Fate/Grand Order　私と彼女の物語

やまさんＭＫ２

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

今日初めて出会って、多少会話しただけのあの子が心配だった

たったそれだけの理由で、一人の少女の運命は決まった

目次

第一話　炎上汚染都市　冬木　1　1
第二話　炎上汚染都市　冬木　2　24
第三話　炎上汚染都市　冬木　3　46
第四話　炎上汚染都市　冬木　4　66
第五話　炎上汚染都市冬木　5　91
第六話　邪竜百年戦争　オルレアン　1　111
第七話　邪竜百年戦争　オルレアン　2　121
第八話　邪竜百年戦争　オルレアン　3　132
第九話　邪竜百年戦争　オルレアン　4　144
第十話　邪竜百年戦争　オルレアン　5　162
第十一話　邪竜百年戦争　オルレアン　6　177
第十二話　邪竜百年戦争　オルレアン　7　196
第十三話　邪竜百年戦争　オルレアン　8　209
第十四話　邪竜百年戦争　オルレアン　9　226
第十五話　邪竜百年戦争　オルレアン　10　240

第一話　炎上汚染都市　冬木　1

人理継続保障機関カルデア。
標高６０００ｍの雪山に建造された地下工房。アニムスフィア家という魔術師の家が管理している施設。
突然そんな処からのスカウトを受けるなんて何事かと、だいたい魔術なんて代物がホントにあるのかと疑ったが、スカウトマンの熱意に押し負けたのだ。
胡散臭い感じはしつつも、結局はこうしてカルデアを訪れた。提示された条件も、悪くないどころかかなり良かったというのもある。
「あは……ははは……」
そして今、長期間のアルバイト感覚でここにきた事を少女は後悔していた。
目の前に広がる何かが焼け焦げる不愉快な臭いと、瓦礫の下から流れる紅い血が、ここで起きた惨劇を否応なしに理解させる。
なんでこんな事になってしまったのか。たった十八年しか生きていない少女の理解を遥かに通り越した、見た事もないような地獄がそこにあった。
『観測スタッフに警告。カルデアスの状態が変化しました。シバによる近未来観測データを書き換えます。近未来百年までの地球において人類の痕跡は発見できません。生存は確認できません。未来は保障できません。中央隔壁　閉鎖。館内戦場開始まで、後１８０秒』
無機質な館内アナウンスが告げる無慈悲な内容。自分はもうここから出られない。
どこからか崩れてくる瓦礫に潰されるか、炎と煙に巻かれて死ぬかの二択がこの先の運命だ。
怖い。怖くてたまらない。まだ死にたくない。この場に飛び込んだ事を、そもそもカルデアのスカウトに応じた事も後悔している。
「せん……ぱい……」
それでも、目の前で倒れている少女を見捨てる事が出来なかった。
ここに来て初めて言葉を交わした、なんだか不思議な感じのする少

女がとても心配になって、この地獄の中を探し回った。
自分が見つけた時には下半身を巨大な瓦礫に押し潰されていて、素人目にも助からないと理解できたけれど。
「……手を、握って……貰えますか……？」
「……うん」
伸ばされた手を両手でしっかり握りしめる。もう体温も殆ど感じない、あと数分もしないうちにこの少女は死ぬんだろう。
そうなればこんな地獄みたいな部屋で一人きりかと思うと恐怖で全身が震えるが、今更だ。
「すいません……先輩……」
「謝る必要なんて無いよ……ね」
『コフィン内マスターのバイタル基準値に達していません。レイシフト定員に達していません。該当マスターを検索中……発見しました。適応番号４８、霧生楓をマスターとして再設定。アンサモンプログラムスタート。量子変換を開始します。レイシフトまで、あと……』
二人を青白い光が包み込んだ。

頬を何かに舐められる感触。そのくすぐったさに、闇に沈んでいた意識がゆっくりと浮上する。
少女、桐生楓が目を覚ますと視界に飛び込んできたのは、犬に見えなくもない白い四足歩行の獣。
「フォウフォウ」
「えっと……フォウ……だっけ？」
カルデアであの少女と初めて会った時、一緒にいた見たことのない不思議な小動物。犬にしては小さすぎるし、かといって他の動物にも見えないという何とも珍妙な存在だ。
なんでこんな処にいるんだろう、なんて事を思うよりも早くに覚醒しだした脳が己の置かれた状況を整理、理解し始める。
まず自分がいるところは、爆弾か何かで吹き飛んで文字通りの地獄

絵図だったカルデア中央管制室では無かった。
「……街？」
崩れ落ち、瓦礫の山となったビルや炎に焼かれる家屋だらけで人の気配を全く感じないが、どこからどうみても街だった。
それなりの都会である事、街並みの雰囲気からして日本である事は理解できる。だが、どこの街かは解らない。
と言うよりむしろ、テレビや映画ぐらいでしかお目にかかれない程に廃墟と化した街のど真ん中に、何故自分がいるのか理解できない。
空を見上げれば立ち上る煙と炎。そして、夜に輝く星空と見事にミスマッチな光景が広がっている。
「えぇっと……なんで？」
「フォ～ウ」
あのＳＦチックと言うか、雪山の中に作られた秘密基地的な施設からなんでこんな滅亡寸前の夜の街に自分は知らぬ間に移動しているのだろうか。
大がかりなドッキリか何かなのか、もしかして夢でも見てるのか、なんで突拍子の無い考えが浮かんでは消えていく。
肌に感じる熱気が、手に触れるアスファルトの感触がこれは現実だと訴えている。これがドッキリの類なら、仕掛けた犯人はよほどの悪趣味かつ大馬鹿だ。
「一体なんでこんな処に……」
「おや……まだ生きている人間がいたのですか……？」
不意に聞こえてきた冷たい声。その方向へと顔を向けると、今にも折れそうな街頭の上に一人の女性が立っていた。
顔まで覆う黒いフードに身を包んだ、長髪の怪しい雰囲気の女性。手には身の丈程もある鎌を持ち、フードの奥から覗く妖しい瞳からはとても好意的な感情は感じ取れない。
まるで、獲物を目にした蛇のような、そんな視線だった。
（な……何……アイツ……？）
一目で理解する。人の、生物としての本能が告げている。あの女性は人間では無く、自分を殺しにきたのだと。

魔術に関してはド素人である楓でも感じ取れるほどに膨大な魔力。あれは人間が戦って勝ち目のあるような、そんな生易しいモノではない。

カルデア入館時、軽く説明を受けたサーヴァント。神話や歴史に名を残した英霊達を召喚し、使役する使い魔。目の前にいる女性がそのサーヴァントなのだろうと理解するまでに時間はそうかからなかった。

「せっかく生き延びてたのに、残念ですね。でも、見つけたのが私で運が良かったと思いますよ……？」

女性が手に持った、まるで鎌のような曲線を描いた刃を持った槍のような武器を持ち上げ、サディスティックな笑みを浮かべる。

「他のサーヴァントに見つかっていたら……何が起こったかも解らないまま、死んでいたでしょうから！」

街頭を蹴って、女性が跳躍。周囲のビルをも飛び越え、槍を振り上げてそのまま一気に落下。

その勢いを加算した大振りの一撃が、楓目掛けて襲い掛かる。

「あ……」

これは避けられない。防ぐなんてもっと無理だと楓が理解するまでに一瞬もかからなかった。

女性の行うあらゆる動作が――それこそ落下ですら――人間を遥かに凌駕する速さで行われている。これに反応しろと言うのは、少なくとも武術の類を齧っていない楓には無理な話。

迫りくる絶対的な死の一撃。まともな恐怖すら感じる暇も無く、女性の槍によって楓の頭が叩き割られ――

「なっ……!?」

――る事は無かった。

二人の間に割って入った影が、女性の一撃を身の丈程もある巨大な盾で防いでみせたのだ。

楓を護るように立つ盾を持つのは、薄紫色の髪をした小柄な少女。華奢な体躯を黒い鎧で覆っているが、その背中には見覚えがある。

カルデアの廊下。自室の前で別れた時に見た、あの後姿だ。

「……え？」
瓦礫に下半身を押し潰され、今にも死にそうだったはずの彼女が何故ここにいるのか。
そんな疑問が沸きあがるよりも早く、少女は盾を力任せに振り回して女性を吹き飛ばし、瓦礫の山に叩き付けたと思えば即座に楓の方へと向き直る。
「ご無事ですか!?」
少女の、前髪で右目が隠れたどこか儚げな感じのする顔を見て確信する。
「マシュ……」
マシュ・キリエライト。カルデアに来て初めて言葉を交わした、自分よりも先にカルデアにいたはずなのになぜか自分を先輩と呼ぶ不思議な少女。
彼女が確かに、無くなった筈の両足でしっかりと大地を踏みしめて自分を護ってくれたのだと。
何故、という疑問は尽きないが彼女が生きていてとにかく嬉しい。
そんな言葉が出てくるよりも早く、マシュは左手を伸ばして楓を片手で抱き上げた。
「へっ？」
自分より背丈も小さく、華奢な体格のマシュに片手で抱き抱えられる。
突然の事に驚く楓を尻目に、マシュは盾で身を守りつつ一方的に告げた。
「大急ぎで撤退します！　舌を噛まないように！」
「えっ……？　え、えええええええええええええええっ!?」
そして、またもや華奢な体のどこにそれほどの力があったのかと言いたくなるほどの脚力を発揮して跳躍。
ビルの壁を蹴る事で一気に屋上へと跳びあがり、休む暇も無く次のビルへとウサギのように飛び跳ねて、その場から楓を連れて撤退する。

マシュの撤退と、女性が瓦礫を吹き飛ばして姿を見せるのはほぼ同時であった。
「チッ……逃がしましたか……」
忌々しく吐き捨て、腹いせ混じりに足元の瓦礫を踏み砕く。
あと少しでコレクションが一つ増えたというのに、まさか邪魔が入るとは思わなかった。本当に不愉快な気分だ。
「しかし、あれは……」
あの盾を持った少女から感じた気配は、間違いなくサーヴァントの物。いささか妙な気配ではあったが、それは些細な事だろう。
この場合重要なのは、自分達とこそこそ逃げ隠れしているあの魔術師以外に新たなサーヴァントが現れたという事だ。
そしてサーヴァントが身を挺して護るとなると、もう一人の少女がマスターと言う事になる。この街で生きている人間がまだいるのなら、それは魔術師かサーヴァントを従えたマスターに違いない。
「……フフ。これは、良い憂さ晴らしが出来そうですね」
ご馳走を前にして、腹をすかせた人間のように女性は舌なめずりをする。
この屈辱をどう返してやろうか。その最高の方法を思いついたのだから。

「……とりあえず、追っては来ていないようですね」
先ほどの場所からは離れた位置にある廃ビルの一室。
割れた窓からそこへと飛び込んだマシュは、壁に身を隠しながら外を確認して、あの女性サーヴァントが追ってきていない事を確認する。
油断できる状況ではないが、とりあえず一息つけるだろうと確信してから、改めて傍らに座り込む楓へと顔を向けた。
「再会の挨拶が遅れてしまいました。ご無事でなりよりです」
「マシュ……だよね？」
「はい。マシュ・キリエライトですが……どうかされましたか？」

「いや、その……元気そうで何よりっていうか、生きてて嬉しいっていうか……」
突然抱き抱えられ、ビルの上を飛んだり跳ねたりした挙句に窓ガラスから中へ飛び込むというアクション映画のような真似を涼しい顔でやってのけた彼女を、楓はマジマジと見やる。
自分よりも細身で、今にも折れてしまいそうな程の体のどこにそんな力があったのか。何より、瓦礫に押し潰されて瀕死だったはずなのになぜ無傷なのか。
そして何よりも……その体のラインを強調した鎧姿は何なのか。最初に見たカルデアの制服姿も良かったが、この格好も中々大胆でにあってるというか私よりも胸あったのねなんて呑気な感想すら抱いてしまう。
「……その格好、何？　コスプレ？」
二の腕や太ももだけでなく、臍や背中まで露出した大胆かつ防御に不安がありすぎる鎧。正確には、レオタードタイプのインナーの上から申し訳程度に装着しているような感じの格好だ。
ボディラインがハッキリと見えるというか、これ以上ないぐらいに強調されたソレは同性である楓も少々目のやり場に困る。
断言しよう、もしも楓が男だったならば、間違いなく直視出来なかったと。
そして眼鏡も無くなっている。あの眼鏡似合ってたのに勿体ない、なんて思ってしまうのはきっと当然の感情だろうと楓は己を納得させる。
「いえ、コスプレではありません。少々事情が複雑なのですが……」
マシュの言葉を遮るように、電子音が鳴り響く。
一体何事かと思うと、音の発信源は楓の右手首に装着された銀色の腕輪からだった。
楓が今着ている服と一緒に支給された物だったが、そういえばこれはなんだっけと思う。霧生楓、イチイチ説明書の類は読まないタイプであった。
「それはカルデア支給の多目的ツールですね。そこに通信用のスイッ

チがあるので……失礼します」
マシュがスイッチを押すと、軽めの電子音と共に音声と立体映像が映し出された。
『良かった、やっと繋がった！』
立体映像に映し出されるのはオレンジ色の髪を無造作に後ろで束ねた白衣の男性。楓も見覚えがある男性の名はロマニ・アーキマン。
カルデア医療部門のトップで、皆からは親しみを込めてドクターロマンと呼ばれていると言っていたのを覚えている。
「こちらＡチーム、マシュ・キリエライトです。同伴者、霧生楓と共に特異点Ｆへのレイシフトを完了しています。レイシフト適応、マスター適応、ともに良好。霧生楓を正式な調査員に登録願います」
『……楓ちゃんも、レイシフトに巻き込まれていたのか。管制室に残ってたっていうから、まさかとは思ったけど』
「あはは……その節はどうも」
彼との出会いはマシュに案内された自室での事。自分が来るまで空き部屋だったそこでサボっていたところに出くわす、というなんとも間抜けな物だった。
お互いにカルデア所長に――理由は違えど――追い出されて居場所もやる事も無い者同士。他愛のない話で盛り上がっていたところで、管制室での爆発事件が起きた。
急いで管制室に行ってみればあの地獄絵図。彼は地下の発電施設へと向かい、楓はロマニの急いで逃げろと言う言葉を無視してマシュを探していたという訳である。
『とりあえず無事で良かった。それはそれとしてマシュ……その格好は何なんだ!?　ハレンチにも程がある!?　僕はそんな子に育てた覚えはないよ!?』
「ですよねぇ……ハレンチですよねぇ……同じ女でもちょっと目のやり場に困るんですが」
「いえ……これはその、変身したのです。先輩を、マスターを守るにはカルデアの制服では力不足でしたので」
『変身？　何言ってるんだ、頭でも……ってちょっと待て。なんだこ

れ!?』
　こちらと会話を続けながら何やら計器を捜査していたロマニの顔が驚愕に染まる。
『マシュの身体データの数値がとんでもない事になってるぞ!?　身体能力、魔術回路、どちらも人間を遥かに超えて……これじゃまるでサーヴァントじゃないか!?』
「それは正しい認識です。私は、レイシフト直前にサーヴァントと融合したのです」
　マシュによれば、レイシフト直前。一騎のサーヴァントがマシュの前に現れた。
　カルデアには実験やら今回の作戦の為に事前に召喚されていたサーヴァントがいたらしく、そのうちの一騎だろうとの事だ。
　自らのマスターも失い消滅寸前だったそのサーヴァントはマシュに契約を申し込んだ。命を救い、自らの力すべてを譲る代わりに今回の事件の全容の調査と原因の排除を依頼。
　そして、マシュはそれを受け入れた結果が今の姿と力なのだと。
『英霊と人間の融合か……カルデアで行っていた実験の一つ、デミ・サーヴァント。まさかこんなタイミングで成功するなんてね』
　ロマニは成程とうなずく。
『それで、マシュの中にはその英霊の意識があるのかい?』
「いえ……彼は私に能力を全て譲り渡した後に消滅しました。私は、彼の真名もこの宝具の使用法も解りません」
　そう言って、マシュは右手に持つ盾に目線を向ける。
　サーヴァントには最低でも一つは宝具と呼ばれる武具がある。それは生前に使用していた武器であったり、残した逸話が形や能力を得たものだったりと様々だ。
　マシュと融合したサーヴァントは盾に関する逸話を持つ英霊だったのだろうかと、彼女の盾を見ながら楓も思う。
「……あれ?　でも、そんなサーヴァントいたっけ?」
　少なくとも、楓は姿を見ていない。
「マスターが知らないのも無理はありません。あの後、熱と煙にまか

れたせいですぐに気絶されましたから」
「あぁ……そうなんだ……」
　では、自分が気絶した後にサーヴァントが姿を見せたという事かと納得する。
　どうもあの辺りは記憶が曖昧だ。マシュを見つけ、彼女の手を握っていたところまではハッキリと覚えているのだが。
「……ところで、マスターって、何？」
　そういえばと、楓はマシュに疑問をぶつける。
　彼女が自分を呼ぶ時は先輩呼びだったはず。それが、いつの間にかマスターに変っているじゃないか。
　私はいつの間に彼女のご主人さまになってしまったのだろう。
「先ほど説明した通り、今の私はデミ・サーヴァントです。恐らく、融合を果たした際にすぐ近くにいたマスターと契約が自動的に結ばれてしまったのではないかと。右手の甲に令呪もありますし、間違いありません」
　本来、魔術師が召喚を執り行う事で呼ばれるサーヴァント。呼び出した魔術師がマスターとして、サーヴァントに魔力の供給や指示やら色々行うのだと説明があったのをぼんやり覚えている。
　つまりは自分がそのマスターとなって、マシュがデミ・サーヴァントとして契約を結んだ状態となっているのか。
　確かに言われてみれば、右手の甲には見覚えのない紅い痣がある。これが令呪、マスターとサーヴァントを繋ぐ証だと説明を受けた覚えはある。
　これを使えば、限度はあるが多少の無理無茶無謀な行為も行使できると。
『なんだか予想外な事が起き過ぎているけど……マシュがデミ・サーヴァントになったのは不幸中の幸いだね。召喚したサーヴァントが協力的とは限らないけれど、マシュなら全面的に信頼できる。さて、霧生楓君』
　今までのどこか緩さがあった雰囲気を引き締め、真面目な表情でロマニは楓へと声をかける。

『無事にレイシフト出来たのは君達二人だけ。そして、マスターとして活動できるのは君だけだ……急な話ですまないけど、マシュと二人で事態の収拾に努めてほしい』
「……やるしかないですよね。良いですよ、何とかやってみます」
『その意気だ。右も左も解らないだろうけど、君にはマシュがついている。酷い例えに聞こえるだろうけど、サーヴァントは君の武器だ。上手く使えるかどうかはマスターである君次第だからね』
武器とか上手く使えとか、確かに酷い例えだなと楓も思う。
あくまで例えだというのは解るが、マシュを武器扱いするなんてとてもじゃないが自分には出来ないだろう。
第一、あの女性サーヴァントから守ってくれた命の恩人なのだから。
『サーヴァントは強力な武器であるけれど、弱点はある。それはマスターとなった楓ちゃん自身……理由は解るね？』
「あぁ……私がマシュに魔力供給しないといけないから、ですよね？」
『そうだ。サーヴァントはマスターからの魔力供給無しではその存在を維持できない。マシュは生身の人間との融合体だから消滅って事は無いかもだけど……それでも能力に大幅な制限はかかるだろう』
万が一にでも自分が倒れれば、マシュの足を大いに引っ張るという事か。
とんでも無い事に首を突っ込んでしまったのはともかく、想像以上に責任重大じゃないかと楓は自らにかかった重圧に表情を曇らせる。
こちらは魔術だってろくに使えない。カルデアに来る前に魔術回路を開いてもらっただけで、ついこの間まで普通の女子高生だったのだ。
「ご心配なく、マスターの事は私が責任を持って守りますので」
曇りの無い笑顔で言いきるマシュに対し、楓は申し訳なさそうに笑顔をむける。
「あぁ……うん。私はろくに援護とか出来ないけど……ごめんね？」
「それなら恐らく大丈夫です。先輩に支給されているその制服はカルデアで開発された魔術礼装ですので、簡単な支援魔術なら行使可能の

はずです」
「……へぇ」
　カルデアに来る前に支給されたこの白い服は、そんな代物だったのかと感心する。
『データを送っておくから、それで使用法は確認してくれ。さて、君達にはこれから色々とやって欲しい事が……』
「ドクター、通信の状態が安定していません。あと１０秒前後で通信途絶します」
『なら、現在の最優先事項だ。そこから2キロ東へ移動した先に強い霊脈ポイントがあるから、そこまで移動して』
　そこまで言ったところで、通信が途切れた。
　マシュを見やると静かに首を横に振る。つまり、現状では通信回復の見込みは無いという事だろう。
　送ると言われたデータは腕輪に届いているし、ロマニの口からは目的地は告げられているので行動に迷うという事は無い。
「それじゃ、行こうか」
「はい。お供します、マスター」
「フォウフォウ！」
「フォウさんもご一緒だったんですか!?　すいません、気付かなくて」
　鳴き声と共にマシュの肩に飛び乗ってくるフォウ。どうやら、楓にしがみついて一緒に来ていたようだ。
　しがみつかれていた楓も気付かなかったので、マシュ共々お互いさまである。
「では、マスター。私に掴まってください」
「……えっ？　もしかして、また？」
「はい。窓から一気に飛び降りようかと」
「……階段から降りない？」
「階段、崩れてますよ」
　実は私、絶叫マシーンとか駄目なんだよね。
　とは今更言えないというか、マシュに抱えてもらって飛び降りる以外の選択肢はない事実に絶望しつつ、楓の口から溜息が漏れたのだっ

た。

楓が己の無力さを知るのは、移動を開始してから数分後の事であった。

腕輪に送られたデータを閲覧し、礼装でもある衣服で行使できる魔術を一通り確認して、どう行使すれば良いのかも把握。

これで戦闘になっても、マシュの手助けができると意気込んでいたのだが。

「はぁぁっ！」

目の前で、動く骸骨の群れを一掃するマシュをただただ茫然と眺めるだけの時間が過ぎていく。

マシュが盾を振り回せば骸骨が数体吹っ飛んで行き、十数はいたそれらはあと三体にまであっという間に減っていた。

（あぁ、これ。下手に援護したら逆に足引っ張るわぁ）

そんな事を思っている間に、盾で一体押し潰され、残り二体も右手を軸にした逆立ちからの回し蹴りでまとめて頭蓋を砕かれて沈黙。

意図も容易く骸骨達を殲滅したマシュは盾を持ち上げ、足早に楓へと近寄ってくる。

「戦闘終了です。お怪我はありませんか？」

「いや、私何もしてないし……マシュこそ大丈夫？」

「はい。私も損傷は認められません」

骸骨達の攻撃は全て避けるか防ぐかしてみせていたから、当然と言えば当然だろう。

まさに余裕の勝利。文字通り、ちょっと目を離したら終わってたという感じだ。

これだけの強さがあるなら、自分が特に何かする必要なんてないじゃないかと思ってしまう程に。

「マシュ、結構強いんだねぇ」

「いえ……相手が低級の使い魔だったので何とかなったというのが正しいです」

「いやでも、あの数を一人でやっつけちゃったし？　実は元から結構やれる方だったとか？」
「そんな事はありません。戦闘訓練ではいつも居残りでしたし……それに、相手がサーヴァントだとこうはいかないと思います」
「へっ？　でもだって、あの変なオバサン、簡単に弾き返しちゃったじゃん」
　忘れもしない。いきなり自分を襲ってきたあの女性サーヴァントの攻撃を防いで、そのまま瓦礫の山に叩き付けたあの勇ましい光景。
　あれの後に先ほどの無双である。いくらなんでも、マシュが弱いという事は無いんじゃないかという楓の考えは、マシュ本人が首を横に振って否定する。
「あのサーヴァントは殆ど不意打ちも同然だったから何とかできたようなものですし……真っ向勝負になれば、私に勝ち目はほぼ無いかと」
「えっ」
「あの程度で倒せたとも思えません。恐らく、今も私達を探しているのではないでしょうか」
　さらっと深刻な事を言われたようなと、楓の顔が一気に青ざめる。
　何となくだが、あの手のタイプは執念深い気がしてならない。次に出くわせば、何を仕掛けてくるのか解らない。
　今いる川沿いの道は遮蔽物も無く身を隠す事も出来ない。つまり、ここで見つかると相当不味い事になるのではないかと一気に不安になる。
「……さっさとここ抜けちゃおう」
　不安と恐怖に負け、とりあえずの目的地である橋に視線を向ける。
　マシュを促し、全力でここを走り抜けようと足に力を入れようとして――――
「っ！　駄目です、マスター！」
「うぇっ!?」
　マシュに服を掴まれ、盛大に足を滑らせる。
　その勢いで脱げた靴が空中を舞い、見えない何かにぶつかって弾け

飛んだ。
派手な音を立てて粉々になった靴。それをやった物は無数に張り巡らされた銀色の鎖。
先ほどまで何も無かったはずの場所に音も無く浮かび上がり、正面だけで無く四方まで包み込むそれはまさに鎖の結界であった。
「な……何、これ。さっきまで何も無かったのに……」
「……遅かったようです。マスター、私の後ろに隠れてください」
楓を庇うように、盾を構えるマシュ。その視線の先、ついさっきまで自分達がいた方向からゆっくりと歩いてくるフードを被った長身の女性の姿がある。
右手に巨大な槍を携え、フードの奥から覗くあの鋭い視線。見間違えるはずもなく、あの女性サーヴァントだ。
状況から見て間違いなく、鎖の結界を張った張本人に違いない。
「ようやく見つけましたよ……もう逃がしません」
舌なめずりをしながら、ゆっくりと足を進めてくる女性にマシュは盾を構えて正面から対峙する。
周囲を塞ぐ鎖も恐らくはあの女性の展開したスキル、もしくは宝具の類。解放してくれるとも思えず、この場から進むも戻るも戦って勝つしかない。
だからといって、戦う以外の選択肢を選べる状況でも無いのだから迷うのは時間の無駄。
「マスター、指示を!」
それに何より、楓の身の安全を守る事が彼女と契約したサーヴァントたる自分の役目なのだから。
「し、指示って言われても……」
「出来る範囲で構いません!　私達二人で、この状況を突破します!」
「そんな事言われても……っ」
楓の脳裏に浮かぶは、この街に来た直後に襲われたあの光景。
あの時は感じる暇も無かった恐怖が、先ほどのマシュの「真っ当に戦ったら勝ち目は無い」という発言もあって一気に込み上げてくる。
しかも、今回は逃げる事も叶わない。今度こそ逃れられない死が目

の前に迫っている。
なのに戦おうというマシュのような勇気は、自分には無いと叫びたくなって、自分を守る為に立つ少女の体が震えている事に気がついた。
（あ……）
横顔には冷や汗が流れ、瞳にはうっすらと恐怖の色。そして、それを押し込めて戦おうとする決意があった。
怖い。
戦いたくない。
助けてください。
マシュの横顔が、そう訴えていた。
それでもなお、自分の為に戦おうというのだ。勝ち目のない相手に、絶対的な死に抗おうと言うのだ。
こんな、まともに指示も出せないであろう役に立たないマスターの為に。
「……っ！　解った……出来る範囲で、良いんだよね……」
なら、私もなけなしの勇気を振り絞ろう。
役に立たなくても、マシュの勇気に応えるために。
「……はい！」
「サーヴァントとの戦いは初めてのようですね……ふふ。初々しくて良いですね」
二人の会話が聞こえていたのか、女性はうっすらと笑みを浮かべて、その姿を消失させた。
紫色の光の粒を残し、突然姿を消した女性に二人が驚愕の表情を浮かべる。
一体どこにと視線を送るよりも早く、本能的に殺気を感じたマシュが頭上に盾を持ち上げた直後、激しい衝撃音と共に姿を見せた女性の一撃が振り下ろされた。
「ぐっ！」
「せっかくですから、サーヴァント同士の戦いという物を教えてあげますよ。手取り足取り……その体にねぇ！」

マシュの頭上を抑えた状態のまま、女性は何度も何度も槍を振り回して盾に叩き付ける。
刃が痛むのを嫌っているのか、鎌のような形状故に刺突は苦手なのか、石突を持って繰り出される連続突きはまさに暴風。
秒単位で襲い来るそれを防ぐマシュの表情には余裕はなく、楓も恐怖のあまりに情けない悲鳴をあげてマシュの背に隠れる。
「中々ご立派な盾ですが、お腹ががら空きですよ?」
頭上の暴風が止まると共に足元から聞こえてくる声。マシュが視線を落とせば、何時の間にか懐に潜り込んでいた女性が凶暴な笑みを浮かべていた。
それを認識すると同時に、マシュの脇腹に叩き付けられる横薙ぎの蹴り。防ぐどころか反応すら叶わず、少女の体は宙に舞う。
「あ、が……っ!?」
「ご自慢の盾も、そうなると意味はありませんね!」
宙へ蹴りあげたマシュの腹部目掛け、女性は槍を構える。
「心臓を串刺しにはしません……ギリギリ死なないように、してあげます!」
「っ……ぅっ!」
空中という不安定な場所で姿勢を正す事など、空を飛ぶ事でも出来ない限りは不可能。
盾で防ぐのも間に合わない。自身を串刺しにせんとする槍の一撃は避けられない。それでも、マシュの目に諦めの色は無かった。
自分にはマスターがついているのだから。
「礼装解放……緊急回避!」
楓の叫びと共にマシュへと流れ込んでくる魔力。
それを用いて行われるのは物理法則を無視した動きによる強引な回避。
マシュの体は宙を舞うように女性の刺突を避け、そのまま背後を取るように着地した。
「な、にぃ!?」
「やぁあああっ!」

確実に決まると思っていた一撃を回避された際の隙。それを逃すような真似はせず、マシュは突き出した盾を女性の背中へ力任せに叩き付ける。
「がぁっ!?」
「そのまま一気にやっちゃえ！　マシュ！」
「はい！」
女性の背中へと打ち込むは盾による力任せの乱打。打ち込み、薙ぎ払い、突き、叩き付け、身の丈程もある盾を高速で振り回しての連続攻撃。
反撃の暇を与えてはならないと、無我夢中で叩き込む。出来る事なら、このまま倒れてくれという願いにも似た懇願を込めて。
「が、ぐっ……調子に、乗るなぁぁっ！」
やはりというか、そう簡単には行くわけも無く女性は槍を振り上げてマシュの盾を弾き返す。
獲物が大型な分、弾かれた隙も当然大きく取り返しはつかない。
むき出しの腹部目掛けて槍の石突が打ち込まれ、肉と骨が軋む音と共に少女の体へとめり込んでいく。
「うあ……っ！」
「小娘如きが……ランサーのサーヴァントを甘く見るな！」
くの字に折れ曲がったマシュの体。その顎を容赦無しに蹴りあげ、宙を舞った少女の足を掴み、力任せに放り投げる。
「マシュ！」
楓は地面へと落下するマシュの下へ駆け寄り、その体を受け止めてようと手を広げる。
特に鍛えている訳でも無い――鍛えていても難しいだろうが――楓に投げ飛ばされたマシュを受け止めきれる筈もなく、その衝撃で背中から地面に倒れた。
「きゃうっ！」
「マ、スター……っ！」
「大丈夫……マシュこそ、平気？」
「はい……まだ、大丈夫です……っ！」

自分を庇って地面に倒れた楓へと申し訳なさそうに目線を向け、すぐにマシュは敵へと向き直る。
苛立ちを表情に張り付けた女性。ランサーと名乗った敵性存在は槍の切っ先を地面に擦りつけ、甲高い音を立てながらゆっくりと歩み寄ってきている。
盾を支えに立ち上がり、楓を守るように身構えるマシュだが先の一撃のダメージは大きいようだった。礼装による緊急回避も、一度使うと再使用までに時間がかかる。
ならばと、礼装に刻まれた魔術の一つである応急手当の術式を解放。マシュのダメージを僅かでも癒す為に楓は魔力を回す。
「ごめん……私じゃ、これが限界かも」
やはりというべきか、礼装に刻まれた魔術では十分な回復は望めない。
同じ礼装でも鍛錬を積んだ魔術師が使えば効力は違うのかもしれないが、魔術回路を開いたのすらつい最近の楓ではないよりマシレベルの効力だ。
残り一つの瞬間強化。サーヴァントの身体能力を向上させるバフも大した効果は得られないだろうと思うと、実質的に手札は尽きた。
令呪を使ってみようかとも思うが、この状況でどういう風に使えばいいのか全く解らない。
(下手な事に使うと、逆に首絞めちゃいそうだし……)
「……マスター。私が何とかあのサーヴァントを抑えます。その隙に、どうにか逃げてください」
「ちょっ……何言って」
「先輩だけなら、まだなんとかなります……してみせますから」
マスター呼びから、先輩呼びに戻った。単にそれだけの事だったが、楓にはマシュが何を考えているのか直感的に理解できた。
ようするに諦めたのだ。自分の生存を切り捨てて、楓だけを逃げ延びさせる方向へと行動目的を切り替えた。
死ぬのが怖いと顔に書いてあるのに、それでも自分が死ぬ事よりも楓が死なない事を優先したのだと。

「……っ！　絶対やだ」
なんだか、それがとても頭に来た。
せっかく生きて再会出来たのに、また死に別れろと言われて頭に来ないわけがない。
「先輩、でも……」
「私一人じゃ、どっちみちのたれ死ぬって。だったら、最後までマシュと一緒にいる……絶対、こんなところで死んでやるもんか」
マシュの後ろから隣へ、盾を支える彼女の手を握りしめる。
「あのオバサン倒して、生き残る！　これ、マスター命令だからね！」
こうなったらヤケクソだとばかりに叫ぶ。
突然オバサン呼ばわりされたランサーは眉間に青筋を立てて、あきらかに激怒しているがこの際どうでもいい。
だいたい幽霊みたいな存在なんだから、歳なんて気にする方がおかしいだろう。
「……はい！　その命令、確かに了解しました！」
マシュも、楓の――ヤケクソではあるが――決意を見て表情を変えた。
ここで死んででも楓を生き残らせるのではなく、二人で生き残る方向へ。
それでもいざと言う時はと覚悟を決めて、真正面からランサーを睨みつける。
「……もういいでしょう。簡単に殺してはあげませんよ」
やはり女性に年齢関係の煽りは禁句と言う事か、ランサーの言葉からは憎悪しか感じない。
彼女視点で見れば、格下相手にコケにされまくっているのだから無理もないだろう。
「目の前であなたの可愛いサーヴァントが嬲り殺しにされる様、見せつけてあげますよ！」
怒りの矛先は、マシュから楓へと変わっていたが。
睨まれただけで怯み、逃げ出したくなるほどの恐怖を感じるが、それを必死でこらえる。

マシュと一緒にこの状況を打破して、絶対に生き残るんだと決めた楓にとって、最早ランサーはその辺の野良犬同然なのだから。
「勝つよ、マシュ」
「はい！」
「舐めるなよ、小娘共がぁっ！」
地面が陥没するほどの脚力を持って突撃を仕掛けるランサー。
殺す。何が何でも殺してやる。生まれてきた事を後悔する程の地獄を見せてやると怒りに任せての突貫。
叩き付けるように放たれる殺気にも怯まず、楓とマシュはそれを迎え撃つ。二人に残された手は、後先考えずにぶつかるだけ。
勝ち目はゼロ同然だろうが、それがどうした。絶対に勝って生き延びるんだと、その為にも負けてなるかと、秒単位で沸きあがる恐怖心を無理矢理押さえつける。

「へぇ……中々根性あるじゃねぇか、嬢ちゃん達」

そんな二人の覚悟に応えたかのように、救いは訪れた。
何処からか飛来した無数の火球。魔力によって生み出されたそれらがランサーへと降り注ぎ、その身を激しく燃やしていく。
「が、ぁあああああああああっ!?」
「えっ……今の、何!?」
突然の援護に驚く二人の前に、音も無く現れるのは青いローブを身にまとった男性であった。
右手には杖を携え、不敵な笑みを浮かべた顔を楓とマシュに向ける。
「いいぜ、気に入った。助太刀してやるよ」
「へっ……？　えっと、どちら様で……？」
「マスター……この人もサーヴァントです」
「その通り。とりあえず、キャスターとでも呼んでくれや」

手短に挨拶を済ませると、獣のように鋭い紅い目を燃えるランサーへ向ける。
「さて、さっさとあっちも済ませておくか」
「お、のれ……キャスター！　何故、そんな連中の味方を……っ!?」
「あぁ？　んなもん、お前らよりマシだからに決まってんだろ」
カンッと杖で地面を叩く。
ランサーの足元に展開される魔法陣。そして、そこから現れるのは激しく燃え盛る、藁で編まれた巨大な腕。
人間二人は余裕で収まるであろうその巨大な手にランサーは捕らわれ、そのまま炎と共に握り潰された。
「ぎぃぃあああああああああっ！」
断末魔だけを残し、燃え尽きて握り潰されるランサー。その消滅を確認して、藁の腕は魔法陣の中へと消えていく。
目の前で行われた圧倒的な光景に二人は唖然となり。
「ちょっと、キャスター！　私を置いていかないでよ！」
道の奥から走ってきた銀髪の女性の声に気づくまで、ほんの少しの時間を有した。
「しょ、所長!?」
「あ……あの人……」
「マシュ!?　あなたもここに来て……って、アンタは」
女性、オルガマリー・アニムスフィアはマシュの姿を見つけてホッと安心したような表情を見せたかと思えば、その隣に立つ楓を見て「えっ？」と目を見開いた。
そのまま一気に楓の傍まで駆け寄り、その胸ぐらを掴むまで僅か数秒の出来事であった。
「なんで、アンタまでここにいるわけ？」
「ちょ……苦しい……苦しいですって……」
「しょ、所長！　マスターを離してください！」
「マスター!?　こいつが!?　なんで!?」
あっという間に緊張感のないやり取りを繰り広げ出した三人を見やり、キャスターは呆れたようにため息をついた。

（もしかして、面倒な関係だったりするのかね？）
なんて事を思いながら、何時の間にか自分の足元で三人の様子を呆れたように見守る白い小動物、フォウを見つける。
「お前、飼い主には苦労してそうだな」
「フォウ……フォウフォウ」
別に彼女達が飼い主って訳じゃ無いんだけど確かに碌でも無い奴に飼われてたな。
何となくだが、フォウがそう言ってるようにキャスターには聞こえたのであった。

第二話　炎上汚染都市　冬木　2

カルデア中央管制室が爆破される数十分前。
ミーティングルームに集められた世界各国の魔術師。その中からも優秀な、サーヴァントのマスターになりえる資質を持つ若者達が集められていた。
数合わせの為に集められた一般枠も含めて四十八名。それぞれが様々な思惑で集まり、これから告げられる重要任務。その内容に憤慨していた。
カルデア所長、オルガマリー・アニムスフィアの口から告げられたのは確定した人類の滅亡と言う未来。
それを防ぐ為に現在とは異なる時間軸、異なる位相への移動を可能とする擬似霊子転移（レイシフト）を用いての原因の調査解明。
自分達はその為に集められた道具であり、命令には絶対服従なのだと。
「命令に従えないのなら結構！　即刻、カルデアから退去して頂戴！
最も、その場合は関係各所からの正式の依頼をそちらが一方的に断ったという形になるけれど」
魔術師と言うのは色々と面倒くさい。血筋だの、長く続いた歴史等を何よりも重要視する上に例外なくプライドが高い。
オルガマリーもその魔術師であり、この程度の反発がある事は予測していた。それを踏まえ、最も信頼するカルデアの技師でもある魔術師、レフ・ライノールと入念に打ち合わせた。
どうすれば反発を抑え込めるか。いかにこの話を蹴る事が自分達にとっての不利益になるか解らせれば良いのかと。
この場合、魔術協会を初めとした魔術師ならば嫌でも世話になる機関にも正式に協力を要請していた為、こういう脅しじみた方法も取れるという訳だ。
（ホント、魔術師って面倒くさいけど解りやすいわよね）
論理的というか損得勘定で動く者が多いというのも、彼女個人はあまり好ましいと思わないが今回に限っては有り難く感じていた。

同じ魔術師である自分が、基本的な価値観とも言えるその辺りの思考を好きになれないというのも変な話だなと思う。
ともかく、今は計画の遂行こそが最重要。人類の滅亡なんて冗談みたいな未来を変えなければならないのだから。
そう決意を新たにすると共に、それをぶち壊す鼾が聞こえてきた。
「……は？」
見れば最奥の席の隅に座っている赤みがかった茶髪の少女が、人目も憚らず眠りこけているではないか。
手首のツールでデータを確認。一般枠の最後の一人、霧生楓。魔術回路を開いたのはつい最近、マスター適正が認められたから呼ばれただけのただの少女。
特に背負う物も無いからか、日本からという長旅と入館直後にやらされるテストのせいで疲労が溜まっていたのか、いくらか理由は考えられる。
だが、よりにもよってこんな大事な日に、しかも自分が説明してる最中に居眠りを堂々とされるなんて。
「……」
オルガマリーによる霧生楓の強制退出まで、十秒掛からなかった。
こういう経緯もあって、オルガマリーから見れば楓の印象は最悪なのである。

時は戻り、廃墟の街にて。
「成程ね……そっちの経緯は理解したわ」
マシュから説明を受け、オルガマリーは頷く。
個人的に納得出来ない部分もあったが、とりあえずマシュと楓の二人がここにいる理由は理解できた。
何故と言う疑問は尽きないが、今更になってカルデアで長年行われていたデミ・サーヴァントの実験が成功したのは不幸中の幸いと言うべきだろう。
マスターがよりにもよって世界各国から集めたエリートでは無く

一般枠の、居眠りしていたあの少女というのは気に入らないがこの際構わない。
「とりあえず、ロマニが指定したポイントまであと少しなんでしょ？　さっさと行くわよ」
彼女の一言で移動を開始する。目的地までの道中、何処からともなく現れてくる骸骨の群れに何度か襲われたが大した脅威では無かった。
まず、同行してくれているキャスターが圧倒的に強いのだ。彼が一発でも魔術を放てば、それで数体以上はまとめて葬れる。
骸骨程度ならばマシュ一人で一掃可能なところにキャスターが加われば、それこそ戦いと言うか蹂躙しているという表現が正しい。
更に、万が一にでも二人が撃ち漏らせば即座にオルガマリーが魔術を行使して援護に入る。まさに完璧な布陣と呼べるのではないか。
（私だけ、何も出来ないけどね……）
楓は、疎外感を感じながらもそんな事を思った。
簡単な魔術すら礼装に頼りきりの彼女がこの面子の中で出来る事は、とりあえず後方に下がって死なないようにするぐらいである。
足を引っ張る事になれば、それこそ申し訳ないのだから。
「……はぁ」
「どうした、嬢ちゃん？　元気ねぇな」
気がつけばキャスターが隣に立っていた。
オルガマリーと一緒に姿を見せた彼は、彼女がここで召喚したサーヴァントでは無く最初からこの街で呼ばれていたそうだ。
マシュ曰くこの街、年代は２００４年の冬木市では聖杯戦争という儀式が執り行われていたのだという。
七人の魔術師がそれぞれ異なる七騎のサーヴァントを召喚。最後の一人になるまで戦い、勝ち残った物には万能の願望機たる聖杯が与えられるという儀式だ。
キャスターはその聖杯戦争の為に呼ばれた一騎で、楓達を襲ったランサーとは別のサーヴァントに襲撃されていたオルガマリーを助け、そのままなし崩し的に行動を共にしていたそうだ。

道中、軽く会話した限りではとても人懐っこいというか、親しみやすい性格をしているなという印象を楓は持っていた。
「いや、私は本格的に何も出来ないなぁって……」
「あぁ、そういや何もしてねぇな」
「今の面子だと私一人だけ役立たずで……なんだか情けないっていうか」
礼装に刻まれた魔術は一度使うと暫く使用不可能。効果も緊急回避以外は使わないよりマシレベルの効力しか得られない。
そして、今はマシュだけでは無くキャスターやオルガマリーまでいるのだから使う必要性を全く感じない。
単にマシュへ魔力を送ってるだけ。一応はマスターという事になっているが、ここまで何も出来ないと情けなさ過ぎて恥ずかしい。
「まぁ、無理もねぇさ。嬢ちゃんは魔術師でも何でもねぇんだろ？」
「はい……ついこの間までどこにでもいる女子高生でした」
「なら無理すんな。自分が今は何も出来ねぇって理解してるだけ上出来ってもんだよ」
一番性質が悪いのは役立たずでは無い。自分は何も出来ないのだと理解せず、無駄にやる気だけ見せて無茶な行動に走る奴なのだとキャスターは続ける。
「でも、なんだかマシュに悪いっていうか……私を守る為に戦ってくれてるのに、見てるだけしか出来ないのって……」
先頭を歩くマシュへ視線を向ける。
戦いが終わるたびに自分に怪我が無いか気遣ってくれるのは嬉しいけれど、その度に彼女への罪悪感が増してくるのだ。
命懸けで守ってくれているのに、自分はそれを見ている事しか出来ないというのが情けなく、そして悔しい。
「ふぅん……ま、合格ってとこか」
「……はい？」
「嬢ちゃんは良いマスターになれるって事さ。少なくとも、俺が知ってる範囲内での話だがな」
人懐っこい笑みを浮かべて、キャスターは楓の肩を叩く。

「そうやって、自分の無力さを理解してるのは良い事だ。令呪も無駄に使おうとしてないしな」
サーヴァントに入れ込みすぎるのもどうかと思うが、盾の嬢ちゃんはまた別かねと呟くキャスター。
生身の人間にサーヴァントの力が宿った変則的な存在なのだから、どこまで行っても所詮は幽霊同然なサーヴァントとはまた別だろう。
「いいか、いつかお前にも何か出来る時は来る。それを待って、それがいつかをちゃんと見極めな」
「いつかって……それまで見てろって事？」
「そういう事だ。見てる事しか出来ないなら、ちゃんと見ててやりな。盾の嬢ちゃんは、お前の為に戦ってくれてんだろ？」
ランサーとの戦いでは、それがちゃんと出来ていたじゃないかとはあえて言わない。
ここまで言えば解ってる筈だとキャスターは確信したし、楓の眼の色を見ればそれは間違いないと思えた。
魔術師として優秀であるかどうかと、マスターとして優秀かどうかはまた別。大抵の魔術師はサーヴァントに対して親身になんてなりはしない。
楓とマシュは出会いからして普通のサーヴァントとマスターのそれとは違っていたようだが、それは些細な事だ。
「フォフォウ」
楓の肩に乗っていたフォウも、キャスターの意見に同意するように喉を鳴らす。
「そっか……それもそうかな」
「先輩？　どうかしたのですか？」
キャスターとの会話が気になったのか、マシュが近寄って話しかけてくる。
楓は軽く息を吐いてから、笑顔で応えた。
「別に。マシュには感謝しなきゃねって話してただけ」
「感謝、ですか……？」
「そう。ありがとね、マシュ」

「……特別感謝されるような覚えはないと思いますが、どういたしまして」
頬を少し赤らめるマシュに、楓も笑みで返す。
根本的解決になったかどうかはともかく、少しは気が楽になっただろうとキャスターも鼻を鳴らして思う。
（俺も、たまには良いマスターに引き当ててもらいたいもんだねえ）
あり得ないぐらい激辛の麻婆豆腐とか食わせようとしないマスターなら、なお良い。
「ちょっとアナタ達！　霊脈まですぐそこなんだから、さっさと来なさいよ！」
あのヒステリーな面が無ければ、あっちの嬢ちゃんも悪くないんだけどなとオルガマリーを見ながらキャスターは思う。
だが、それを口にする事は決してない。
それは何よりも、彼女を傷つける事だろうから。

オルガマリーの指示に従い、マシュは盾を地面に突き立てる。
到達した霊脈のポイント。地面の下を流れるマナへと盾を媒体に介入し、魔法陣が発動。
一瞬だけ青白い光に包まれたかと思えば、盾を中心にしたサークルの展開が完了した。
「カルデアにあった召喚実験場にそっくりです……」
マシュのそんな呟きが聞こえてくるのと、楓の端末に通信コールが響くのは同時であった。
指で端末を操作すれば、立体映像で映し出されるロマニの姿。人の良さを絵に描いたような彼の顔を見ると、なんだか酷く安心出来た。
『無事にサークルを設置出来たんだね。良かった、最後まで伝えられたか心配で』
「ロマニ！　何であなたがその席に座ってるのよ!?」
『って所長!?　なんでそこに!?』
「私もマシュや霧生と同じ、偶発的にレイシフトに巻き込まれたみた

いね。そんな事よりもね！」
　約一名、物凄い剣幕で怒鳴りつけているが。
「ねぇ、マシュ。所長とドクターって、仲悪いの？」
「いえ、そんな事は無いかと。むしろ、ドクターと険悪な関係の人を探す方が難しいです」
　つまり、ロマニは本当に人が良いという事なのだろう。
　カルデア勤めの長いマシュが言うのだから、間違いない。
「そんな……レフが……？」
『爆発の中心部にいたので……生存は絶望的かと。所長達が生き残っていたのだって奇跡のようなものですし……』
　二人の会話に出てくるレフという名前には楓も覚えがある。カルデアに来た時、マシュに次いで出会った中年の男性がそういう名前だったはずだ。
　なんだか人の良さそうな笑顔を――良すぎて逆に胡散臭く見えなくも無かったが――浮かべていたが、あの人も死んでしまったのか。
　楓からしてみればろくに知らない人だからか、多少のショックを受ける程度でしかない。
　だが、マシュやロマニ達は相応に付き合いが長いのだろうから、受けているショックはと　てもじゃないが楓が想像できる物では無いだろう。
『僕が指揮を取っているのは、レフ教授他僕より上の階級の者に生存者がいないからです。４６名のマスター候補達も全員危篤状態で治療の目途も……』
「っ……だったらコフィンをコールドスリープモードにしなさい！　死ぬよりマシ！　生きていれば後からどうにでも弁明できるわ！」
『りょ、了解！　すぐに手配します！』
　立体映像のロマニが画面の外にいるであろう生き残った職員に指示を飛ばす。
　それを尻目にオルガマリーは「そんな大勢の命なんて背負えないわよ……死なないでよ頼むからぁ……」と小さく涙声で漏らしている。
『手配完了しました。これでなんとか、外部からの応援が来るまでは

持たせられるはず……その外部との通信も今は不通ですが』
「そう。とりあえず、呼びかけは続けなさい……さて、次は」
カルデアの方の問題。ここから指示を出せる範囲の物は何とかなっただろう。
その他は帰還してから手を付けるしかない。万が一があっても、ロマニはあれで優秀なのだから任せていいとオルガマリーは思案する。
ならば、次はこちらの問題だ。
「キャスター、改めて色々と確認を取りたいのだけど」
「ん？　何だ、次は俺の番か」
暇そうに瓦礫に腰かけていたキャスターが顔をあげる。
「えぇ。ここなら落ち着いて話も出来るし、なんで低級の使い魔やサーヴァントがウロウロしてるのか説明してくれない？」
『僕からもお願いします。御身がどこの英霊かは存じませんが』
「あぁ、堅苦しい挨拶は結構。手っ取り早く要点だけ話そうや」
ロマニの挨拶を遮るようにキャスターが言う。ついでとばかりに「そういうのは得意だろ、そこの軟弱男」と中々に酷い事を言い放った。
解りやすいほどにショックで表情を歪ませるロマニを無視し、楓が恐る恐る手を上げる。
「あの、一つ質問。サーヴァントって、マスター無しだと実体保てないんだよね？」
「あぁ、その通りだ」
「じゃぁ、キャスターのマスターは？　私とマシュ襲ったオバ……ランサーも、そういえばマスターいなかったみたいだし」
「知らねぇけど……まぁ、生きちゃいねぇだろうな。俺の……俺達の聖杯戦争は、ある日突然変わっちまった」
キャスターにも詳しい事は何も解らない。ある日突然、気がついたらこうなっていたとしか言いようが無かった。
冬木の街は炎に包まれ、人間達は一夜にして消え去り、残ったのは何故かマスターを失ってもなお現界を保ち続けているサーヴァントと、どこからか湧いてきた低級の使い魔のみ。

実質的に聖杯戦争は終結したも同然だと、少なくともキャスターは思ったそうだ。
マスターも無く、街もこのような有様になっては最早まともな形での続行はあり得ないから。
「だが、そんな状態で聖杯戦争を再開したヤツがいた」
それがセイバー。呼び出されるサーヴァントの中でも最優と誉れ高い剣の英霊が、突如として他のサーヴァント達を襲撃したのだ。
結果、キャスターを除く五騎はセイバーの手で打倒される。そして、セイバーが浴びせた泥のような物に飲み込まれて蘇生。
今や、セイバーの手駒として街中に散らばって各々行動しているというのだ。
「じゃぁ、キャスターは聖杯戦争で勝ち残ってるって事になるの？」
「あぁ……まだ負けてないって意味ならそうなる。この街に残ってるのも、俺以外でいえば件のセイバーと、アーチャー……そんでバーサーカーだ」
『ランサー、アサシン、ライダーはすでに？』
「アサシンはお前らが来るちょい前に始末したし、ライダーはそこの銀髪の嬢ちゃん助ける時にやった。ランサーは、そこの二人と会った時にな」
キャスターが挙げていた戦果に、ロマニもオルガマリーも驚きの色を隠せないといった様子だった。
オルガマリーは目の前で見ていたから解らなくもないといった風でもあるが、それでも信じられない物を見たような顔をしている。
「マシュ、キャスターがやった事ってそんなに凄いの？」
「先輩は、サーヴァントの知識もあまり無いのですか？」
「ん～……カルデア来る前に読まされた資料で読んでたけど、大雑把にしか解ってないといいますか」
「成程。では、この際なので簡単にお教えします」
サーヴァントは基本七つのクラスに分けられる。
剣の英霊セイバー。
弓の英霊アーチャー。

槍の英霊ランサー。
騎兵の英霊ライダー。
魔術師の英霊キャスター。
暗殺者の英霊アサシン。
狂戦士の英霊バーサーカー。
それぞれクラスに応じた特徴を持ち、当然ながらそれを活かした戦いを得意とする物である。
例えばアサシンならば敵サーヴァントとの直接戦闘には向かないが、マスターを文字通り暗殺するという事に関しては他クラスを凌駕。
ライダーであれば、基本ステータスは低い事が多いが多彩な宝具や騎乗する生物、乗り物などによって高い機動力を得るといった風に。
「キャスターはその名の通り、魔術師ですので直接戦闘には向いていません。それにセイバー、アーチャー、ランサー……通称、三騎士と呼ばれるクラスには高い対魔力スキルがある場合が殆どです」
つまり魔術が効かない、効きづらいという事。
絶対に勝ち目がないとまでは言わないが、それでも不利である事は変わりない。
ましてや、一対一の直接戦闘ともなればその不利は圧倒的ともなろう。
「何せ、基本的にはテメェの陣地つくって引きこもるクラスだからな」
何時の間にか、二人の傍に立っていたキャスターが会話に加わる。
ロマニ達からの質問はだいたい終わり、今は二人で何やら盛り上がっているので席を外してきたようだ。
「俺みたいに一人で前衛(まえ)に出るようなのは変わり種だ。他のキャスターとはあんま比べんなよ」
「そうなんだ……ちなみに、マシュってどのクラスなの？」
そう言えばマシュのクラスを知らない。マスターならば、自分が契約したサーヴァントの基本情報は観るだけで解るそうだが、楓には全く解らない。
オルガマリーには「それはアナタが魔術師としてヘッポコ以下だか

らよ」と一蹴された。
　確かに、魔術師ですら無いのだからヘッポコ以下と言われても確かに言い返せないのだが。
「それは……私にも把握出来ません。この宝具も盾であるという事しか解りませんし」
　マシュ本人にも解らないとなれば、それはもうお手上げじゃないだろうか。
「そこはあれだ。マジで嬢ちゃんがきちっとした魔術師なら、解析で来てたと思うぜ？」
「……ですよねぇ」
　キャスターの容赦ない指摘に楓は肩を落とす。
　いくらマシュが通常のそれとは違うデミ・サーヴァントだからといっても、マスターである楓が融合したサーヴァントの情報を閲覧できないのは問題外だろう。
「それはそれとして、自分のクラスすら解らねぇってのは流石にな。盾が武器ねぇ……とりあえず、盾の英霊（シールダー）とでも名乗っとけば良いんじゃねの」
「シールダー、ですか？」
「おう。自分の真名隠すのは大事……って、嬢ちゃん達には当てはまらねぇか」
　サーヴァントが各々のクラス名で名乗りをあげるのは、自分の真の名を隠す為だという。
　真名が知られれば、そこから生前の死因等を調べ上げられる等で己の弱点が丸裸になるも同然だからである。
　キャスターの言う通り、自身に融合した英霊の真名も解らないマシュには当てはまらない事ではあるが。
「……じゃぁ、キャスターの真名って何……あだっ！」
　杖で叩かれた。
「バーカ。その辺を調べんのもマスターの役割だ。そんぐらい自分で当ててみな」
「……肝に銘じます」

調子に乗って甘え過ぎたかと、叩かれた頭を摩りながら反省。
やはりというか、自分が一人前のマスターになるにはまだまだ道のりは遠そうだ。
「まぁ、カルデアってとこに帰ってからでもいいから俺の真名当ててみな。所謂宿題ってやつだ」
「せ、せめてヒントください……いきなりノーヒントは辛いです」
「ったく、しゃーねぇな。俺はキャスター以外にもランサーやライダーのクラスで呼ばれる場合があるとだけ教えてやる」
「……なんか、難易度あがった感が」
「悪いね。俺はこう見えても有名人なんでな」
つまり、これ以上のヒントは真名に即時繋がるので出せませんと言う事らしい。
有名だというのもヒントなら、帰ってから図書館で歴史とか神話関係の本漁ればすぐに解るのだろうか。
あまりそっち方面に詳しくない楓でも、パッと浮かぶ有名処だけで二十人以上であったが。
「帰ったら、その辺の講義も必要かしらね……全く」
『所長。楓ちゃんの面倒見る気満々ですね』
「成り行きとはいえ、カルデア所属のマスターになったんだもの。つまり私の部下！　なら、半端な知識のままでいられたら困るのよ！」
完全にロックオンされた。歴史の成績が悪い楓にとっては、無事に帰ってからも地獄が続く事が確定してしまった。
いや、普通の女子高生にサーヴァントの知識を最初から求める方が間違ってませんかと嘆きたい。
間違っているからこそ今から教えますという事ですか、そうですか。
「ふふ……歴史の成績よくなる魔術とか、ありません？」
「「『ありません』」」
「……ですよねー」
思ってたより魔術使えないな、と魔術師に聞かれたら激怒されそうな事を思ってしまったのは内緒である。

「フォーウ……」
楓のそんな考えを見抜いたのか、呆れたようにため息をつくフォウ。
まさか謎の小動物にまで呆れられる日がこようとは、今朝の楓には想像もつかなかった事である。
「まぁ、その為にも無事に帰らないと……霧生」
「はい？」
「これからあなたには、サーヴァントを召喚してもらいます」
「……はいぃ？」
オルガマリーからの突然の無茶ぶりであった。
サーヴァントを召喚。いや、私にはマシュがいるじゃないか何を言っているのかと楓は思う。
キャスターだっているし、それにマスター一人で複数のサーヴァントと契約と言うのは出来るのだろうか。
そんな楓の疑問に答えるようにマシュも声を荒げていた。
「ちょ、ちょっと待ってください！　サーヴァントはその維持に膨大な魔力消費をマスターに要求します。私はまだ魔力消費は少なくて済みますが……他の英霊を召喚すると先輩の体にかかる負担も」
「あ……やっぱり、不味いの？」
「はい。最悪の場合、先輩は魔力の枯渇で……その……」
「干からびで死ぬかもな」
「うぇっ!?」
サーヴァントとマスターは基本二人一組、というのはそういう理由なのかと背中に走る寒気と共に楓は実感する。
そんな事をさらっとやれと要求してきたオルガマリー。貴女は悪魔か。
「大丈夫よ、その辺の事もちゃんと考えて対処済みだから」
だが、そんな不安は次の言葉であっさりと解消された。
「マシュは気づいてるでしょうけど、このサークルはカルデアの召喚実験場と同じ物を再現した空間よ。つまり、カルデアの召喚システムと直結してる」

『爆破によって、カルデアの施設の八割は壊滅したけど発電設備も召喚システムも無事。召喚システムは電力を魔力に変換させられるから……』
「先輩が消費する分の魔力を、カルデアで補う……と？」
『そういう事。幸い、電力は有り余ってるからね……仮に楓ちゃんが１００を超えるサーヴァントと契約しても、その維持を賄える魔力は代価出来る』
　ただし、戦闘における魔力消費。特に宝具の使用に関してはマスターとなる楓への負担は避けられないとの事であった。
　それでもサーヴァントの維持に使う魔力は実質考えなくて良いと言うのは、とても大きい。
　キャスターもそんな事が出来るのかと、感心したかのように声を漏らしている。
「でも、なんでサーヴァント召喚しないといけないんです？　私じゃ無くて所長が呼べばいいんじゃ……」
「っ……私が呼べたらやってるわよ」
「はい？」
　忌々しげに吐き捨てられた言葉に、楓は意味が解らず首をかしげる。
『楓ちゃんは知らなくても無理ないけど……所長、マスター適正が無いんだよ』
「……適正が、無い？」
　つまり、サーヴァントのマスターにはなれないと言う事なのだろうか。
　魔術師として優秀なのだろうとは、素人目に見てもハッキリ解ったのだが、それなのにマスターにはなれないというのか。
　あからさまに苛々した表情を浮かべているので、これ以上は踏み込まない方が良さそうだと理解する。
「とにかく！　私達はカルデアに帰る前に、この特異点の調査を行わないといけないの。手ぶらで帰ったら、協会のお偉方に対する言い訳にも支障が出るわ」

『偶発的なレイシフトとはいえ、特異点化の原因の調査解明及び可能ならばそれの排除は当初の計画通りだからね』
突如滅亡が確定した人類の未来。それの原因を探る為に、特異点の調査を行うのは確かにカルデアの目的である。
早い話、楓達にはこのまま強行軍で調査を行ってもらおうという方向で話がまとまっていたようだ。
「今のあなたは私の部下なんだからね。拒否権は無いわよ」
「はい……そうですよね」
新入社員が、会社の社長に逆らえる訳もないのである。
「話を戻すわ。今後の調査を行うにも、他の使い魔やサーヴァントに襲われる可能性は高い……戦力は少しでも多い方が良いでしょ？」
そう言いながら、オルガマリーはキャスターを見やり、彼は頷く事で返した。
「あぁ……お前らが言う特異点とやらの原因調査なら、まず間違いなくセイバーとアーチャーは相手にしないとならねぇだろうな」
「セイバーとアーチャー……バーサーカーは？　まだ生き残っているのでしょう？」
「アイツは無視でいい。理由は知らんが陣取ってる街外れの森にさえ近づかなきゃ、手は出してこねぇよ」
それでも、今後の目的の為に戦力の増強は行うべきだとキャスターの言葉が告げていた。
彼ほどの実力があっても、残るセイバーとアーチャーは強敵だと言う事か。
「ほら、さっさと召喚の準備に入りなさい。詠唱なら私が教えてあげるから」
オルガマリーに促され、サークルの中心部へ移動する。
そこで召喚の方法を教えてもらう楓の姿を見やりながら、マシュは小さく息を吐いた。
確かに戦力の増強は必要だ。成り行きとはいえ力を貸してくれているキャスターがいるとはいえ、今のままでは、特に自分の力不足が否めない。

（私がもっと戦えれば、先輩に負担を掛ける事も無いのでしょうか）
デミ・サーヴァントになった時は正直戸惑ったが、自分と契約したマスターが楓である事を知った時は正直嬉しかった。
カルデアの廊下で――おそらく入館時に強制される戦闘シミュレーションでの脳への負担のせい――眠っていた処を見た時は流石にちょっと驚いたが、それ以上の何かが沸きあがったのを鮮明に覚えている。
彼女からはカルデアを訪れた他のマスター候補生のような、他者への敵意やその類の感情を一切感じなかった。何も背負う物も無い、普通の人だからだろうか、マシュには解らない。
交わした言葉も多く無く、一緒にいた時間も特異点にレイシフトしてからを含めても三時間少々。だが、とても楽しく充実した時間だったと思う。
（もっと、貴女の役に立てれば良いのに）
彼女のサーヴァントになった事を抜きにしても、その力になれるのだと思うと何でも出来る気がしてくる。
街のあちこちから湧いて出てくる骸骨程度なら自分一人でも実際になんとかなった。だが、サーヴァント相手だとそうはいかないというのが現実。
ランサー相手には結局推し負けていたし、楓が支えてくれなければ、キャスターが助けてくれなければ間違いなく死んでいただろう。
今後待ち受けている敵サーヴァント相手には、今の自分は足手纏いにしかならないのではないかと思うと、楓に対して申し訳ない。
（せめて、宝具が使えるようになれば）
デミ・サーヴァントになった直後から手元にあった盾が、自分と融合した英霊の持つ宝具なのだろうとは思うがどうやって発動させればいいのかが解らない。
宝具の真名解放が出来れば、ランサー相手にもまだマシに立ち回れたのではないか。楓の役にもっと立てるのではないか。何故発動できないのかと自分を責めたくなる。
今の自分は、間違いなくデミ・サーヴァント失格だ。自分と融合し、

消滅した英霊に顔向けできない。
一体どうすれば宝具を使えるようになるのか、知るにはやはりサーヴァントの先輩に聞くのが一番だろうか。
「あの、キャスターさん」
「あん？　何か用か？」
「宝具とは、どうやれば使えるようになるのでしょうか？」
まさかそんな質問が来るとは思っていなかったのか、キャスターは一瞬呆気にとられた表情を浮かべて、少しばかり困った風に首をかしげる。
「どうすればと言われても、宝具なんて使えて当たり前の代物だからな。使えるようになる方法なんざ、教えようがない」
「そう、ですか……」
キャスターの返答に、マシュは肩を落とす。
使えて当たり前の物が使えないなんて、自分は本当に駄目なデミ・サーヴァントだと表情が一気に曇る。
その落胆ぶりは見ていて可愛そうになってくるが、ここで甘く接しては彼女の為にはならないだろう。
「一つ言えるのは、使えないなら問題があるのはお前さんの方だ。サーヴァントと宝具は同じものだからな……サーヴァントになった時点で使えるようになってるはずだ」
真名が解らないだとか、マシュの抱えている問題は一切関係ない。
要するに彼女が、無意識にリミッターを掛けているようなものなのだから。
「何かのきっかけさえあれば、使えるようになるかもしれんな」
そのきっかけが一体何なのかまでは知らんがなと、キャスターは言い残して楓達の方へと歩いて行く。
あちらの準備も終わったらしく、サークルの中心に立つ楓が戸惑いつつ行う詠唱に反応して膨大な魔力が放出されている。つまり、サーヴァント召喚が始まったのだ。
きっと、そのサーヴァントも問題なく宝具を使えるのだろう。ますます、自分は役に立たない存在になるかもしれない。

それでも、楓は自分を傍に置いてくれるだろうか。自分は彼女を守れるのだろうか。
言いようのない不安を抱えたまま、マシュも楓の下へと足を進める。
「……抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」
丁度詠唱も終わったところだった。
サークル中心点からは魔力と共に光が溢れ、それと共に一騎のサーヴァントの姿がゆっくりと現れる。
光が収まると共に確認できるようになった姿。ピンク色の長髪を三つ編みに結えた、白マントを羽織る美少女であった。
「ん？　キミがボクのマスター？　ボクの名前はアストルフォ！　クラスはライダー、よろしく！」
「アストルフォ……？」
「むぅ……マスター？　もしかして、ボクの事知らなかったりする？」
「……ごめん。名前とか初耳です」
「ガーン！　ボクって、そんなにマイナーな英霊だったのか……」
楓の反応に解りやすいリアクションで返すライダーのサーヴァント。
アストルフォといえば、シャルルマーニュ十二勇士の一人ではあるが、原典となると古典の類であり知らない人は存在すら知らないだろう。
楓のように、歴史や神話に疎い人物であれば特にだ。
「あ……なんか、ごめん」
「別に良いけどね。これから知ってもらえればいいんだし。じゃ、改めてよろしくマスター！」
「あ……うん。よろしく」
あっさりと機嫌を直し、握手を求めてくるアストルフォ。半ば気圧されるように応じた楓の手は勢いよく振り回される。
僅かなやり取りであったが、傍から見て呼び出したサーヴァントがどういう性格なのかは誰が見ても明らかであった。
一言で言えば能天気。伝承からして理性が蒸発してるとまで言わ

れている英霊なのだから、ある意味当然といえばそうなのかもしれない。
「あれ？　ボクの他にもサーヴァントと契約してたの？　じゃぁ、仲間だね！　よろしく！」
「あ……こ、こちらこそよろしくお願いします」
「俺は別に嬢ちゃんのサーヴァントってわけじゃねぇんだが。まぁ、目的が同じって意味なら一緒に行動した方が得だわな」
　仮契約って事でよろしく頼むわと本人は気楽に言うが、本格的に協力体制を取ってくれるのは有り難い。
　ともかく、これで三騎のサーヴァントがこちらについてくれた。戦力としては十分だろう。
　その分、楓に掛かるマスターとしての責任も重たくはなるのだが。
「ライダー……か。本音を言えばランサーが良かったけれど」
『所長。こればっかりは運ですから、楓ちゃんを責めるのは』
「責めてるわけじゃないわ。単なる愚痴……ライダーなら前衛も任せたっていいだろうし」
　オルガマリーが見据えているのはセイバー戦。アーチャー相手ならどうにかなるかもしれないが、セイバーともなると前衛がマシュ一人というのは不安要素が大きすぎる。
　故に近接戦闘で力を発揮するランサーや、機動力で相手をかく乱する事が可能なライダーを期待していたのだが、見事にライダーを引き当てた楓は運が良い。
　アストルフォ自体、特に武勇に優れた逸話を持たない英霊なのは不安要素だが、数多の宝具を持ち得るライダーであればどうにでもなるだろう。
「霧生、ご苦労さま。とりあえず、戦力的にはこれでなんとかなるわ」
「あ、はい。どうも……」
「これで後はセイバーとアーチャーの真名が解れば文句なしなんだけど……キャスター、あなたは知らないの？」
「……アーチャーの方は見当もつかんが、セイバーの方なら解る。アイツの宝具を一度でも見れば、誰だってその真名に行きつくだろうし

な」
　オルガマリーの方を向かず、サークルの外……遠くに見えるビルの群れへ視線を向けたままキャスターは目を細める。
　彼の目に映るのはビルの群れ。それ以外の何かが見えるわけでもないが、英霊としての感が告げているのだ。
　その視線の先に、何かがいると。
「なら、セイバーの真名だけでも教えて……って聞いてるの!?」
「……ヤベェ」
「は？　何が？」
「先手を取られた！　さっさと逃げるぞ！」
　キャスターが叫んだ直後、空から降り注いだ何かがサークルを爆炎に包み込んだ。

「ふん……キャスターめ。よくもまぁ、私に気づいたものだ。こんな雑なやり方では当然かもしれんがね」
　高層ビルの屋上。
　地上数十メートルはあろうそこに立つは、弓を携えた褐色肌の男性であった。
　鷹を思わせる鋭い視線が捉えるは先ほど放った矢の着弾点。炎と煙で詳細は確認できないが、牽制として撃ち込んだあれで仕留めたとは欠片も思わない。
　他の者達ならともかく、あのキャスターがこの程度で倒れるならばとっくに打ち取れている。
「ほぅ……やはり無事。しかも無傷と来たか」
　男性、アーチャーのサーヴァントはそのクラス特性故に持つ視力によって、今いるビルの屋上からでも正確に地上の様子を見て取れる。
　一本の橋で繋がる隣町までは流石に見通せないが、それでもこのビル街全土ならば十分に。
　その視力を持って、煙の中から飛び出してくるキャスター達を正確に捉えていた。一緒に行動している人間すらも無傷と言うのは、流石に予想外であった。

「む……？　サーヴァントが一騎増えているな……なるほど、あの妙な空間は召喚の為だったか」
監視を始めた時にはキャスターとあの盾持ちの二騎しかいなかったサーヴァントに、三騎目のピンク髪が増えている。
一見して真名はおろかクラスすら判別できないが、その程度はサーヴァント同士の戦いではよくある事。
戦力を増やしてしまったのは失策だったかもしれないが、現状一番警戒すべきアーチャーのクラスで無いであろう事はすぐに見抜けた。
同じアーチャーなら、このような雑な――キャスターにすら撃つ前に気づかれる――狙撃で、こちらの場所を特定できない筈がない。
「どれ、もう一発……脅かしてやるか」
左手で弓を構え、右手の中に生成するのは矢……では無く一振りの剣。
それを弓の弦に添え、形状を作り変える。剣としての最低限の形を残してはいるが、それはまさに矢であった。
弦を軽く引き絞り、矢を放つ。
「この程度、防いでみせろよ？」
風を切り裂く轟音と共に放たれ、飛んでいく矢。まるでミサイルか何かの如き速度で目標へと向かう様は、血に飢えた獣のよう。
狙いは白服の少女。あの一行の中で最も弱き存在であろう彼女を容赦なく貫かんとする一撃であったが、やはりそれが着弾する事は無かった。
盾持ちのサーヴァントによって防がれたアレは明後日の方向へと飛んでいき、そのまま消滅する。
単なる脅かしで放った一撃故、防がれるのは当然。防げないのならここで死なせてやるのが慈悲。そう思って放ったが、アーチャーにとっては予想外の事も重なっていた。
「……あの盾は」
最初は単なる盾だと思っていたが、よくよく見ればそういう訳でも無いようだ。
キャスター以外は適当にやれば良い。疲弊したところを街を彷

徨っている骸骨共に襲われ、それで終いの連中だと思っていたが見込み違いだった。
あの盾のサーヴァントは、確実に仕留めなければならない。あれは、セイバーの天敵となりえる存在だ。
「やれやれ……好きでやっている事とはいえ、こうも仕事が増えるとはな」
口の端を釣りあげ、嗤う。
何かと目障りなキャスターの相手は自分がしなければならないと思いながらも面倒ではあったが、盾のサーヴァントの相手もするとなると面白くなってくる。
こちらの攻撃に対する反応は悪く無かったが、アーチャーから見ればまだまだ甘い。事情は分からないが、己の力もろくに発揮できていないようだ。
あれが未熟なままで終わるのか、その力の一旦でも発揮するのか、これからの戦いでどう転ぶのだろうかと思うと気分が高揚する。
別にサディスティックな趣向も無ければ戦いを特別好むわけでも無いが、どうにも心が躍って仕方がない。
「さて、力を見せてみろ。盾持ちの少女よ」
お前達の目指す場所は、あの橋の向こうだぞ。

第三話　炎上汚染都市　冬木　3

肩で息をしながら、楓は瓦礫を背に預けてその場に座り込んだ。
突然の襲撃。キャスター曰く、アーチャーの矢だそうだが、あんな破壊力があるなんて聞いてない。
どこの世界に地面を吹き飛ばす矢があるというのか。
「も……もう撃ってきてないよね……っ!?」
「は、はい……アーチャーの狙撃は止まっています」
「あれの！　どこが！　狙撃なのよぉ！」
サークルに撃ち込まれた一発目、自分を狙ってきた二発目、そしてこの廃ビルに逃げ込むまで撃ち込まれた回数は百を超える。
そのうち、確実に直撃する物は全てマシュが防ぐか弾くかしてくれたおかげでどうにか無傷で済んだが、逃げている最中は生きた心地がしなかった。
あれは狙撃と言うより空爆。矢ではなく爆弾を放り投げているんじゃないかと言いたい。
「てかどっから撃ってきてんの!?」
「私にはさっぱり……方角はともかく、アーチャーの位置は特定できません」
「ボクにも解んなーい！　あー、もう！　場所さえ解れば、ひとっ飛びしてやっつけてやるのに！」
アストルフォは一方的にやられ放題な状況が気に入らないのか、頬を膨らませて解りやすく不機嫌になっている。
「俺らじゃ、どっちみち位置の特定までは出来ねぇさ。向こうだって、とっくに移動してるかもしれねぇしな」
その辺に落ちていた石ころに魔術を使い、索敵の為に四方に飛ばすキャスター。
表情は苦々しく、彼にしてもやはり面白い状況では無いようだ。
「あの野郎、滅多に弓なんざ使わねぇくせにこういう時だけ真っ当なアーチャーしやがって」
何やら弓兵への評価とは思えぬ言葉が飛び出たが、突っ込む余裕も

ないほどに皆疲弊している。
　こちらの遠距離攻撃手段となると、キャスターかオルガマリーの魔術だが射程はせいぜい数メートル前後。だが、アーチャーのそれは遥かにそれを上回る。
　反撃を試みようにも手札がそもそも無い上に、近づいて直接叩こうにも相手の居場所が解らない。控えめに言って最悪である。
「マシュ、何度も防いでたけど……大丈夫？　怪我とかしてない？」
「問題ありません。むしろ、狙いが先輩に集中していたので防ぎやすかったです」
「あ、あぁ……そうなんだ……ははは。ありがと、マシュ」
　あんな威力の矢で自分が集中的に狙われていたのかと、改めて背筋が凍る。
　逃げるのに必死で全く気付かなかったし、それを全部防ぎきってくれたマシュには一生頭が上がらないかもしれない。
　本当にアーチャーがこれほど厄介だとは思わなかった。
「……いっそ、アーチャー無視とか駄目？」
　ふと思いついた事を楓は口にする。
　居場所も解らない敵に固執するより、無視して先にさっさと進んでしまうのも手ではないだろうかと。
「賛成したいのが本音だけど、無視するにしては厄介すぎるわよ。あ～……セイバーよりはまだやりやすいと思った私も馬鹿だったわ」
「アーチャーの野郎はセイバーのボディガード気取りだからな。セイバー狙いなら、アーチャーの相手は絶対に避けられねぇ」
　横目でキャスターが見やるのは廃ビルの外に見える橋。冬木大橋と呼ばれる、このビル街と隣町にあたる住宅街を繋ぐ唯一の道だ。
「ついでに言えば、セイバーの居場所はあの橋の向こう側。柳洞寺って寺がある山の洞窟の中だ」
「橋の向こうって……あ～……確かに無視出来ない、ね」
　楓も橋を見やり、自分が口にした案が非現実的な事であると理解する。
　遮蔽物も一切無く、相応の距離がある橋の上をアーチャーの襲撃を

かいくぐって走り抜けるのはどう考えても無理だ。
楓が諦め交じりの溜息をつく中、アストルフォは。
「じゃぁさ。橋の向こうまで飛んでっちゃえばいいんじゃない？」
と、あっさり言ってのけた。
「はぁ？　飛んでいくなんて何言ってんのよ……」
「ボクの宝具なら空飛べるよ？」
「……マジで？」
「マジだよ」
アストルフォが立ち上がり、ミニスカについた埃を手で払って、右手を空に掲げると虚空を裂いて一体の獣が出現した。
一見して馬のようでもあるが、その上半身はまるで鷲のようで翼も持った奇妙な四足歩行の獣。
「紹介しよう！　これがボクの宝具にして相棒、ヒポグリフさ！」
「お、おぉ……」
ドヤ顔で胸を張るアストルフォに楓は小さく拍手を送り、確信する。
ヒポグリフの大きさ的に、三～四人は何とか乗れなくもないだろう。これなら全員で空を飛んで橋を超えていく事も可能かもしれない。
「ちょっ……そんな気軽に宝具出して……霧生の魔力消費考えなさいよ」
「平気だよ。真名解放しない限りは省エネだし」
「ん～……今のところ、そんなに負担感じませんし、大丈夫ですよ？」
実際、楓はさほどの負担を感じていない。
アストルフォを召喚した直後は、少しばかりの疲労と言うか何かが体から抜き取られたような感覚があったが今はそれも無い。
これに乗って飛んで移動するだけなら、さほどの問題は無いだろうと思える。
「それでも、よ。霧生は魔術師ですら無いんだから、迂闊な宝具の開帳は控えなさい」
「あれ……マスター、魔術師じゃなかったんだ？」

ちょっと意外、と言いたげな顔のアストルフォに楓は申し訳なさそうに頭を下げる。
「う、うん……実はそうなんだよね……」
「ふ～ん。でもま、呼んでくれたからには全力でキミの事を守るから安心してね！」
実にあっけらかんとしたその態度に、楓は逆に呆気にとられた。
英霊というからにはもっとこう、立派と言うか生真面目なのが来ると思っていたから、アストルフォのようなお気楽なのがいるなんて思ってもいなかった。
魔術師でも無い自分に呼ばれたとなれば、不満を覚えやしないかとも思ったが杞憂だったのかもしれない。
「で、どうする？　ヒポグリフで飛んでっちゃう？　逃げるのでも、アーチャーと戦うのでも、ボクはマスターに従うよ」
楓は「あー……」と言葉を詰まらせ、考え込む。
正直言って、アーチャーの事は無視してしまいたいがキャスターの言葉通りなら絶対に戦いは避けられない相手。
なら、さっさと倒してしまうのもアリかと思うが肝心の居場所が解らないのであればどうしようもない。
「どうしよ……私個人としては無視しちゃいたいんだけど、セイバーだけ倒すって無理なんだよね？」
訴えるような目でキャスターを見る。
「あぁ。仮にここで無視したとしても、あの野郎は追ってくるぜ？　さっきも言ったが、セイバーのボディガード気取りだからな」
そうなった場合、下手をすればセイバーとアーチャーの二騎を同時に相手にしなければならない。
完全に勝ち目が無くなるも同然の状況。それだけは避けた方が良いのは、戦いに関してド素人である楓でも解る。
だが、居場所すら解らないアーチャーとどう戦うかが問題だ。
「……戦うしか、ないって事ですよねぇ」
「当たり前でしょ！　全く、空を飛ぶにしたって……この人数を乗せて、アーチャーの攻撃避け続けられると思ってるの？」

オルガマリーの言う通り、この人数を乗せてアーチャーの攻撃を全て掻い潜って逃亡は現実的では無い。
何回かに分けて橋の向こう側とこっち側を往復してもらう、なんてのはもっとあり得ない。
どうするもなにも、最初から選択肢なんて無くないかと気づいたのは今更なような気がした。
「でも、どうやってアーチャー見つければ……まだ最初に撃ってきてた場所にいるかな……？」
「いないだろうな。何時までも同じ処に陣取る狙撃手はいねぇよ」
「そもそも、最初にいた場所からして解りません」
逃げるのは難しく、戦おうにも土俵に乗る事すら叶わない。
素人考えでは詰みなような気がすると、楓は頭を抱える。
「それって、どうしようも無くない……？　あー、せめて向こうが攻撃してくれれば居場所解るかもしれないのになぁ」
「……それだ。嬢ちゃん、名案だな」
「へ？」
意地の悪そうな笑みを浮かべるキャスター。
楓がなんとなく感じた嫌な予感は、見事に的中するのであった。

廃墟の街。その大通りを楓やマシュと共に歩いていた。
表情は暗く、何時どこから来るか解らないアーチャーの攻撃に怯えながら進む楓を守るようマシュは盾を構えて、傍らに立つ。
「ったくもぉ……キャスターめぇ……」
涙目になり、口にするはキャスターへの恨み節。
確かにアーチャーが攻撃してくれれば居場所が解るかもとは言ったが、まさか囮をさせられる羽目になるなんて思ってもいなかった。
囮として攻撃を受けてこいなんて、よりにもよってなんで自分がと叫びたくなる。
「アーチャーの攻撃は、ほぼ先輩を狙っていましたから……」
「私が一番囮に向いてるって事ですか、そうですか……はぁ……これ、

怪我したら保険効くかな……？」
「カルデアは福利厚生もバッチリなので恐らくは。ただ、怪我で済めば……ですが」
無事にカルデアに戻れたら、オルガマリーに頼んで賃金に色つけてもらおう。
密かにそう決意するのと、マシュがはるか上空より飛来する矢に気づいて楓を押し倒すのはほぼ同時であった。
「マスター、伏せて！」
「きゃぁぁっ!?」
押し倒される形でマシュに庇われ、降り注ぐ矢という名の爆撃は全て彼女の盾で防がれる。
二人の周囲は矢の直撃で抉るられるように吹き飛び、一撃防ぐ毎に衝撃が苦痛となってマシュを痛めつける。
「ぐっ……これは……っ！」
最初の爆撃の時よりも、明らかに矢の威力が上がっている。
以前の攻撃が単なる牽制だとすれば、これは本気。確実に自分達をここで仕留めんとする物だ。
決して防げないわけでは無いが、これを何発も受け続けるとなると話は別。あまり長くは持たないと、この一撃で察するには十分だった。
「マスター、立ってください！　移動します！」
「わ、わかった！」
マシュに促されるまま立ち上がり、楓は一目散に近くの廃ビルへと駆け込む。
建物の中なら、外から撃ってくるアーチャーもこちらを見失うかもと期待したが、それは壁を貫いて襲い来る矢の群れによって打ち砕かれた。
「ちょぉっ!?」
目の前を通りすぎた矢に驚き、尻もちをつく。
動きが止まった一瞬を狙うかのように楓を狙って飛来する数本の矢。すかさずマシュが防ぎ、楓を抱き上げてすぐ傍の部屋に転がり込

む。
　元々は何かの事務所でも入っていたのだろうと思われる室内には、デスクやソファー、ロッカー等がそのまま放置されていた。
　無いよりはマシと、マシュは即座にデスクを蹴り飛ばして自分達が入ってきた出入り口を塞ぎ、楓を背にして盾を構え次の攻撃に備える。
「と、とりあえず……釣れた、かな？」
「ええ。後はキャスターさんとアストルフォさんが、アーチャーの居場所を突き止めて強襲を掛けてくれるはずです」
「じゃぁ、あとはここに隠れてれば……」
「そうであれば嬉しいですが……っ!?」
　やはりそうはいかないかと、自身に突き刺さるような殺気をマシュは感じ取り、直後に襲い来る無数の矢が二人を喰らわんとデスクや壁を容易く貫いて飛来。
　壁や床が貫かれ、砕かれる音と楓の悲鳴を耳にしながら、雨あられと降り注ぐ矢を防ぐマシュに浮かぶのは苦悶の表情。
　一撃一撃を防ぐ毎に威力が上がっている。防いだ先から移動など出来ず、踏み止まるのがやっと。
「ぐ、ぅ……っ！」
　盾が砕けるのでは無いか、それよりも先に自分の腕が壊れるのではないかと思えるほどの衝撃が絶え間なく襲い来る。
　自身を支える両足に力を入れ、決して膝をつき、倒れぬよう意思を込める。自分が倒れたら、後ろにいる楓を誰が守るのか。
　彼女を守る為にも、この程度で負けてはいられないのだから。
「っ……ぅぁっ……ぁああっ！」
　拷問のような矢の暴風雨が終わり、無残な有様となった部屋の中。耐えきったマシュは荒く息を吐きながら背後にいる楓を確認する。
　全身を恐怖で震わせながら、頭を抱えて蹲っている。見たところ、怪我一つ無いようだ。
「はぁ……はぁ……ご無事、ですか……？」
「う、うん……ありがと……」

返事にホッとした瞬間、気が抜けたのかマシュは両足から崩れ落ちる。
咄嗟に楓が抱き抱えるが、彼女の顔は苦痛と疲労に歪んでいた。
ただ盾を構え、攻撃を防いでいただけだと言うのに、マシュの身にはどれだけの負担が掛かっていたのか、楓にはとても想像はつかない。
「マシュ!?」
「だ、大丈夫……です……」
「大丈夫って顔してないよ!」
ちょっと力を込めれば折れてしまいそうな程に細い腕で、身の丈程もある巨大な盾を振り回し、ビルの一室を見るも無残な光景に変えてしまう程の攻撃を長らく防ぎ続けたのだ。
いくらデミ・サーヴァントとして常人を遥かに超える力を持っているとしても、マシュの感じた苦痛は一目瞭然ではないか。
これ以上、彼女に盾役をしてもらう事は楓には出来そうにも無かった。
「とりあえず逃げよう！　アストルフォ達がアーチャーと戦ってくれるんだし、私達……っていうか、マシュはもう休んでれば……」
「……いえ、どうやら……そんな暇は、無いようです……っ！」
マシュが楓の後方を睨みつけ、それにつられて自身でも確認をすると、砕けて消滅した壁の向こうから骸骨達の群れがゆっくりと迫ってきているではないか。
さっきまでのアーチャーの爆撃の音に釣られ、周囲にいたのが一斉に群がってきたのか。
確認できるだけでも数十体。その中に、人骨とは違う骨で組まれた異形の存在もある。
「な、何アレ……!?」
「竜牙兵、ですね……他のスケルトン達より、ほんのちょっとだけ強い個体と思えばいいかと……」
盾を支えに立ち上がり、マシュは楓と骸骨の群れの間に立つ。
「どこかに隠れてください……マスター」

楓の静止も聞かず、マシュは目の前の敵性存在へと立ち向かう。
全身を襲う疲労と苦痛に膝を折っている場合では無い。ここで自分がやらなければ、楓の身が危ないのだから。

２０階以上はあろうビルの屋上に陣取っていたアーチャーは、黙々と矢を撃ち放っていた。
標的である盾の少女とそのマスターの位置はすでに掴んでいる。後はひたすら、ここから攻撃を繰り返しているだけで良い。
いずれ防ぎきれずにこちらが圧し勝つか、爆撃の音を聞きつけたスケルトン達に群がられるかのどちらかだ。
「……む？」
しかし、この優位は続かないかと悟った瞬間に遥か上空から叩き付けられる無数の魔力球。
後方に飛びのいてそれを回避し、即座に空へと目線を向ければ、そこにいるのは忌々しい見知った顔。
鷲と馬を合わせた獣にピンク髪の少女と共に跨り、空からこちらを狙うとはずいぶん姑息なと思いつつも、その可能性を考えなかった自分の浅はかさに苦笑する。
（やれやれ、調子に乗りすぎたな）
さっさと移動していれば良かったのに、ここから一方的に盾の少女を嬲る事に意識を向け過ぎていた。
セイバーに倒された後に浴びた泥のせいで、どうにも思考が雑というか、一種の狂化状態に陥ってしまった影響とでも言うべきだろうか。
今更何を言っても言い訳だなと脳裏に浮かんだ雑念を振り払い、アーチャーは屋上へと降り立った因縁の敵と真正面から睨み合う。
「あの二人が囮と気付かんとは、感が鈍ったか？　らしくない事をしたせいだな」
「やれやれ……確かに、アーチャーらしい戦い方をしすぎたせいかもしれんな」

手の中の弓矢を消滅させ、皮肉っぽい笑みを浮かべる。
「だが、私を抑えたところであちらの二人も窮地には変わらんぞ？
今頃、スケルトンや竜牙兵共に襲われているころだろう」
「チッ……それも込みだったってわけかい。せっこい事しやがる」
忌々しげに吐き捨てるキャスターを尻目に、アストルフォは腰に下げた剣を引き抜いた。
マスターとマシュに危機が迫っているのなら、悠長にお喋りなどしていられない。
一刻も早く、アーチャーを倒して二人の下に駆けつけなければならないのだから。
「だったら、さっさとやっつけさせてもらうよ！　サクッと倒して、マスター達を助けるからね！」
「サクッとか……こちらも意地はあるのでね。そう易々とやっつけられるわけにはいかんな」
アーチャーの両手に具現化するのは二対の剣。弓兵だからと弓ばかり使うわけでは無いと言わんばかりにそれを構え、見せるのは不敵な笑み。
まるで、こちらの方が本来の得物だと言わんばかりの表情と構えだ。
「んじゃ、前衛は任せるぜライダー。オレは支援に回るからよ！」
「オッケー！　それじゃ、シャルルマーニュ十二勇士アストルフォ！
いざ尋常に勝負！」
「……真名バラすのかよ」
わざわざクラスで呼んだ自分の気遣いを一瞬で台無しにするとは。
理性が蒸発しているというのは伊達では無いと言う事か。
（……盾の嬢ちゃんの方に来てもらうべきだったか？）
一瞬そう思ったが、それだと楓の護衛を任せられる相手がいなくなる。
オルガマリーと違って、楓には自衛の手段が無いのだから誰か一人はサーヴァントがついていなければならない。
故に楓にはマシュをつけ、オルガマリーには一人で隠れてもらって

いる。自衛が出来る分、一人でも生き残れる確率は高いからだ。
スケルトン達に見つかっても、彼女なら――数で圧されない限りは――どうにでも出来るからだ。
（ま、今更考えても仕方ねぇか！）
さっさとアーチャーを片付けてしまえば良しという状況に変わりはない。
腰に携えた剣を引き抜き、アーチャーへと立ち向かうアストルフォの背を見ながら、キャスターも己の役割を果たさんと魔術を展開する。
今の自分の役目は、アーチャーを倒す事なのだから。
「てぇりゃぁあっ！」
「フン！」
アストルフォとアーチャーの剣が甲高い音を立て、火花を散らす。
激しい剣撃の応酬と言うより、アーチャーが余裕でアストルフォの剣を防いで反撃に転じ、慌てて回避した彼女が懲りずに立ち向かうという光景が繰り返されていた。
多少でも剣の心得がある者が見れば、アストルフォの刃はアーチャーには届かないだろうとすぐに理解できる光景。それは誰よりも本人が解っているはずだ。
それでもなお、何度も何度も馬鹿正直に斬りかかってくる相手に、アーチャーは忌々しく舌打ちをした。
（一対一なら、すぐに終わらせられるが……っ!?）
アストルフォを蹴り飛ばし、その反動を利用して後方へと飛び退けば、キャスターの放った魔術が雨あられと降り注ぐ。
ハッキリ言って、アストルフォは弱い。元々が武勇に優れた英霊と言う訳でも無い事もあり、アーチャーには宝具を使う暇も与えずに仕留める自信があった。
だが、それは一対一での話。後方から隙を伺って魔術を放ってくるキャスターの存在が、それを許さない。
（あちらを仕留めに掛かれば、その隙をつかれて私がやられるか）
あのキャスターとは不本意ながらも長い付き合い。互いの癖、性格

はだいたい解っている。
にやついた表情が「遠距離からチマチマ攻撃される気分はどーよ？」と嗤っているようで、本当に忌々しい。
キャスターというクラスになっただけで、こうも嫌らしくなるのかと感心すら覚える。見慣れたランサーとしての彼はまだ色々な意味で解りやすい漢だったというのに。
（かといって、キャスターを仕留めにかかれば……）
「えええや！」
何度も懲りずに突っ込んでくるアストルフォに、その隙をつかれかねない。
剣というか武芸その物に不向きなのか、その攻撃事態は大した脅威では無いが後先考えずに突っ込んでくるのは厄介だ。
あのキャスターは強敵。こちらも多少の消耗、ダメージは覚悟しなければ倒せない相手。
故にアストルフォの存在は邪魔。気の抜けない相手がいるのに、集中を乱しにかかる存在がいるというのは非常に鬱陶しい。
（だが、そう簡単には終わってやれんな！）
元より英霊としては大したことのない存在だと思っているし、誇れる物も持ってはいない。
だからといって、大人しく負けてやれるほど意地が無いわけでもないのだ。
双剣を交差させ、アストルフォの攻撃を受け止める。キャスターの援護は確かに厄介だが、それでも対応策はある。
「うわっ！　んのぉ！」
アストルフォの攻撃を捌きながら、一気に間合いを詰める。
密着といっても良いほどに距離を詰め、剣のつばぜり合いへと持ち込みながら、アストルフォを自分とキャスターの間に立つように誘導。
これで、キャスターの魔術へのとりあえずの対策にはなる。味方であるアストルフォごと、魔術で燃やし尽くすなどと言う愚行を行うような英霊では無い事は知っている。

そこまで堕ちるような、誇り無き英霊では無いだろう。
「チッ！」
自分が心の中で煽っている事に気づいたのか、忌々しげな舌打ちが聞こえてくる。
問題はアストルフォをどうするか。このまま押し切って倒してしまうのは簡単、だと思っていたが意外と粘る。
直感か、それに近いスキルでも持っているのか致命的な攻撃はギリギリで防いでくる。
「うわっ！　危ないなっ、とぉ！」
首を斬り裂こうとした一撃を紙一重で避け、負けじと反撃を返してくるのは流石と言わざるを得ない。
英霊の座に招かれた存在である以上、そう簡単に倒されてはくれないという事か。
「簡単に終わらんのは、そちらも同じか……っ！」
「こっちは時間が無いんだ！　そっちこそ、さっさと終わってくれないかな!?」
「悪いが、出来ない相談だ！」
アストルフォが振り下ろした剣を二刀で返し、彼女の手の中から弾き飛ばす。
一瞬の無防備を晒した相手へ、アーチャーはトドメを刺さんと剣を突き出そうとして、即座に突き出された一撃に目を見開く。
剣を持っていたのとは別の手に、いつの間にか出現させていた一本の馬上槍。それを反撃にと繰り出してきたのだ。
完全な不意打ち。だが、アーチャーはアストルフォを仕留めんとしていた一撃を即座に止め、槍を止める。
「ぐっ!?」
しかし、無理矢理な防御であった事に変わりはなく、体制を崩した上に大きく引き離されてしまった。
そんな好機をキャスターが見過ごすはずもない。即座に撃ち放たれた魔術を防ぐ事は流石に出来ず、アーチャーは無理な体制での回避を余儀なくされる。

咄嗟に両手の剣を投げつけ、二発分の魔術と相殺。残りはどうにか体をひねって避けるが、交わしきれずに脇腹を掠めていく。
「チッ……武勇に優れぬ相手と侮りすぎたか」
「いや、俺も正直ここまでやってくれるとは思わなかった。ライダー、お手柄だ」
「そんな事より、さっさとトドメ刺しちゃうよ！」
ヒポクリフを出現させ、その上に跨って馬上槍をアーチャーへ突きつける。
こうして会話する暇すら惜しいという事か。召喚されてまだ三時間程度の付き合いだというのに、随分とマスターに懐いた物だとキャスターは笑う。
サーヴァントに好かれるのは悪い事じゃない。楓本人はどう思うか解らないが、彼女はマスターとしてかなり良い物を持っているんだろう。
「そうだな。見ていて気持ちの良い面でもねぇし、さっさと始末するとしようか！」
指先でいくつもの文字を空中に刻み、一つ一つに必殺級の魔力を込める。
この攻撃で確実に仕留めてやるという意思を嫌でも感じさせるそれを目に、アーチャーは観念したかのように息を吐く。
しかし、キャスターは彼が口元に微かに浮かべた笑みを見逃さなかった。
「チッ……させるかよ！」
何かを企んでいるのか、単なるブラフか、どちらか判断はつかないが放置するのはどちらにしろ不味い。
即座に魔術を放つ。数発の魔力の塊がアーチャーへ吸い込まれるように飛んで行き、爆発がその身を包む。
爆発四散した瓦礫と魔力の残り香が風に乗って空へ舞い上がり、アストルフォとキャスターの足元にもひび割れという形でその威力の高さが表れる。
キャスターが杖を一振りすると風が巻き起こり、二人の視界を隠す煙

が吹き飛ぶ。
「ありゃ……？」
開けた視界に見えたのは、キャスターの攻撃とは別の物で穿たれたであろう大穴。
ビルの中、覗きこんでみた限りではかなり下の階まで打ち抜かれているそれは、明らかにアーチャーが弓で足元を破壊した結果の物。
「アーチャーの野郎、逃げやがったか」
「え？　やっつけれてないの？」
「俺の攻撃に紛れて、この穴から逃げたに違いない。ったく、最初っからこれが狙いかよ」
忌々しく穴を見やり、腹いせとばかりに足元の小さな瓦礫を蹴とばすキャスター。
「今から追いかけても無駄だな……いったん戻るぞ」
「追わないの？　いや、ボクとしてはマスターとマシュ助けに行きたかったから有り難いけどさ」
「深追いは禁物ってな。それに、アーチャーの野郎も相応に深手を負ったはず……しばらくは仕掛けてこねぇよ」
キャスターはそう言って、アストルフォにヒポグリフの呼び出しを急かす。
次にあった時には確実にアーチャーを仕留める。そう、強く誓いながら。

「はぁ、はぁ……っ！　たぁあああっ！」
マシュの盾が、もう何体目になるかも解らないスケルトンの体を粉砕する。
スケルトン一体一体は非常に弱い。だが、これだけの数が……覚えている限り、二十体以上倒しているのに全く減ったように見えない程に集まっていれば話は別だ。
それに加え、今のマシュはアーチャーの爆撃を防ぎ続けた疲労もある。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……」
両足は震え、表情は疲労で歪み、鎧から露出した二の腕や太ももには避けきれずに負ったダメージが痛々しい傷跡となっている。
今にも崩れ落ちそうな体を必死に盾で支え、スケルトンの群れを睨みつけるマシュ。その背中を見やる楓は、ただただ己の無力感を嫌と言う程味わっていた。
（私……私にも出来る事って……っ!?）
礼装に刻まれた支援魔術は、スケルトンの群れと戦いの中で使いきった。
竜牙兵もすでに二体撃破したが、群れの中にまだ存在を確認している。
マシュの言う通り、スケルトン達よりは強い個体だが、それでもどうにかなるレベルの敵ではあった。
だが、この数が相手では相当な脅威になりえるのだ。
（マシュはもう限界……このままじゃ……っ！）
彼女一人では残りの敵を倒しきるのも、自分を連れて離脱するのも不可能なのは素人目でも明らかだ。
アストルフォとキャスターはアーチャーと戦っているはずであり、オルガマリーもここへ駆けつけてくれるとは思えないし、来たところでどうにかなるわけでも無いだろう。
自然と、右手の甲に刻まれた令呪に視線を落とす。
（令呪を使う……？　でも、どう使えば……？）
マシュを強化する、アストルフォを呼び戻す、いくつかの用途は浮かぶが実行に移す決断を下せない。
今も自分を守る為に無茶をしているマシュに更なる負担をかける事は出来ないし、アストルフォもキャスターと共にアーチャーと戦っている最中の筈だ。
楓の脳裏には、現状を打破する手札が思いつかない。
今の自分に、マシュを助ける術は何も無いのだ。
「くっ……ぁああっ!?」
「マシュっ!?」

遂に限界が来たのか、竜牙兵の一撃を受けたマシュが悲鳴と共に地面を転がる。
何とか起き上がろうとするが、積み重なったダメージと疲労のせいか動きは鈍い。
その間にも迫ってくるスケルトンの群れ。このままでは、成すすべなく飲み込まれて二人ともお終いだ。
「ひっ……っ！」
恐怖のあまり逃げ出したくなるが、視界の片隅に映るマシュの姿を見て踏み止まる。
荒く息を吐きながら、今も立ち上がろうとしている年下の少女を置いて逃げ出せるほど、薄情でも無かった。
必死に自分を守ってくれていた彼女を見捨てるというのなら、とっくにそうしている。
「っ……ぁっ！
「マシュ……マシュ！」
最早自力で立つ事も難しくなったのか、立ち上がれずに崩れ落ちるマシュへ駆け寄ってその体を抱き止める。
「マ、マスター……」
表情に浮かぶ疲労を通り越して苦痛にすら至っている色を見て、楓は己の無力さとここまで彼女一人に負担を掛けた事への責任を改めて思い知らされたような気がした。
年下で、自分よりも華奢な体格の少女に――いくらデミ・サーヴァントだからとはいえ――戦わせているのに、ろくな支援が出来ないのだから。
「っ……危ない！」
マシュの悲鳴にも似た叫び。見れば、すぐ傍にまで迫っていたスケルトンの一体が大きく剣を振りかぶっているではないか。
防ぐ事など楓には、今のマシュにも無理。避けるだけならば、マシュを見捨てさえすれば楓は不可能では無い。
しかし、その選択肢はない。逃げるのであれば、絶対にマシュと一緒で無ければならないのだから。

「えっ？」
それは、己の中にある恐怖と言う生命が持つ根源的な感情よりも強く優先された。
マシュが楓を突き飛ばそうと両腕に力を込めるよりも早く、その背中を斬り裂かれた激痛に悲鳴をあげるのは彼女が守ろうとしたその人。
「マ、スター……マスターァァッ!?」
「ぁ……ぐ、ぁ……ぁっ！」
楓自身、マシュを押し倒すように庇った事もあってさほど深く斬りつけられはしなかった。
だが、焼けつくような痛みは容赦なく少女の表情を苦悶に歪めて、庇われた側の少女も悲鳴のような声をあげる。
「あ、ぁぁぁっ!? なんで、なんで……マスターぁ……先輩っ!?」
絶対に守ると決めた少女が、自分を守って傷ついた。
背中に回した手が、楓の血で赤く染まる。自分の不甲斐無さを、責め立てるように。
逃げなければならない。逃げて、彼女の傷の手当てをしなければ。疲労でまともに動かない、なんて言い訳は言わせない。
マシュは楓を抱き抱え、ゆっくりと迫るスケルトン達からの逃走を図るが、やはり動きの鈍った体に怪我人を抱えては追いつかれてしまう。
何体かがマシュの背後に廻り込み、完全に取り囲まれた。
「ぁ……あっ!?」
死ぬ。自分のせいで自分が死ぬのはまだいいが、楓までもが死んでしまう。
それだけは、絶対に許容できない。
「や、めて……お願い……先輩だけは……先輩だけは！」
聞き届けられるはずの無い懇願。当然のように無視をするスケルトンと竜牙兵が一斉に二人へ飛び掛かる。
あと数秒もせずに、自分の不甲斐無さのせいで楓が無残に殺されるという現実を嫌でも認識させられる。

「やめ……やめてぇぇぇっ！」

「恐慌呼び起こせし魔笛！」

暴風のような音が響き渡り、二人を取り囲んでいた全ての敵性存在が消滅する。

なんて都合のよい、奇跡のような光景。それが現実に起きた出来事であるとマシュが認識するのと同時に二人の下へ駆け寄ってきたのは別行動を取っていた仲間だ。

「良かったぁ！　ギリギリ間に合っ……ってぇ、マスターぁ!?」

マシュの腕に抱かれ、苦悶の表情を歪める楓を確認したアストルフォもまた悲鳴のような声をあげる。

彼を囲っていた巨大な笛は、あっという間に手のひらサイズにまで縮小されて、手早く腰のベルトへと下げられた。

その笛も、アストルフォの宝具の一つと言う事なのだろう。

「アストルフォさん！　先輩が、私のせいで……っ!?」

「わ、解ったから！　とりあえずこれで傷口抑えよう！」

手早く自身のマントの一部を引きぎちって、楓の傷口に押し付ける。

治癒の魔術も使えない二人には、出来てもこれぐらいが限界だった。

「今、キャスターがしょちょーさん迎えに行ってるから、ボク達もそっちに合流しよう！　ヒポグリフ呼んでくるから、待ってて！」

ビルの外に待機させている相棒を呼び寄せに駆け足で出ていくアストルフォを見送りながら、マシュは腕の中で小さく悲鳴をあげる楓に視線を落とす。

守ると決めたのに守れなかった。それどころか、逆に庇われて不要な怪我まで負わせてしまった。

盾の英霊、なんて名前をいただいておきながら情けない。今すぐに

でも自害を命じられても仕方がないほどの失態。
「先輩……ごめんなさい……ごめんな、さい……っ！」
目尻に溜まる涙を堪え、消え入りそうな声で謝罪の言葉を繰り返す。
宝具も使えない、駄目なサーヴァントでごめんなさい。
守れなくてごめんなさい。
怪我させてごめんなさい。
彼女の中から、マスターを守りきると言う決意と僅かにあった自信が消え去った瞬間だった。

第四話　炎上汚染都市　冬木　4

キャスターが迎えに行っていたオルガマリーと合流し、楓とマシュの治療も終えた一行はセイバーがいるという洞窟へと向かっていた。
道中襲い来るスケルトン達は最早敵では無く、出てきた先から軽く撃退、一掃し続けている。
未だ健在らしいアーチャーの襲撃も警戒していたが、やはりキャスターの攻撃で負傷しているのか仕掛けてくる気配はない。
この特異点に来て初と言って良いぐらいに順調な道筋、ではあったが楓には気になる事があった。
「……」
マシュの様子がおかしい。
歩みは遅く、表情は暗い。戦闘中はそうでもなく、キャスターやアストルフォとの連携も様になってきている。
だが、それでもどこか遠慮しているような。積極的に前に出るような事も無く、他二人の邪魔をしないように防御に徹しているのみで攻撃には出ようとしない。
その理由は、誰に言われずとも解っている。
（どう考えても、私のせいだよね）
彼女を庇って、怪我をしてしまった事が原因なのだろうなとは解っていた。
怪我自体はオルガマリーの魔術によって――傷口を塞いだだけだが――治療を終えており、少しばかり痛みはあるが気にはならない。
その行動自体は治療代変わりだとばかりに、オルガマリーにかなり絞られてしまった。
「マスターがサーヴァント庇うなんて、何考えてんの!?　マスターが死んだら本末転倒でしょうが！」
と散々言われたが、楓自身はあの行動が間違っているとは思っていない。
付き合い自体はまだまだ短いが、楓にとってマシュはそう簡単に見捨てられるような存在では無くなっているのだから。

むしろ、マスターらしい事も先輩らしい事も何一つ出来ていないのだから、あれぐらいはとすら思ってもいる。
「……マシュ、ちょっと前にも言ったけど、私の怪我の事なら気にしなくていいんだよ？」
治療を終えた後、マシュは物凄い勢いで楓に謝罪した。
深々と頭をさげ、しつこいぐらいに謝罪の言葉を口にし続け、ようやく終わったと思ったら今の有様である。
「怪我したのは私の自業自得みたいなとこもあるんだし、そこまで重く受け止めなくても……」
「いえ、私が不甲斐無いせいで先輩を危険に晒したのですから私のせいです。私は先輩のサーヴァント失格です」
自分で言ってて更に傷ついたのか、どんどん表情を暗くしていくマシュ。
解ってはいたつもりだったが、予想を遥かに超えるレベル重症だった。自分の行動のせい　で、彼女にこんな想いをさせてしまったのかと嫌でも思い知らされる。
マシュを庇ったあの行動は間違っていたのだと、当人から言われているような気すらしてくる。
「そ、そんな事無いって！　マシュがいなかったら、私は今頃あのオバサンに殺されてただろうし」
「いえ、あの時もキャスターさんが来てくれなければ守り切れませんでした……私のようなサーヴァントなんて……」
「マシュ！」
いない方が良い。そう言おうとしているのを察し、楓は声を張り上げる。
マシュの両肩を掴み、驚いた様子のその顔を睨みつける。
「それ以上言ったら、ホントに怒るよ？」
「で、ですが……」
「ですがも何かも無い！　マシュがいてくれて、私は助かってるんだから……そういう事、言わないで」
マシュにそんな事を言われると、自分の今までの行動を全て否定さ

れているようだ。
何よりも、彼女にそこまで言わせてしまった事が悲しく、情けなくて死にたくなる。
「……ごめんなさい、先輩」
「いや、まぁ……私も悪かったし？　マシュもそこまで気に病まなくていいから、ね」
「……はい」
何処か暗い表情のままであったが、マシュは楓の言葉に頷いた。
イマイチ納得いきませんと顔に書いてあるが、とりあえずは落ち着いてくれたと思いたい。
「そうそう！　マスターも軽い怪我だけで済んだんだし、気持ち切り替えて、次に向けて全力で頑張ればいいんだよ！」
二人の肩を思い切り叩きながら、満面の笑みを浮かべてアストルフォが乱入してくる。
その言葉通り、本人は次に備えて気持ちを完全に切り替えているようだ。
「取り返しがつくなら、次で取り返せばいいのさ！　反省なんて、その後でいいんじゃない？」
「いや、反省は大事だと思うのですが……？」
「ん？　それもそっか……まぁ、とりあえず！　マシュもうじうじ悩まずに、一緒に頑張ろう！」
まるで悩みなんて無い、というか何も考えてませんと言わんばかりの屈託のない笑み。
同じマスターに仕える仲間同士、一緒にやっていこうと純粋に訴えるかのようなそれを見ていると、少しばかり気持ちが楽になってくる。
確かに、楓も気にするなと言っているし、次こそはアストルフォと共に彼女を守りきれば良いだけの話。
「……はい」
一人で気負う必要もないのだと、教えられた気がした。
しかし、それでもマシュの心に刺さった棘は易々とは抜ける事は無

い。
何が何でも守らなければならない存在を守れなかったのだから。
「ん～……まだ表情が暗いよ？　色々抱え過ぎても、ろくな事無いと思うんだけどなぁ」
「そ、そうですか……？」
「アストルフォの言う通りだよ。ホントに私を心配してくれてるって事なのは解るけど、もうちょっと気楽にっていうか……」
マシュがここまで抱え込んでしまったのは自分のせいだと解っているだけに、この状況は辛い。
間違っていないと思っていたあの行動が、逆にマシュを追いつめてしまったとなるとマスター失格ではないか。
せめて、もう少しでもマシュの罪悪感を拭ってあげることは出来ないかと考え……彼女の左手を両手で握りしめる。
「えっ……あの……？」
「いや、その……ほら、管制室でさ？　手を握ってって言われたし、こうするとちょっとは落ち着くかなぁって……」
あははと笑う楓と、優しく握られている自分の左手を交互に見やる。
よく理解できないが、そうしてもらえるだけで不思議と落ち着いてくる。
張り詰めていた緊張の糸が、ほんの少しだが緩んだような、そんな気がした。
「じゃれ合ってる最中に悪いけどな。ぼちぼち、セイバーが陣取ってる洞窟だぞ」
先頭を歩いていたキャスターが声を掛ける。
彼の先導でひたすら歩き続けていた山道。整備された登山道からも外れた、非常に歩きづらい荒れ果てた獣道の先にある洞窟の前に一行は到達していた。
「この洞窟、自然に出来た物なのでしょうか……？」
「洞窟自体はそうでしょうけど、後から人が手を加えたものね。元から、地元の人間がある程度出入りしてたのかしら？」

マシュの疑問にオルガマリーが答える。
二人の視線の先には自然に出来た物とは違う、明らかに何者かが手を加えて整えられた道が奥へと続いていた。
人の出入りはあまり激しいわけでは無いようだが、何らかの目的が無ければこんな事をするはずがない。
「この先は、この街で一番の霊地だからな……この奥には大聖杯。いわば、この地で開催されている聖杯戦争の心臓部みたいなもんがある」
足元の地面に杖を押し付けながら、キャスターは言葉を続ける。
「その大聖杯を守るみてぇに、セイバーが陣取ってるってわけさ。何から守ってんのかは知らねぇけどな」
「よくわかんないけど……とりあえず、セイバーさえ倒しちゃえばいいって事に変わりないんだよね？」
「あぁ。大聖杯自体はどうにかしなくても、セイバーを倒しちまえば聖杯戦争は終わる。そしたら、この狂っちまった儀式も終わんだろ」
そう言い終えて、キャスターは洞窟の入り口から背を向けて自分達が歩いてきた山道へと向き直る。
「という事で、後は任せた」
「……はい？」
「セイバーは任せる。俺はその辺に隠れてる邪魔者片付けっから……よ！」
杖を振るい、山道へと魔術を放つキャスター。それを迎撃するかのように放たれた矢が空中で激突。
相殺し合ったそれを放った相手は、わざわざ言われなくても理解できる。
「アーチャー……っ!?」
姿こそ見せないが、すぐ近くにまで迫っていたアーチャーの存在にマシュは思わず身を硬くする。
遠くから一方的に撃ち込まれる矢の威力は身をもって知っているし、何よりも楓を守り切れなかった原因の一つともいえるのだから。
横目でその様子を見やり、小さくため息をつく。

（やれやれ……さっきのやり取りだけじゃ、完全に吹っ切れはしねぇか）
この様子では、とてもじゃないがアーチャーの相手はさせられない。
ならばと、キャスターは即座にいくつか頭に描いでいた選択肢の一つを選び取る。
「アーチャーの相手は俺がする。お前らは先に行け」
「えっ……一人で？　任せていいの？」
「あぁ。さっさと倒して追いつくからよ。お前らは適当にセイバー弱らせて俺を楽させてくれや」
一歩前に出て、楓達を庇うように立つキャスター。
最早、これ以上は交わす言葉もないと言わんばかりの態度。オルガマリーは楓に目配せして、行動を促した。
ここでアーチャーの相手に時間を取られるよりは、彼に任せてセイバーの下へ行く方が良いのだと。
「……キャスター、お願い！　皆、行こう！」
楓の言葉と共に、キャスターをその場に残して四人は洞窟の中へと駆け込んでいく。
背中越しに聞こえてくるキャスターとアーチャーの攻防による爆発音。それに振り返りそうになるが、楓は堪えて真っ直ぐに走り抜けていく。
マシュを庇った時のように、余計な心配事や厄介事をキャスターに抱え込ませては駄目だと自分に言い聞かせる。
ここは、彼を信じて任せるべきだ。
（それに……）
ちらりとマシュを見やる。
アーチャーの存在を知った時の彼女の様子は、明らかにおかしかった。
執拗に狙われ、楓の負傷の遠因でもある敵性存在なだけにマシュにとっては畏怖の対象となっているのかもしれない。
そんな状態で彼女とアーチャーを戦わせるのは、絶対に不味い。

（キャスターには、後でお礼言わないと）
それを見抜いていたのだろうか、キャスターがアーチャーの相手を買って出てくれたのはありがたかった。
彼女だけを特別扱いして良いわけはないのだろうが……。
「マスター！　そろそろ着くよ！」
アストルフォの声で我に返り、顔をあげればそこは洞窟の最奥。
途方もなく巨大な空洞。小さなビルの三つ四つは入るのではないかと思えるほどの空間の中央に、明らかに何らかの力で造られた小高い山のような物がある。
否、山のように見えるだけだが何かを祭る祭壇にも見えなくもないなと、楓はそんな事を思った。
「な、何よこれ……っ!?」
オルガマリーの驚きを隠せない声に、この空間の異様さに気づけていないのが自分一人だという事も理解した。
マシュとアストルフォも、どこか表情が強張っているように見える。
「あれが大聖杯……とんでもないレベルの魔力炉心じゃない!?　なんで、極東の島国にこんなのがあるわけ……!?」
魔術師としての興味と驚愕、人間としての恐怖が入り混じったような声でブツブツ呟くオルガマリーを尻目に、二人のサーヴァントはそれぞれ武器を構えて前に出る。
「マシュ？　アストルフォ？」
「マスター、所長と一緒に下がってください。絶対に、私達より前に出ないでください……っ！」
「セイバーがいるって言ってたよね……そろそろ来ると思うよ？」
そんな二人の言葉に反応するかのように。
「ほぉ……サーヴァントが二騎、か」
この空間の主が、ゆっくりとした足取りで祭壇の上に姿を現した。
全身を黒いドレスと甲冑に身を包み、目元を仮面で隠した小柄な少女。
楓ですら敏感に感じ取れるほどのプレッシャーを放つその少女が

セイバーだと、その場にいた誰もが一目で理解した。
「あれが、セイバー……っ!?」
楓が直接姿を見た敵性サーヴァントはランサーのみだが、セイバーから感じる威圧感は比べ物にならない程だった。
もし、どちらかと自分一人で戦えと言われれば迷うことなくランサーを選ぶ。勝てる勝てないの問題では無く、そっちの方が絶対にマシだと理性が訴えている。
自分と共にいるマシュやアストルフォとも、レベルが違い過ぎるのではないかとすら思えるほどに。
『とんでもないレベルの魔力だ……皆、気を付けて!』
通信機から聞こえてくるロマニの声もろくに入ってこない。
数メートルはあろう断崖ともいえるような祭壇の上から飛び降り、何事でも無いように着地するセイバー。
優雅ですらある一挙一動。こちらへと叩き付けてくるような殺気さえなければ、見惚れてしまっていたかもしれない。
「……面白いサーヴァントがいるな」
仮面の奥に光る眼が、マシュを捉える。
「あぁ、随分と面白い宝具を持っている。その護り、果たして使いこなせるか試してやろう」
セイバーの右手に漆黒の剣が出現する。
どす黒い闇が刀身から溢れながらも、本来持つ輝きが目に見えるような、美しいとすら思える剣だ。
(あの剣、は……?)
初めて見る筈なのに、何故か見覚えがある。
そんな奇妙な感覚を覚えながらも、マシュは盾を構えて楓達の前へと進み出た。
今度こそ、マスターを守りきらなければならない。今度は自分一人ではなく、アストルフォと共に戦うのだから何とかなる、してみせるのだ。
正直、守りきれる自信は無いが、それでもやらなければならないのだから。

（やらなきゃ……今度こそ、絶対に！）
内心沸きあがる恐怖。マシュは盾に添える自分の左手を、未だ僅かに残る楓の手の温もりを感じて抑え込む。
（見ていてください、先輩！）
その隣、槍を手の中に出現させて構えをとるアストルフォは冷や汗を流しながら、セイバーを見やっている。
マスターを守る事、敵と戦う事、それらに何の不満もない。だが、全身で嫌でも感じてしまうセイバーから放たれる敵意はすさまじい物があった。
対峙するだけで嫌でも理解できる実力差。ハッキリ言って勝ち目はゼロに等しいというかゼロだと確信している。
「キャスター、早く来ないかなぁ」
誰もが思いながらも口にしない本音が漏れる。
アストルフォには、セイバーの剣で斬り殺される自分とマシュの姿がハッキリとイメージ出来ていた。
それでも、この為に自分は呼ばれたのだからやるしかないと腹をくくる。
召喚されたばかりでまだ付き合いは短いが、今回のマスターは第一印象からして悪い印象は持っていないのだから、やる気は十分だ。
「我が名はシャルルマーニュが十二勇士アストルフォ！　どこの英霊かは知らないけど、いざ尋常に勝負！」
高らかに己の真名を告げるという非常識っぷりに、オルガマリーが頭を抱えるのは目の前のセイバーに比べれば些細な問題であろう。

大聖杯のある洞窟からいくらか山を降りた位置にある寺。歴史と威厳を感じさせたであろう本殿を初めとした建造物は全て崩れ落ち、見る影もない。
その寺の敷地内へと、派手な爆発と共に飛び込んでくるのはアーチャー。
地面を転がりながら、その手に構えた弓から矢を放ち、上空から降

り注ぐ魔術の炎を迎撃する。
「ったく、さっさとくたばってくれねぇかね？　こちとらお前といつまでも喧嘩してる時間はねぇんだがな」
アーチャーに毒づきながら、崩れ落ちた本殿の屋根の上に降り立つキャスター。
いくらかの因縁がある相手である彼とは、どうせならしっかりと決着をつけたい処であったが、今回ばかりはそういう分けにもいかない。
今頃セイバーとの戦闘に突入している楓達の応援へ、一刻も早く向かわなければならないのだから。
「随分と余裕が無いな、光の御子。いや、こちらとしてはお前との喧嘩を続けても良い気分なのだがね？」
「チッ……くたばりぞこないの癖して、嫌味だけは絶好調かよ」
本当にコイツは気に食わない。
「盾の嬢ちゃんがあの様子だから、自分が急がなくてもどうにでもなるって踏んでんのか？」
「ほぉ……やはり、キサマも気づいてたか？」
ニヤリと嗤うアーチャー。
最初は単に楓を狙っていただけかと思っていたが、真の狙いはマシュだったと気づいたのはビルの上で交戦した時だ。
「テメェがあんだけ派手に動くなんざ、セイバー絡み以外にねぇからな。アイツの真名知ってりゃ、だいたい想像つくっての」
その場から移動せず、執拗にマシュを狙っていたのがどうにも奇妙だった。
マスター狙いなら、絶えず移動して四方八方からの狙撃を繰り返せばよいだけ。その場に留まり、マシュを正面から狙い続ける理由がない。
だいたい、目の前のアーチャーという男は敵を嬲るような趣味では無かったはずだ。
「ランサー見てぇな悪趣味に目覚めたってんなら話は別だが、今までセイバーのボディガード気取ってた奴がああも動けば」

「成程。自分で思っていたよりも、思考が直情になっていたか……キサマにヒントをくれてやってしまうとは」
屋根から飛び降り、キャスターは真正面からアーチャーと睨み合う。
見た目は無傷に見えるが、ビルの屋上で受けたダメージのせいで中身はボロボロなのは一目瞭然。その状態で中々仕留めきれないのだから、本当に忌々しい。
キャスターでは無くランサーとして呼ばれていれば、サクッと秒殺しているところだが。
「そこまで解っているなら、後は言わずとも良いだろう？　アイツ等はセイバーには勝てないし、お前もここで討ち死にだ」
アーチャーにしてみれば、マシュを狙ったのはセイバーの天敵になりえるからであるが、単なる気まぐれも入っていたのが事実。
仮に自分が何もせずとも、あの盾の力を解放しようともあの程度のサーヴァントがセイバーに勝てるとは思えない。
「ハッ！　寝言は寝て言えっての！　ここで死ぬのはテメェの方だ」
アーチャーの勝ち誇ったような声を鼻で笑い、キャスターは口元に獰猛な笑みを浮かべた。
杖を手の中で回転させ、目の前の忌々しい敵との決着をここでつける為に構えて、ついでとばかりに嫌味ったらしく言葉を紡ぐ。
「それによぉ？　この国のことわざにあるそうじゃねぇか。窮鼠猫を噛むってな」
下手に追いつめると、逆にセイバーが痛い目を見るかもしれないぞと。

最初に動いたのはアストルフォだった。
足の速い自分がセイバーを撹乱する役目を担うとマシュに告げると同時に駆け出し、その手に槍を構えてセイバーへと突撃する。
黒衣の騎士は、その場から一歩も動かずに剣を振り上げ、馬鹿正直に突っ込んでくるアストルフォを、無造作に薙ぎ払う。

「うわっとぉ!?」
咄嗟に両ひざを折り、上半身を仰け反らせて横一閃の黒い刃を避ける。
反応が一瞬でも遅ければ上半身と下半身を断っていた一撃。その下を膝で滑るように潜り抜け、お返しとばかりに左足を軸に槍を体ごと振り回す。
「触れれば転倒(トラップ・オブ・アルガリア)!」
ついでにと真名までも解放。
その能力を解き放った槍触れれば転倒(トラップ・オブ・アルガリア)!が、無防備なセイバーの背中へと叩き付けられる――
「成程……シャルルマーニュ十二勇士。イングランドの聖騎士か……」
――事は無く、セイバーは肩越しに剣を後方へ回し、その一撃を簡単に受け止めていた。
「ならば、その槍には当たってやれんな」
そのままの体勢で、力任せにアストルフォの槍を弾き飛ばすセイバー。
思わず槍を手放してしまい、自分までも後方へ吹き飛ばされてしまうが、アストルフォは咄嗟に腰から剣を引き抜き、そのまま投げつける。
鼻で笑う事すらせず、僅かに頭をズラす事で悪足掻きの投擲を避けて、その真の意図に気がついた。
「はぁあああっ!」
勇ましくも初々しい叫びと共に駆けてきたマシュの手に、アストルフォが投げた剣が握りしめられる。
最初から彼女へ武器を渡す為の投擲。最初から打ち合わせていたのか、咄嗟にやってのけたのかは知らないが悪くはない連携だとセイバーは感心する。
だが、悪くはないだけだ。
「甘い」
手甲でマシュが振り下ろした剣を受け止め、自身の内側に蠢く魔力

を放出。
まるで爆発のような衝撃が無防備なマシュを襲い、悲鳴と共に吹き飛ばして地面に叩き付ける。
槍を回収し、再度突撃してきたアストルフォの攻撃もついでとばかりに捌き、その背中を蹴り飛ばした。
「うわっ!?」
頭から地面に倒れるアストルフォの背中へ、セイバーは淡々と振り上げた刃を突き立てんとし、それは二人の間に滑り込んだマシュの盾に防がれる。
甲高い激突音が洞窟内に響き渡り、その一撃を受け止めたマシュの表情が苦悶に歪む。
「っぅ!?」
体格はさほど変わらないのに、盾の上から襲い掛かる衝撃の重さはアーチャーの矢を遥かに上回る。
アーチャーの矢がライフルの弾だとしたら、セイバーの剣撃は戦車砲だ。少しでも気を抜けば、両腕どころか上半身ごと消し飛ばされるのではと思う程の剣撃。
黒く染まった刃が目にも止まらぬ速さで何度も振り下ろされ、盾に打ち付けられる度にマシュの口から短い悲鳴が漏れる。
「っ……ぁあっ!」
これならアーチャーの矢に耐え続けていた方がまだマシだとすら思えるほどの剣撃。
自分を支える両足からは秒単位で力が抜けていき、今にも膝から崩れ落ちそうになるのを無理矢理に抑え込む。
「どうした？　少しは前に出ようとしないのか？」
「くっ……」
セイバーの侮るような言葉に、悔しさを覚えながらもマシュに切り返す術は無い。
実際、力量が違い過ぎる。マシュもカルデアでの戦闘訓練は受けてはいたが、そんな物など目の前の黒騎士から見れば児戯に等しいだろう。

隙を見つけて攻撃に転じようにも、そんな隙は無い。一撃の重さが凄まじく、防御に意識を集中させねば一刀の元に斬り殺されると直感的に理解出来たからだ。
故に、攻撃を行うのはマシュではない。
「ちょっと肩借りるよ！」
声がするよりも早く、マシュの右肩を踏み台にして跳躍したアストルフォが彼女に貸していた剣をセイバー目掛けて突き降ろす。
躊躇いなくセイバーの頭頂部目掛けて突き出される細身の剣。やはり、それは最小限の、僅かに頭の位置をズラすだけの行為で当然のように回避される。
だが、それでほんの僅かにセイバーの意識がマシュから逸れ、彼女が攻撃に転じる好機が生まれた。
「っ！　はぁあっ！」
盾を振り上げ、鍔迫り合いのように押し合っていた剣を撥ね退け、セイバーの腹部目掛けて回し蹴りを決める。
黒い甲冑の上からではさほどダメージは期待出来ないだろうが、その体勢を崩すには十分。
立て続けにアストルフォが横薙ぎに剣を振るい、セイバーの目元を覆う仮面に細身の刀身を叩き付けた。
「っ!?」
仮面越しとはいえ、顔面に刃を受けたセイバーは短めながらも初めて悲鳴をあげる。
忌々し気に口元を歪め、足に力を入れて体勢を整えるが、更にアストルフォは攻撃を繋げてきた。
「触れれば転倒（トラップ・オブ・アルガリア）！」
何時の間にか持ち替えていた宝具たる槍。その効力からして、とりあえず当てさえすれば良いという敵対者からみれば厄介極まりないであろう獲物の刺突。
セイバーも、アストルフォが自らの真名をバラすという一瞬我が耳を疑ってしまった行為が無ければ、槍を手甲や鎧で受け止める事もしただろう。

だが、この槍の前では体に当たる、鎧で受け止めるという行為自体が命取りだとセイバーは知っていた。というより、真名をバラしてくれたお陰で察する事が出来た。
つまりは避けるか、剣で捌くの二択を強いられる。
「チッ！」
舌打ちと共に、セイバーは剣で捌く事を選択。
剣で刺突の軌道を逸らし、そのままアストルフォの体を切り裂かんと一期に踏み込む。
セイバーから見て、脅威度が高い方を手早く片付けようという判断自体は正しいだろう。
「へっへーん！」
アストルフォのしてやったりという笑みに、己の直感が悪寒を告げる。
槍を手放すと共に、その体を覆うように腰に下げていた魔笛が巨大化して、槍の上を滑ってきたセイバーの剣を受け止める。
宝具が一つだけとは限らない。そんな知識が、何故か脳裏に響いた。
「恐慌呼び起こせし魔笛！」
至近距離から放たれるのは爆発のような音波。
元々はスケルトンのような低級使い魔を一掃する為の物故、サーヴァント相手にはさほど効果は望めない。
しかし、それでもこの笛は宝具であり、至近距離から放たれる爆音を浴びたセイバーの聴覚を短時間潰すには十分である。
「ぐぅ!?」
思わず仰け反り、アストルフォから飛び退いて、音波を受けて若干の混乱に陥った頭を抱える。
この隙が戦いにおいて致命的な間になると、言われずともにセイバーは理解しており。
「っ！　たぁあああああっ！」
当然のように、マシュにもこの隙を見逃す手はないと理解出来ていた。

盾を水平に構え、殴りつけるようにセイバーの顔面に叩き込む。その懐へ飛び込んだ勢いと、全体重を乗せた一撃が黒騎士の体を宙へ吹き飛ばした。
背中から落下し、地面を滑るように転がっていくセイバー。マシュは盾を降ろし、緊張の糸が切れたかのように息を吐く。
「はぁ……」
「マシュ！　今の一撃、ナイスだったよ！」
「えっ……あ、ありがとうございます」
横合いから抱き着いてくるアストルフォに、呆気にとられながらも笑みで返す。
「アストルフォさんがいなかったら、一方的にやられていただけでした。ありがとうございます」
「いやいや。ボクも、マシュがいなかったらとっくにやられてただろうしね。お互い様だよ」
実際、一対一ではここまでやれなかっただろうと思う。
それだけ、セイバーとの実力差は開いているのだ。
「マシュ！　アストルフォ！　二人とも凄い！」
思わず、楓も二人へ労いの言葉を掛ける。
最初は圧されていたが、連携でセイバーを追いつめて顔面に一撃叩き込んだ。楓から見て、十分すぎる程の結果だった。
アストルフォが宝具を連発したせいで魔力を持っていかれたのか、全身に疲労感があるがそれも気にならない。
このまま行けば倒せるんじゃないか。そんな淡い期待すら抱いてしまう程の光景を、見せてもらえたのだから。
「油断しないで！　セイバーのサーヴァントがその程度で倒せる筈がないわ！」
オルガマリーの声で緩んでいた緊張の糸が一気に張り詰める。
最優と言われるセイバーのクラスたる英霊が、この程度で終わるはずがない。あまりにも順調に行き過ぎたせいもあって、気を緩めてしまった。
視線を向けると、そこにはゆっくりと体を起こす黒衣の騎士の姿が

あった。
「……正直、お前達を見くびりすぎていたな。この一撃は、己への戒めとしておこう」
マシュの一撃で亀裂が走り、使い物にならなくなった仮面を外して投げ捨てる。
その下に隠されていた金色の、明確な敵意を込めた瞳が楓達を捉えた。
「暫くここに詰めていたから……いや、それは言い訳か。おかげで目が覚めた思いだ」
額から流れ出た血を指で拭い、傷口を魔力をもちいた自己修復で塞ぐ。
その口には、思わぬ敵の登場に対して興奮を隠しきれないといったような、獰猛な笑みが浮かんでいた。
漆黒の剣を腰だめに構え、敵を射殺さんばかりの鋭い視線を向ける。
「返礼だ。受け取れ」
直後、今まで感じたことのない悪寒がそこにいた全員を貫いた。
セイバーの全身から溢れ出した魔力が剣へと収束。その膨大な力に、大気が、洞窟全体が震えているようだ。
「宝具……っ!? あなた達! 早く逃げなさい!」
オルガマリーの言う通り、一刻も早く逃げなければならない。だが、マシュとアストルフォにはそれが不可能だと即座に理解出来た。
あれから逃げるには、この洞窟では狭すぎる。それに、下手に避けようとすると狙いを楓とオルガマリーに向けられかねないのだから。
いや、この洞窟の中にいる限りはあの二人にも間違いなく被害が行く。
「卑王鉄槌。極光は反転する。光を呑め……っ!」
大気の震えが、洞窟全体の振動が激しくなる。
あと数秒もし無いうちに、セイバーの宝具たる漆黒の剣。その真の力が解き放たれる。
「アストルフォさん! マスター達をお願いします!」

頭で考えるよりも早く、マシュが盾を正面に構え、地面に突き立てる。
自分の後方にいる楓とオルガマリーを庇うようにセイバーの前に立ち、アストルフォも反射的に二人の元へ駆け寄り、力任せに地面へと押し倒す。
オルガマリーの抗議の声。マシュの名を叫ぶ楓の悲鳴のような声。そのどちらも遮るように、黒騎士の口が己の剣の真の名を紡いだ。
「約束された勝利の剣（エクスカリバー・モルガン）」
とても静かな、呟くようなセイバーの声が、不気味なぐらいに響き渡った。

全身を駆け抜ける痛みに悶えながら、楓は体を起こす。
アストルフォに押し倒された以外にも、何かとてつもない力に全身を殴りつけられたような感覚に襲われた気がする。
気絶でもしていたのだろうか。ぼんやりとする頭を押さえて、ゆっくりと記憶を思い返していく。
「っ……そうだ、マシュ!?　アストルフォ!?」
セイバーの宝具。それから自分達を守る為に盾を構えたマシュと、地面に押し倒したアストルフォの姿が脳裏に浮かぶ。
微かに聞こえる小さな呻き声に視線を向けると、うつ伏せに倒れたアストルフォがそこにいた。
「アストルフォ！　大丈夫!?」
「うっ……な、なんとか……」
「ちょっと……退いてくれないかしら……？　いたた……っ!?」
白いマントは埃に塗れ、所々が破けて肌に擦り傷も見られるがアストルフォは無事のようだ。
その下、押し倒されていたオルガマリーも全身を痛めたようだが、その程度で済んでいる。
「っていうか何よ……エクスカリバー？　って事はあのセイバーって……」

セイバーが紡いだ宝具の名を聞いて、オルガマリーはその正体に行きついたようだ。
とても青白い顔をしてブツブツと何かを呟いている。どうやら、セイバーの正体はかなり凄い英霊らしい。
楓にしてみれば、エクスカリバーはゲーム等でチラホラ見かける武器の名前といった印象なのだが。
ともかくオルガマリーが無事な事に胸を撫で下ろし、楓はすぐにマシュの姿を探し求める。
「マシュ……マシュ!?」
立ち上がり、彼女がいた方向へと駆けていく。
土煙で視界が悪く、数メートル先もろくに見えない事も気にせず、マシュの姿を探す。
何度名前を呼んでも反応がない事。最後に見た、セイバーの宝具から自分達を守る為に立ちはだかった姿に不安を覚え、それを振り払うように。
「マシュ！　返事して！」
脳裏に浮かぶ最悪の予感から目を逸らすように、泣き叫ぶような声で名を呼び続ける。
やがて、煙の中に見覚えのある小柄な少女のシルエットを見つけて、楓の顔に浮かぶのは笑顔。
数歩近づけば、探し求めていた少女の姿だとようやくはっきりと確認できた。
「マシュ！」
「せ……んぱい……」
こちらを振り向き、弱弱しい笑みを浮かべると同時に崩れ落ちるマシュの姿に、楓から笑顔が消えた。
「マシュ……？　マシュッ!?」
悲鳴をあげ、マシュの体を抱き起こす。
真正面からセイバーの宝具を受け止めたダメージは、彼女の華奢な体を容赦なく痛めつけていた。
その身を守る鎧の一部は砕け、その下に隠れていた白い肌に刻まれ

た大小様々な傷が、彼女の受けたダメージを物語っていた。
　礼装に刻まれた応急処置の魔術を発動させるが、それもマシュの浮かべる苦しげな表情を和らげるには至らない。
「先輩……お怪我、は……？」
「私の事は良いから！　所長に治療してもらわないと……っ！」
　楓を襲うのは恐怖と無力感。
　吹けば消えそうな程に弱り切ったマシュ。ろくな治癒魔術も使えない自分の無力さが、心の底から忌々しい。
　こんな何もできない自分を先輩と、マスターと呼んでくれる少女への申し訳ない。
「いえ……まだ、です。まだ……っ！」
　自分を抱えて行こうとする楓を制し、盾を支えにして無理矢理立ち上がる。
　ほんの少し動いただけでも全身を駆け抜けていく激痛に耐え、未だ戦意の消えぬ目で正面を睨みつける。
「マスター……下がっていてください……っ！　セイバーが、またすぐに……」
「ま、待って！　そんな体で！」
　楓の言葉がマシュに届くよりも早く、煙を吹き飛ばすほどの疾走と共にセイバーの一撃が振り下ろされる。
　盾で受け止めるが、その衝撃は今のマシュで耐えきれるような生易しい物では無い。
「あぐっ……ぁっ！　あああっ！」
　両腕がへし折れたのではないかとすら思える程の激痛。自分の体重を支える事すら難しい両足は、今にも潰れてしまいそうだ。
　本来なら今の一撃で倒れても可笑しくはないが、気力のみでマシュはそれを耐えていた。
「ぐっ……ぅ」
「ほう、私の宝具に耐えるとは……やはり、面白いサーヴァントだ」
　それだけに惜しいなと、どこか哀れみすら感じられる瞳でセイバーはマシュを見つめる。

一秒ごとに全身を襲う苦痛に歪む表情。今にも挫けそうな意思を必死に奮い立たせていると一目でわかる表情。
自身のすぐ後ろにいるマスターの少女を、何が何でも守ろうとする意志がそこにあった。
「だが、それだけだ。キサマの意思に、その盾は応えんようだ」
「あぅ……っ」
盾を押し込む剣に、力を籠める。
ほんの少し力を入れて押し込むだけで、小さく悲鳴をあげてマシュの足は震える。
「くぁ……ぁぁっ！」
手足から秒単位で力が抜けていく。全身を絶え間なく襲う感じた事もない激痛に意識が途切れそうになりながらも、マシュは盾を離さない。
諦めれば苦しみからも、痛みからも解放される。この耐えがたい地獄も終わるのだと誘惑に誘われるが、それを振り払って正面のセイバーを睨みつける。
マシュの頭に浮かぶのは、自分の不甲斐無さ故に怪我を負わさせてしまった楓の姿。
（私が……やら、なきゃ……今度、こそ……）
薄れていく意識を必死に繋ぎ止める。
ここで自分が押し切られれば、すぐ後ろにいる楓にセイバーの刃が向けられるのだから。
自分が耐えれば耐えるだけ、時間は稼げる。アストルフォが回復して、セイバーを打倒してくれるかもしれない。
楓達が一度撤退し、新たにサーヴァントを召喚するという事も可能だろう。自分なんかよりも遥かに役に立つ英霊を引き当て、セイバーを次こそ倒してくれる。
その為なら、楓を生かす為ならどのような苦痛にも耐えてみせよう。
（せん、ぱ……い……）
今度こそ、ちゃんと守りきれただろうか。

あの時、自分の傍に最後までいてくれた事への感謝の気持ちと、最後にもう一度だけ、手を握って欲しかった。
闇の中へと沈んでいく意識の中、恐らく人生最後となる思考でそんな事を思う。
「終わりだ」
無情なセイバーの一言と共に、更に剣が押し込まれる。
限界をとっくに超えていたマシュがそれに屈するのは必然。されるがままに押し倒され、セイバーに斬り裂かれるまでもなくそのまま力尽きるだけ。
だが、そんな事は無いとばかりにマシュの背中に、盾を支える両手に触れる感触があった。
「ぁ……？」
崩壊したカルデアの管制室で、瀕死の自分の手を取ってくれた時と同じ感触。
楓が倒れそうな自分の体を支え、手を握ってくれているのだと理解するのに、一秒と掛からなかった。
「先輩……な、んで……？」
問われても解らない。ただ、目の前で苦しんでいるマシュの為に何か出来る事は無いかと思って、無我夢中でやっているだけだ。
キャスターからは見ているだけしかできないなら見ていてやれと言われたが、マシュが一人で苦しんでいるのを見ているだけなど、出来るわけがない。
具体的に何ができるか、礼装での支援以外でも何かと考えているうちに、咄嗟に体が動いた。
「今更、キサマ程度の魔術師が来て何になる」
セイバーの言う通り、楓が出てきたところで何か出来るわけでも無い。
むしろ、纏めて潰すだけだと言わんばかりに剣が押し込まれる。
「っぁ！」
マシュを支える腕に、身体全体に激痛が走る。
これがサーヴァントの攻撃の重さ。これほどの激痛に、マシュは耐

えていたのかと楓は思い知って……余計に引けなくなった。
全身に力を込めて、マシュの体を支える。
「マシュ……私に出来る事なんて、こんなのがせいぜいだし、逆に迷惑かけてるかもだけど」
自分とマシュの体を密着させ、今も倒れまいとする後輩を文字通りの意味で支える。
そうして、ようやく自覚した。自分が彼女に対して出来る事。マスターとして彼女を支援する以外にしてあげられる事を。
とっくにやっていた筈なのに、状況に怯え、戸惑っていたせいで気がつけなかった事に。
「マシュの事、絶対に一人にはさせないから」
管制室で、瀕死の彼女に寄り添うと決めた時と同じ事だ。
マシュの隣にいる。例えマスターとして、魔術師として役に立たなくても、それで彼女の支えになれるなら。
単なる自己満足かもしれない。我が侭を言っていると自覚もある。
それでもマシュが受け入れてくれるなら、どんなに危険な状況でも彼女の傍で、隣で共に立っていたい。
「私は、何があってもマシュの隣にいるから。マシュも……私の傍にいてくれる？」
「先輩……っ！」
すぐ隣で、そう言って微笑んでくれる彼女の存在に心が熱くなる。
楓の手が、盾を支えるマシュの手に添えられる。誰が何と言おうと、隣に居続けるという決意の顕れ。
付き合いの長さなど関係なく、私は貴女を受け入れると言ってくれたような気がした。
それだけで、マシュを苦しめていたあらゆる要素が消し飛んでいく。
「私も……絶対に、先輩の傍を離れません！　だから！」
何があっても、貴女を最後まで守り抜きます。
その心に応えるかの如く、マシュの持つ盾が青白い光を放ち始めた。

「なっ！　まさか……っ!?」
セイバーが初めて目に見える形で動揺する。
マシュの持つ盾に興味を示していたようだったから、その事を関係があるのだろうかと思うが今はそんな事はどうでも良い。
どういう理屈かは解らないが、この盾が宝具としての力をついに発揮しようとしているのだから。
「……ならば」
剣を頭上に掲げ、刀身にセイバーの膨大な魔力が集中する。
二発目の宝具。マシュと楓を諸共に消し飛ばさんとする確固たる意志を持って放たれんとする漆黒の聖剣。
「その力、本物かどうか確かめてやろう！　約束された勝利の剣（エクスカリバー・モルガン）！」
地面が砕け、全てを飲み込んで滅ぼす為だけの暴力が解き放たれる。
マシュと楓が構える盾に直撃するまで一秒と無い。眼前に迫りくる圧倒的な死への誘いに対し、二人の表情に恐怖の色はない。
ずっと隣にいると決めた相手と共に立っているのだ。恐怖を全く感じないと言えば嘘だが、それ以上に互いへの感情が上回っている。
マシュが隣にいてくれるのなら、どんな恐怖でも耐えてみせる。
楓が隣にいてくれるのなら、どんな敵にも立ち向かえる。
「私が絶対に……貴女を守ります！　先輩！」
その言葉と共に、盾に秘められた力が解放された。
青白い魔力を帯びた光が巨大な壁。まさに城壁とも呼べるそれを造り出し、二人を飲み込まんとするセイバーの一撃を完全に受け止めているのだ。
魔力の城壁を、盾から展開される護りに亀裂の一つも走らせる事も出来ずに止められ、弾かれる漆黒の聖剣。
「っ！　うぅぁあああああああっ！」
マシュの叫びに、絶対に楓を守り抜くという意思に応えるように魔力の城壁はその輝きを増していく。
その輝きが闇に染まった剣撃を上回り、反射させる。
「なぁーーーーーッ!?」

勝利を呼ぶはずの剣撃が、その持ち主を完全に飲み込んでいった。

第五話　炎上汚染都市冬木　5

何度も震動する大地。嫌でも感じ取れる膨大な、ゾッとするほどに強大な魔力。
セイバーが宝具を、少なくとも二度は使用したのだろう。出なければ、これほどの魔力を感じ取れはしないはずだ。
あの洞窟からはそれなりに距離も離れているのに、それでも伝わってくる圧倒的な、暴力的ですらある力。
直接食らったわけでも無いのに、背筋に冷たいものが走るのをキャスターは感じていた。
「相変わらず、バカみてぇな魔力ぶっ放しやがるな」
一体、何をどうすればこれほどの魔力を得られるのかと呆れすら覚える。
他にも強い魔力を感じた事から、マシュも宝具を発動させたのだろうか……もしそうなら、幸運だ。
彼女の宝具は――自分の推測通りなら――セイバーに対する切り札になりえるだろう。
（あとは、アイツ等次第ってとこか）
アーチャーの相手を引き受けた時点で、マシュに全チップを賭けたのだ。
ならば、あとは彼女達を信じて自分の役目を果たす事に全力を尽くせばいい。
賭けに負けたなら、それはそれだ。
「さて、と……そろそろテメェとの喧嘩にも飽きてきたんだがな？」
大気を切り裂いて飛来する無数の矢を炎で迎撃し、アーチャーを睨みつける。
二人の魔術と矢の撃ち合いで、辛うじて本殿だと解る程度には原型をとどめていたそれは完全に吹き飛んでいた。
地面にはいくつものクレーターが出来上がり、周囲の木々は爆風でなぎ倒され、二人の撃ち合いがどれほどの物であったかを物語っている。

「くたばりぞこないのクセに、無理しやがって。そろそろ楽になったらどうよ？」
「そのくたばりそこないを、何時までも仕留めきれないキサマはなんなのかな？」
アーチャーの嫌味に舌打ちで返し、キャスターは彼の様子を窺う。
ビルの屋上で与えたダメージも相当の筈だが、ここまで持ちこたえたのは忌々しくも流石だと賞賛の一つも送りたくなる。
同時に、どれだけセイバーにご執心なのかと、どこまで彼女のボディガード気取りなのかと呆れも感じるが。
（だが、どっちみち限界も近いみたいだな）
それでも、もう長くは持たないだろうと確信する。
見た目からはそう思えないが、中身はボロボロ。今もああやって立ち、油断なくこちらを見据えているだけでも相当の激痛に襲われているはず。
一切それを表に出さない辺りは本当に我慢強いというか、この戦いを我慢大会か何かと勘違いしてないかと言いたくなるほどだ。
「まぁ、そろそろ決着といこうじゃねぇか。テメェもやせ我慢はいい加減にしんどいだろ？」
手の中で杖を回転させ、切っ先を突きつける。
同時に展開した数発の魔力弾を放出。一つ一つが意志を持つかのように独自の軌道を描いてアーチャーへと襲い掛かる。
アーチャーも矢を放ち、それらを次々に撃ち落としていくが蓄積したダメージは着実に彼を蝕んでいく。恐るべきは、それを決して表には出さない精神力か。
だが、表に出さなくてもそれらはアーチャーから体力を、集中力を着実に奪っていく。
「さぁて、コイツで終いといこうじゃねぇか！」
故に、キャスターは勝利を確信する。
僅かに落ちたアーチャーの矢を放つ速度。それを見逃す事無く、両足に魔力を集中させて、解き放つ。
魔力を噴射しての加速で、文字通りロケットの如く突貫するキャス

ター。自ら間合いを詰めてくる彼に意表を突かれながらも、冷静にアーチャーは矢を構えるが……。
「おせぇ！」
予め魔力を込めていたキャスターの杖が、その心臓を貫くのを防ぐことは叶わなかった。
蓄積していたダメージはアーチャーの動きすら鈍らせ、迎撃を不可避にしていた。もしも弓ではなく双剣を使用していれば、とも思ったが結果は変わるまい。
それでも、弓を使うよりはまともに戦えたかもしれない。そんな、今更過ぎる後悔をほんのわずかに抱きながら、アーチャーは消滅した。
「その心臓、確かに貰い受けたぞ……アーチャー」
宿敵の消滅を見届け、キャスターは洞窟へと歩を進める。
恐らく賭けには勝っているだろうと、直感的に感じ取りながら。

目の前で起きた光景に、オルガマリーは我が目を疑った。
セイバーの宝具、エクスカリバーの名を聞いた瞬間に彼女を襲ったのはかつてないほどの絶望感。
エクスカリバーといえば、かの有名なアーサー王の持つ聖剣。恐らく、セイバーのサーヴァントとして呼べる英霊としては最高位に位置する存在。
何らかの影響で本来の輝きが黒く染まり、暴力的な物となっているがそれでも最高レベルの聖剣である事に変わりはない。
その直撃に、一発だけでもマシュが耐えきった事が奇跡に等しい。
「何なのよ……あの宝具……」
だというのに、今まさに発動したマシュの宝具がその漆黒の聖剣を弾き返したのだ。
エクスカリバーに耐えきるだけでなく、弾き返すとはどんな宝具なのか。彼女は一体、どんな英霊と融合したというのか。
そして、間違いなく宝具を発動させるきっかけとなった魔術師でも

ない単なる一般人だったはずの補欠マスター候補生。
（……マシュがなんか懐いてるな、とは思ってたけど）
二人が交わしていた言葉までは聞き取れなかったが、楓の行動が、その存在がマシュの宝具覚醒の一因になった事は間違いない。
仮に自分がマシュのマスターになっていたとしても――カルデアでコールドスリープ中であろう他のマスター候補生であろうとも――きっと、宝具を目覚めさせるには至らない。
そんな確信めいた物を、オルガマリーは確かに感じていた。
「はぁ……全くもう、見せつけてくれちゃって」
二人で肩を支え合う様を見せつけられ、呆れたようにため息をつく。
全くどこのバカップルだと言いたくなるのを堪え、二人の元へ足を進めようとして、気がついた。
「な、ぁ……っ!?」
跳ね返された自らの宝具に飲み込まれた黒騎士が、ゆっくりとその姿を現したのだ。
流石に無傷とはいかなかったのか、鎧は所々砕け、若干足もふらついている。だが、消耗しきったマシュでは相手をするのは無理だろう。
もうこれはどうしようもない。オルガマリーを絶望が支配しようとした時、視界の片隅から飛び出す影があった。
楓が召喚した、もう一騎のサーヴァントだ。
「二人共、後は任せて！」
サーヴァント、アストルフォは言うが早いかヒポクリフを呼び出し、その背へ飛び乗った。
自身が所有する四つの宝具。そのうち三つではどうやってもセイバー相手に致命的なダメージは期待できないが、今から発動する物であれば別だ。
全快の時ならばともかく、自らの宝具を跳ね返されて手傷を負った今ならば避けられる可能性もそう高くはない。そも、マシュにばかり無茶を押し付けるなど出来ようはずもない。

出会って数時間程度ではあるが、彼女は仲間なのだ。共に助け合うのは、彼女が頑張った分、自分も頑張るのは当然の事。
「いっくぞぉ！」
セイバーもこちらに気づき、目の前のマシュよりも遥かに脅威だと判断したのか、剣を構えて魔力を放出。
刃に纏わせた膨大な魔力。それをそのまま斬撃として、力任せに放ってくる。
それを避けようとせず、アストルフォを乗せる幻馬は速度を落とすことなく、まるで風を切り裂きながら目標へ直進する銃弾のように突撃。
真っ向から受ければ両断される事は間違いない魔力の斬撃。明確な死を自身に与えるであろうそれに対し、アストルフォは笑みを浮かべて。
「この世ならざる幻馬」
相棒たる幻馬の、宝具としての真の名を告げた。
「!?」
瞬間、アストルフォとヒポクリフの姿が消え去った。
目の錯覚では無く、本当にその場から消え去った事にセイバーが驚愕し、その意味を理解したのと主を背に乗せた幻馬が再度姿を見せたのは同時。
一瞬で斬撃を避け、セイバーの眼前へと迫った幻馬は一切速度を落とすことなく、鷲のそれのような前足で黒騎士の両腕を掴むとそのまま空中へと上昇。
そうしてまた、姿を消したかと思えば一瞬で洞窟の天井付近へと移動していた。
「あれは……空間跳躍」
ヒポクリフとは、グリフォンと雌馬の間に生まれるという本来あり得る筈のない存在。
故に真名を解放すれば幻の、非実在の存在としての認識を高めて、この世界から完全消滅という形で異なる次元へと移動する事が可能なのだ。

そこを実在する乗り手、アストルフォが元の世界へ引っ張り上げる事で帰還する。これを繰り返す事で、空間跳躍という芸当をこなしている。
加えて、その速度。オルガマリーの見立てではレース用の車並であろうそれは一切衰えない。一度捉えた相手に反撃など許す暇は与えない。
「いっけぇえええ！」
そして、天井から地面へと空間跳躍を繰り返しながらの急降下。
音の壁を突破するほどの勢いでセイバーを叩き付け、その衝撃で楓とマシュは悲鳴交じりに地面を転がってしまう有様だ。
距離を置いていたオルガマリーも踏ん張らねば尻もちをつきかねない程のそれの後、空間跳躍を持ってアストルフォと愛馬は楓の傍へと姿を現した。
「美味しいところは貰っちゃったけど、別に良いよね？」
「え、えぇ……私も限界でしたので」
やはり、本物の英霊は違うとマシュは感じた。
真名を解放した宝具の破壊力をその身で受け、今もこうして間近で見やり、自分では足元にも及ばない存在なのだと実感する。
それでもと、楓の協力を得て遂に発動した自分の宝具たる盾に視線を移す。この盾で、確かに楓を守りきってセイバーの剣を防ぎ切った事に違いはない。
ほんの少しでも、楓の力になれた。この盾があれば、きっとこれからも彼女の役に立てると思うと、不思議と心が躍る。
「あ、あのぉ……そろそろ、私、も……限界……なんです……けど……」
その一方で、凄まじい間での消耗に襲われている楓であった。
これが宝具開帳による魔力消費。サーヴァントを使役する負担であり、ろくな支援も出来ない自分もに出来る事であると理解しているが、それはそれとしてかなり辛い。
ちょっと眠いどころの話ではなく、このまま瞼を閉じれば永遠に目覚めないのでは無いかと思えてしまう程だ。
「アストルフォ！　アンタ、いつまで宝具展開してるの!?」

「えっ……ああ！　ボクのせいだ！　ごめん、マスター！」
オルガマリーの怒声で、ハッと我に返ったアストルフォはヒポクリフを解除。未使用時の槍のように、魔力として四散させる。
真名解放すれば切り札にもなりえる自身の最強宝具であるが、一度解放すると膨大な魔力消費を強いるという欠点がある。
セイバーへの――まず間違いなく致命傷足りえる――攻撃を見まい、その余韻に浸ってしまって、楓への負担を失念していた。
勝つのは難しいどころか、負けるだろうなと思っていた相手だったのだから、余韻に浸ってしまった事自体は仕方ない……なんて事は無いだろう。
「先輩、大丈夫ですか……？」
「う、うん……ちょっと、というかかなり全身怠いけど」
全身を襲う疲労。だが、マシュやアストルフォはこれ以上の負担を受けていたのだから、こんな事でこれ以上弱音を吐くわけにはいかない。
肩を貸してくれるマシュに、素直に頼って倒れそうになる体を支えてもらう。
「全く……マシュは宝具を発動させたというのに、肝心のマスターがこれじゃねぇ」
呆れたようにため息をつき、オルガマリーは楓を見やる。
ろくな魔術一つ使えない、ついこの間まで一般学生だったこの少女がレイシフトに成功しただけ一人のマスターと聞いた時は絶望すら覚えたが、こうして結果を残したことは認めなければならない。
実際、理由は解らないがマシュは彼女に信を置いている。アストルフォも――何も考えてないのかもしれないが――楓をマスターとして立てている。
魔術師としてはともかく、マスターとしては悪くない、のかもしれないがまだまだだろう。
「ところでマシュ。あなた、宝具を発動させたけれど……」
オルガマリーの意を察したのか、マシュは申し訳なさそうに首を横に振る。

「いえ、宝具は発動させましたが……宝具も、私と融合した英霊の真名の把握には」
「そう……真名は解らなかったけど、発動させたって事ね」
つまり、マシュの楓を守ろうとする純粋な心に反応して発動したという事か。
まるで御伽噺のような展開じゃないか。そんな事で、英霊の証たる宝具が発動したなんてありなのかと言いたくなる。
しかし、実際に発動させたのは目の前で起きた現実だ。
「全く、そんな御伽噺みたいな事をホントにやってのけるなんて……呆れるを通り越して感心するというか」
色々と認めたくない事が起きているが、実際にこの眼で見たのだから認めるしかない。
こうなれば、カルデアに帰還した後の楓の処遇も色々考えなければならない。とりあえず、本格的に魔術を学ばせるところからだろうか。
他のマスター候補生達が動かせないであろう事を考えると、楓には色々とやってもらう事になる。
（癪だけど、弟子にでもするしかないかしら）
脳内で今後の楓の処遇を考えつつ、マシュの持つ盾へ視線を移す。
宝具として発動させられるようになったのは良いが、具体的にどういう物で使っていた英霊も未だ不明。
不安要素は付きまとうが、それはこの際仕方ない。使えないよりはマシだと割り切って、今必要なのは。
「ところでマシュ……貴女の宝具、真名不明のままってのも不便だし、何か適当な名前つけてあげないとね」
「名前、ですか」
「えぇ。霊基を起動させる呪文って意味でもあった方がとかいいでしょう。そうね……人理の礎（ロード・カルデアス）どう？　カルデアは、貴女にとっても意味のある名前でしょ？」
「ぁ……はい！　ありがとうございます！」
疑似的な物とはいえ、名前がついた事が嬉しいのかマシュは笑みを

浮かべて盾に手を添える。
そんな様子を微笑ましく思いながら見やる楓。オルガマリーも軽く息を吐く。
「ともかく、セイバーはこれで倒せ……っ!?」
洞窟内に、静かな金属音が響く。その方向へ顔を向けると、土煙の中からゆっくりと黒衣の騎士が姿を見せているではないか。
鎧は砕け、その下の黒いドレスも破けて白い肌が露出しているが、威厳すら感じさせる立ち姿は健在。
アストルフォの一撃にも耐えきったというのかと、オルガマリーは怯え、マシュは限界などとっくに超えている体を推して楓を守る為に盾を取る。
「いや、心配ないと思うよ?」
そんな皆の警戒を、アストルフォはあっけらかんとした声で否定した。
「はぁ!? 何を言ってるの!?」
「……いえ、アストルフォさんの言う通り、のようです」
よく見ると、セイバーの体は足元から光の粒子となって消滅を始めていた。
自身の宝具を跳ね返され、更にヒポグリフによる攻撃を受けたのは彼女にとっても耐えきれる物ではなかったという事だったようだ。
「……私の負けか」
小声で呟きながら、自虐的に嗤うセイバー。消滅を前に悪足掻きなどと言う無様は晒さぬと、その手から黒き聖剣も消滅させる。
先ほどまでの敵意に満ち溢れた表情は消え失せ、穏やかな視線でマシュを見やる。
「……自らのマスターを守ろうと、共にあろうとする純粋な心に応えたか。アイツらしい」
加えて、マスター自身もその隣で共にあったのだ。ただ独りで全てをなそうとしたした自分が負けるのは道理という物。
ヒポグリフを避けられなかったのも、純粋に自分の力不足。結局のところ、彼女達を侮っていたのだろう。

「こっちも終わってたか。やるじゃねぇか、お前ら」
声と共にキャスターが姿を見せる。やはり、彼の指先も光の粒子となって消え去ろうとしていた。
「俺の退去が始まってたから、もしやと思ったが……やるじゃねぇか」
彼女達は見込み通り。いや、それ以上のマスターとサーヴァントだったかもしれない。
何にせよ、これでこの狂った聖杯戦争も終わるのだ。後は後腐れなく消えていくだけだ。
「結局、どう運命が変わろうとも……私独りではこれが限界だったという事だな」
「あん？」
しかし、セイバーの漏らした言葉がそれを否定する。
今の発言は、まるでこの聖杯戦争を何度も繰り返してきたかと言っているような……。
「おい、テメェ……それはどういう意味だ!?」
「いずれアナタも知るだろう、アイルランドの光の御子よ。グランドオーダー……聖杯を巡る戦いは、始まったばかりだと」
そう言い残し、セイバーは光の粒子となって消滅する。
キャスターはまだ何か聞きたかったようだが、問うべき相手はすでにおらず、自身もまた消滅しようとしている。
最早、セイバーの残した言葉の意味を考える暇もない。となると、最後にやるべきは彼女達を称える事だ。
「ここまでか……ま、ご苦労さん。お前らのお陰で、このおかしな聖杯戦争は無事終了だ」
杖を肩に担ぎ、笑みを浮かべて楓とマシュを見やる。
「じゃぁな、勇敢な嬢ちゃん達。もし、俺を召喚する機会があったら……そん時はランサーで呼んでくれ」
そうして、キャスターもまた消滅した。
残された四人の緊張が解けるまでほんの少しの時間を必要とし、やがて全身を襲う疲労に耐えきれなくなったマシュが膝から崩れ落ち、楓が咄嗟にそれを抱き止める。

必死に気を張っていた彼女の表情は疲労と苦悶に歪み、全身から冷や汗を滲ませた様は、どれだけの苦痛に耐えていたのかを嫌でも理解させた。
「マシュ、お疲れ様。ありがとうね」
「先輩……すいません。最後の最後で」
「気にしないの。私よりマシュの方が大変だったんだから、こういう時ぐらい……っ！」
マシュの体を抱き寄せて、自身を支えにしてなんとか立ち上がらせる。
「先輩を頼りなさいって、ね？」
「ぁ……は、はい。あ、あの……もう大丈夫ですから」
「駄目。黙って私に体を預けて休みなさい」
抱き寄せられた事に戸惑ったのか、頬を赤らめ離れようとするマシュを楓は離さず、半ば無理矢理に彼女の手を自分の肩へ回す。
この特異点に来てから、ずっと彼女に負担を掛け続けていたのだからこれぐらいはしなければ、先輩と呼ばれている手前、格好がつかない。
マシュの汗ばんだ肌、まだ若干荒い息遣いがその鎧姿と相まって同性であっても動揺を覚えるレベルではあるが、そこはどうにか抑え込むだけである。
「うんうん。マシュが一番頑張ったんだし、それぐらいは許されるって」
アストルフォの言葉もあり、ついに観念したのかマシュも小さく頷き、楓に体を預けた。
ただそれだけの事なのに、不思議と心が安らぐ。ただ休んでいるよりも、心身の回復が大きく感じるのは何故だろうか。
ここが特異点で無ければ、このまま眠りについてしまいそうな程だ。
『セイバーの撃破おめでとう。そこだと映像がつながらないみたいで、喜んでる君達を見られないのは残念だけど』
端末から聞こえてくるロマニの声も上機嫌。こちらの帰還準備を

進めるとの声と同時に、彼と共に忙しく動き回るスタッフ達の声も聞こえてくる。
　これでようやく帰れるんだと、深く息を吐く楓。一つ気になるのは、一人だけ浮かない顔をして何やら考え込んでいる様子のオルガマリーだ。
「……所長？」
「グランドオーダー……なんでセイバーがそれ知ってるの……？」
「あのぉ……所長？　どうかしました？」
「ん……いえ、なんでもないわ」
　自身の顔を覗き込んでくる楓に気づき、オルガマリーは軽く頭を振る。
　セイバーの残した言葉は気になるが、今ここで考えても仕方がない。これ以上の頭脳労働は、カルデアに帰還した後やればいい。
　帰った後も今回の事後処理や、楓やマシュの今後も整えねばならないのだから、落ち着けるのは当分先になるだろうが。
「とりあえず、お疲れ様。カルデアに帰ったら、二人は休みなさい。面倒事は私の方でやるから……ロマニ、早く私達の帰還を」
『了解。ちょっとだけ待っててくれ』
　ロマニの返答を聞き、ふぅと溜息をつく。
　ともかくこれで帰れるのだ。難しい事は、カルデアに帰ってから考えればいい。
　楓達も消耗しているのだから、今必要なのは一刻も早い休息なのだ。
「いや、素晴らしい。まさかセイバーを打倒するとはね」
　そんな空気に似つかわしくない、嫌味を含んだ声と白々しいまでの拍手が洞窟に鳴り響く。
　何事かと顔をあげれば、最初にセイバーが陣取っていた祭壇の上に一人の男の姿があった。緑色のコートとシルクハットに身を包んだ、中年の男性だ。
　いかにも人が良さそうな笑みを浮かべた――というよりも張り付けた――彼の顔を見やり、オルガマリーの顔が喜びに変る。

「レフ！」
楓も彼の顔と名前には覚えがあった。カルデアに来た時、マシュの次に出会った人物だからだ。
カルデア職員の中でも重要なポジションにいるらしいという事しか楓は知らないが、オルガマリーの喜びようを見れば彼女がどれだけ信頼を置いているのかは解る。
管制室の爆発に巻き込まれ、死んだと思われていたが自分達のようにレイシフトに巻き込まれていたという事だろうか。
ともあれ、一応は知った顔と再会出来て楓の顔にも少し安心の表情が浮かび……視界の隅、アストルフォの顔が強張っている事に気が付いた。
「レフ、生きてたのね！」
「ダメだ所長さん！」
喜びのあまり、彼の元へ駆け寄ろうとする彼女の腕をアストルフォが咄嗟に掴む。
「なっ!?　ちょ、何するのよ!?　レフが生きてたのよ！」
「近づかない方が良い……なんか、アイツはヤバい気がする……」
そう言いながらオルガマリーを力任せに自分の後方へ引き寄せ、横目でマシュにも問う。
あの男から何か言い様の無い気配を感じないか。それを察したマシュもレフを改めて見やり、感じ取ったのは悪寒。
反射的に楓を下がらせ、盾を構えて前に出る。アストルフォもオルガマリーを半ば投げ飛ばすように楓へ預け、槍を構えてマシュの隣に立った。
「えっ……ちょ、二人とも!?」
「何してるの!?　マシュ、彼が誰なのか解ってるでしょ!?」
「解ってますが……あれは、ホントにレフ教授ですか……？」
「……は？」
マシュの言葉に呆気にとられるオルガマリー。そんな彼女の様子が可笑しいのか、レフは口元を歪に歪めて嗤う。
「ふっ……ククク！　流石はデミ・サーヴァント……そして真っ当な

英霊だ。私が普通の人間ではない事を感じ取ったかね」
「え……レ、レフ？」
「君もしぶとい女だな、オルガ。爆弾は君の足元に仕掛けてあったというのに、肉体を失ってもまだ存在しているとは」
「……は？」
レフの言葉に、オルガマリーの顔から感情が消える。
一体何を言っているのか理解できない。

爆弾を仕掛けた？

私の足元に？

もう肉体が無い？

一体、レフは何を言っているのだろうか。冗談にしても性質が悪すぎる。
「そもそも、マスター適正もレイシフト適性も無いお前がこの場にいるというのも変だと思わなかったのか？　肉体という枷を失った事で望んでいた適性を得たが、それも一時的な物だ」
オルガマリーの呆然とした様子にもう我慢しきれんとばかりに、笑いを堪えながらレフは続ける。
「つまり、お前はとっくに死んでるんだよ！　カルデアに戻っても、その魂の入れ物たる肉体は無い！　いや、肉片程度なら残っているかもしれんが……どの道、帰還したところでお前を待っているのは完全な死だよ」
「し……死んでる……？　私が……？　レフ、何を言って……？」
「現実を理解できないかね？　まぁ、いい。今更理解したところで、どうにもならん」
レフが指を鳴らすと同時に、彼の背後の空間が歪む。その奥から姿を現すのは、オルガマリーやマシュにとってすでに見慣れた巨大な装置。

楓にもうっすらと覚えはある。カルデア管制室の中央に浮かんでいた、巨大な球体型の装置だ。地球儀のように地球全体が映像として映し出されていたそれは炎に包まれたかのように真っ赤に燃えていた。

それがどういう意味なのか彼女には解らないが、オルガマリーやマシュの顔を見ればとにかく不味い状況なのは理解できる。

「嘘……カルデアスがあんなに……ただの虚像でしょ!?」

「これは今まさに起きている現実だ。解りやすいように空間を繋げてやったのさ。聖杯さえあれば、この程度の事は造作も無い」

そういう彼の手の上に浮かぶのは、金色の杯。一目見ただけで、それが持つ異常なまでの魔力が感じ取れる聖遺物。

手にした物の願いを叶えるという万能の願望機。本物の聖杯なのだと、直感的にその場にいた誰もが理解した。

「さぁ、よく見るがいいアニムスフィアの末裔。お前達の愚行の末路をな」

レフが腕を軽く振る。それを合図に何らかの魔術が起動したのか、オルガマリーの体がゆっくりと宙へ浮かぶ。

そうして、ゆっくりとレフの……彼の背後に見えるカルデアスへと引き寄せられていく。

「な、何!? 何をしているの、レフ!?」

「君との付き合いも長いからね。せめてもの情けとして、君の宝物であるカルデアスに触れると良い……ブラックホールか太陽とそう変わらないソレに人間が降れれば、分子レベルで分解される。永遠に死の瞬間が引き伸ばされるだろうが……まぁ、気にするな」

淡々と残酷に告げるレフ。その顔に張り付けられた笑みが本物だとようやく理解し、オルガマリーの口から洩れるのは悲鳴。

「いや、いやぁ! 助けて、誰かぁ!」

「あ……っ! アストルフォ!」

「言われなくても!」

楓の指示より早く、ヒポクリフを呼び出したアストルフォが空を駆けてオルガマリーの元へと向かう。

目の前で行われようとしている非道を黙ってみていられるような性格ではないと、アストルフォの伸ばした手がオルガマリーを掴む。
だが、それはレフの一睨みで徒労と化した。
魔術ですらない。ただ、魔力を放出しただけの衝撃波でヒポグリフごとアストルフォ。そして、地上にいた楓とマシュも悲鳴と共に吹き飛ばされる。
「うわぁっ!?」
「きゃ、ぁああっ！」
全身に叩き付けられた衝撃。ヒポクリフは消滅し、三者はそれぞれ無様に地面へ転がり落ちる。
ただの魔力放出。レフが行ったのはそれだけであったが、その力を見せつけるには十分すぎた。
マシュもアストルフォも理解したのだ。レフの力は、苦戦の末に倒したセイバーよりも遥かに上なのだと。
「いやぁあああああああああああっ！　ぁ、あ……ぁ……」
オルガマリーがカルデアスに吸い込まれ、悲鳴が途切れたのもそのすぐ後だった。
これ以上ないぐらい、あっさりと、彼女の命が消滅する。呆気ない、そんな感想すら抱いてしまう程に。
「所長……っ！　レフ教授、アナタは一体？」
「ふん。では、改めて自己紹介をしよう」
わざとらしく、深々とお辞儀をしながらレフは続ける。
「私はレフ・ライノール・フラウロス。キサマ達人類を処理するために遣わされた、２０１６年の担当者だ」
「処理……？　担当者……？　な、何訳わかんない事言って……!?」
「簡単な話だ。キサマ達に最早未来など存在しない。２０１６年より先の未来は消滅したのではなく、焼失したのだ。我らが王の寵愛を失ったが故に、キサマら人類の未来は永遠に失われた！　キサマ等の時代は、すでに存在しない！」
その高らかで、誇らしげですらある宣言。
彼の眼は狂気に染まり、己の言葉に……いや、彼が言うところの王

たる存在に陶酔しているようであった。
『……外部との連絡が取れないのは通信の故障ではなく、そもそも通信を受け取る相手がすでにいなかった。そういう事か』
「その声はロマニか。やはり賢しいな……真っ先に始末できなかったのが悔やまれるよ。最も、それも虚しい抵抗にすぎない。どのみち、カルデア内での時間が２０１６年を過ぎれば、そこも完全に消滅だ。紙屑のようにな！」
　再びレフが手をあげると、祭壇の奥から何かが彼の手の中へ飛来する。
　金色に輝くそれからは楓でも感じ取れるほどの圧倒的な魔力が溢れていた。
「聖杯……」
　アストルフォの呟きが妙に響く。
「これさえあれば、最早ここに用はない。では、さらばだ。このまま崩壊に飲まれるがいい」
　そう言い残し、歪んだ笑みを浮かべてレフは転移魔術で姿を消した。
　彼の言葉が引き金になったのか、それとも聖杯を持ち去ったせいなのか、大空洞が激しい振動に襲われ崩壊を開始。
　天井が崩れ落ち、大小様々な岩が落下し始める。
「っ！　ドクター、ここはもう持ちません！　至急レイシフトを！」
『今やってる！　けどごめん！　ギリギリでそっちの崩壊が早いかもだ！　なんとか耐えてくれ！』
「そんな無責任なぁ!?」
　咄嗟に盾で楓を庇うマシュと、ロマニから帰ってきた言葉に思わず悲鳴をあげるアストルフォ。
　盾の下で轟音と共に落下してくる岩に怯えながら、楓はマシュの手を握りしめ……その感触と共に視界は暗転した。
　意識が戻った時、視界に飛び込んできたのは見覚えのない天井。
　そして、視界の隅で蹲る白い小動物だった。

「……あれ？」
ここはどこなのか。記憶の中から手繰り寄せ、カルデアの……案内された自室だと気が付くのに少し時間がかかった。
確か、自分は洞窟の崩落に巻き込まれたはずだ。マシュやアストルフォが自分を庇ってくれて……。
「っ！　そうだ、マシュ！」
ベットから飛び降り、その時にベットの上から転げ落ちた小動物。フォウが抗議の声をあげたが楓は気付かない。
一体どこにいるのか見当もつかないが、とりあえず管制室に行けば誰かはいるだろう。そう考え、部屋を飛び出そうとした時であった。
「あ、目が覚めたんですね。先輩」
扉が開き、マシュがその顔を見せたのだ。
初めて会った時のように眼鏡をかけ、カルデアの制服に身を包んだ姿。ホッと一安心すると同時に、思わず楓はマシュに抱き着いていた。
「マシュ！　良かったぁ……っ！」
「へっ!?　あ、あの……」
マシュは赤面し、戸惑ったような声をあげるが楓に抱擁されているのは嫌ではないのか、自然と自らの両腕を彼女の背に回していた。
お互いに生きて帰ってこれたという安心感をようやく実感できた。腕の中にいる相手の鼓動が伝わってくるようで、何とも言えない安らぎを感じる。
楓もマシュがいる事に、自分でも驚くほどに安らぎを覚える。こんな自分を必死に守ってくれた彼女に、改めて礼を伝えなければと顔をあげて……。
「「……オホン」」
何やら、温かいような冷たいような、そんな視線を向けているロマニとアストルフォと目が合った。
「酷いなぁ、マスター。ボクの事、忘れてたでしょ」
「ア、アハハハ……ゴメン」
気まずそうにアストルフォから目を逸らす。

マシュも楓から離れ、照れくさそうに顔を伏せている。その様子を微笑ましくみやりながら、すぐに険しい表情になったロマニが口を開いた。
「まずは生還おめでとう。君達のおかげで、カルデアはなんとか救われたよ。所長については、残念だったけど……だからといって、足を止める訳にはいかない」
ロマニの話によれば、冬木の特異点は消滅。だが、それに代わって新たな特異点が七つ観測されたという。
冬木のそれとは比べ物にならない程の時空の乱れ。レフのいう人理焼却を防ぐ為には七つの特異点全てをどうにかしなければならないという事だ。
だが、特異点にレイシフト出来るマスターは楓以外全員凍結。戦力として数えられるサーヴァントはマシュとアストルフォのみ。
ここまで言われれば、嫌でも解る。
「この状況で言うのは、強制同然だと解っているけど……」
七つ全ての特異点を修正して、人類を救うという大仕事を引き受けてくれ。
一応お願いという形にはなっているが、本人の言う通り強制な上に仮にそうでなくても拒否権は無い。
ここで「嫌です」と言ってしまえばそれまで。自分の一言で全人類滅亡が決定してしまう。
(これ、断れないやつじゃん……)
そんな重たすぎる物を嫌でも背負わせようというのか。怒りが全くわかないといえば嘘になるが、やらなければどうしようもないと理解も出来る。
それにと、隣に立つマシュを見やる。不安は隠しきれていないが、それでも楓を信じていますと言わんばかりの表情。そんな顔をされるとどうにも断りにくい。
一方的に滅亡を告げられた事にも正直腹は立つ。まだまだやりたい事は山ほどあるのだから、それも出来ないまま、こんな山奥の研究施設で死ぬのを待つだけなんて、どう考えても受け入れられない。

「……解りました。やりますよ」
半ば諦めたような、それでいて最後までやり通してみるかと決意に満ちた声で返答する。
こうして、彼女達の物語は始まった。

第六話　邪竜百年戦争　オルレアン　1

単なる長期間のアルバイト。そんな感覚でカルデアを訪れた時は、こんな大事になるだなんて思ってもいなかった。想像すら不可能だろう……人理修復。早い話が全人類の滅亡　阻止という、とんでもない規模の案件に巻き込まれてしまうだなんて。

「はぁ……」

全身に叩き付けられる熱めのシャワー。友人達からも――嫉妬交じりに――褒められる彼女の体のラインにそって流れ落ちていくそれに体を預けて、楓は湯気で曇ったバスミラーを手でふき取り……そこに映った自分の顔を見る。

「うわ……酷い顔」

自分でも解るぐらいに表情は暗い。こんな顔で、誰かの前に出る事などできはしない。

レイシフトする前に、人員やら何やらがゴタゴタしている組織内部を色々整理整頓しないといけないからと命じられた待機命令。すぐに行かされると思っていただけに拍子抜けといえば拍子抜けだが、こうして落ち着ける時間があるのはありがたい。

実際のところ、何割かは自分に落ち着いて頭の中を整理する時間を与えるのもあったのかなと楓は思う。

（……ここ以外、全部無くなっちゃったんだよね）

カルデアの外は燃え尽きて、最早存在しない。

廊下から覗けるはずの外部の景色――普段も猛吹雪ばかりでろくに見えないそうだが――はまるで夜のように真っ暗で何も見えない。生き残った職員が何人か志願して外部に出たが未だに帰還せず、連絡もない。

外部との連絡も一切不通。本当に、カルデア以外の場所は無くなってしまったようだというのが結論だった。

楓も駄目元で実家に連絡を取ってみたが、返ってくるのは一切の雑音すらない……無その物。

つまり、死んだという事だろう。人も世界も、何もかも。

「――――――っ！」
途端に全身を悪寒が駆け抜ける。
自分の体を抱きしめ、膝をついて、シャワーを浴びながらなお寒気を感じてガタガタと体が震える。
冬木にいる時は必死で考える事もしなかった。ただ、目の前で起きる出来事やボロボロになりながらも自分を守ろうとしてくれたマシュ達の事で精いっぱいだった。
それが、こうして安全な場所に戻って、あらためて現在の状況や自分に半ば押し付けられたも同然の、世界の命運という重荷を実感すると一気に恐怖として湧き上がってきた。
「……は、ぁ……はぁ……はぁ……」
シャワーの温度をめいいっぱい熱くして、最早痛みすら感じるそれを持って己を飲み込まんとする恐怖を誤魔化す。壁にはめ込まれたデジタルの時計が刺しているのは午前６時４０分過ぎ。マシュがこの部屋を朝の挨拶をする為にこの部屋にくるまであと２０分もない。
それまでに、少しでも落ち着いておかなければ。彼女にはこんな自分は見せられないだろう。
自分のような弱い人間を、先輩と慕ってくれるマシュにだけは。

午前７時。楓のマイルームの扉がノックと共に開き「失礼します」の言葉と共に入室するマシュ。
丁度シャワーを終え、着替えの真っ最中だった楓も黒いノースリーブシャツに袖を通した処だった。
「あ、お着替え中でしたか。すいません、気付かずに……」
「別にいいよ。あと上着着るだけだったし」
ベットの上に置いていた上着を着こみ、ボタンを留めて胸元のベルトを締める。
胸を強調するようなこのデザインはいかがな物かと、カルデアに来る前に支給された時から少しの疑問と不満を抱いていた。
（でもまぁ……）
マシュを見やる。今はカルデア研究スタッフの制服を着ているが、

デミ・サーヴァントとしての鎧姿は、正直目のやり場に困るレベル。自分が着ろとか言われたら、絶対に無理。
恥ずかしくて人前に出られないというか、マシュはあの格好を恥ずかし気も無くできて、しかも似合っているのは凄いんじゃないだろうか。
「？　どうかしました？」
「別に……何でもない」
あれよりマシというか、この制服程度で文句言ってたら彼女はどうなるのかって話になってしまう。
迂闊に触れるのは止めておくべきなのかもしれない。
「さて、と……朝ごはん行こうか？」
「はい。それと、朝食後にドクターがブリーフィングを行うので来てほしいと……アストルフォさんには廊下で会いましたのですでに伝えてあります」
マシュの言葉で察する。
ついに、特異点に行くときが来たのだと。

「よく来たね、楓ちゃん、マシュ、アストルフォ」
ブリーフィングルームに来た楓達を出迎えたのは、何時になく真面目な表情を浮かべるロマニ。
他の職員達も忙しそうにそれぞれがコンソールを操作しており、こちらに気づきこそすれど挨拶をする余裕は無いようだった。
いよいよ、特異点修復のためのレイシフトが行われるのだと嫌でも実感する。
「さて、まずは僕達の目的のおさらいだ」
一つ、レイシフト先の時代における特異点化の原因を探る事。
特異点はそれぞれ、人類史において重要なターニングポイントと呼べる時代であり、そこが崩壊するような事があれば人類の未来が大きく変わる……滅亡すらあり得てしまう。
そうなってしまった原因の究明こそが、その時代における最優先事項。

「まぁ、これは間違いなく聖杯の力によるものだろうね。でなきゃ、こんな大事やれるわけがないよ」
レフはどうやって聖杯を手に入れたんだかとロマニはぼやく。
「えっと、つまりは聖杯を見つけろって事？」
「その通り。もっといえば、聖杯の確保もしくは破壊だ。聖杯級の代物は、放置していて良い物じゃないからね」
アストルフォの質問に頷いて答える。
「最も、聖杯がただ置いてあるだけで特異点になるとは思えない。その時代で聖杯を悪用している何者かが……レフがいるかもしれない」
そこまで言われ、楓も理解した。
これから赴く時代でレフと。あの男と戦うのかもしれないのだと。
オルガマリーを殺害し、マシュとアストルフォ。二騎のサーヴァントを相手に圧倒的な力を見せつけた奴と。
「……っ！」
考えただけで全身が悪寒に包まれる。
あんな化け物とまた出会わなければならないのか。いや、いずれは何らかの形での決着が必須なのだろうとは思っていたが、こんなに早くその可能性が出てくるとは。
「……先輩？」
「どうしたの、マスター？」
「っ……なんでも、無い」
心配そうに声を掛けてくる二人の声に我に返り、小さく笑みを作る。
「……楓ちゃんには、相当な負担、重荷を強引に背負わせてしまった事を悪いと思う。だけど」
今は前に進んでくれ、と苦しそうな表情で告げるロマニに楓も小さく頷く。
そんな顔をされたら、そもそも自分達の置かれた状況からして、断るに断れないじゃないかと心の中で呟きながら。
「以上でこちらからの説明は終わりだ。君達から質問は？」
特に無い楓は首を横に振り、マシュとアストルフォを見やる。

マシュも特に無いようで、アストルフォは「質問したって、ボクわかんないし」と言い切った。
「特にない、と。あぁ、そうだ……これは最悪後回しで良い事なんだけど」
「レイシフト後、どこか安全な霊脈を見つけた後にサークルの設置をやってくれないかな？　冬木でもやっただろう？」
唐突に、ロマニの言葉を遮って響き渡る第三者の声。
何事かと楓とアストルフォは驚き、ロマニは「あー……忘れてた」とぼやき、マシュは「ここに来るなんて、珍しいですね」と呟いている。
二人の知り合いという事は、カルデア職員なのだろうと思っていると、声の主が姿を現した。
金色の粒子が集まって、人型を作り上げるという方法で。
「うぇ⁉　な、なななっ⁉」
「あー……そういえば、霊体化の事知らなかったっけ？」
「れ、霊体化？」
「そっ。ボク達サーヴァントって魔力で体を作ってて、こうして実体化をしてるだけでも魔力を消費するんだけど、霊体になれば大丈夫さ」
「霊体化と呼ばれる状態……解りやすく言えば透明になってると考えてください。そうしていれば、魔力消費を抑えられたり、魔術師やサーヴァント以外には気配も察知できなくなります」
アストルフォの説明をマシュが補足する。
物凄く乱暴に言えば、省エネモードという事かと理解して、目の前で実際に霊体化を解いて実態となるサーヴァントの姿を見やる。
黄金比ともいえるようなスタイルをした黒髪の女性。手には身の丈程の杖を持った温和そうな雰囲気をしたサーヴァントだった。
「君が桐生楓ちゃんだね？　お初にお目にかかる。私は見ての通りサーヴァント。かのルネサンスに誉れの高い、万能発明家、レオナルド・ダ・ヴィンチさ！　気軽にダ・ヴィンチちゃんと呼んでくれたまえ。はい、復唱！」
「だ……ダ・ヴィンチ……ちゃん？」

瞬間、楓は理解することを止めようと思った。
歴史には全く持って自信が無いが、それでもレオナルド・ダ・ヴィンチぐらいは知っている。
だが、目の前にいる自称ダ・ヴィンチはなんというか、色々と楓の知識とは違っているというか。
「ってか、モナ・リザじゃん」
思わず口から出た言葉に、全てが集約されていた。
「あぁ、だってモナ・リザが好きだからね！」
「……はい？」
知られているように、ダ・ヴィンチは男性だがサーヴァントとして召喚され、現界する際に自らの体をモナ・リザに造り替えたのさ！と満面の笑みで自信たっぷりに言われてしまった。
変態か、と喉から飛び出しそうになった言葉を必死に飲み込む。いくらなんでも、心の底から思っていても口にしてはならない言葉だってあるのだから。
「さて、話がそれちゃったかな。さっきも言ったけど、レイシフトした後にサークルの設置をお願いしたい。無くても通信などのサポートに支障はないが、物資の補給等がスムーズになるし、新たなサーヴァントの召喚も行える」
ロマニが最悪後回しで良いと言ったのは、現地でどのような状況に陥るか解らないからという意味だとも付け加えられた。
ともかく、レイシフトした後は可能な限り早くサークルを設置した方が良さそうだ。
「これで話は全部終わりかな？　じゃぁ、早速レイシフトの準備に」
「おぉっと、その前にちょっと楓ちゃんを借りてくぜ？」
「はい？」
何時の間にかダ・ヴィンチにガシッと手を握られ、管制室から誘拐される楓。
その光景をボケっと見やっていた一同。ダ・ヴィンチの突拍子の無い行動に呆気に取られ、レイシフトを行おうとした出鼻をくじかれて、どうしたものかとそれぞれ顔を見合わせる。

そして数分後。再びダ・ヴィンチが楓を引きずって管制室に姿を見せた。
「いやぁ、ごめんごめん。彼女用の礼装の用意がギリギリ間に合ったんでさぁ」
「ちょ……ちょっと……こ、これは……!?」
楓は顔を真っ赤にして、胸元を抑えて姿勢を低くして蹲っている。
いま彼女が来ているのはカルデア戦闘服と呼ばれる一品。本来、レイシフトを行うマスター候補生全員に支給される物が、楓の分だけ手違いで用意が遅れていたという訳である。
「こ、これ……ものすごく……恥ずかしいんですけど!?」
黄色と白に塗り分けられたＳＦチックなデザインの、ボディラインがハッキリと出るタイプの衣装。
見た目だけ見れば魔術とかオカルト方面には不釣り合いのそれは、楓の体をハッキリくっきり見せつけており、男性職員からは思わず声が漏れ、女性職員からさえも……という有様。
それだけならまだしも、胸元が露出しているのが凄く恥ずかしい。
「これ、着なきゃ駄目なんですか!?」
「そうだね。見た目以上に頑丈だし、礼装に刻まれた魔術もより戦闘向きに調整してるし……何より、君のようなスタイルの良い子が着ると栄える！」
「セクハラで訴えますよ!?」
「いや……レイシフトした先で何があるか解らないし、その礼装着てた方が良いと思うよ？」
ロマニまで敵に回ってしまった。口調や表情から、心の底からそう思っている事は疑いようがない。
「マシュ達の戦闘支援も出来るし、絶対に役立つ事は保証するよ」
「うぐ……」
マシュ達の役に立つ、と言われると断りづらい。
冬木ではろくな支援も出来なかったせいで、二人にはとてつもない負担を掛けてしまった負い目がある。
特にセイバーとの戦いでは、本当に何にもしていない。今後の事も

考えると服装で贅沢は言えないだろう。
「うぅ……出来れば、もっと別のデザインが良かったんですけど……」
「ごめんね。爆発騒ぎのせいで、他の礼装全部駄目になっててさぁ」
神はいなかった。
「大丈夫です、先輩！　とても似合っているというかその……格好良いと思います！」
「そうそう！　体のラインがハッキリ出る服が似合うって凄い事だと思うよ！」
「うん……ありがと……」
マシュとアストルフォのフォローでとりあえず立ち直る。
露出という意味ではマシュのよりマシだし、と思ってふと頭をよぎる一つの確信。
（……マシュの戦闘服は着れないなーとか、他人事みたいに思ったせいかな）
もう二度と、人の服装を弄るまい。
そう硬く決意して、楓は二騎のサーヴァントと共にレイシフト用のコフィンへと向かっていった。
「さて、私は支援物資を適当に見繕ってくるよ。また後でね、ロマニ」
「あぁ、お願いするよ「何。これぐらいはお安い御用さ。私が天才なのもだが、変態なのも事実だしね」
手を振りながら、霊体化して今度こそ管制室を去っていくダ・ヴィンチを見送った後にロマニも自らの席につく。
ここからはただの一度もミスが出来ない重要な仕事。直接レイシフトして戦う事の出来ない自分達がやれる、最大限の支援を行わなければならないのだから。

コフィンに入り、全身から力が抜けていく感覚と共に意識を手放して、次に目を覚ました時にぼんやりとした視界へ飛び込んできたのは一面の青空だった。
全身に感じる草の感覚。どうやら草原で寝転んでいる状態らしい。
「フォウフォウ！」

「わぷっ！」
そして、完全に回復する前の視界を突然白い物体が遮った。
白い物体、フォウが楓の顔をに飛び乗ったのだと、というかフォウも来てたのかといくつかの突っ込みどころか楓の脳内を支配する。
「ごめんなさい、先輩。フォウさん、私の盾の中に潜んでたみたいで……」
フォウの首根っこを掴み、楓の顔から引きはがしながらマシュが謝罪する。
デミ・サーヴァントとしての戦闘服に身を包み、重そうな盾を軽々と片手で持ち運んでいる様は何度見ても凄い迫力。フォウを肩に乗せ、空いた手を差し出してくるマシュ。
それをとって、身体を起こしてもらう。
「んっ、ありがと。マシュ」
「いえ。アストルフォさんもすぐそこにいます。カルデアとの通信が繋がるには、まだ若干の時間がかかりますが……」
「それじゃ、通信が繋がるまではとりあえず待機かな……」
それにしてもと周囲に目をやる。
見渡す限りの大草原。日本ではまずお目に掛かれない、ＴＶぐらいでしか見た事のない光景には軽く感動すら覚える。
「そういえば、ここってどこなの？」
「確か１４３１年のフランスだったかと……丁度、百年戦争の頃ですね」
「あ～……それなら学校の授業でも習ったかな？　確か、ジャンヌ・ダルクとかの」
「その通りです。最も、この時期ならすでに聖女ジャンヌは処刑された後ですし……戦争も休止期間中かと」
戦争なのに休止期間なんてあるのか。そんな楓の疑問を察したかのようにマシュが続ける。
「百年戦争と言っても、ずっと続けていたわけではありません。何度か休戦しては捕虜の交換などを行っていたとか」
「へぇ……そうな「ねぇ、ねぇ、マスター！　マシュも見てよあれ！」

突然割り込んできたアストルフォの大声に若干顔をしかめ、何事かと指さしている空を見上げる。
そこには、とてもではないが信じられない光景が広がっていた。
「何……あれ……」
青空に浮かぶ光の輪。
最初に目を覚ました時、気付かなかったのは視界がまだぼんやりとしていたせいだろうか。
一目で異常だと、自然に発生した物では無いと解る。
「ねぇ……あれ、何？」
「解りません。ですが、この時代が特異点化した事や人理焼却に関係しているのは間違いないかと」
『よし、ようやく繋がった。って、どうしたんだい？』
場の空気にそぐわないような能天気な声で問うてきたロマニに、マシュが映像を送る。
即座に解析したが、衛星軌道上に展開されている魔術式か何かだろうという推測しか返ってこなかった。
『あれの解析はこちらでも進めおくよ。君達は何も無さそうなら、とりあえず霊脈の確保を行ってくれ』
「ドクターの言う通りですね。周辺の探索と並行して、霊脈へのサークル設置を行いましょう」
「まぁ、他にやる事も無い……よね。とにかく移動しよっか」
「それじゃ、ボクが空から周りを見てくるよ！」
口笛を吹き、ヒポクリフを呼び寄せたアストルフォが空へと舞い上がる。
ほんの数分空中を旋回し、二人の元へと降りてきたアストルフォの報告でここを東へ向かったところに街らしきものが見えた事を報告。
一行は、そこへ向かう事となった。

第七話　邪竜百年戦争　オルレアン　2

蒼い空を行くいくつかの影があった。
一つ一つが巨大。鳥ではなく、ましてや飛行機でも無い。それを見た者は口をそろえて竜という表現を使うだろう。
二枚の巨大な翼を使い、空を行く竜の群れ。その背に立つは二人の男女であった。
「……ふむ」
男の方が小さく頷く。
長身を覆う黒いコートを纏った、立ち姿に気品すら漂わせる金髪の紳士。
だが、獣のように鋭い目と、死人のように白い肌。その手に握る身の丈程はあろう長槍が、彼をただの紳士とはかけ離れた人物であると物語っている。
「マスターの命だ。引き返すぞ、アサシン」
「あら？　この辺りの街は全て焼き尽くしたはずだけど？　生き残りの始末はアーチャーの役回りではなくて？」
男に応えた女も、また普通の人物ではなかった。
黒と赤を基調としたボンデージ風の露出度の高いドレスを纏い、白い髪と白い肌をした、目元を仮面で隠した怪しげな女性。
その手に握る杖は、異様な不気味さを放っている。
「どうやら、招かれざる客がきたようでな。持て成せとの事だ」
「あらそう……。私好みの子がいてくれればいいのだけれど」
クスクスと笑う女を無視し、男は馬替わりの竜に指示を出し反転。
それに続いて他の竜も反転し、群れは新たなる目的地へと風を裂きながら空を駆け抜けていった。

アストルフォが発見した街に足を踏み入れた一行を待ち受けていたのは、想像を絶する光景だった。
そこにあるのは中世の街並みではなく、荒れ果て、崩れ落ちた瓦礫の山。

冬木の街を思い起こさせる瓦礫の街並。唯一違うのは、少数ながらも生き残っている人々がいるという事だろうか。
力なく瓦礫にもたれ掛かる者や怪我人を治療する者、邪魔な瓦礫を撤去する者がいるが皆一様に疲れ果てた顔をしていた。
「何、これ……酷い……」
「ん～……空から見た時はそんなに酷い様子には思えなかったんだけどな……」
「恐らく、アストルフォさんが確認したのはたまたま被害の少ない箇所だった……という事でしょうね」
一体何が起きたのか。この時代の特異点化と何か関係があるのだろうか、とりあえずロマニに連絡をと手首の通信機を楓が操作するよりも早く、アストルフォが手近なところに腰かけていた兵士へと話しかけていた。
「ねぇねぇ、ちょっと話聞きたいんだけどいいかな？」
「ちょ!?　アストルフォ、そんないきなり!?」
「ぁ……っ!?　な、なんだお前ら!?」
慌てて地面に置いていた槍を取り、構える兵士。
騒ぎに気づき、他の兵士達も慌てて駆けつけてくるが……全員文字通りボロボロであり、中には折れた武器を無理矢理使おうとしている者までいる始末。
街の奥で、怯えた様子でこちらを見ている住民達を守ろうとしての行動なのは解るが、楓の目から見てもマシュとアストルフォを相手にするには、下手をすれば野党の相手すら満足にできないのでは無いのかと思える有様だ。
「お、落ち着いてください！　私達は怪しい者では……」
「いや、マシュ。私達、現地の人から見れば十分怪しいから……多分」
「えっ!?」
本気で驚くマシュ。自分達の今の格好と、この時代の格好を比べてみればすぐにわかると思うのだが、なんて突っ込みはしないでおくべきか。驚いてる顔可愛いし。と、少しだけ現実逃避をしてから楓はどうしたものかと考える。

「え、えっと……とりあえず抵抗しませんので、落ち着いてもらえません……？」
「お前達……魔女の手下か？」
「……魔女？」
魔女というと、御伽噺とかに出てくるアレだろうか？
確かにこの時代の人達から見れば――現代においても――怪しい服装をしているという自覚はあるが、いくらなんでも魔女とか手下には見えないような、と疑問を覚える。
「魔女？　何それ？」
「……ホントに、知らないのか……？」
兵士達のリーダーであろう男はそう呟き、警戒は解かぬままに楓達へと近づいていく。
「……もう一度聞く。本当に……」
「知らないってば！　ボク達、ここには来たばっかりなんだからさ！」
「出来れば、詳しいお話を聞かせていただけると……」
そこまで言われて、男はようやく警戒を――完全ではないが――解いて剣を降ろす。
「解った……」
男が言うには、数日前に火刑に処されたはずの聖女が蘇り、フランス全土を恐怖に陥れたのだという。
ピエール・コーション司祭、フランス国王シャルル七世はすでに殺害され、後は魔女となった聖女とその軍勢による一方的な虐殺の嵐が、国中に吹き荒れる事となったのだと。
彼ら自身、襲撃を受けた他の街から市民達を連れて命からがら逃げ延びてきた者達なのだそうだ。
「その、魔女というのは……？」
「俺は火刑の場にも、国王が殺された時にもその場にいて、この眼で見た。間違えるはずがない……魔女は、処刑されたはずのジャンヌ・ダルクだ……っ！」
男だけでなく、周囲にいた兵士達も同様に頷き、中には震えだす者までいた。

その様子を見るだけで、彼らが味わった恐怖は嫌でも理解できる。
「ジャンヌ・ダルクが、魔女？」
「あぁ、肌や服の色は違っていたが間違いなく彼女だ……自分を見捨てたフランスへの復讐のために舞い戻ってきたんだ！」
そう叫んだ兵士の一人はガタガタと震えだし、以前見たであろう地獄を思い出したのかその場に蹲ってしまった。
「それだけじゃない。魔女が従えてる連中も揃いも揃って化け物ばかりさ……イングランド軍は尻尾を巻いて逃げ帰ったが、俺達フランス国民は奴らに怯えながら逃げるしかない」
男はため息交じりに、諦めの籠った声でそう呟いた。
祖国を捨てて他国へ逃げる事も出来ない彼らは、恐怖に怯えながら逃げ惑うしかないのだと。
「お前達、何者かは知らないが……さっさと逃げた方が良いぞ。魔女の軍勢は、情け容赦なんて言葉とは無縁だからな……」
そう言い残し、男は兵士達を連れて街の奥へと消えていく。
楓達はその疲れ果てた背中姿を見送りながら、手に入れた情報を整理する。
「すでに処刑されたジャンヌ・ダルクが復活し、フランス全土に殺戮の嵐を巻き起こしている……特異点化した理由は、その復活したジャンヌ・ダルクが関係している事に間違いないでしょうね」
「だよね……とりあえず、そのジャンヌを探すって事でいいのかな？
なんか、すっごいおっかない感じだけど」
「ええ。ですが、その前に霊脈の確保を……」
楓とマシュの会話に混じる事無く、アストルフォは腕を組み、考え込んでいるかのように唸る。
さっきの話にどうにも納得いっていませんと、その顔に書いていた。
「アストルフォ？　どうしたの？」
「いや……な～んか、納得いかないって言うか？　あのジャンヌがそういう事するのかなぁ……って」
「？　えっと、アストルフォさんはジャンヌ・ダルクをご存知なのです

か？」
どう考えても、二人が活躍した年代や国が合わない。
故にアストルフォがジャンヌ・ダルクを知っている訳がないのだが、それは次の一言であっさりと覆される。
「うん。前に別のマスターに召喚された時、色々あって一緒に戦ったし」
「『……はい!?』」
通信機越しに会話を聞いていたロマニも、思わずツッコミを入れる程の一言であった。
本来、あり得ざる言葉が飛び出してきたのだから当然である。
単純に驚いただけの楓、マシュとは違い、ロマニのそれは多大な疑問を抱えた突っ込みなのだ。
『いやいやいや!? ちょっと待ってくれ！ サーヴァントっていうのは、過去に召喚された際の記憶を持ちこせないんじゃなかったのかい!?』
「う～ん……そりゃそうだけど、ボクは覚えてるしなぁ……全部ハッキリとって訳じゃ無いけど」
『どういう事だ……？ 人理焼却、特異点発生の影響が英霊の座にも何かしら出てるって事か……？』
うんうんと唸るロマニの声。
楓には英霊の座というのもイマイチよく解らないが、今いるアストルフォが昔の記憶を……過去に召喚された時の覚えているのはおかしいという事は理解した。
かつてのマスターや、仲間の事を覚えていないというのがどうも納得いかないというか、楓の感覚では受け入れづらい事だ。
「えっと……前のマスターとかの事、覚えてるのってそんなにおかしい事なの？」
『サーヴァントっていうのは、厳密に言えばその英霊本人じゃない。詳しい説明は省くけど、限りなく本人に近い分身……みたいなものだと思ってくれ』
「う～ん……つまり、英霊の座？ そこにいる本人の分身が来てて

……？」
「すっごい大雑把に言えば、今のボクは座にいる本体が見てる夢みたいなものって事さ」
最も、ボクはボクだし、座にいる本体の分身だとも思ってないけどねとアストルフォは付け加える。
夢という例えで、楓もようやく理解した。目から覚めれば、夢の内容ははっきりと覚えていないものだから。
つまり、契約が切れればアストルフォは自分の事を忘れてしまうのかもしれない。そう思うと、なんともいえない寂しい気持ちになる。
「そっか……なんか、寂しいね」
「マスターが気にする事じゃないよ。何時になるか解らない事を考えるより、今の事考えればいいさ」
屈託のない笑顔で言い切るアストルフォを見て、楓も自然と笑みがこぼれる。
付き合いはまだまだ短いが、この表裏の無い性格と言動は心地よい。良い意味で遠慮をしなくてよい付き合いになれそうだなと、そんな気がするのだ。
マシュとは違う形で、良い旅のパートナーになってくれそうだと思える。
「……とにかく、アストルフォさんはジャンヌ・ダルクがこのような惨状を引き起こしている。という事が信じられない……という事ですね？」
「だね。アイツがこんな事するなんて……」
『でも、さっきの兵士達は確かにジャンヌ・ダルクの仕業と言っていた……。どういう事だ？』
アストルフォの証言で、一気に訳が分からなくなった。
何らかの理由でジャンヌ・ダルクがそうなってしまったのか、名を語る何者かがやっているのか、どちらにせよ判断材料が足りない。
「まっ、どうするにしたってジャンヌにあってみないと解んないって事だよね」
「そういう事になる、のかな？　とりあえず、まずは霊脈探すところか

ら……でいいよね？」
「はい、それで問題ないかと」
この街に霊脈はない事は、ついさっきマシュが確認したそうだ。
ならば、さっさと移動した方が良いのかもしれない。ここに居ても何かが変わるわけでもなく、あの兵士達や共にいる人々に対して何かできる事があるわけでもないのだから。
正直な話、何かしてあげたいという気持ちが無いわけではないのだが、そんな物まで背負えないというのが楓の本音でもあった。
「……それじゃ、早速」
『ちょっと待った！　物凄い速度でそこに向かってきている反応がある！』
行こうか、と紡ごうとした言葉は通信機から聞こえたロマニの声にかき消された。
『数はざっと数えて五十はいるぞ！　うち二つは特に強い……サーヴァントの反応だ！』
「っ!?　サーヴァントって……」
『明らかに友好的な雰囲気じゃ無さそうだし、この数の差は不味い。すぐにその街から撤退するんだ！　いくらなんでも、数で勝る敵との戦いは許可できない！』
撤退。その判断自体は楓にはとても正しく、それでいて魅力的に聞こえていた。
恐らく敵であろう五十を数える集団。更にサーヴァントまでいるのを相手にするなど、とてもではないが御免こうむりたい。
どう考えたって圧倒的に不利。サーヴァントがいないならまだ何とかなるかもしれないが、マシュとアストルフォだけで相手をするのは無謀だと楓でも理解できた。
「撤退って……ここにいる人達は!?」
アストルフォの声にハッとなり、街の奥にいる人々へと目を向ける。
彼らも高台にいた見張りが集団の接近に気づいたのか、悲鳴やら怒声やらが響き渡って迎撃するのか逃げるのかの相談、というか半ば罵

りあいが始まっていた。
その反応からして、今迫っている集団が彼らの言っていた魔女の軍勢なのだろう。混乱している一同を、兵士達がどうにかまとめ上げようと必死に声をあげている。
「ボクは嫌だぞ！　あの人達を見捨てて逃げるなんて！」
「マスター……っ！」
マシュも言葉にこそしないが、目がアストルフォと同意見であると訴えている。
だが、ロマニの言う事も最もであり、不必要に危険な目に合いたくはない。だが、ここで兵士達や逃げ延びてきた他の街の住民達を見捨てて自分達だけ逃げるというのも、正直嫌な気分ではある。
「……っ！　あー、もぉ！」
本音としては逃げたいし、自分達とは無関係と言ってもいい人達とはいえ、見捨ててしまうのも嫌と最悪の状況。
ここで逃げればマシュやアストルフォからどんな目で見られるか、残っていればどんな恐ろしい目に合うか、そんな事ばかり頭に浮かぶ。
それでも、この場で決断しなければならないのは自分なのだと、何度も楓は頭の中で自分に言い聞かせて。
「……わかった。相手の出方次第だけど……戦おう」
「はい！」
「さっすがマスター！　話が分かる！」
「でも、街の人達が逃げる時間を稼ぐだけ！　あの人達が皆逃げるか、本当に不味いって私が思ったら逃げるから、それでいいよね？」
楓の言葉に二騎のサーヴァントは力強く頷く。
恐怖で震える足をなんとか黙らせ、楓もそれに頷く事で返した。

街に悲鳴が木霊するまで、そう時間はかからなかった。
空から来るは紅い鱗に身を包んだ数匹の竜。フランスの各地の街を、口から吐き出す灼熱の吐息で焼き尽くしたワイバーン達。

地上より迫りくるは竜牙兵。兵士達でもまだなんとかなる程度の、いわば雑兵ではあるがワイバーンと共に来られれば一気に脅威度は跳ね上がる。
ワイバーンに気を取られた隙に竜牙兵の剣で切り捨てられ、竜牙兵を倒した直後にワイバーンの尾に叩き潰され、みるみる数を減らしていく兵士達。
「こ、このままでは全滅だ……っ！」
「う、うろたえるな！　なんとか民達だけでも……っ！」
「その通り！　あきらめちゃ駄目だ！」
空を駆ける風がワイバーンを撃墜し、地上へと勢いよく落下して竜牙兵を吹き飛ばす。
槍を振り回し、まとめて数体の敵影を叩きのめすはヒポグリフに跨ったアストルフォだ。
「ここはボクが引き受けた！　君達は早く逃げろ！　守ってきた人達を死なせるな！」
「お、お前は……っ！　すまん、助かった！」
突然見た事も無い生物に跨って現れたアストルフォに、一瞬呆気にとられたようだがすぐに一礼して兵士達は撤退する。
共に逃げ延びた市民達を守らねばならないと、国や仕えるべき王を失っても譲れぬ最後の一線。それを成し遂げるための撤退である。
「という訳で！」
それを追おうとする竜牙兵を吹き飛ばし、ワイバーンの前に立ちはだかるようにヒポグリフを飛翔させてアストルフォは槍を構える。
「ここから先は通行止めにさせてもらうよ！」
「ほぉ……中々に骨のある奴がいると思えば、キサマであったか」
そんなアストルフォの前に、一匹のワイバーンがゆっくりと姿を見せる。
否、正確にはワイバーンの背に立つ黒コートの紳士が。その顔を見やり、アストルフォは一瞬驚愕に目を見開いて、すぐに表情を険しい物へと変えた。
「まさか、このような場所で再会するとは思わなんだぞ。ライダーよ」

「それはこっちもだよ、ランサー。っていうか、ボクの事覚えてたんだ？」
ランサーと呼ばれた男はニヤリを口元を歪める。
かつて、とある戦いで共にサーヴァントとして召喚され、同じ陣営の総大将と配下として共に戦った者同士。
互いに予想打にしない再会であった。
「成程。キサマも覚えていたか……奇妙な偶然もあるものだな」
「全く持って同感。ところで、キミってこんな無意味な殺戮するような人だったっけ？　ボクの記憶だと、怖いけど賢くて、信頼できそうな王様だったんだけどなー？」
「ほう？　そのように思っていてくれたのか。ならば、失望させてしまった事を詫びよう」
そう言いながら、ランサーは手に構える長槍をアストルフォへ向ける。
「だが、今の余は一介のサーヴァントであり、血に飢えし狂った鬼でな。かつて、ルーマニアで黒の陣営を率いたヴラド三世ではないと知るがよい」
「ふーん。まぁ、どっちにしろ……王様だった頃のお前だとは、最初から思ってないさ！」
ヒポグリフを駆けさせ、一気に間合いを詰め、互いの槍がぶつかり合う。
甲高い金属音が空気を震わせ、そのままの体勢で睨み合う。
「理由はどうあれ、こんな事をするような奴を捨て置けるか！　ヴラド三世、その首貰い受ける！」
「やってみせよ、アストルフォ。キサマのその勇猛さ、余は嫌いでは無いぞ」
「今のお前に褒められても、全然嬉しくないね！」
互いに相手を弾き、空中で睨み合う。
かつて、共に戦った仲間同士の空中戦が開始されたのと同時に、地上では楓とマシュが一騎のサーヴァントと対峙していた。
竜牙兵を蹴散らしていた際、姿を見せた女。一目で解る異様な雰囲

気と圧倒的な力の持ち主だった。
（でも、冬木のセイバーに比べたら……）
明らかに劣ると、楓は感じていた。
あのセイバーに比べれば大した事は無いのであれば、勝つ事は厳しくても耐え抜く程度はなんとかなるのではないかと。
「マスター、私の前には絶対に出ないで。あのサーヴァント……」
「うん。セイバーに比べれば大した事無いような……」
「いえ……直感ですが、冬木のセイバーとは違う形で……いえ、下手をすればあちらより厄介かも」
「えっ!?　嘘でしょ!?」
マシュの弱気な発言に、思わず驚く楓。
それが可笑しいのか、女は口元を抑えて笑いを堪えていた。
「あらあら……随分と素人なマスターなのね。なら、今回を丁度良い勉強の機会と捉えなさいな」
女の、仮面に隠れた目が、妖しく光る。
それと共に、女の足元に広がる血のように赤い液体。そこから這い出してくるは鎖や鞭等の様々な、そういう知識に疎い者でも一目で用途を理解するに足る様々な器具。
「授業料として、そうね」
女は、マシュの体を……頭からつま先まで、じっくりと舐めとるように見定めて、口元を歪めた。
丁度よい。アレは好みだ。アレの奥にいるマスターは、どちらも自分にとって最高の相手だと確信する。
「とても良い声で悲鳴（な）いてくれそうな、そこのサーヴァントをいただくわ」
杖を液体の中に沈め、代わりに鞭を手に取って、空気を引き裂き、地面に打ち据える。
何かが破裂したような音が響き、仮面の女はサディスティックに嗤う。
「今から始まるのは戦いではなく……拷問よ」

第八話　邪竜百年戦争　オルレアン　3

空気を、大地を引き裂く耳障りな破裂音が、街に響く。
仮面の女が手にした鞭は、まるで生きているかのような軌道を描いてマシュの鎧を、柔肌を打ち据えんと唸りをあげる。
迫る鞭を盾で防ぎ、身体を捻って避けながら、マシュは女との間合いを詰める。距離をとっての戦いでは彼女に反撃の手段はなく、一方的に嬲られるだけだ。
「ハァァッ！」
自身の間合いまで踏み込めたと同時に、盾を攻撃に転用。重量に任せて叩き潰しにかかるそれに対し、女は慌てた様子もなく、足元に広がる血だまりの中へと体を沈める事で回避。
「マシュ！　危ない！」
女の姿が血だまりの中に消えた事で、動きが止まりかけていたマシュは楓の声で我に返りその場の飛び退く。
その一瞬後、彼女が立っていた場所から無数の鎖が飛び出してその場で絡み合い、血に飢えた獣の如き金属音を奏でながら血だまりの中に沈んでいく。
楓が気づかなければどうなっていたか。ゾッとする彼女へ向け、血だまりの中から放たれるのは無数の針。
「くっ！」
針を盾で防ぎながら着地。視界の隅で楓へと飛んでいく針を確認すれば、すぐ様に彼女の前へと移動してそれを防ぐ。
「ありがとうございます、マスター」
「私も、運良く気付けただけだし……」
「……気に喰わないわね」
僅かに怒りのこもった声と共に針の放出は止まり、入れ替わりに女が血だまりの中から姿を現す。
その手に握られているのは、最初に手にしていた杖だ。
「初々しい戦い方のわりに、動きはまるで熟練された戦士のよう……ホント、気に入らないわ」

だが、その声色は次第に歓喜の色に染まっていく。
まるで、これから始まる事への楽しみを抑えきれないかのように。
僅かに頬を高揚させ、堪え切れない笑いを漏らして。
「でも、いつまで持つかしら？」
無造作に杖を頭上に掲げ、はめ込まれた宝石が怪しく光を放つ。
直後、自分達を覆う影に気づいたマシュと楓が顔をあげると、そこに開いていたのは闇のように深く、暗い穴。
そして、そこから落下してくる巨大な物体であった。
「くっ！」
咄嗟に楓を抱き抱えて飛び退き、マシュは落下してきた物体を回避。
それは重たい激突音を響かせて地面に激突したかと思えば、そのまま地面を滑るかのように二人へと猛スピードで接近してくるではないか。
楓を降ろす暇もなく、迫りくるそれを避ける事を強いられつつも、マシュはそれの形状をつぶさに観察する。
（あれは……？）
恐らく鋼鉄製であろう女性を模った人形。２メートル程はあろうそれは、女の杖に操られて自在に地面を滑り、時には血だまりや空に開かれる穴より飛び出して少女達に襲い掛かる。
その人形に、マシュは見覚えがあった。実際に見るのは初めてだが、雑学の勉強も兼ねて読んでいた図書室の本に載っていたとある用途の器具に瓜二つ。
「鉄の処女（アイアン・メイデン）……貴女は、ハンガリーの血の伯爵夫人ですね」
「……流石に、これは有名すぎたかしら？」
マシュの言葉に女は静かに微笑み、鉄の処女を自身の傍へと引き寄せる。
「え……血の、伯爵夫人……？」
「はい。１６世紀に実在した人物です……史上に残る連続殺人鬼にして、吸血鬼伝説のモデルともなった貴族」
「その通り。よく勉強してるじゃない……でも、ちょっと惜しいわね

？」
仮面の奥に光る眼が妖しく光り、足元に広がる血だまりが波打つ。
まるで、彼女という存在の象徴であるかのように鉄の処女は宙へと浮かび、能面の如き頭部が二人を見下ろす。
「我が真名(な)はカーミラ！　血を求める怪物となり果てた者……そして」
カーミラの口が大きく歪む。
すでに自身の勝利は確定したと言わんばかりの、愉悦に歪んだ笑み。
「これから、貴女達の血と悲鳴を堪能する者よ！」
彼女の足元、波打つ血だまりから飛び出す無数の鎖。
真っ直ぐに楓を狙うそれ等を、マシュは盾で弾き飛ばし、直後に突貫してくる鉄の処女もどうにか受け止める。
盾との激突音で空気が震え、両腕に感じる重量に表情を歪めるも耐え抜いて弾き返すが、どうしても一瞬動きは停止してしまう。
その一瞬のうちに、マシュの懐へと飛び込んでいたカーミラの爪が振るわれる。
「うぁっ!?」
露出している太腿を引き裂かれ、マシュは苦悶の表情を浮かべる。
足を裂かれ、思わず片膝をついてしまった彼女の足元へと広がる血だまり、吐き出される鎖がマシュの体を一瞬で絡め取っていく。
「マシュ!?」
「邪魔よ」
マシュへと駆け寄ろうとした楓を、カーミラは手に持つ杖で殴りつけ、彼女は小さな悲鳴と共に地面を転がる。
「あうっ！」
「マスター！　ぐっ、ぅあ、ぁあ！」
マシュもまた、楓へと駆け寄ろうとするも己を絡め取った鎖に阻まれ、そのまま地面に引き倒されてしまう。
仰向けとなり、四肢を鎖で封じられたマシュを見下ろすカーミラ。
その口元には冷酷な笑みを浮かべ、仮面の奥に光る眼は、これから行

う蹂躙へと歓喜に満ちていた。
「さぁて、まずは宣言通り……」
杖をマシュの喉元へと突きつけ、ゆっくりと彼女の胸元、臍の上を撫でるように滑らせていく。
「あなたの悲鳴、存分に聞かせてもらおうかしら」
肩越しに、自身の後方で体を起こしている楓へと視線を送る。
マシュへ向けられた杖の切っ先に、妖しくも攻撃的な光を纏った魔力が収束し、今にも彼女目掛けて放たれようとする様を、見せつけるように。
「そこで見ていなさいな。貴女の可愛いサーヴァントが、無様に鳴き叫ぶところをね」
「っ！　やめーーーっ！」
そして、マシュの悲鳴が廃墟の街へ響き渡った。

空中を駆ける幻馬と飛龍。
相棒の背に跨り、槍を携えたアストルフォは背後より迫る飛龍。その背に立つヴラド三世を肩越しに睨みつける。
「どうしたライダー？　逃げているだけでは、余の首は取れんぞ」
ワイバーンの巨体からは想像もできない速度は、アストルフォのヒポグリフをほんの僅かにではあるが上回っていた。
ヴラド三世が騎乗する事により、その魔力を帯びて強化されているのか。それとも特に優れた個体を彼の馬替わりにしているのか。言われている通り、逃げているだけではいずれやられてしまう。
だが、とアストルフォの表情には余裕の色があった。
「そっちこそ、地上ならともかく……空中でボクに勝てると思うなよ！」
直後、アストルフォと幻馬の姿がその場から消え失せた。
突然の事にヴラド三世は目を見開き、感じ取った悪寒に従ってワイバーンの背から飛び降りるのと同時に、アストルフォの槍がワイバーンの首を刺し貫いた。

「ほう……そういえば、それがキサマの宝具であったな」
別の飛竜へ飛び移ったヴラド三世は、素直にアストルフォの、その宝具の力へ称賛を送る。
別次元への跳躍。それこそがアストルフォの宝具たるヒポグリフの真骨頂。僅か一瞬の事ではあるが、あらゆる干渉を受け付けない絶対回避とも呼べるそれは敵対者にとって脅威足りえる。
少なくとも、ヴラド三世には別次元への干渉手段は無い。加えて、騎乗しての戦闘となればライダーのクラスたるアストルフォの有利であると理解するのもそう時間はかからなかった。
「でぇやああっ！」
ワイバーンに比べて小回りの利くヒポグリフの機動性は、空中戦に置いて優位性となる。
次元跳躍もあって、数の差も――指示通りに動くしか出来ないワイバーンでは――大した脅威とならないだろう。
ヴラド三世が飛び移った二匹目の飛竜も槍で貫かれ、不意を突くように襲い掛かった別のワイバーンも次元跳躍を用いた回避であっさりと返り討ちにされる。
「ふむ……騎乗スキルの無い身で、ライダー相手に騎乗戦を挑むのは愚の骨頂であったか」
さっさと地上に降りて迎え撃つべきだったかと考えながらも、ヴラド三世の顔に焦りの色はない。
あれよあれよという間に、彼が引き連れていたワイバーンの群れは半数にまで数を減らされ、今自身が足場としている個体も、自身諸共貫かんとする槍で間もなく倒されるであろうというのに。
「獲ったぞ、ランサー！」
槍が心臓に突き立てられる直前、ヴラド三世の体は霧散した。
「なっ!?」
槍はワイバーンのみを貫き、地面へと落下させる。
しかし、ヴラド三世であった黒い霧はその場に胎動し、意思を持った生物の如き動きでアストルフォのヒポグリフの体を包み込む。
「ぐっ、ぁ、ぁあああああああああああっ!?」

そして、霧が牙をむいた。
アストルフォの全身に絡みつくかのように纏わりついた霧の中、ヒポグリフ諸共にその身を引き裂いていく。
「生憎だったな、ライダー」
霧の中で響くのは、ヴラド三世の声。
四方八方、全方位から囁くように、声は告げる。
「今回の召喚、クラスこそランサーではあるが……マスターの手で狂化スキルを付与されていてな。忌々しい事に、それが我が忌み名にとって最高の相性だったようだ」
声はどこか自虐的でありながら高揚しており、それでいて諦めにも似た声だった。
「いわばバーサク・ランサー……ランサーでありながらバーサーカーである。故に、キサマはある意味幸運かもしれんな。鮮血の伝承（レジェンド・オブ・ドラキュリア）を常時発動させている余と戦えるのだから」
世界に名を轟かせる怪物。ヴラド三世の名を血に落とした忌み名、吸血鬼としてのイメージを体現する宝具。
通常、決して発動させる事も無いその伝説が、一人のサーヴァントを凄惨な地獄へと叩き落とした。
「がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!?」

「うあぁぁっ!?」
眼前に見えるマシュの顔が苦痛に歪む。
鎧は砕け、インナーも所々が破けた傷だらけの体を四つん這いのような体勢にして、その背中に何度も振り下ろされる鞭や鎖による蹂躙から楓を庇うために。
「中々我慢強いわね。辛くなったら、いつでも逃げて良いわよ？　あなたのマスターがいたぶられるだけですものね？」
「くっ……ぅ……ぁぁぁっ！」
肩越しにカーミラを睨みつけるも、即座に叩き付けられる鎖が彼女に僅かな抵抗も許さない。

「マシュ……やめ……もう、やめ、て……っ！」
眼前で行われる蹂躙。カーミラの気まぐれから始まった彼女の為だけの娯楽。
マシュを嬲っている最中、ふとした思い付きで楓へと対象を移しての拷問を行おうとした際、マシュが自らの背を盾にしたのだ。
カーミラは一瞬驚きこそしたものの、笑いが込み上げてくるほどに健気なマシュの姿勢と、文字通り目の前で自分のせいで痛めつけられるサーヴァントを見せつけられる楓の絶望に染まる表情。
それが、最高に楽しい物に思えたからだ。
「だい……じょうぶ……です……ま、だ……全然……へい、き……です、から……」
楓を心配させまいと浮かべる笑みも、彼女から平常心を奪って罪悪感を募らせるスパイスだ。
最早、令呪を使って反撃を試みようという正常な判断すら出来なくさせている事を、果たして気付いているのか。
言葉には出すまい。まだ、その時ではない。
（サーヴァントの意識がなくなるまで嬲った後、マスターにその事を伝えたらどんな顔をするかしら？　それとも、適当に引き剥がして目の前でマスターの方を痛めつけながら、サーヴァントにその事を告げた方が楽しいかしら？）
生前ですら、ここまで楽しいと感じた拷問はそうは無かった。
お互いを心配している行為そのものが、相手をもっと傷つけている様というのは、極上のワインにも等しい美味だと死後に気づかされるなんて。
「貴女達、ホントに良いわ。出来る事なら、私の城に連れて帰りたいぐらいよ」
そう言いながら、何度も振り下ろす鞭や鎖がマシュを容赦なく痛めつけ、彼女の意識を、命を秒単位で削っていく。
ヒールでその背に刻んだ傷跡を抉り、苦しむ彼女の様に悲鳴をあげる楓。ここまでサーヴァントに感情移入出来るマスターというのも珍しい。

二人の見目麗しい絆を嘲笑いながら、マシュの背中……最も深く刻んだ傷跡をヒールで踏み、抉るように圧し掛かる。
「うぐぁあああっ!?　あ……ぁ、ぁぁ……ぁ……」
何かが切れるような感覚があった。
血管や皮膚などではない。ただ、こうして楓を守る盾になる為に必要だった何かが、プツリと音を立てて切れる音がはっきりと。
（せん……ぱ、い……）
それがトドメになった。か細くなっていく悲鳴と共に、彼女の体から力が抜ける。
重力に従って崩れ落ちながらも、楓の身を守るように覆いかぶさるそれは、何があっても彼女を守りぬくという決意の表れだろうか。
「マ、シュ……？　ねぇ……マシュ？　マシュってば……返事、して……」
だが、楓にとっては更なる恐怖へと突き落とされるに等しい行為だった。
揺さぶり、呼びかけても何の反応も示さない体。マシュの背中から流れてくる生暖かい、真っ赤な血が楓の体を濡らしていく。
「どうしたの……？　ねぇ……返事、してよ……お願いだから……ねぇ……？」
何度も揺さぶり、自身の体から崩れ落ちたマシュの姿を見て、楓は絶句した。
傷が無い箇所を探す方が難しいとばかりに痛めつけられ、光の消えた虚ろな目はどこを見ているのか解らない。半開きになった口から微かに漏れる呼吸音と、弱弱しく上下する胸元が、辛うじて彼女の命が消えていない事を示しているが、その凄惨な有様は思わず目を背けたくなる。
「あら、もうお終い？　思ってたより呆気ないわね」
幕切れがあっさりしすぎだった、つまらないとばかりに吐き捨てるカーミラの声も届かない。
体を起こした楓はマシュを抱き上げ、必死に呼びかけながら、脳内に浮かぶ嫌な予感を否定する。

（死んじゃう……マシュが死んじゃう！　やだ、そんなの……そんなの！）
目の前で力無く倒れるマシュに意識を向けていた楓は、背後で聞こえた何かか落下する音に対しても、僅かに反応が遅れた。
否、振り向いて確認する事を本能的に拒絶したのかもしれない。そこに落ちてきた物に対して、嫌な予感がしたから。
「……あ……」
恐る恐る振り返るとそこには、全身を引き裂かれたような無数の傷を負ったアストルフォが倒れていた。
やはり虚ろな目で、それでも楓とマシュの姿を認めたのか、残された力を振り絞って右手を伸ばし……楓がそれを取る直前に力尽きる。
消滅していない事が不思議なほどに、文字通り全身を引き裂かれた惨い姿。
「ぁ……ぁあ……っ!?」
「その者はよくやった。だが、相手が悪かったな」
カーミラとは反対側。丁度、楓を挟むような形で声と共に黒い霧が地上へ降り立ち、人型へ……ヴラド三世の姿へと変わっていく。
「己のマスターと仲間の危機を察し、我が宝具で全身を喰らわれながらもここまで辿り着いた勇者だ。せめてもの弔いとして、称えてやる事だ」
槍の切っ先を楓達へ向けながら、ヴラド三世は歩み寄る。
「せめてもの情けである。マスターであるキサマを苦しませず殺してやろう」
そうすれば、そこに倒れ伏した二人もこれ以上苦しむ事は無い。
そう言われたような気がした。
「令呪によるサポートも行わぬ不出来なマスターを身を挺して護ったのだ。これ以上苦しませるのは、いくら狂気落ちた身であろうとも気が引ける」
「お待ちなさい。この子は私の獲物……横取りしないでもらえないかしら？」
「知らんよ。言ったであろう？　これは不出来なマスターの為に命を

としたサーヴァント達への情けであると」
令呪、という言葉に楓は自身の右手を見やる。
そこに刻まれた三つの絶対命令権。これを使えばマシュやアストルフォを救えたかもしれない。
だというのに、自分は完全にこれの存在を忘れていた。目の前で苦しむマシュに、ただ泣き叫んでいただけだ。
（……私の、せい……だ……）
つまり、マシュがこうなったのは自分のせいだ。
アストルフォに至っては、令呪と同じで完全に頭から消えていた。
（私……最低だ……二人とも……必死に頑張って……なのに……わた、し……は……）
なんて事だろう。自分のような最低最悪の……そんな評価すら生温いマスターのせいで二人は必要以上の苦痛の中にいたのだ。
言葉をどう取り繕おうと完全に自分の責任。
「わたしのせいだ……わたしの、せいだ……わた、しの……」
『楓ちゃん！　敵サーヴァント二騎は口論に夢中で君に気づいていない！　すぐにそこから逃げるんだ！　マシュ達は令呪で別の場所に移動するよう命令すれば……楓ちゃん！』
カーミラとヴラドの口論も、通信機から聞こえてくるロマニの声も聞こえない。
今の楓を支配するのは、マシュとアストルフォへの罪悪感と、二人をこんな無残な姿を晒す羽目に陥れてしまった自らへの嫌悪感のみなのだから。
「……なさい……ごめんなさい……私の、せいで……わたし……の……」
傍から見れば壊れた人形のように、楓は二人への謝罪を繰り返す。
その姿からは、最早己の生存すら諦めてしまったのだという無気力さしか感じない。
『しっかりするんだ！　君がそこで死んだら、マシュもアストルフォもそれこそ無駄死にだぞ！』
逃げさえすれば、二人の治療もまだ可能なのだと必死に訴えてくる

ロマニ。
だが、そんな説得も今の楓には届かなかった。
折れてしまったのだ。彼女の心は、完全に。
最早、助ける手立ても助かる道も無い。何より本人にその気が無くなってしまった。
通信機の向こう側。カルデア管制室の面々にも広がる絶望という感情。処刑執行人たるヴラド三世とカーミラの口論は終わる気配こそないが、それでもいつまでも続くものではない。
どうあがいても、この状況の打破は不可能なのだ。

「そこまでです！」

都合の良い、第三者の登場という奇跡が起きない限り。
突風のような衝撃が立て続けに起こり、カーミラとヴラド三世が弾き飛ばされる。
何かが楓達の前に止まり、突風の正体たる一人の少女が楓へと呼びかける。
「無事ですか⁉　動けるなら立ってください。この場を離れます！」
だが、そんな救世主の言葉にすら楓は反応を示さなかった。
ギリッと、歯ぎしりする音が聞こえたかと思えば、楓の頬に走る焼けるような熱い痛み。
「あ……」
「しっかりなさい！　いつまで呆けているつもりです！」
目の前いる、自分の胸ぐらをつかんでいる金髪の少女に頬を叩かれたのだとようやく認識する。
「そのままで呆けていれば、そこの二人が立ち上がるとでも⁉　甘えてないで、今やらねばならぬ事をなしなさい！」
そのまま乱暴に、少女の背後に停まっていた煌びやかな馬車に放り込まれる。
続けざまにマシュとアストルフォも運び込まれる。馬車の外では激しい金属音が響き、何者かが戦っているようだった。

「セイバー！　こちらは終わりました！　あなたも早く！」
「すまない……そろそろ限界だったところだ……っ！」
「なら、後は僕の仕事だね。死神のための葬送曲（レクイエム・フォー・デス）！」
　再び走る激しい突風に馬車が揺れる。
　そうして、金髪の少女とは違う別の少女の声と共に、馬車は走り出した。
　荷台の外に先ほどの金髪の少女をはじめとした声の主達の気配を感じつつ、楓は荷台に寝かされるマシュとアストルフォの手をそれぞれ握る。
「ごめんね……二人とも……ごめんね……っ！」
　大粒の涙を流しながら、楓は二人への謝罪を繰り返し始める。
　何より許せないのは、こうして都合よく表れた第三者達に救出され、生き延びられたという事に対して安堵している自分。
　ああして直に叱咤されるまで、何もしようともしなかった自分自身の不甲斐無さだった。

第九話　邪竜百年戦争　オルレアン　4

「んっ……んぅ……ぅ……」
「マシュ……？」
　闇の底から浮上した意識に呼びかける声。閉じていた瞼を開くと、自分の顔を覗き込む涙目の少女がいた。
「……せん……ぱい……？」
「マシュ！」
　少女、楓はマシュを思わず抱き寄せる。
　戸惑う彼女を尻目に、確かに感じるマシュの体温、鼓動に、涙が止まらない。
「良かった……ホントに……良かったよ……っ！」
「あ、あの……先輩……？　一体、何が……？」
　寝起きの頭が覚醒していくと共に、最後の記憶を手繰り寄せる。
　カーミラとの戦い……というより、一方的に嬲られていただけだったが、それから楓を庇っていた最中に限界を迎え、意識を失ってしまったのだろう。
　相当酷くやられてしまったのは、楓の反応を見ればわかる。自分が寝かされているベットの周りには、カルデアから持ってきていた使い捨ての回復魔術が記録された巻物（スクロール）が転がっていた。
「……どうやら、心配をおかけしてしまったようですね。申し訳ありません」
「謝らなくていい……悪いのは、全部私だから……マシュは悪くないよ」
　力いっぱい抱きしめてくる楓の体は、微かに震えていた。
　もしかして、自分が死んでしまうのではないかとずっと怯えさせて、心配させてしまっていたのか。だとしたら、それは自分の不甲斐無さのせいだ。
　それでも、ここまで強く心配してくれていたという嬉しさが勝るのは不思議な感覚でもあった。
　これほど誰かに求められた経験は、今まで無かったから。

「……ありがとうございます、先輩」
自分の為に泣いてくれる人と出会えた。これほどの喜びは無いかもしれない。
自然と楓の背中に手を回し、自分からも彼女を抱きしめる。
「……オホン」
その直後、わざとらしい咳が聞こえてきた。
二人で咳の聞こえた方へ顔を向けると、扉すらついていない――もともとついていたのが壊れて使い物にならなくなっていた――部屋の入り口に、金髪の少女が立っていた。
青を基調とした気品を感じさせながらも、どこか親しみやすさを覚える雰囲気の少女だ。
「あ……えっと……何時から、そこに？」
「あなたが彼女を抱きしめたあたりからずっと、ですけど」
「……」
楓の問いに答えた少女の顔は、どこか悪戯っぽい表情に見えた。
対して、楓は顔を真っ赤にして、目尻に溜まっていた涙も引っ込み、マシュから離れて少女へと頭を下げる。
「……気づかなくて、ごめんなさい」
「いえいえ。私も二人の邪魔をしない方が良いかと思ったのですが……」
「あの……先輩？　こちらの方は……？」
「申し遅れました」
金髪の少女は一礼し、マシュへと微笑みを浮かべる。
「私はサーヴァント、ルーラー。真名をジャンヌ・ダルクと申します」

ジャンヌがこの地に召喚されたのは数日前。
自身が処刑されたほぼ直後の祖国に呼ばれるとは流石に思わず、戸惑っていたがそれ以上に驚いたのは国の有様だった。
空を見ればワイバーンが飛び回り、街や村は炎に焼かれている。そして、それを行っているのはサーヴァントと、英霊を配下に従え、祖

国へと復讐を開始した自分自身だった。
「では……もう一人のジャンヌさんが、この地にいると？」
「はい。直接対峙するまで、私も信じられなかったのですが……」
飛竜の群れ、数体のサーヴァントを引き連れた自分自身。
肌は死者のように白く、衣装は黒く染まってこそいたが確かに己の姿を見間違えるはずもない。
問答無用で襲い掛かられ、ジャンヌ自身も何らかの影響で弱体化していた事もあって窮地に立たされたが、辛くも逃走に成功したのだと。
「私は運が良かった。ルーラーとしての力の殆どを制限された状態で逃げ切れたのも、この地で頼りになる方々と出会たのも、きっと主のお導きでしょう」
自分と同じように、この地に召喚されたサーヴァント。
もう一人のジャンヌが召喚したサーヴァントではなく、何らかの理由でこの地に呼ばれた、マスターを持たないはぐれと言うべき存在と運よく出会う事が出来た。
それ以降、彼らと行動を共にして黒衣のジャンヌ・ダルクと彼女が率いる軍勢への反撃の機会を窺っていたのだ。
「それで、たまたま立ち寄った先で私達が襲われてたから助けてくれて……」
この廃屋と化した森の中の教会に身を潜めている、というのが現状であった。
「そうだったのですか……感謝します。私達だけでは、間違いなく全滅していたでしょうから……」
「いえ。こちらとしても、もう一人の私が召喚したというサーヴァント達の暴走を止めねばなりませんでしたし……」
つまり、ヴラド三世とカーミラのマスターはもう一人のジャンヌ・ダルク。
この特異点の原因であろう存在に相違ないと、マシュは結論付けた。
後で報告をすれば、ロマニ達もきっと同じ意見だろう。

「つまり、ジャンヌさん達と私達の戦うべき相手は同じ……という事でよろしいのでしょうか？」
「えぇ、そうなります」
「なら、協力しあえるかもしれません。ですよね、先輩」
楓は、答えなかった。
俯いて、何かに怯えるように体を震わせている。
「……先輩？」
「そ、そうだよね……戦わないと……駄目、なんだよね……」
「……話はとりあえず後にしましょう。楓は、あなた達が目を覚ますまでの二日間、一睡もせずに看病していたのですから」
「二日も、ですか!?　先輩、心配してくださるのは嬉しいですが無理はしないで休んでください！」
「……うん。ごめん……ちょっと、休むね」
マシュに促され、部屋を後にする楓。
その背中姿は、単なる疲労以外の何かが原因だと嫌でも気づかされる程に、小さく見えた。
「……ジャンヌさん、先輩に何かあったのですか？」
「……えぇ。今が、彼女にとっての試練の時という事かもしれません」
そう言いながら、ジャンヌが取り出したのはカルデアとの通信機。
マシュが個人的に持ち歩いていた物だ。
「あなた方の事情は、ドクター・ロマニから聞いています。詳しい話は、彼とした方が良いでしょう……」

適当に入った部屋の隅に腰を下ろし、膝を抱えて楓は俯く。
マシュは目を覚ました。アストルフォも、彼女より早くに目を覚ましている。
すぐに出立という事は無いだろうが、何時までもここに身を潜めるという事はすまい。そう遠く無く、ここを立つ事になるだろう。
（そうしたら……また戦いに、なるんだよね……）
この時代にレイシフトした時点で、戦いは避けられないのは解って

いた。
冬木で実際に経験したし、マシュとも約束したのだ。何があっても彼女の傍にいて、絶対に離れないと。
だが、それがどうしたというのか。ただ傍にいただけで、自分は彼女達に何もしてやれてはいない。
ここに来てからやった事といえば、目の前で嬲られるマシュに悲鳴をあげ、アストルフォや令呪の事を忘れるという、最低最悪の行為。
(……また、マシュがあんな目にあったら……アストルフォだって……今度は死んじゃうかもしれない……)
次に敵サーヴァントと、カーミラやヴラドとの戦いになれば今度こそ二人は助からないだろう。
目の前で徹底的にいたぶられ、苦しみながら死んでいく二人。そんな悪夢のような光景を嫌でも想像してしまう。
「っ!」
全身が恐怖で震える。
つまるところ、自分はマスターという物を全く理解していなかったんだと楓は己の愚かさを恨む。
マスターになるという事は、自分に従ってくれるサーヴァントの命を預かるという事。　マシュやアストルフォは、自分の指示次第でその生死が決まるといっても良いのだと。
(私の……せいで……二人が……マシュが、死んだら……)
たった二人。たった二つの命が自分のせいで消えるかもしれないと思うだけで、全身を駆け抜ける恐怖が止まらない。
こんな有様でよくもまぁ、全人類の未来を背負う事を引き受けられたものだ。二人の命を背負う事にすら恐怖を覚えるのに、顔も名前も知らない人々の命まで背負うなど愚かとしか言いようが無い。
状況的に強制されたも同然だった?
それは単なる言い訳。引き受けたのは自分自身の責任じゃないか。
そして、マシュとアストルフォが死ねば自分も死ぬ。
全人類が滅亡し、未来が燃え尽きた今、特異点修復を成さねば遠くない未来にてやはり自分は死ぬ。

ここで立ち止まっても、進んでも、どう転んだって死ぬ。
何よりも、それが怖くて怖くてたまらなかった。
「私……最低だ……ホントに……最低だ……っ！」
結局のところ、自分はあの二人よりも自分自身の命が大切なんだ。
自分には人類どころか、先輩と慕ってくれるマシュや、体を張って戦ってくれているアストルフォの命を背負う資格も、ありはしないのだ。
冬木でマシュに気を使っていたのも、どこかで状況を軽くとらえていただけだったのか。
マシュと一緒に、どんな恐怖にだって耐えると誓ったのは単なる格好つけでしかなかったのだと自己嫌悪の嵐が楓を襲う。
「フォウ……キューゥ」
そんな彼女を心配してか、足元にすり寄ってくるフォウの存在すら楓は気づかなかった。

ロマニとの通信を終え、マシュは楓の姿を探して教会の中を歩く。
『楓ちゃん、酷く自分を責めてたよ……二人がこうなったのは自分のせいだって。見てて気の毒なほどにさ』
「今、彼女の心は折れています。恐らく、戦いに対する……いえ、明確に目の前に突き付けられた死への恐怖の前に」
通信の際、ロマニとジャンヌが口にした言葉を思い出す。
楓を守ろうとする一心で、文字通りこの身を盾にしたが、それが逆に彼女を追いつめてしまったのか。
結局最後まで守りきる事も叶わず、全滅一歩手前にまで陥ったが故に、彼女を不必要に苦しめてしまったのか。
（私が、もっとしっかりしないといけなかったのに！）
己の中に渦巻く自己嫌悪に苛立ちを覚えながらも、楓の姿を探して歩く。

彼女に対して何ができるか解らないが、とにかく傍にいたいと自身の内側から湧き上がる衝動に任せて教会内を探し回り……。
「……あれは？」
教会の外、崩れ落ちた門を背にした銀髪のサーヴァントと親し気に言葉を交わすアストルフォの姿を見かけた。
腰まで届く銀髪、胸元が大きく開いた鎧に身を包んだ大柄の男性。見た目の印象だけでいえば、セイバーやランサー……騎士の類のサーヴァントだろうか。
アストルフォもすぐにこちらに気づき、大きく手を振って駆け寄ってきた。
「やっほー、マシュ。目が覚めたんだ」
「はい。つい先ほど……アストルフォさん、あちらの方は？」
「うん、紹介するよ。ジャンヌにはもう会った、よね？　彼は彼女達と一緒にボク達を助けてくれた」
アストルフォの紹介が終わるころ、丁度良いタイミングで男性もこちらへと歩いてきた。
「セイバーのサーヴァント。真名はジークフリートだ。よろしく頼む」
「ジークフリート……!?　ニーベルンゲンの歌の、竜殺しの英雄ですか!?」
「一応、後世ではそう言われているようだな。あまり、その自覚は無いのだが……」
ジャンヌと共に、自分達を救ってくれたはぐれサーヴァントの一騎。
それが、数多の冒険を重ねてついには邪竜を撃ち滅ぼした大英雄ともいえる騎士だとは思いもしなかったと、マシュは驚きに目を見開く。
「ライダーとは、以前召喚された聖杯戦争で縁があってな。思わぬ再会を喜び合っていたところだ」
「ジャンヌもいるし、敵のランサーも顔見知りだし……もしかして、他にもあの時呼ばれてたサーヴァントがいたりして……」

こうも連続で顔見知りと出会うとは思わず、アストルフォは冗談交じりに口にする。
「ところで、マシュは何してるの？　マスターと一緒じゃなかったんだ？」
「はい。実は、先輩を探してまして……見かけませんでしたか？」
「いや、こっちには来てないよ。出入り口もここ一つだけ……だよね？」
アストルフォの問いに、ジークフリートも頷いて肯定する。
「あぁ、俺達が把握しているかぎりは……だが」
「そうですか……ありがとうございます」
二人に一礼し、マシュは教会の奥へと足を進める。
外へ出ていないなら、アストルフォの言う通り中にいるのだろう。もしかしたら、ジークフリートの言うような把握していない出入り口があり、外に出てしまったのか。
そう思うといてもたってもいられず、自然と駆け足になる。
今、楓を一人にしては駄目な気がする。そんな言いようのない不安と恐怖に駆られて、マシュは楓を探し求める。
「先輩……先輩！」
「マシュ」
逸る気持ちを抑えきれず、駆け出そうとするマシュを呼び止めるのはアストルフォだった。
「ボクも一緒に探すよ」
「アストルフォさん……ありがとうございます」
マシュの隣に並び、アストルフォも適当に部屋を覗きこんで楓の姿を探しながら、ふと思いついたかのように口を開いた。
「そういえばさ。マシュはマスターの事、どう思ってるの？」
「えっ？」
「ちょっとした会話のネタだよ。お喋りしながらの方が楽しいじゃん」
そう言い切り、言い出しっぺであるアストルフォは言葉を続ける。
「ちなみに、ボクは割と好きだよ。少なくとも悪い人じゃないのは間

違いないし……たまにボクの事忘れてるっぽいのは、どうにかして欲しいけど」
　最後の方は苦笑交じりというか、あきれた様子でもあった。
「でもさ、フユキ……だっけ？　あそこでマシュの事庇ったりとか、セイバーとの戦いでも最後までマシュの傍にいたりとか、すっごくいい人なんだなーって、結構良い印象は感じたよ」
「そうですか……アストルフォさんも、先輩に良い印象もってくださるのは嬉しいです」
　その言葉に、マシュは自然と笑みをこぼしていた。
　自分と同じく彼女と契約した英霊も、良く想ってくれている事が我が事のように嬉しいのだ。
「それで、マシュは？　マスターの事をどう思ってるの？」
「私は……よくわかりません」
　ドンッ！　と激しい音と共に埃や木片が舞う。
　アストルフォが、盛大にずっこけて、後頭部を床に打ち付けてた為だ。
「ア、アストルフォさん!?　大丈夫ですか!?」
「だ、だいじょうぶ……だけどさ……よくわかんないって……何、それ？　君、ボクより前からマスターと一緒にいたんでしょ？」
「はい。ですが、先輩と出会ったのも冬木へのレイシフト直前でしたので……付き合いの長さで言えば、アストルフォさんと大差はありません」
　言われてみれば、楓との付き合いはまだそう長くない。
　信頼が付き合いの長さと比例して構築される物であるなら、自分が楓に寄せている感情は一体何なのだろうか……考えてみたが、よく解らなかった。
　ただ、初めて出会った時から彼女に対して感じていた感情。それはとても温かい物だと断言できるし、その気持ち一切の偽りは無い。
「それにしては、マシュってマスターの事を凄く信頼してるっていうかさ……？　何かきっかけでもあったの？」
「きっかけですか……あぁ」

楓に対する感情がとても強くなったきっかけ。となれば間違いなくあの時しかないだろう。
「実は私……デミ・サーヴァントになる前に死にかけた……いえ、一度死にました。カルデアの爆破テロに巻き込まれて、瓦礫に下半身を潰されて……」
永遠に忘れる事は無いだろう。
あの時、自分を救ってくれた楓の姿を。

炎に包まれた管制室。ただ一人、瓦礫の下敷きになったマシュは全身を走っている感覚が痛みなのか苦しみなのか、それすらも正しく認識できなかった。
ただ一つ。妙にハッキリとした頭は冷静に、自分に突き付けられた事実を認識していた。
（あぁ……私、死ぬんだ……）
下半身の感覚は全くない。この場から救出されたとしても、二分と持たずに自分は死ぬと理解した。
別に死ぬのは怖くない。ここで死ぬのなら、自分はそういう運命だったのだと受け入れられる。
ただ、その間何一つとして出来る事が無いというのは、恐ろしく不安で、怖かった。
（このまま、一人で……何もできないまま……か……）
死ぬ間際で、初めて恐怖という感情を知れたのは幸か不幸か。
そんな事を思いながら、静かに瞼を閉じる。
（あぁ、でも……許されるなら……叶う事なら……）
脳裏に浮かぶ一人の少女。
最後に一目で良いから会いたかったと、最早叶わない、生まれて初めての我が侭といっても良い事を願ってしまう。
どうせ死ぬのだから、どうせ叶わないのだから、それぐらいはきっと許される。この気持ちを抱えて死ねるのも、きっと幸運に違いない。

そうして、静かに意識を手放そうとした時。
「……シュー！　マシュー！」
「……え？」
声が聞こえた。
いるはずのない人物の声。
この状況で、自分の名前を呼んでくれる人の声。
地獄といっても過言ではないこの状況の中で――。
「マシュー！」
「せん……ぱい……？」
――最後に会いたいと願った、その少女がやってきた。
「な、んで……ここ、に……？」
「マシュが心配だったからに決まってるでしょ！　待ってて、すぐに助けてあげるから！」
何という事だ。この人は、自分の事が心配だったというだけでこの地獄に飛び込んできてくれたのか。
助かったはずの命を危険に晒し、無情にも管制室の閉鎖を告げるアナウンスによる死刑宣告を受けてしまったのに、自分の為だけに来てくれた。
（あぁ……なんて……）
この人は、きっと後悔したんだろう。
顔は恐怖に引きつっていたし、全身は逃れられない死に震えていた。
それでも、この人は自分の傍にいてくれた。手を握ってくれた。
自分に心配をかけまいと、必死に笑顔を浮かべて。
（温かいんだろう……）
なんて、自分は幸運なのだろう。
死の間際に、これほど美しいものをみれたのだから。
なんて、自分は罪深いのだろう。
この人は、自分のせいで死んでしまうのだから。
（ありがとう……ございます……）
なんて、自分は我が侭なんだろう。

この場に来てくれたこの人だけは、なんとしても助けたいと、守りたいと思ったのだから。

「そして、私はデミ・サーヴァントになりました。冬木で目覚めた時、先輩が私のマスターなんだと知った時……心の底から嬉しいと思いました」

楓の力になれる。彼女の傍にいられる。

彼女の身に降りかかる危機を、自分が防ぐ事が出来る。

あの時の恩を返す事が出来る。

これ以上の幸福なんて、果たしてあるのかとすら思えてしまった。

「先輩は、私にとても美しいものを、温かいものを与えてくれました。だから……あの人を信じられます」

この想いはきっと、何があっても変わる事は無いのだろうと確信がある。

「……と、長々語ってしましたが……これで、良かったでしょうか……？」

頬を赤く染め、照れたように顔を俯かせるマシュに対し、アストルフォはニヤニヤと堪え切れないとばかりに笑みを浮かべる。

「そっかー、そんなことがねー。ふーん」

「な、なんですか!? なんなんです、その反応!?」

「べっつに～？ ただ、マシュはその気持ちを大事にした方が良いよ。きっとね」

まさか、これほどまでに初々しい感情を露わにする少女を目の当たりに出来るとは、今回の召喚は本当に色々な意味で良い物かもしれない。

「さて、マシュの気持ちも聞けたところで肝心のマスターは……おや？」

廊下の奥。未だ未探索の部屋から飛び出してくる小さな白い影。

こちらを見つけ、駆け寄ってくる姿。そういえば見かけなかったなと思いだす不思議な小動物のそれだ。

「フォウさん？」
「フォウフォウ！」
二人の足元に駆け寄り、すぐさま身をひるがえして部屋の中へと着いてくるように促している。
「もしかして、先輩はその部屋に？」
「フォウ！」
肯定の意味なのか、一声鳴いてフォウは室内へ消えていく。
それを追いかけ、部屋の中へと足を踏み入れて、日の光も入らない薄暗い室内の隅で蹲る楓の姿を見つけた。
「先輩、ここにいらしたんですね」
「探したよ、マスター」
声をかけ、楓の傍へ近寄る。
しかし、反応は無い。二人が来た事に気づいているはずなのに、楓は俯いたまま顔をあげようとしない。
「……先輩？」
「……いで」
「え？」
聞き逃してしまいそうな程にか細く、弱弱しい声だった。
「私の事……先輩なんて……マスターなんて……呼ばないで……」
そして、今にも泣きだしそうな声だった。
ジャンヌやロマニから、楓が深く傷ついている事を聞いてはいたが、いざ目の当たりにすると想像以上だった。
その姿にも、声からもあの時確かに感じた温かさも、光もなかったのだから。
「……どうしたんですか？」
楓の前に腰を下ろし、目線を合わせる。
「何か、私で力になれる事なら……相談なら、乗りますから」
「……お願い。一人にして」
「……それは、聞けません」
今一人にしては駄目だ。この人を孤独にしたら駄目だと、自分の中の何かが訴える。

「良いから……一人にしてよ……」
すっと立ち上がって、楓は二人の間を抜けて行こうとする。
そっちが出て行かないなら、私が出ていくと言わんばかりの行動。
だが、マシュはその前に立ちはだかって、楓の手を取る。
「今の先輩を、一人にはできません」
「だから……っ！　先輩って、言わないでよ！」
次の瞬間、楓は声を荒げてマシュを振り払おうとする。
そのまま体制を崩し、倒れ込む二人。咄嗟にマシュは楓を庇い、自らが下敷きになる形　で床へと倒れ込んだ。
丁度、楓に押し倒されたかのような体勢となる。
「ちょ……二人とも、大丈夫!?」
「私は、平気です……先輩は？」
「言わないでよ……そんな事……そんなに、慕われる資格なんて、私には……無い、から……っ！」
荒げていた声は、涙声に変っていた。
そこにあるのは二人に対しての罪悪感と、何も成せないという情けなさからくる自己嫌悪。
誰にもぶつけられない、ぶつけてはいけない自分自身への怒りだった。
「なんで……なんで、私が……っ！　何も、出来ないのに……役に立たないのに……いるだけなのに……なんで、私なんかがマスターになるのよ……なんでよぉ……っ！」
マシュに体を預けたまま、堪え切れなくなった感情が次々に吐き出される。
決壊したダムのように、最早抑える事など出来はしない。
「私のせいで……マシュが、アストルフォが死ぬなんて嫌だし……私が死ぬのは、もっと嫌だし……そんな、そんな私に……マスターなんて……出来ないよ……人類の未来なんて……背負えないよ……私なんかが……マスターなんて……出来るわけ……無いよぉ……」
きっと二人は自分に失望しただろう。
許されない我が侭を言い放つ自分に、見切りをつけるだろう。

それでいい。もう止まらない、もうどうしようもないのだから。
「……私じゃなかったら、良かったのに……」
それがそもそもの間違いだったんじゃないか。
きっと、もっと上手くやれる人がいたはずなのに。
「先輩……言わないでください。そんな事」
「マスターになったのが……私じゃ……」
「言わないでください！」
突然の叫びに、楓は思わず体を起こしてしまった。
マシュもゆっくり上半身を起こし、正面から、今にも泣きそうな目で楓を見つめる。
「言わないでください……私は、先輩以外のマスターなんて……先輩がマスターじゃ無かったらなんて……私は、嫌です……」
「マシュ……で、も……私は」
「役立たずのマスターだって？　別にいいじゃん」
アストルフォはため息に交じりにそういって、腰を下ろす。
目線をしっかりと楓にあわせて、口元に笑みを浮かべて。
「誰だって自分が死ぬのが一番怖いに決まってるじゃん。それは無責任でも何でもない、当然の事だよ。だいたい、マシュはともかくとしてもボク等サーヴァントはどれだけ理屈を並べたって、どこまでいったってとっくの昔に死んでるんだ。今を生きてるマスター達の命の方が、ずっと重くて大切さ」
「アストルフォ……でも……私……」
「それに、マスターは魔術師でも何でもない普通の人なんでしょ？　なら、戦いで何も出来なくたって仕方がないよ。だいたい、今回の事はボクの我が侭がきっかけなんだし、マシュが死にかけたのってボクのせいでしょ？　その事についてはホントにゴメン！　全面的にボクのせいだ！」
そう言って、アストルフォはフォウを抱き上げて立ち上がる。
「あと、ボクが言えた事じゃないけどさ？　マスターもマシュも、もうちょっと我が侭になっちゃいなよ。自分を押さえつけるなんて、ストレス溜まるだけだよ？」

「フォウフォウ！」
「こら暴れんな！　ボク等の出番はここまでだよ」
　腕の中から這い出ようとするフォウを押さえつけ、アストルフォは二人に背を向ける。
「それじゃ、邪魔者はこの辺で！　二人で納得いくまで話しなよ。どんな結論出したって、ボクは二人の味方さ」
　そういって満面の笑みを浮かべ、アストルフォは足早に退室する。
　暴れるフォウの抗議は、力尽くで黙殺である。残された二人は、お互いに視線を合わせたまま沈黙。
　数秒か数分か、あるいは数時間だったかもしれない。それだけ長く感じた沈黙を破ったのは、マシュだった。
「あの……先輩……先ほどは、すいませんでした」
「……ううん、私も……ごめん」
「……私、とても我が侭だったみたいです。先輩が、どんな事を感じているのかも知らずに……」
　あの時感じた温かくて美しい物を、ずっと彼女に求めていた。
　傍にいてくれるだけで、満たされる想いだった。
「私は……先輩の重荷ですか？」
「むしろ、私の方こそ、マシュにとっては……」
「重荷なんかじゃありません！　絶対に……たとえそうだとしても、私に背負わせてください」
　力いっぱいに、楓の手を握る。
　管制室の時も、冬木の時も彼女が自分にしてくれたように。
　自分が出来る事は、今はこれぐらいしか思いつかないから。
「私は、あなたのサーヴァントですよ？　それぐらい、背負わせてください。あなたの事を、守らせてください……」
　それがあなたの重荷になるかもしれないと解っているけれど、どうしても求めてしまう。
　きっと、これから何度もあなたの前で死にかける。いずれ、本当に死んでしまうかもしれない。
　不必要に傷つけて、追いつめるかもしれない。

だけど、それでも、求めずにはいられないのだ。
「あなたが背負ってる物を……私にも背負わせてください……私に、シールダー（あなたの盾）でいさせてください」
それが、今や私の存在理由なのだから。
（私……本当に……最低だ……）
ただでさえ、戦いで傷ついてるマシュを更に傷つけている。
彼女に涙を流させて、ここまで言わせている。彼女が背負う必要が無い物まで背負わせようとしている。
それに、縋りたくてたまらない自分がいる。
あぁ、本当に、なんて最低な人間なのだろうか。
「うん……ありがとう。でも……大丈夫だから……」
きっと大丈夫じゃない。これから何度も挫けて、泣いてしまう。
そのうち、きっと壊れてしまう。
だから、私も我が侭になろう。
「マシュが、傍にいてくれるんだもんね……」
「はい……っ！　誰が何と言おうとも、私は先輩の傍から……離れません」
私を守ってくれる、私には勿体ないぐらいの、素晴らしい後輩がいてくれるのだから。
一人では大丈夫じゃなくても、彼女がいてくれるのならきっと、これから先も大丈夫。
「情けなくて、何もできないマスターだけど……これからも、よろしくね……」
だから、私はもっと強くならなきゃ駄目なんだろう。
後輩に縋って、頼ってばかりじゃない。自分のような人間を先輩と、マスターと慕ってくれるマシュの為にも、味方してくれるアストルフォの為にも。
もっともっと、強い自分にならないと駄目なんだ。
「フォウ……」

「ね？　ボク達は邪魔者だっただろ？」
部屋の外。壁越しに様子を見やっていたアストルフォの言葉にフォウは頷く。
「さて、これから先は大変だぞ～。一緒に二人を支えてあげないとね」
「フォウ！」
とっくに死んだ身なれど、人生経験とサーヴァント経験は自分の方が上なのだ。
決して強くはない。むしろ弱い英霊だけど、あそこまでお互いを思い合える少女達の力になれないようでは騎士失格。
いや、騎士として以前に男が廃る。また自分の事を忘れられてはしないかと思うし、正直それはムカつくがこの際水に流そう。
たまに揶揄うネタが出来たと、前向きに捉えてしまえ。
「心配してるだろうし、ジャンヌ達のところにでも行こうか？」
「フォウ！」
腕の中、すっかり暴れるのを止めたフォウと共にその場を後にする。
不安要素は正直あると思うけれど、きっとあの二人は大丈夫だ。
お互いがお互いを支え合うかぎり、何があっても、折れはしない。
万が一にでも折れてしまった時は、自分が支えてあげればいいのだから。

第十話　邪竜百年戦争　オルレアン　5

何もない真っ白な部屋。
正確に言えば、出入り口である扉と壁一面に設置された巨大な鏡。それとベットに映像用モニターがあるだけの部屋。
不自然なほどに巨大な鏡は、所謂マジックミラーというヤツだろう。向こうからはこの部屋の中は丸見えで、こちらが何をしているか一部始終を確認できる。
別にそんなことは気にしていない。こうして一日、生きていられる事だけでも十分に満たされているのだから。
「やぁ、おはよう――」
それに、最近はわざわざ部屋の中に入ってきて、声を掛けてくれる人もいるのだから。
私は十分すぎる程に、満たされている。

変なというか、妙な感じのする夢だなと感想を抱くのと、後頭部の柔らかい感触に気が付くのは同時だった。
知らないうちに眠ってしまった事を自覚し、僅かに重たさが残る瞼を開く。
「おはようございます、先輩」
視界いっぱいに映り込む、笑みを浮かべたマシュの顔。
とても良い物を見させてもらいましたと、ハッキリ書いてある。
「ぁ……おはよう」
後頭部に感じる感触の正体は、マシュの膝枕だったのか。
未だにぼんやりとした頭が、それを理解した途端に秒速で覚醒していく。
ハッキリと自覚できる程に顔が熱く、赤くなり、そそくさと体を起こす。
「え、えっと……私……」
「あの後、すぐに眠られましたので……二日も眠っていなかったので

すから、仕方のない事だと思います」
「あ、ぁ……うん、その……ありがと……」
だからって、ごくごく当たり前のように膝枕されていたというのはかなり照れるというか恥ずかしい。
状況的に、寝顔をじっくりはっきり見られていたのだろうし、どんな間抜け面を晒していたのか等、考えたくもない。
それ以上に、凄く快適な寝心地だったななんて感想も抱いてしまうのだが。
「起きたばかりで申し訳ないのですが、礼拝堂でジャンヌさん達が待っているはずですので行きましょう」
「う、うん……解った……」
どうやら、居眠りのせいでジャンヌ達に待ちぼうけをさせてしまったようだ。
その申し訳なさと、もう少しあのまま眠っていたかったという名残惜しさに後ろ髪を引かれながら、楓は部屋を後にした。

礼拝堂にはアストルフォ、ジャンヌの他にジークフリートと更に二騎のサーヴァントがいた。
一人は大きな赤い帽子が目を引く銀髪の少女、もう一人は青黒いローブに身を包んだ男性。どちらもマシュは初めて見る顔だが、この場にいるという事はジャンヌの仲間なのだろう。
「マシュはまだ会ってなかったっけ？」
「ジャンヌさんとジークフリードさんにはお会いしましたが、あとのお二人にはまだ……」
それを聞くが早いか、少女が二人の前に躍り出た。
「あら、あなた。目が覚めたのね！　私、マリー・アントワネット。クラスはライダー、よろしくね」
「マ、マリー・アントワネット……フランス王妃の!?」
「ええ、そうよ！　でも、そんな畏まらずに気軽にマリーとでも呼んでくださいな」
「は、はぁ……マ、マリーさん？」

そう呼ばれた彼女は、物凄く目をキラキラさせていた。
凄く嬉しいんだなというのが、よくわかる。
「マリー、嬉しいのは解るけどほどほどにね。僕はキャスター。真名はヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト……長ったらしくて呼びにくいだろうから、好きに呼んでくれ」
ローブの男性は、かの天才作曲家。
特異点を巡る旅、様々な英霊と出会う事になるだろうとは思っていたが、誰でも一度は名前を聞いた事はあるであろう偉人と早速出会う事になろうとは。
「ともかく、ここにいるのはこれで全員かな？」
「フォウフォウ！」
忘れるなとばかりに、物陰から飛び出してきたフォウが楓の肩へと飛び乗ってきた。
「フォウさんもいますので、これで全員ですね」
「それでは、今後の事の話し合いを……という事で良いですね？」
ジャンヌの言葉に全員頷き、現在とこれからの事についての意見を交える。
この特異点の原因、聖杯を持っているであろうもう一人のジャンヌと彼女が率いるサーヴァント達。
それに対抗する楓達とジャンヌ達。構図としては単純、戦力的にはあちらが圧倒的に上と良く無い状況だ。
「私達が手を組むとしても、やはり戦力差は大きいですね」
マシュとアストルフォでは、あちらのランサーやアサシン相手に敵わなかった。
ジャンヌも大きく弱体化しており、マリーとアマデウスは元より戦闘向きのサーヴァントではない。
更に言えば、敵のサーヴァントは全員に狂化が付与されており、戦闘力が増しているという事だ。
「すまない。俺が本調子なら、少しは力になれたのだが……」
そして、ジークフリードはジャンヌ達と合流する前に負傷しており本調子を出せないという事だった。

複数のサーヴァントに襲撃され、その時の傷が完全に癒えてはいない。
その負傷は単なる怪我ではなく呪いの類。ジャンヌ一人では浄化しきれず、完全に癒すには最低でももう一人は聖人系のサーヴァントが必要だという。
数多のワイバーンを戦力として有する敵と戦うには、竜殺しの異名を持つ彼の力は必要不可欠と言っても過言ではない。
「間違いなく、この場で最強のサーヴァントである彼の傷を完全に癒す為、聖人系の英霊を探す。それが私達の当面の目的でした」
「他にも召喚されている、という事ですか？」
「確証はありませんが……現に私達のように、マスターも無しに召喚されているサーヴァントがいますので可能性はあると思います」
『ふむ……その可能性は大いにあると思うよ？』
突然割り込んでくる女性の声。
何事かと皆が身構える中、楓は声が聞こえてきた手首の通信機のスイッチを入れる。
「えと……ダ・ヴィンチちゃん？」
『はいはい～。私だよ～。ロマニは今ちょっと休憩中だからね、ちょっとの間代役さ』
空中に映し出されたダ・ヴィンチの映像。
魔術と機械を併用した通信手段であると初見のジャンヌ達が理解するよりも早く、ダ・ヴィンチは口を開いた。
『そもそも、君達のようにマスターを持たない……いわば、はぐれサーヴァントが呼ばれている件だが。恐らく、もう一人のジャンヌが持っているであろう聖杯によるカウンター的なものだろう』
「カウンター……？　要するに、聖杯が今の状況を聖杯戦争と捉えたと？」
『その通り。最初から聖杯を手にした……いわば優勝者が決まっている状態から強引にでも聖杯戦争としての形を成り立たせるために、君達のようにマスターを持たないサーヴァントを召喚した。こう考えれば、辻褄は合わなくもないと思うよ？』

あくまで状況証拠から推測に推測を重ねた仮説だけどね、とダ・ヴィンチは付け加えるがジャンヌは確かにと納得した。
確証はないとはいえ、他に聖人系サーヴァントがいるかもしれないという可能性に一筋の光が見えたことに変わりはない。それに、今の自分達はそれに縋るほかないのだ。
『後はそうだなぁ……楓ちゃんが、この場で聖人系サーヴァントを召喚しちゃうのもありかな？』
「……えっ？」
ダ・ヴィンチの思わぬ発言に、楓は間抜けな声をあげ、他の皆は一斉に彼女へと視線を移し「……あー」と頷いた。
確かに、この面子で。この世界において唯一のマスターである彼女なら新たにサーヴァントを呼ぶ事も可能。
上手く行けば、サクッと聖人を呼び出してしまう可能性はあるといえばあるのだ。
『幸い、その教会は霊脈の真上にあるからね。サークルを設置して、カルデアの召喚システムと直結させれば楓ちゃんも新たなサーヴァントを召喚できるはずさ』
「成程。どのみちサークル設置は必要ですし、やっておきますね」
サークル設置の作業を行うマシュを他所に、楓はダ・ヴィンチからのまさかの振りに頭を抱えていた。
「まさか、聖人サーヴァントを呼べなんて……」
『いやいや、あくまで可能性の話だよ。そう上手く呼べるなんて思ってないさ』
「まぁ、呼べたらラッキー！　ぐらいに思ってたら良いんじゃない？」
楓の肩をポンと叩き、アストルフォもダ・ヴィンチの意見に同調する。
「物は試しっていうし、召喚するだけしたらいいじゃん」
『どの道、他のはぐれサーヴァントを仲間に出来るかどうかも不透明な現状を考えると……新たな英霊召喚を行って、戦力の増強は計らないとだ』
「ですよね……やるしかないかぁ……」

頭では理解している。それでも、楓の心に圧し掛かるのは不安だった。
上手く呼べるかどうかはともかくとしても、自分が背負わなければならない命がまた一つ増えるという事が、たまらなく不安だ。
マシュやアストルフォだけでも重たく、潰れそうになった自分に背負えるのか。
それでも、強くなると決めたのだ。ならば、この重圧からも逃げては駄目だ。
「サークルの設置、終わりました」
『うん。こちらの召喚システムとの接続も確認したよ。後は、楓ちゃん次第さ』
「……はい」
深呼吸をして礼拝堂の奥。祭壇の前に立ち、令呪が刻まれた右手をかざす。
冬木でオルガマリーに教わった事を一つ一つ思い出し、意識を集中させる。
「……素に銀と鉄。　礎に石と契約の大公」
一心に願うのは、この召喚に応えてくれる英霊がいてくれる事。
マシュやアストルフォと共に、自分と共に戦う事を良しとしてくれる誰かがいてくれる事。
不甲斐無く、弱い自分のようなマスターの願いを拾ってくれる誰かの存在。
「聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」
召喚の儀式を見守る皆の表情。真剣な眼差しが楓に集まる。
正確には、これから彼女が呼び寄せるサーヴァント。共に戦う事になる英霊は誰なのかは、嫌でも気になる事だ。
果たして、皆の期待に応えられるような英霊を呼べるのか。
そんな不安がよぎるが、即座に頭から消し去って召喚に集中する。
「抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ」
今自分が考えるべきなのは、召喚に応じてくれる英霊の事だけだ。
詠唱を終えると共に、礼拝堂を眩い光が包み込む。魔力が溢れ、新

たなサーヴァントの存在が嫌でも感じ取れる。光が収まっていき、楓は己の正面に立つ一騎の英霊の姿を認めた。
「あら、随分と可愛らしいマスターに呼ばれたものね」
紫のローブと黒いフードに身を包んだ女性がそこにいた。
深く被ったフードで表情は読み取れないが、立ち姿からして気品に溢れた、生まれからして自分なんかとは違うタイプの女性だと、一目で楓は理解する。恐らく、相当な美人だろう。
そんな楓の様子を見やりつつ、女性は周囲を……自身を取り囲む他のサーヴァント達を確認する。
「随分な数を揃えてるけど……正式に契約しているのは、そこの二人だけかしら？　ちょっと変わった魔力の供給方ね……魔術と別の物を複合させた方法かしら？」
「あれ？　見ただけで解るの？」
メディアの問いに、あっさりと答えるアストルフォに一瞬呆れるような視線を送り、女性は続ける。
「魔力の流れを見れば解るわ。同じマスターに仕えるのだから、気にするのは当然ではなくて？」
「あー、それもそっか」
そして、あっさりと納得される。
コイツはこういうヤツなのだろうと理解するにはそれで十分だ。その一方、マシュは先ほどのやり取りから何かを思考しているようであった。
「見ただけでそこまで……失礼ですが、クラスはキャスターで間違いないでしょうか？」
「そういえば、自己紹介がまだだったわね。本来ならマスター以外に真名を明かすのは不本意ですが、召喚の際に与えられた知識で今の状況は知っていますので、特別です」
そうもったいぶって、女性は己が名を明かした。
「サーヴァント、キャスター……真名はメディア。召喚に応じました。よろしくお願いするわ、可愛いマスターさん」
『へぇ……こいつは驚いた。まさかコルキスの王女とは。大当たりだ

よ、楓ちゃん』
「大当たり……？　もしかして、凄い人呼んじゃった？」
「……は？」
今のやり取りの意味が解らず、メディアは間抜けな声をあげる。
召喚の際に与えられた知識にカルデアの事もあり、触媒無しでの召喚である事も理解している。故に、特定の英霊を狙った召喚で自分が来たという訳ではないのだろう。
だとすれば、このマスターである少女は……。
「……いくら未熟でも、魔術師なら私の名前ぐらい知ってると思ってたんだけど……」
「あ、いえ……先輩は魔術師というわけでも無いですし。歴史や神話に関してはほぼ無知だそうで……」
「……あぁ、そう」
ハッキリ言って、ハズレか。
魔術師ではないというのも大概だが、英霊に関する知識も持ち合わせないとはハズレ以外の何だと言うのか。
だからといって表には出さない。第一印象は良くは無いが、召喚されて早々に関係を悪化させる事もないだろう。
メディアがそういった思考を巡らせている間、楓はマシュやダ・ヴィンチから彼女に関する基礎的な知識を教わっていた。
「つまり、凄い魔術師って事だよね？」
『簡単に言っちゃうとそうなるね。キャスターで呼べる英霊なら、トップレベルなんじゃないかな』
そう聞いて、楓の脳裏に浮かぶのは一つの考え。
我ながら短絡的な発想だと思うが、世辞でもマスターとして優秀とは言えないどころか、三流以下な自分が少しでも皆の役に立てるようになるには、絶対に必要だろうと確信する。このチャンスを逃す手はない。
「ねぇ……ちょっとお願いあるんだけど、いいかな？」
「あら、何かしら？」
純粋に無知かつ無力で、自身を現界させる為の楔でしかない彼女が

何を願い出ようというのか。
魔術師でも無いのに、サーヴァントを引き連れているからと無駄に大きな態度で威張り散らすようなマスターであるなら、こちらにも相応の考えはある。
様々な――主に最悪な――パターンを想像し、それら全てに適切な対応はどうなるかと思考を走らせ――
「……魔術、教えてください！」
「……えっ？」
見事としか言いようが無いレベルでの頭をさげ、教えを乞う。なんて展開は、流石に予想していなかったのであった。
「えぇ……？」

全てが燃え尽き、死に絶え、朽ち果てる。
人も、家も、家財も、家畜も、全てが平等に、一切の差別も区別なく滅んでいく。
つい数分前まで、人々で賑わっていた街が一つ。紅蓮の炎に舐めとられてこの国の歴史から消え去っていく様を見ながら、少女は呟いた。
「で？　まんまと逃げられたってわけ？　ランサーとアサシン、二人も揃っておきながら？」
「そのようです。例の一味の介入があったそうですが」
「そんな事、言い訳にすらなりません。ろくな力も出せない、戦闘力でも圧倒的に劣る連中の集まりに邪魔されて……あと一歩で倒せた獲物に逃げられる吸血鬼。なんて無様」
苛々を隠すことなく、足元に転がっている小石を踏み砕く。
少女の傍らに控える黒紫のローブを身に纏った、片手に本を抱える男は笑みを浮かべたまま少女へ語り掛ける。
「それで、どうなさいますか？　私の方で手配を済ませましょうか？」
「そうね……新しく来たっていうお客様の顔も、一度は拝んだっていいでしょうし」

右手に持つ旗を振るい、上空に待機していたワイバーンを地上に降ろす。
「次は私がいくわ。ジル、後は適当にやって先に帰っててくれる？」
「かしこまりました」
一礼し、男――ジル・ド・レェはワイバーンの背に乗って飛び出つ少女と、引き連れられたサーヴァントを見送る。
その顔に浮かぶのは笑み。心の底からの喜び。元気にはしゃぐ子供を見守る、愛に溢れた親のような優しさに満ちた笑顔だ。
彼は今、満ち足りている。正確には満ち足りようとしている。今、この国には彼が望んだ全てがあるのだから。
「さて、それでは……」
ぐるりと体を捻り、視線を向けるのは馬小屋。その中に集めた少年少女達。
つい数分前まで、親が殺戮され、陵辱される様を見せつけられた哀れな子羊達。
「適当にやっておくとしましょうか」
炎の音しかしない街に、子供達の悲鳴が響き渡った。

メディアを召喚してすぐに、楓達は教会を後にした。
戦力の増強も叶い、マシュとアストルフォの傷も、楓の傷もとりあえずだが癒えたのだから穴倉を決め込む必要もなくなった。
次にやるべき事は、ジークフリードの傷を癒す為に聖人系のサーヴァントを探す事と、他にも呼ばれているであろうマスターを持たないサーヴァントを味方に引き入れる事だ。
「……マスター、あなた」
そして現在、森の中に身を潜めての野営中である。
夜の闇に紛れて進む事も可能ではあるが、楓が生身の人間であるという事を考慮するとどうしても無理があるからだ。
適当に食事を済ませた後、楓はメディアからとりあえずやってみろと言われた簡単な魔術絡みのテストを受けていたのだが。

「才能無いわね」
「……無いですか」
「無いわ。私が知ってる中で一番無いわ。私がカルデアのスタッフなら、ただ一人生き残ったのがアナタだけだとしてもマスターやれなんて絶対言わないわ。むしろマスター候補として呼ばないわ」
「そ……そこまで言わなくても……」
文字通りの意味で、これ以上ないぐらいにダメ出しを喰らい続けていた。
「これでも手心加えてます。だいたい、才能のあるなしは最初のうちに理解してもらわないと困るのよ」
「うぅ……いや、才能あるなんて思ってなかったけどさぁ……」
「自覚があるのは結構だけど、実際に己の才能の無さを目の当たりにするのも経験よ」
正直、楓に魔術の才能が無いなんてメディアから見れば修行を付けるまでもなく、一目見ただけで解っていた。
それでもなお実際にやらせ、言葉にしているのは彼女に身をもってそれを理解させる為。
勘違いをさせて身の丈に合わない力を求めた挙句に……なんて無様な末路を、自ら教えを乞うてきたマスターに歩ませてしまうのは、魔術師としてのプライドが許さない。
(断っても良かったのだけど……マスターとしてそれなりの付き合いになりそうだものね)
師匠と弟子という関係を築く事で、多少の借りを作っておくのも悪くはないだろう。
打算的な考えを張り廻らせ、なおかつ真面目に厳しく、メディアは楓を師事する。
基本は礼装に頼らせる事にして、簡単な、自身の身を守るのに役立つ程度の物は礼装の有無に関わらず使えるようには鍛えられるだろう。
厳しく楓を師事するメディア。そんな二人の様子を離れた位置で見やりながら、マシュはふぅと息を吐く。

なんだかんだと上手く行きそうな感じで、一安心。それが素直な感想だ。
『しかし、メディアを召喚したって聞いた時は驚いたよ』
マシュの持つ通信機から、声だけ届かせる形でロマニはぼやいた。
休憩から戻り、ダ・ヴィンチから事のあらましを聞いた時も正直、自分を落ち着かせるのに精いっぱいだった。
楓が新たなサーヴァントを召喚する事自体は良いし、反対する理由も無い。
だが、呼びだした英霊が問題なのだ。
『だって、メディアといえばあれだよ？　その……ねえ？』
本人には聞こえないように、小声になっていくロマニの声に呆れたような溜息を洩らしながらも、マシュにも彼の心配は何となく理解できた。
メディアと言えば、裏切りの魔女と呼ばれる人物。妄信的なまでに愛した男の為、父を裏切り、弟を手にかけ、様々な非道を行ったとされるのが彼女だ。
楓の召喚に応じてくれたのだから、そんな風に疑いたくはない。実際、アストルフォは気にしている様子も見せず能天気なまま。今は大の字になって盛大にいびきをかいて眠っているというマイペースっぷりだ。
他の面子も、マリーとアマデウスはさほど気に留めていないようではあるがジャンヌは解りやすいぐらいに警戒しているようだし、ジークフリードは特にこれといって反応を示していない。
対してメディア本人は、気付いていないという事は無いだろうが徹底して無視。というよりも、楓への魔術授業に集中していて、それどころではないといった様子だ。
（あれ……？　警戒してるのってドクターとジャンヌさんだけ？）
その事に気づいてしまったのは、良い事なのか悪い事なのか。
とりあえず、その疑問を忘却してマシュは自分の意見を口にする。
「確かに、メディアさんは逸話からして危険なのかもですが……私は信じてみたいです」

何故なら、楓は信じているようだから。
彼女にもそれとなく、裏切りの逸話に関しては教えている。その後に出た第一声が、魔術の教えを乞うあれだったのだ。
今もああして魔術について教えを受けている様子からも、警戒しているようなそぶりは全く見えないではないか。
「それに、こっちが信じないと始まりませんし」
『まぁ、それもそうだよね』
これから共に戦い、歩んでいく仲間になるのだから疑うなんてしたくはない。
きっと、楓もそういう風に思っているに違いない。根拠は無いが、マシュはそう確信している。
願わくば、アストルフォは勿論。メディアにも、そうあって欲しい。
そんな想いと共に二人の様子を見やっていると、何かに気づいたようにメディアが視線を楓から外した。
「？　メディアさん、どうかされましたか……？」
「森の外に放ってた使い魔が一体消えたわ。羽虫程度のサイズでしかないのに気づいて潰すなんて……敵でしょうね」
「っ!?」
その言葉に盾を実体化させるのと、通信機越しにロマニが敵の接近を知らせるのは同時。
一瞬遅れてジャンヌの、ルーラーとしての探知能力もそれを捉え、彼女は悔しそうに表情を歪める。
本来なら、万全の力を発揮できていればもっと早い段階でこちらに接近する敵に気づけたはずなのにと。名ばかりのルーラーと化した己の無力さに苛立ちを感じずにいられない。
「申し訳ありません。私が万全でさえあれば……」
そうであれば、逃げる事も十分に可能だったはずなのだから。
「過ぎた事を言っても仕方がない。今は、この局面をどう切り抜けるかが重要だろう」
ジークフリードの言葉に小さく頷き、ジャンヌは気を引き締める。
幸いにも、探知範囲が万全時の半分以下になった程度で制度自体に

問題はない。相手が接近してくれれば、それだけ正確に居場所を感じ取れるのだ。それを活かして、この場を切り抜けようと頭を切り替え――

――風が吹きぬけると共に、楓の右肩が射抜かれた。

「……えっ？」

自身に何が起きたのか理解できぬまま、右肩に走る焼けるような痛みと吹き出す鮮血を目にして倒れる。

「先輩!?」

「マスター!?」

マシュが抱き抱え、アストルフォが槍を構えて周囲を警戒する。

視界に広がるのは闇夜に包まれた森。敵の姿は一切見えず、気配すら感じ取れない。

横目で楓を見やると、右肩に突き刺さった矢をマシュが引き抜き、メディアが傷口を魔術で癒している。

とりあえず彼女は大丈夫だなと、一安心した直後に感じた悪寒。

「やっぱっ！」

それに従って槍を振り回し、森の中から飛来する矢を叩き落とす。

一本ではない。一度に数本以上の矢が、四方八方からマシンガンの如く連射され、それ等を全て弾き、叩き落としていく。

アストルフォの背面はマシュが盾を構え、左右はそれぞれジークフリードとジャンヌが得物を構えて防御。

「ちょっ！　一体何本持ってんのさ!?」

「相手はサーヴァントだからね。矢だって魔力で作りたい放題だろうさ」

マリーと共に身をかがめ、アマデウスは忌々し気に言い捨てる。

この攻撃方法なら、敵はまず間違いなくアーチャーだ。

「夜の森で、ここまでの動きが出来るアーチャー……まさか……っ!?」

飛来する矢を旗で叩き落としながら、ジャンヌの脳裏に浮かぶのは一人の英霊。

彼女の知る限り、この悪条件で縦横無尽に森の中を動き回り、矢を乱射出来るのは彼女しかいない。

「殺す……殺す……殺す……っ！」

狂気に染まり、それ以外を考える事を許さない思考が敵を捉える。

相手からはこちらは見れないが、自分からは丸裸同然のように何もかもが丸見えだ。

夜の森で、自分に勝てる存在などいる者か。自分から逃れられる獲物などいるはずもない。

「殺す……何もかも……一人、残らず……っ！」

僅かに残った冷静さが思い起こす記憶。

召喚直後、何かの理由でマスターに逆らって、他の者達よりもより強い狂化を受けた。そんな辱めすらも、本来ならばマスターに向けられるであろう憎悪も、全て目の前の敵を、生きている者を殺す為の燃料として燃やすように思考する事を奪われた。

この記憶も、明日には、一秒後には消えているかもしれない。だからどうした。

今の自分は、ただ敵を殺すだけの獣なのだから。

「殺してやる……殺してやるぞ……」

獣の名はアタランテ。

ギリシャ神話に名高き、女狩人。竜の魔女により思考も、誇りも、何もかも奪われたバーサク・アーチャーである。

第十一話　邪竜百年戦争　オルレアン　6

森の中より連射される矢を盾で防ぎ、背後にいる楓を守りながらマシュは闇に潜む狩人の姿を捉えんと、必死に目を凝らす。
デミ・サーヴァントとして強化された視力であれば、明かりの少ない夜の闇であろうとも十分な視界を確保できるが、木々という障害物が乱立する森の中であっては十分に見通す事は叶わない。そもそも、相手は一度たりとも同じ場所から矢を放っていない。木々の隙間からようやく姿を捉えたかと思えば、あっという間に移動されて見失う。
「速すぎる！　いくらサーヴァントといっても、夜の森でああも早く動けるなんて……っ！」
「マシュ、楓から決して離れないで！　夜の森は、彼女の独壇場です！」
出鱈目に動き回って矢を乱射してるようでいて、大半は楓を狙って放たれている。
狂化されてるとはいえ、やはり超一流の狩人。誰を狙うべきかは、本能的に理解しているのだろうとジャンヌは内心で感心、恐怖すら覚えていた。
「彼女……？　ジャンヌさんは、敵の正体に心当たりがあるのですか？」
「えぇ……少なくとも、私が記憶している英霊の中で、夜の森でこうも戦えるのは一人しか思い当たりません」
「……あぁ、そういう事。確かに、彼女ならこの程度は余裕でしょうね」
ジャンヌの言葉で何か理解しえたのか、メディアも呟く。
フードに隠れて見えないその表情は、どこか複雑そうな、何とも言えない物になっているように、楓は感じた。
「えっと……メディアも、解ったの？」
「多分、アタランテよね？　そこのお嬢さんが言っているのは」
「えぇ……以前召喚された戦いで、面識がありましたから。その能力

も把握はしています」
そういえば、メディアもアタランテとは生前の面識があるのかとジャンヌも理解する。
同じ時代を生きた英霊同士で、一時ではあるが同じ船で旅をした事もある筈。親しかったのかどうかはともかく、正体に察しを付けられるのも当然と言えるだろう。
「アタランテ以外にも、こちらに接近する敵がいます。離脱したいところですが……くっ！」
話に少し集中しすぎていた隙を狙って放たれた矢を、間一髪で叩き落とす。
敵はアタランテを先行させ、こちらを釘付けにしてから一方的に蹂躙しようという腹積もりだろう。冗談ではないが、このままでは本当にそうなりかねない。
強行突破を図ろうにも、人間である楓の足の速度に合わせてとなるとやはり無理がある。仮にこの場にいるのが全員サーヴァントであったとしても、夜の森という悪条件の中で彼女から逃げるのは相当厳しいのだから。
「私の馬車が出せればなんとななりそうだけれど……」
「矢が止んでくれればヒポクリフで逃げ出せるのに……っ！」
ライダークラスとしての移動手段を有する二人でも、やはりこの矢の雨の中では宝具を展開するのは難しい。
マリーの馬車では全員が乗り込むのに時間がかかるし、アストルフォのヒポクリフには全員は乗せられない。
いや、全員一緒に離脱できずとも狙いを分断できればチャンスはあるだろうが……。
「これ、敵が狙ってるのって……もしかしなくても私だよね？」
「そうだね。マスター狙いは、サーヴァント戦での定石だし」
アマデウスの返答を受け、楓は必至に頭を回転させる。
決して頭は良くはないし、戦いの初歩の初歩も理解できていないが、それでも何かできる事は無いかと。
敵が狙っているのは自分。射抜かれた右肩の、メディアにより治癒

されて痕すら残っていないはずの傷が疼くのは、狙われているという事への恐怖からだろう。
　このままマシュ達に守ってもらえば安心だろうが、それでは近づいてきているという他の敵にやられてしまう。
（令呪……はどう命令すればいいのか思いつかないし……礼装は……）
　前の戦闘で上手く活用出来なかった令呪と礼装に活路を求める。
　令呪で敵を見つけろと命令するのは簡単だが、見つけてもあんな出鱈目に早い相手をどう捕まえるのか。捕まえろと命令したところで上手くいくのか解らない。
　カルデアでダ・ヴィンチと女性職員達に羽交い絞めにされ、無理矢理着用させられたカルデア戦闘服に刻まれた魔術をチェックする。
（……ガント？　これ使えるかな……）
　相手の動きを一瞬だけ止める、注意を逸らすという物だそうだ。これを使えば、敵の動きも……と思ったが、あんな動きの速い相手に当てられる自信などあるわけがない。
　そもそも、マシュやアストルフォ達でも目で追うのがやっとなのだ。自分では姿どころか影すら見つける事も出来ないだろう。それ以前に夜の森でまともに物を見る事すら不可能。
　結局、どうすればいいのか見当がつかない。そんな自分に苛立ちを覚えながらも、何か出来る事は無いかと必死に頭を働かせる。
「全く……あなたの十八番だっていうのに、サーヴァントどころか人間一人も仕留められないなんて……使えないわね」
　そんな楓の思考は無意味だと言わんばかりに、更なる悪意は声と共に降り立った。
　ワイバーンの背に立つのは黒。全身を黒い装束で包んだ銀髪の少女。旗を片手に、口元を歪に歪めた銀髪の、ジャンヌ・ダルクと瓜二つの少女であった。
「あれは……ジャンヌさんがもう一人!?」
　話には聞いていたが、いざ実際に目にするとその衝撃はすさまじい物がある。

顔は瓜二つ。服や髪の色、長さ等の差異はあるがまさに生き写しという他ない。
「もう一人？　何を馬鹿な……私こそが本物のジャンヌ・ダルク。そちらにいるのは私の偽物。私が切り捨てた、この国を救おうとした哀れな部分が寄り集まった絞りカスよ」
そう言われたジャンヌの顔が悔しさに歪む。彼女自身、それを否定しきれないという事か。
もう一人のジャンヌはそれ見た事かと言わんばかりに口を吊り上げ、更に追い打ちをと喉を震わせんとして。
「うっさい、黙れよ偽物」
アストルフォの一言が、それを遮った。
「……は？　断言してくれるわね……何を根拠に私を偽物だと？」
「本物なら、何があったって何の罪のない人達を殺戮したりしないからさ」
「はぁ？　私の逸話は知ってるでしょ？　あれだけの裏切りを受け、復讐に走らぬ方が正しいとでも？」
「少なくとも、ボクの知ってるジャンヌならそんな事はしないからね」
お前の意見等聞く耳持たないと言わんばかりの断言。彼を召喚して、まだそんなに経ってはいないがここまでの拒絶を見せるなんて珍しいと楓は思うと共に、明らかに自分よりも格上の相手にあそこまで堂々と立ち向かえるその様は、やはり英霊なのだと理解できた。
「……あぁ、そう。どうやら、何を言っても無駄という事のようね」
「そういう事だよ、偽ジャンヌ！」
その言葉に、ついに黒いジャンヌの怒りは頂点に達した。
指を鳴らすと、彼女が従えていた二騎のサーヴァントが霊体化を解き、その姿をさらす。
一騎は緑色のドレスを身に纏った、獣の耳と尾を持つ少女。その手に握られた弓からして彼女が森から狙撃してきたアーチャー、アタランテだろう。
もう一騎は、羽帽子を被った金髪の男性とも女性とも思える中性的な、サーベルを構えた剣士。

「なら、さっさと死んでもらいましょうか！」
黒いジャンヌの乗ったワイバーンが、口から火球を乱射、楓達を爆撃する。
無茶苦茶かつ出鱈目な乱射。盾を構え、楓を庇うマシュを更に守るようにメディアが防御壁を展開。ワイバーン程度の火球であれば問題ないとばかりに、涼しい顔で全て防ぎきりながら、お株を奪われたとでも言いたげなマシュへ告げる。
「マシュ、サーヴァントは任せるわ」
「えっ……あ、はい！」
直後、爆炎を突き破って飛来する矢を盾で弾き、即座に接近してくる剣士のサーベルはアストルフォが剣で受け止める。メディアも新たな魔術を展開。数発の魔力弾を放ち、ワイバーンの翼を、尾を、頭を吹き飛ばす。
黒いジャンヌは舌打ちをしながらワイバーンを乗り捨て、空中で手の中に旗を出現させ、落下の勢いのままに楓へと叩き付けようとして、それはジャンヌの旗により阻まれる。
「チッ……そう上手くはいきませんか」
「ぐっ……はぁぁっ！」
力いっぱいに旗を振るい、黒いジャンヌを弾き飛ばすものの、ジャンヌは改めて自身の力不足を痛感する。
やはり、ルーラーとしての本来の力を発揮できていない。全体的に体が重く、思うように動く事もままならない。手足に重石をつけられたような感覚とはこういう事を言うのだろうか。
それは相手も察したのか、黒いジャンヌはつまらなそうに、大げさな溜息をつく。
「何それ？　その程度の力しか出せないわけ？　はぁ……その程度なら、わざわざ出てくるまでも無かったかしら！」
そう言いながら、手の中に生み出した黒い炎を投げるように放ち、ジャンヌを狙ったそれは咄嗟に飛び出したマシュの盾に阻まれる。
「ぐぅ……っ!?」
盾越しであっても全身を焼き焦がすような炎。鉛のように重たい

衝撃に、盾と自身を支える両足が崩れそうになるのを必死に堪える。
それを嘲笑うように、黒いジャンヌは力任せに振り抜いた旗を持って盾ごとマシュを殴り飛ばした。
「うあぁっ!?」
「マシュ!」
吹き飛ばされたマシュを受け止め、諸共に地面に転がった楓へと矢が乱射される。
即座に二人の前へと飛び出したメディアが防御壁で矢を弾きながら、適当に狙いを付けた魔力の球を数発、お返しにと発射。当然とばかりにアタランテは全て回避、着弾した魔力の爆発音だけが森に響く。
「あ、ありがと……メディア」
「全く……マスターが不用意に無防備晒すんじゃないわよ」
呆れたように呟きつつ、手早く別の魔術を展開。黒いジャンヌに牽制の魔力弾を放ちながらマシュに治癒。更には楓へと簡易の防御術式を掛ける。
「まだやれるでしょ？　というよりも、マシュに盾役やってもらわないと私が死ぬわ」
「は、はい！」
すぐさま立ち上がり、マシュは盾を構え直して黒衣のジャンヌと対峙。
それを後方で見やりつつ、メディアは周囲を視察。アストルフォは苦戦しながらも相手のセイバーをどうにか抑え込み、マリーとアマデウスはジークフリードの援護に回っているようだ。
（さて、ここからどうするべきかしら……）
もっとも厄介なのはアーチャー、アタランテだ。
彼女さえどうにか出来れば逃げる算段は格段につけやすくなるが、夜の森で彼女を捉えるなど今のメンバーでは不可能に近い。今は姿を晒しているが、また木々の奥へと隠れられたらそれこそアウトだ。
では、どうするべきかとメディアは思案する。策を考えて立ち回るのはキャスターの本分なのだから。

（こちらのセイバーとルーラーは万全じゃないようだし……戦力的にはこっちが圧倒的に不利と……）

マシュは盾役としては当てにできるが、攻撃となると少々心許無い。アストルフォも、正直言ってそっち方面では頼れる英霊ではないだろう。それでも敵のセイバーにどうにか食らいつき、持ちこたえているのだから十分だ。

こちらのセイバー、ジークフリードは表情にこそ出していないが全身を蝕む呪いのせいで立っているのも辛いはず。一目見れば、彼の全身を流れる魔力が強力な呪いで阻害され蝕まれているのもよくわかる。

ルーラー、ジャンヌ・ダルクに至っては本来の力の半分も出せない有様。どちらも前衛を買って出てはいるが現状ではどちらも言う程頼りにならないし、アマデウスとマリーは最初から論外。どちらも戦闘力を期待しては駄目だろう。

（となると、打つ手は……）

マシュとアストルフォ。そして、ジャンヌとジークフリードの前衛四人にに魔術的強化を施しながら思考を走らせる。

陣地作成スキルでこの森一帯を自身の陣地にするのは不可能。戦闘中にそんな時間は無いし、準備している間に自分が殺されるのがオチだ。

自分の魔術による攻撃も状況打破には至らないだろう。

（……どうしても博打になるかしら？）

唯一ひっくり返せるとすれば自身の宝具。あまり使いたい代物ではないが、その有用さは決して他の宝具に劣る筈はないと自負している。ただ、唯一にして最大の欠点である射程の短さからくる発動条件の厳しさがその可能性を博打に変える。

相手の懐に飛び込むなど、キャスターの身にしてみれば自殺行為以外の何物でもないのだから。

「……ねぇ？　今、新しいサーヴァントを召喚するって……駄目かな？」

「はぁ？」

突如、そんな事を言いだした楓に思わず呆れと怒気が入り混じった声を漏らす。
考えなかったといえば嘘にはなるが、一秒足らずで却下した案だ。自身の陣地作成と同じく、そんな暇を相手が与えてくれるはずもないのだから。
「この状況で召喚なんて、敵に殺してくださいって言ってるような物よ？　第一、呼んだところでまともに戦えるサーヴァントを引けるかどうかも怪しいのだから……それなら、今この場にいる他の英霊と契約した方がまだ現実的ね」
「で、でも！　私に出来る事ってそれぐらいしかないかなって……ガントも当てる自信ないし……」
「ガント……？　あぁ、その礼装の……いえ、ちょっと待ちなさい」
まじまじと、楓が身に纏う礼装を見やる。
このカルデア戦闘服には、ガントの他にも魔術が組み込まれている。それについても一応目を通していたなと記憶を呼び起こし、今の戦況を確認する。
「……マスター、確かその礼装には……」
メディアの脳裏に、一つの作が思い浮かんだ。
どう転んでも博打にしかならない作戦だが、せっかくマスターがやる気になってくれているのだ。
彼女にも、体を張ってもらうとしよう。
「……良いわね？　あなたのタイミング次第ですべて決まるわ」
「う、うん……解った！」
恐怖と重圧に震える声で、それでいて決意に満ちた声で楓はメディアの提案を受け入れた。
深く息を吐き、可能な限り自身を落ち着かせてから楓はメディアから簡単にやり方を教わった方法を復唱しつつ、念話を行う。
マスターとサーヴァントの間に流れる魔術的な繋がりを利用しての物であれば、魔術方面の素養が一切ない彼女でも礼装の補助なしで可能なはずだ。
『えっと、これで良いのかな……？　アストルフォ、聞こえる？』

『はえっ!?　な、なんだ念話か……何マスター？　今、ちょっと余裕無いんだけど！』
敵のセイバー相手に必死に食らいついている最中、突然念話を繋げられたのだからイラつきもするだろう。
そんな彼の不機嫌さが解るような、あまり見せない荒げた声で返された事に驚きつつも楓は言葉を返す。メディアの立てた作戦を実行するなら、足の速さに優れた彼の協力が必要不可欠なのだから。
『アストルフォ、敵のアーチャーに突撃して欲しいんだけどお願いできる？　宝具使ったっていいから』
『ちょっ！　無理だよ！　このセイバーで手一杯、なんだからさ！』
頭の中に直接声が聞こえてくるという感覚に違和感を覚えるが無視。この程度の事でへばっているようでは、これから先の旅など続けていられないのだから。
『お願い！　アストルフォが頼りなの！』
『……あー、もぉ』
敵セイバーの剣をどうにか受け止めながら、アストルフォの口元は緩む。
全く、自分のような世辞にも強いとはいえないどころか弱い英霊を頼りにするなど、あのマスターはどうかしているとしか思えない。
だが、頼ってくれる以上は応えよう。それこそが、騎士でありサーヴァントである自分が成すべき事なのだから。
「了解、マスター！　突っ込むよ！」
セイバーの刺突を避けきれず、剣先を掠めた頬が切り裂かれるが気に留める事無くアストルフォは一目散にアーチャーへと突撃する。
アーチャーは当然の如く矢を放ち、アストルフォの迎撃に移る。槍を盾代わりに己へ飛来する矢を防ぎ、それでいて肩や足を掠めていく物は無視してひたすら真っ直ぐ、楓の指示を信じてアタランテの懐目掛けて突撃する。
「チィィッ！」
流石に馬鹿正直に飛び込まれるのを待つわけもなく、アタランテは矢を放ちながら後方へと飛び退くために足に力を込める。

一秒にも満たない時間。アストルフォの足では当然――今からヒポグリフの真名解放を行おうとも――間に合わぬ確実にして無慈悲な回避。深夜の森に身を潜めれば、彼女を見つけ出す事など不可能に近いのだから。

「させないよっと！」

その声と共に、アストルフォを飛び越える影があった。

見れば、それは水晶で形作られた馬。その背に跨るマリーとアマデウスの姿があり、アマデウスの手にはバイオリンが握られている。

「いくら戦闘向きじゃないといっても、これぐらいの事はしないとね」

アマデウスがバイオリンを奏で、その美しいとしか評せぬ音色が響き渡る。

直後、アタランテの背面にで起きる破裂音。彼女が何事か理解する間もなく、立て続けにその周囲で起きるそれは文字通り、音の爆発。周囲で立て続けに起きる小規模の、威力こそ大した事は無いが彼女の動きを封じるには十分であった。

「グ、ァァァッ!?」

「どうだい？　威力は大した事ないけど、足止めには十分だろう？」

「ありがと、アマデウス！」

そうして、アストルフォはアタランテの懐へと飛び込んだ。

メディアもそれを確認すると共に、楓へ目配せし、彼女も即座に動く。この礼装に刻まれた魔術の一つを起動させる為に。

「礼装解放……オーダーチェンジ！」

礼装から魔力がほとばしり、メディアとアストルフォの足元に魔法陣が展開した直後、二人の位置が一瞬で入れ替わった。アストルフォは楓の傍に、メディアはアタランテの懐に。

この礼装を着用したマスターの指示かに、契約関係にあるサーヴァントの位置を入れ替える魔術。本来、マスター一人に対してサーヴァント一人という基本的な関係であれば使い道も無く、活用される事も無かったであろう試作的に刻まれたそれが、この局面で活きた。

「っ!?」

突然懐に現れたメディアの姿に驚愕し、反応が遅れたアタランテ。

いかに戦闘が不得手であろうとも、メディアにとってもその僅かな隙で十分。懐より取り出した一本のナイフを、アタランテの胸元に突き立てるだけの時間はあったのだから。
「破戒すべき全ての符（ルーブレイカー）」
メディアが突き立てたナイフの真名が解き放たれ、アタランテの内側から噴き出すように魔力が強制的に放出される。
「ガ、ァァァァァァァァァァァッ!?」
悲鳴をあげながら全身を痙攣させるアタランテ。その様子を見やり、即座に何を意味するか悟った黒のジャンヌは右手の中に炎を握りしめ、無造作に投げつけんと構える。
別にアーチャーはいてもいなくても困らない駒。ならば、あのキャスター諸共に吹き飛んでもらうとしよう。そう結論付けて、炎を投げつけようとして。
「っ!?」
後頭部に、何かを撃ち込まれた衝撃が走った。
見れば、こちらに指先を向けた人間が、桐生楓が全身を恐怖に震わせながらそこに立っていた。
「あ、あたった……っ！」
メディアが狙われている事に気づき、咄嗟にカルデア戦闘服に刻まれた魔術の一つであるガントを黒のジャンヌへ放ち、見事に後頭部にヒットさせた自分を褒めてやりたい。
狙い通り、あの魔女の注意はメディアから自分に向いている。人を射殺しそうな程に鋭い視線で、殺意をむき出しにしたそれをこちらに向けられ、腰を抜かして失禁しそうになるほどの恐怖を感じているが真正面から受け止め、踏ん張って耐える。
皆頑張っているのに、自分だけ恐怖に負けて泣きじゃくる等、もう二度と御免だと自らを怒鳴りつけるが如く。
「……邪魔よ」
短く吐き捨て、魔女は炎を楓目掛け投げ放つ。
人間では反応出来ない速度で突き進む炎が楓を飲み込むまでほんの数秒未満。何が起きたのか理解する間もなく、炎に食らい尽くされ

る。そんな確実に訪れる死を阻まんと、楓の正面に躍り出たマシュが魔女の獄炎をその盾で受け止めた。
「っ！　ぐ、ぅぅ！」
盾ごと吹き飛ばされそうになるほどの衝撃をその身に受けながら、両足を地面に食い込ませるほどに踏ん張ってマシュはその炎を受け止め、楓に火の粉一つすら落とさんと必死に防ぐ。
戦いでは他の皆に劣る身。実際、このオルレアンに来て最初の戦いで惨敗という無様を晒した身なれど、マスターを守り抜く盾としての意地と覚悟だけは決して砕け、折れる事は無いと言わんばかりに。
だが、長続きはしまい。もう一撃か二撃見舞えばたやすく砕ける守りだと、魔女は追撃をかけんと新たに炎をその手より吐き出さんとして。
「させません！」
横合いより飛び出してきたジャンヌの、横薙ぎに振り払った旗がそれを防ぐ。
体勢を崩され、炎も明後日の方向へ飛ばされ、舌打ちと共に己の旗を持ってジャンヌへと攻撃を仕掛けるも、それは彼女の陰より飛び出したジークフリードにより防がれる。
「くっ！　この……死に体の分際で！」
「死に体でも、この程度の事は出来るという事だ」
力の半分も出せないルーラーと、その身を蝕む呪いで死に体の騎士。
大した事のない相手ではあるが、それでも二対一という数の差はいかんともしがたい。
「ちぃっ！　セイバー！」
ならばと指示を出し、マシュの盾の防御範囲外たる真横から、楓を狙って突撃するのはセイバー。
細身のサーベルを構え、楓の胸を刺し貫かんと一足で敵対するマスターを己の間合いに捉えるが、それを阻むのはこの戦いで剣を交えた一人の騎士。
楓を狙う刺突を防ぎ、槍を振り回してセイバーを後方へと飛び退か

せてアストルフォはニヤリと笑う。
「さっきは中断しちゃったけど、キミの相手はボクだろ？」
「……忙しいヤツだな、君は」
何度かの打ち合いで実力的には自分に劣ると身をもって知っている筈なのに、こうも食らいついてこられるといい加減に苛々が募る。あるいは、この身に付与された狂化が無ければ好敵手として認めたかもしれないが。
チラリと状況を確認する。アーチャーは消滅こそしていないが沈黙し、こちらのマスターは抑えられている。冷静に考えればこちらが不利だが、それをマスターは理解しているのかどうか。
（あれで直情的だからな……困ったものだが……）
ムキになって戦闘を継続しようとしなければ良いのだが、と内心小馬鹿にしたような不安を抱くセイバー。
そんな不安を抱かれていると知ってか知らずか、黒衣の魔女は己の内側から湧き上がる噴火寸前の怒りにどうにかなりそうだった。
力はこちらが上だったはずだ。狂化を付与し、本来持つ力を更に引き上げた自身のサーヴァントを二騎。それもスペックであればトップクラスのセイバーとアーチャーを引き連れてきたのに何故、こちらが追い込まれている。
数の差は確かにあったが、本来の力をろくに引き出せないルーラーとセイバー、こちらのランサーとアサシンが一方的に蹂躙した雑魚二人、ろくに戦えない論外が二人と、圧倒的にこちらの戦力が上だったはずなのに。
（一体何が違う！　どうしてこうなる!?）
単純な力押しで蹂躙できるはずだったのに。仮にアーチャーかセイバーを失ったとしても、自分達が勝てるはずだったのに。
あのキャスターがアーチャーに宝具を撃ち込む事を防げなかったのが原因か？
そもそも、アーチャーに突っ込んでいったのはライダー。あれを軽視していたせいか？
否、そのライダーとキャスターが一瞬で場所を入れ替える転移魔術

さえ無ければ。
（アイツ、か……っ！）
　あのマスター。そういえば、アーチャー諸共にキャスターを始末しようとした時も邪魔をしてくれた。
　たかが人間だと軽視した。サーヴァントがいなければ何もできない存在であると見下していた自分の落ち度か。
　怒りがマグマの如く燃え滾るが、同時に今はどうしようも無い事を理解する。無理矢理押し通るという方法もあるが、それは控えるべきだろう。自分でも気味が悪くなるぐらいに、冷静なまでに何かがそう訴えてくる。
「……セイバー、撤退するわ」
「了解した」
　言われるがまま、アストルフォへと向けていた剣を下げ霊体化するセイバー。
　それを見届け、空に待機していたワイバーンの背へと飛び乗った黒のジャンヌは最後にもう一度、眼下にいるジャンヌと、楓へと視線を向けた。
「……ここは大人しく負けって事にしてあげるわ」
　そう言い残し、魔女は飛竜の群れと共に夜空へと消える。
　あっさりと引き上げてくれた事に戸惑いを覚えながらも、退ける事に成功したのだと確信して、楓はその場に尻もちをつくかのように、崩れ落ちた。
「お、終わった……？　は、はは……終わった……よね……？」
　必死に堪えに堪えていた恐怖心が爆発し、最早立っていられないとばかりに全身がガクガクと震えている。
　あの黒いジャンヌに睨みつけられた時は本当に怖かった。視線だけで人を殺せると言われても信じてしまいそうなぐらいに、もう二度とゴメンだと泣き叫びたい。
　しかし、彼女達を倒さない限りはカルデアに戻る事すら出来ない。そう考えると逃げたくなってくるが。
「先輩、大丈夫ですか!?　怪我とかしてませんか!?」

「ガント決めた時のマスター、カッコよかったよ！」
マシュとアストルフォの声に、その気持ちも和らいでいく。
ほんのちょっとだけれど、今度は彼女達の役に立てたのだという実感がようやく沸いて来て。
「そ、そう……かな？　うん、そうかな……」
ほんの少しだけだが、自分に掛かる重圧や恐怖心が消え去った。
そんな気がした。
「やれやれ……あっちは賑やかなものね」
そんな三人の様子を離れたところで見やりながら、メディアは足元に倒れるアタランテの傍に腰を下ろす。
自身の宝具、あらゆる魔術を初期化する力を持つルールブレイカーによって彼女とマスターであったらしい黒のジャンヌとの契約は断たれた。マスター無しでもある程度は現界し続けられる単独行動のスキルと持つアーチャーたる彼女ではあるが、狂化を付与されている事で激しくなった魔力消費を考えると長くは持つまい。
「アルゴー号以来だったかしら？　全く……嫌な再会をしたものね」
「……あぁ、そうだな」
契約を断たれ、一層激しくなった魔力消費に比例して後付けでしかなかった狂化も弱まったのかアタランテはまともな会話ができる程度の理性を取り戻していた。
「礼を言う。これで、これ以上無益な殺戮に力を貸さずに……済むからな」
「……それはどうも」
次第に実態を保てなくなり、消えていくアタランテの体。
それに気づいたのか、楓達も彼女の下へと集まってきていた。
「……お前が、マスターか？」
「う、うん……そうだけど……」
「そうか……お前達には、借りが出来た、な……」
自嘲気味に笑い、オルレアンに呼ばれてからの最悪な記憶を思い返す。
呼ばれた直後に狂化を無理矢理付与され、男女や大人子供の区別な

く無理矢理殺させられ続ける日々もこれでようやく終わるのだと思うと、ほんの少しでもあの気に喰わないマスターが悔しい思いをしたのだと思うと、少しは清々しい気持ちで消える事が出来そうだ。
「アタランテ、もし知っているなら教えてください。私達は聖人系のサーヴァントを探しているのですが……」
「……あぁ、そういえばお前もいたか」
声に対し目線だけ向けて、ぶっきらぼうにアタランテは声を返す。
ジャンヌに対してどこか棘のある態度。やはり、もう一人の彼女に無理矢理仕えさせられていた事が気に入ら勝った事が、そのままジャンヌにも向いているのか。
いや、それだけではない何かがこの二人にはあったのだろうと、楓は何となく感じていた。
（……流石に、聞いたら不味いよね……）
聞きいてみたいという衝動をグッと堪え、二人の様子を見やる。
ジャンヌもアタランテに対し、どこか申し訳なさそうな表情を浮かべているのは、自分の感がとりあえず外れていないという事だろうと解釈で来たから。
「一人知っているが……生憎とこちら側のライダーだ。他の連中より話は通じるかもしれんが、お前達の期待には応えんだろう」
「そう、ですか……」
「だが……お前達以外にもあの黒いのに敵対するサーヴァントはいるらしい……居場所は知らんがな……せいぜい、頑張って探す事だ」
狂化の最中に小耳に挟んだ程度の話だから信ぴょう性は無いかもなと付け加えられたが、それでも有益な情報には違いなかった。
自分達以外にもあの黒いジャンヌと戦う者がいるのだから、最悪聖人でなくても仲間にはなってもらえるかもしれないのだから。
「さて、私は……そろそろ消える頃合いか」
最後に、アタランテは顔を楓の方へと向ける。
「この借りはいずれ返したい。今度会う機会があれば……その時はお前達の味方である事を願おう……」
そう言い残して、アタランテは粒子となって消滅した。

今度会う機会が何時になるか解らないが、それも案外そう遠くは無いかも入れない。
不思議と、楓はそんな気がしてならなかった。
「さて……もうすぐ夜明けですし、このまま出立しましょう」
「そうだね……あ、でもその前に」
楓はメディアの方へと向き直り、右手を差し出して。
「ありがと、メディア。あなたのお陰で、私もちょっとは役に立てたみたいだし」
「……ふん。あの程度、役に立ったとは言い難いのでは無くて？」
「えっ!?」
「それでもまぁ……」
うっすらと笑みを浮かべ、メディアも腰を上げて楓の右手を取る。
「あなたのガントは……いいタイミングだったと思うわよ」
ほんのちょっとだけは、見直してやらなくもない。そういわれた気がした。

振り下ろされた斬撃が、胸を切り裂く。
誰がどう見ても致命傷たる一撃。切り裂かれた女性は苦悶の声を漏らしながらも、どこか安堵した表情を浮かべて瓦礫に背を預けるように倒れ込んだ。
「流石……ですね。あなたに、止めてもらえるのは……恐れ多い、ですけど……」
自身を切り捨てた相手に送るのは称賛の言葉。
申し訳なさと感謝の意を込めたそれに対し、女性と戦っていた男は静かに首を振る。
「いえ、あなたともっと早くに出会えていれば……このような悲劇を起こさせずに済んだと思うと……」
「何を言うのですか……この私はとっくに血に汚れた身です。私の方が先に召喚されていた以上、どうしようも……無かったのですから……」

瓦礫の山と化した街の一角。
女性は自虐的に嗤って、男性を見やる。
「行ってください、聖ゲオルギウス。きっと、この地のどこかにあなたを必要としている人たちが……いる、はず……」
言葉と共に、女性はサーヴァントとしての肉体を保つ事が出来ずに消滅した。
ゲオルギウスと呼ばれた男は静かに目を伏せ、消滅した彼女へと黙とうと祈りをささげる。
せめて、次に呼ばれる時には狂化に飲まれる事なく、本来の彼女としてその役目を果たせることができるようにと。
「そっちは終わったの？」
「こちらも片付きましたわ」
ゲオルギウスの背に言葉を掛けるのは、二人の少女。
竜を連想させる角と尾を持った紅い髪の少女と、高価な着物に身を包んだ薄緑の髪の少女。
そのどちらもサーヴァント。この廃墟の街の、別の場所にて僅かに生き残った人々を襲っていたサーヴァントを一騎屠ってきたところだ。
「はぁ～、全く。あの仮面の男、キモイったらないわ。何がクリスティーヌよ……疲れた……」
「私、バーサーカーですが……あの方よりはマシですわよね」
「……かもね」
そんなやり取りを聞き流し、ゲオルギウスは剣を納める。
次にやるべき事は生き残った人々を安全な場所まで移動させる事と、その旅路の護衛だ。
「では二人とも、次へ行きましょう」
その後、この地のどこかにいる筈の、同じく竜の魔女を打倒する為に戦う仲間達を探す為に再度旅立つべきだ。
まだ見ぬ仲間達はきっとどこかにいる。そして、出会う日もそう遠くはない。
主から啓示が降りたというわけでもないが、ゲオルギウスにはその

確信があった。

第十二話　邪竜百年戦争　オルレアン　7

黒いジャンヌ達を退けてから数日が過ぎた。
特に追撃されるという事もなく、ワイバーンやスケルトンとの遭遇戦が何度かあった程度で旅その物は順調と言えば順調だ。ジャンヌは追撃が無い事を気味悪がっていたが、襲ってこないのならばそれに越した事は無い。
最も、肝心な聖人系サーヴァント探しは上手く行かず手掛かりすらつかめていないのが現状なのだが。
「とりあえず、ここまでにしておきましょうか」
「はぁ……つ、疲れたぁ……」
「魔術回路の活性化を促せば、少しはその礼装もまともに使えるようになると思ったけど……思ってたより時間がかかりそうね」
ワイバーン等から身を隠す為に入った森の中での小休止。楓にとっては、メディアからの講義の時間でもある。
正確にはほぼ実技。楓の魔術回路はカルデアに来る前に開かれたというだけで、ろくに使われていない。もともとの本数も大したことが無く、どんなに努力しようが魔術師として大成する事はあり得ないが、それでも活性化させれば礼装の運用がもっとスムーズにはなる。
故に、メディアは楓に魔術回路を使わせる事にした。礼装に刻まれた魔術を行使させるも良し。魔力を通さないと解けない紐で軽く手を縛って、自力で解かせてみるも良し。とにかく楓の体が、魔術回路が魔力を使うという行為に慣れさえすればよいのだ。
「最初は初歩的な魔術ぐらい礼装無しでも使えるように仕込むつもりだったけど……あなたの場合、そもそも魔力の行使という物に体を慣れさせる事の方が重要ね。魔術の才能云々以前だったわ」
「それは良いけど……もっと手早く、出来るようにとかならない？その……次もいつ敵が来るか解らないし……？」
何を生意気なと思う発言ではあるが、楓は楓なりに自分に出来る事を増やしたいのだろう。
前線で体を張り続けるマシュ達の助けになりたいと、その純粋な意

志はメディアも感じているし、積極的な姿勢は好ましい。
ただ、それはそれとして少々焦り過ぎでもある。
「そうね……方法が無いでも無いわ」
「ホント!?」
「えぇ……ただし」
一度咳ばらいをして、メディアは続ける。
「あなたの魔術回路を強引に活性化させる事になるわ。まだ体が魔術という物に慣れきっていない状態でそんな事をすると……結構苦しいわよ？」
「ちょっとぐらいなら、我慢できるかなって思うけど……」
「へぇ……なら、やってみましょうか」
悪戯っぽい笑みを浮かべ、メディアは手袋を脱いで楓の頬に素手で触れる。
そのまま撫でるように手を滑らせ、カルデア戦闘服の襟を外して胸元に彼女の手が触れ置かれた。
「へっ？　え、ちょっ……」
「騒がないの。じっとしてなさい……そう、そのまま力を抜いて……」
同じ女性とはいえ、胸に遠慮なく触れられるというのはやはり気恥ずかしい。
メディアの声色も普段より優しく、それでいて同性であっても動揺を隠しきれない。楓も初めて感じる大人の色気というものが籠った、妖しい色香すら漂わせるように耳元で囁くのだから。
「メ、メディア……や、め……恥ずかしいって……」
胸元を滑るメディアの手。楓は羞恥で頬を赤く染め、少しずつ息が荒くなってくるのを自覚する。
一行の中で誰よりも大人であり、顔も体格も厚手の衣装で隠している物のスタイルの良い美人に胸元を直に触れられ、未知の感覚が湧き上がってくる。
胸元のファスナーも降ろされ、普段は戦闘服の下に隠された部分をあらわにされながらも一切の抵抗が出来ずにされるがまま、メディアの手が楓の胸の谷間に滑り込み。

「そうね……ここかしら……？」
「や……ぁ……」
　果たして何をされるのか、嫌でもそっちの方向に思考が働いてしまい羞恥を超えて恐怖に似た物すら湧き上がる。
　こんな昼間の野外。すぐ近くに皆がいるというのに、この魔術師はもしかして凄く大胆な――――！
「っ!?」
　ドンッと、そんなやましい考えを一瞬で吹き飛ばす程に強い衝撃が楓の胸を起点に走った。
　ほんの一瞬ではあったが、全身の神経という神経に直接電流を流されたかのような衝撃と痛みが駆け抜けて楓はその場に崩れ落ちる。
　苦しいなんて言葉では表現しきれぬ苦痛と吐き気。視界が真っ白になり、気を失いそうになっても痛みで意識が覚醒し、自分でも今何を考えて、何をしているのかが理解できない。
「げほっ！　えほっ！　あっ……ぐぅ……な、なに……い、まのぉ……っ!?」
　苦し気に、ようやく吐き出した疑問の声に対してメディアはいつもの淡々とした調子で――若干、楽しそうに――答えた。
「ほんのちょっとだけ、あなたの魔術回路を刺激したの。ちなみに、あなたがご所望の方法をやるとなると……そうねぇ。今のを数時間ぐらい我慢してもらう事になるけど？」
　今の衝撃と苦痛が数時間と聞いて、血の気が引いた。
　ほんの一瞬でもこの有様なのに、数時間どころか数分すら耐えられるわけがない。
「私は別に構わないわよ？　まぁ、やるにしても外でやるわけにもいかないわね……どこか二人っきりになれる場所で簡易の工房でも作って……少しばかりあなたを着飾らせてぇ」
　メディアの脳内では、どんどん話が進んでいるようだ。
　コスプレさせられて今のを数時間。しかも二人きり。考えただけでゾッとする。
　教会の地下室で白いドレスに着替えさせられて、背中とかお尻とか

触られたりして辱めを受けるんじゃないかとか、負担は弱めにしてじわじわ嬲るようにされるのではないかとか、妙に具体的なイメージが浮かんだのは気のせいだと思いたい。
「……や、やっぱり……今の、ペースで……お願い……しま、す……」
これ以上は不味い。自分は地雷を踏み抜いたのだと、楓は謝罪した。
仮に実行したら、数時間と言わず一晩か二晩もの間、じっくりと彼女に調教されてしまいそうだと謎の確信すらある。
「素直でよろしい。でも、残念ねぇ……あなた、素質は全然だけど見た目は可愛いし色々着替えさせたら楽しめそうなんだけど」
なんだか怖い事を呟きながらメディアはその場を後にした。自分の身の程をわきまえない提案に怒ったのもそうだが、コスプレさせて色々しようとしていたのはもしや本気だったのか。
さっきまで胸元を散々弄ばれていただけに、妙に生々しいリアルさを感じてしまって身震いする。
色々と大切な物を失わずに済んだかもしれないが、カルデアに戻った後とか怖いかもしれない。安堵と不安の息を漏らすと共に楓は手足を投げ出して大の字になって地面に寝ころび、荒く息を吐きながら空を見上げる。
「酷い目にあったぁ……自業自得だけど……ん？」
視界一杯に広がる青い空。元々、こうして空を見上げるような事も殆どしてこなかったが故に「空はどの時代でも同じなんだなぁ」なんて台詞は出てこない。ただ、それでも違和感を感じるのはあの光の輪。のせいだろうか。
（あれ……どれだけ大きいんだろ……）
初めてオルレアンに来た時から見えていた光の輪。この世界のどこにいても、昼夜問わず空を見上げると必ずそこにある。ロマニ達の解析でも魔術的な何かだろうという事しか解らず、メディアにもあれはよく解らないらしい。
ただ、あれが魔術であればとんでもない力を持った魔術師が行使した物だと言っていた。

（魔術の事なんて、全然解んないからどう凄いのかイマイチ解んないけど……）
少なくとも、メディアがとんでもない魔術だと言っているのだからそうなのだろう。
彼女にお仕置きされた胸元がまだジンジンと痛む。礼装の上からどころか、わざわざ露出させてまでやってきたのは――楓認定の――趣味と生意気な弟子へのお仕置き込み、といったところか。
目線を向け、胸元を見ると痣らしきものは一切ない。その辺は考慮してくれたようだ。
「はぁ……」
開きっぱなしの胸元を戻す事もせず、仰向けのままぼんやりと空を見やる楓。
体にフィットさせるタイプの礼装故、襟を外すだけでも割と緩くなって快適だし、吹きぬける風が汗ばんだ肌に心地よい。故に、このまま少し寝てしまっても構わないだろうか。
「年頃の女の子が、胸元出しっぱなしなのは感心しませんよ？」
「はい？」
なんて事を想っていた矢先に声を掛けられ、顔を向けるとそこにいたのはジャンヌだった。
「あっちで男性陣がチラチラとあなたを見てましたのでさっき注意しましたが……あなたもちょっと無防備すぎですね」
「え……ちょっ!?　えぇぇぇぇっ!?」
咄嗟に体を起こし、胸元を両腕で隠しながらジャンヌが横目で見ていた方角へ視線を向ける。
そこには気まずそうにしているアストルフォと、眼福眼福と言わんばかりのアマデウスがいた。
「〜〜〜〜〜〜っ!?」
バッチリと見られていたようである。
「ご、ごめんマスター！　つい視線が向いちゃったと言うか、なんというか！」
「僕よりガッツリ見てたよね、キミ」

「なんて事言うんだよ！　そりゃ、ボクだって男だからつい気にはなっちゃうと言うか……マスター可愛いし、ついっていうか……」
アストルフォ、お前……男だったのか。
楓はここで彼の性別を初めて知ったのだが、最早それはどうでも良い事である。
「ぐ、ぐぬぬ……っ！　わ、私も確かに無防備だったのが悪いけど……ぬぅぅぅ！」
怒りを覚えなくもないが、確かに無防備過ぎた自分も悪い。
ここは怒りを抑え、高い授業料だったと諦めるべきか。それはそれとして、暫くあの二人には近づくのやめておくべきかもしれない。
「まぁ、二人には私からも言っておきましたから。ところで隣座っても？」
「それは、別に良いというかイチイチ許可取らなくてもいいよっていうか……？」
「では、失礼しますね」
そうして、ジャンヌは楓の隣に腰を下ろした。
「何か用？」
「いえ、特に用事というわけでもないのですが……あなたと、ちゃんと落ち着いて話をした事は無かったなと思いまして」
言われてみれば、初めて出会った時はマシュとアストルフォが瀕死の状態に追い込まれていたところを助けてもらい、その後も二人に付きっ切りだった。
軽く自己紹介程度は済ませていたが、まともな意味で言葉を交わしたかと言われると……。
「あ～……そういえば、全然だね。なんか、ゴメン」
「いえ、気にしないでください」
苦笑気味に言うジャンヌ。まさか謝られるとは思っていなかったようだ。
「それにしても、あなたはこの数日で強くなりましたね」
「へ？」
「己の無力さに泣いていた時とは見違えるほどですよ。その……あそ

こまで折れてると、元に戻るのも少し難しいかと、失礼ながら思ってしまいまして」
「……あぁ……あはは、あの時はその……お見苦しいところを、オミセシマシタ……」
顔を真っ赤にして、気恥ずかしそうに楓は目を逸らす。
あの時はマシュとアストルフォが無残に敗れ、自身もマスターとしての不甲斐無さを容赦なく叩きつけられて、情けなさと二人への申し訳なさでみっともないぐらいに泣きわめき、挙句八つ当たりまでしてしまった。
今思えば恥ずかしいというかなんというか、穴があったら入りたい。
「いえ、見苦しいなんて思いませんよ。サーヴァントの為に泣けるマスターに、悪い人はいません」
故に共に戦う事を迷うことなく選択できた。
演技ではない、本当の涙を使い魔（サーヴァント）の為に流せるのだから、きっと善良な人間なのだろうとすぐに信用できた。
そして、自分でも何かを成そうと必死に努力する様。完膚なきまでに折れてなお、すぐにそう行動に至れる楓の姿がジャンヌには好ましかった。
「ルーラーはマスターを持つ事はありませんが……もし、マスターを持てるなら貴女のような人がいいですね」
「ふぇ!?　いやいやいや！　それはほめ過ぎだって！」
流石に、そこまで言われるほどの事をしていなければ、そんな立派な人間でも無いと慌てて否定する。
褒められて悪い気はしないが、過度に褒められてもこそばゆいというか、自分なんかをそこまで評価されてもというか、もしや「とりあえず褒めまくっておけばいい」なんて思ってやしないかこの人とさえ思えてしまう。
「そりゃ、今はマスターなんてやってるけど成り行きでそうなったようなもんだし、元は補欠の補欠みたいな感じだったし……」
「それでも、今は前を向いているでしょう？　それが出来るだけで、私

は凄いと思いますよ……」
　流石に褒め殺しにも程があると、楓は顔を真っ赤にして俯き、恨めしそうに横目でジャンヌに視線を向ける。
「そこまで言われるような事してません……それ言うなら、ジャンヌだって十分凄いと思うんだけど……」
　フランスを勝利に導いた後、魔女として処刑された少女。この程度の知識でしかないが、楓もジャンヌの事を一応は知っていた。
　比較的テレビ等の題材に取り上げられる人物ではあるし、歴史の教科書か何かで名前を見かけた事はある。まさか、実際に目にする機会があるなんて思ってもいなかったが。
「その、さ？　こう言っちゃ悪いけど……かなり酷い形で殺されちゃったのに、それでもフランス守ろうってなれるんだし」
　自分を裏切って殺した相手を守れるかと問われると、無理とまではいかなくても難しいと答える者が多いのではないか。
　少なくとも、楓はそう思っているし、あの黒いジャンヌの言い分も正直解らなくはないというのが本音だった。
　だからといって、むやみやたらの虐殺を行うという事が正しいとも思えない物の、自分が同じ立場なら同じく復讐に走るかもしれない。
　だからこそ、守るという道を選べる自分とそう歳も変わらない筈の彼女は凄いと思うのだ。
「私が、ですか？　いえ、私の方こそ大した事はありません。聖女等と呼ばれていましたが所詮、田舎者の村娘です。それに、今はサーヴァントとしても半端者ですし……」
　実際、黒いジャンヌとその配下サーヴァントに襲撃された時は殆ど何もできなかった。
　もしも自分一人だったなら確実に殺されていたどころか、まともな反撃すら不可能だっただろうと言う確信がある。楓とメディアの働きが無ければ、あのまま押し切られていただろうと。
　ルーラー本来の力があれば、多少手こずっただろうが少なくともセイバーとアーチャーの二人はどうにでも出来たと思うだけに、今の自分の半端さが不甲斐無い。

「じゃあ、私達って半端者同士？」
「……ええ、そうかもしれませんね」
マスターとして半端者とサーヴァントとして半端者。確かにその通りだと、思わずジャンヌは笑みを零す。
本人は否定したが、やはりマスターを持てるなら彼女のような人物が一番良いかもしれない。
契約を結べば、本来のスペックとまではいかずとも戦うのに十分な力を取り戻せる可能性はあるが……そこまで考えて、ジャンヌはそれを否定した。
あらゆる意味で素人でありながら、すでに三騎のサーヴァントと契約しているのだ。これ以上の負担を増やすというのは、やはり躊躇われる。
「どうかした？　なんか、私の顔じっと見てるけど……」
「いえ、何でもありません」
それに、いきなりそんな提案をしても戸惑うだけだろう。マスターとして成長途上の彼女にとって、今は契約した三騎との絆を育む事こそ重要なのだから。
対して、楓はジャンヌが何か言いたそうにしている事を何となく察し、それにどう反応するべきかを考えていた。
わざわざ自分に話しかけるような用事となると、思いつく事は限られるのだが……。
「……もしかして、私と契約したい……とか？」
「えっ!?　いや、その……そう、ですね。考えなかったといえば嘘ですが……」
まさか楓の方からその話題を振ってくるとは思わず、ジャンヌは言葉に詰まる。
「私は別に契約してもいいかな～って思ってるけど……」
そして、楓は戸惑いなく契約しても良いと口にして、ジャンヌは「えぇ……」と思わず声を漏らした。
いや、それはそれで有り難いのだが。楓に掛かる負担の事を考えると、能天気すぎやしないかと思わずにいられない。

本来、サーヴァント一騎と契約するだけでも魔術師には相応の負担が掛かる。いくらカルデアからのバックアップがあるとはいえ、三騎ものサーヴァントと契約済みの彼女には、こうしているだけでもどれだけの負担が掛かっている事か。

「楓、申し出は有り難いですが……無理はしないでください。魔術師として未熟であるその身に、これ以上の負担はただの苦痛でしか無いはず」

「いや、別に普段はそこまででもないよ？　戦闘になると確かにちょっと辛いけど……我慢できないってほどでもないし。それに、私が出来る事って契約ぐらいしかないしねぇ」

運動神経にはそこそこ自信はあったが、戦闘なんて無理。

魔術は論外。指示もろくに出せないしとマスターとして最低なんてレベルではない事は誰よりも理解している。

「私はこれが出来る！」と胸を張っていえるような事など何一つ持ち合わせていない自分が出来る事といえば、サーヴァントと契約する事しかない。むしろ、契約する事でジャンヌに利益があるなら自分の負担などいくらでも増やせと言いたいぐらいだ。

「というか、それぐらいは頼ってもらえないと一応マスターやってる身としては情けないというか、戦ってる皆に対して申し訳なさすぎると言いますか……」

もしも、それすら出来ないのであれば本当に自分がここにいる意味がない。

マスターとしての責任感に目覚めた、というよりもせめてそれぐらいはやりたい。楓なりに自分が出来る事を積極的にやっていきたいという意思が――自信はないけれど――そこにある。

これは、逆に遠慮する方が失礼にあたるのでは？　とジャンヌも思ってしまう程に。

「無理にとは言わないけど、契約したくなったら何時でも言ってね。私みたいなマスターでいいなら、だけど」

そう言って、楓は立ち上がってマシュを探してその場を去った。

彼女の背中を目で追いながら、ジャンヌは小さくため息をついた。

やはり、彼女は強くなっているように思える。
小さな一歩。進んでいるかどうかも怪しいかもしれないレベルかもしれないが、間違いなく彼女は前に進んでるだと
「……なんだ、つまりそういう事ですね」
残念そうに、若干の苛立ちを吐き捨てるようにジャンヌは呟いた。
どうやら、自分は心のどこかで彼女を下に見ていたのかもしれない。初めて会った時のあの折れた様を見て、自分が彼女を導かねば等と思ってしまったのか、それとも、竜の魔女の存在でイマイチ自信が持てない事を楓を使って紛らわそうとしてしまったのか。聖女等ともてはやされ、自分はそんなたいそうな人間ではないと思ってはいてもだ。
「私もまだまだ、という事でしょうかね」
自虐的に笑って、ジャンヌは息を吐きながら空を見上げる。
己の反省点を理解出来た。そして楓が前に進んでいる事も解った。なら、次は自分が前に進む番なのだろう。
楓と契約を結び、聖人を探してジークフリードの呪いを解く。そして、竜の魔女とその軍勢を倒す。色々と悩みが消えたわけではないが、うだうだ悩むのは前に進みながらでも出来るのだから。
「しかし、断ったすぐ後に契約を……というのは」
いささか恥ずかしいなと、頬を赤らめてジャンヌは腰をあげる。
これも己の未熟さを反省する為の授業料だと受け止めよう。これからは、彼女達と共に歩んで成長していく、その一歩だと前向きに捉えるべきだ。
さぁ、と顔をあげて楓の後を追う。うだうだ悩むのは自分も彼女も、もうお終いにしよう。
きっと、何かが動き出すに違いないのだから。

禍々しい光と共に、魔女の眼前に二騎のサーヴァントが召喚される。
アーチャー、アタランテが倒された上にどうやらライダーとして手駒としていたマルタ、アサシンのファントム・ジ・オペラまでもが倒

された事は彼女にとって痛手、ではあるが別にこれといった感傷等無かった。
所詮は手駒。自分の指示通りに動き、フランスを地獄に変える為の手足としての働き以外望んでやしない。戦力が減るのは痛手には違いないが、また代わりを召喚すればいいだけなのだから。
故に生きていようが死んでいようがどうでも良かった。だが、もう一人の自分と……自分の絞りカス同然のジャンヌ・ダルクの偽物とその一味はこちらが思っていた以上だと認識を改めた。
「召喚して早速だけど、あなた達に命を下します」
イチイチ手駒に挨拶など求めない。ただ、マスターたる自分の指示に従うだけでいいと言わんばかりに指示を下す。
真名を初めとした全てのステータスは、マスターであれば容易に確認できるのだから。
「私の偽物……あの忌々しい絞りカスとその一味を皆殺しにしなさい。方法も過程も、全てあなた達に一任するわ」
それに従い、頷いて二騎は霊体化し、その場から立ち去ろうとする。
「……あぁ、いや。待ってちょうだい。やはり、命令（オーダー）は変更です」
新たな手駒達が立ち去ろうとする直前、魔女はその指示を撤回した。
別に気にしなくともよいかと思っていたが、やはり収まりが悪い。小石をぶつけられた程度の事とはいえ、借りは借り。いや、きっと自分で思っている以上に屈辱を感じていたのだろう。
きっちりとしっかりと、返礼をしておくのは基本中の基本だ。
「あの赤茶髪の……アイツ等のマスター。アイツにだけは手出しを許しません。いえ……多少痛めつける程度はともかく、殺す事は不許可です」
甲高い足音を立てながら、自ら二騎の間をすり抜けて扉をあけ放つ。
「あのマスターは、私自ら手を下す事にします。他は好きに……ええ、それこそどう扱おうが文句は言いません」
自分にガントを撃ち込んでくれたあの小娘に、相応の地獄を味合せ

る事にしよう。
竜の魔女の口元が吊り上がる。もしかすると、絞りカスの相手をするよりもこちらの方が有意義やもしれない。
そんな高揚感を覚えながら、魔女は城の外に鎮座する自らの真の相棒とも言えるソレに声を掛ける。
「今回はあなたも連れて行くわ。存分に暴れてもらうわよ」
魔女の声に反応し、ソレは唸りを上げる。
山のように巨大な黒いソレは、閉じられていた瞼を開けた。
「アナタを見たアイツがどんな顔するか、それだけでも気分が晴れるというものよ」
ソレが折りたたまれていた翼を広げるだけで大地が震え、周囲にいたワイバーンの群れが怯えたように四方へ飛び去って行く。
フランスを短期間で地獄へ変貌させ、彼女を竜の魔女たらしめる理由。
邪竜ファヴニールが、大空へと舞い上がった。

第十三話　邪竜百年戦争　オルレアン　8

楓とジャンヌの契約は滞りなく結ばれた。
結果、半分以下へと落ち込んでいたジャンヌの力は完全とまではいかずとも十分と言えるほどにまでなり、戦力は増強。
それ自体はとても良い事、ではあるのだが。
（やっぱ……ちょっと格好つけすぎたかも……）
ジャンヌの危惧通り、楓への負担は増大して、それは思っていた以上の物だった。
生身の体を持つマシュは他の面子と違い、戦闘中でもない限り魔力を持っていく事はほぼ無く、契約したサーヴァントへの魔力供給はカルデアのサポートで大部分が賄われている。
それでも楓への負担は決してゼロではない事と、短いスパンで立て続けに契約を結んだ事で彼女の魔術回路がビックリして必要以上の負担が掛かっているのではないか、というのがダヴィンチとメディアの出した結論である。
『ようは慣れの問題かな？　時間が経てば楽になってくると思うよ』
「良かったじゃない。これであなたの三流未満な魔術回路も少しはマシになるかもね」
ダヴィンチの優しい言葉に対して、メディアの厳しい言葉。まさに飴と鞭というヤツであろうか。どちらにしろ楓の自業自得には違いないので、文句の一つも言えやしないのだが。
「アハハハ……」
故に苦笑いで返すしかないのです。
幸い、生身の肉体を持ち他のサーヴァントほどの魔力を必要としないマシュや、キャスターというだけあって魔力の操作はお手の物とばかりに戦闘時以外は本当に最低限の魔力供給に絞ってくれているメディアのお陰で、倒れる程の負担ではないのだが。
「やはり、契約するべきではなかった……のでしょうか？」
『いやいや、楓ちゃんには良い刺激になったかもだしね。それに、君との契約はそのまま戦力の増強に繋がったから結果オーライさ』

「そうだよ。それに契約持ちかけたの私の方だし……」
申し訳なさそうに頭を下げるジャンヌに対し、楓とダヴィンチはフォローを入れる。
『それはそれとして、黒いジャンヌに関してだが……流石にあの程度じゃ、こっちで詳細なデータは取れなかったけど……実際見てみると、疑いようもなくジャンヌ・ダルクだったね』
少なくとも外見はと付け加えるダヴィンチに対し、楓も思わず頷いた。瓜二つとは、まさにあの事。身に纏う雰囲気や、衣装の色等の差異はあれど、あの顔はどこからどう見てもジャンヌにしか見えない。
事情を知らない者が見れば、確かに処刑されたジャンヌが復活してフランスに憎悪の牙を剥けたと思う他ないだろう。
「でも、明らかにこっちのジャンヌと色々その……性格とか言動違ってたよね」
『すぐに思い当たる可能性とすれば、ジャンヌ・ダルクのオルタナティブ……別側面が召喚された、かな？』
「別側面……？」
『楓ちゃんには、その辺の説明してなかったね。サーヴァントは英霊の座にいる本体のコピー……というのは説明してたよね。要は、召喚時にコピーされる部分が違うみたいな感じかな？』
ザックリと言えば、同じ英霊だけど性格が違う。そういう感じだと理解すればいいと思うよと簡単に説明され、楓もなんとなくふんわりとした理解度のまま頷く。
「えっと、つまりジャンヌの本体からフランスなんて滅んじゃえって部分だけがコピーされてきた……みたいな？」
『大雑把に言えばそういう事』
「いえ、それはあり得ないと思います」
だが、それはほかならぬジャンヌ本人にハッキリと否定されてしまった。
『おや、どうしてだい？』
「私には、フランスに対する憎しみだとか、そういう感情が一切無いので……そういった別側面が召喚されるなんて事はあり得ないかと」

その返答に、ダヴィンチも思わず一瞬目を丸くした。予想していなくはなかったが、本当にそう言いきられるとは思っていなかった、といった風な様子だ。
『ほほう……言い切ったね。少しばかり意地悪な事を言わせてもらうが、君はこの国に尽くした結果、この国に裏切られて口に出すのも憚られるほどの扱いの末に処刑された存在だ。だというのに、フランスやそこに生きる人々に対する恨みは一切ないと？　本当に？』
「本当です。なので、あっちの私の言う憎悪とかそういう物がイマイチ実感がわかないというか……いざ実際に相対してみると、何とも言えぬ違和感すら覚えると言いますか……」
『ふむ……だとすると、無辜の怪物かなぁ』
二人の会話についていけず、というより飛び出してきている単語がいい加減に理解を超えた楓はマシュに小声で問う。
「マシュ、無辜の怪物って何？」
「サーヴァントの持つスキルですが、ある意味では一種の呪い……のようなものですね。生前の行いなどから来る風評、イメージによって本来の在り方を捻じ曲げられる……サーヴァントは人々の願い、信仰に大きく影響を受ける存在ですので……ジャンヌさんもあんな最後を迎えたのだから、フランスを憎んでいるのではないか……というイメージを持たれていてもおかしくはありませんし」
確かに、自分も歴史の教科書等で得たざっくりとした知識だがジャンヌの最後は知っている。さほど強く意識した事はないが、実際にこうして出会うまでフランスに対してろくな感情を抱いてはいないだろうなと思わなくは無かった。
その辺りのイメージでジャンヌ本来の在り方が捻じ曲げられ、あの黒いジャンヌが召喚されたという事なら、素人知識なりに納得はいく。最も、ダヴィンチとの議論を続けているジャンヌはイマイチ納得がいかないようだったが。
『はいはい、二人ともその辺で。今はまだ考察するにも手札が足りないし、あの黒いジャンヌ……とりあえず、ジャンヌ・オルタと仮称するけど、彼女についての議論はまた次の機会にという事で』

割り込んできたロマニが強引に二人の会話を中断させ、小さく咳払いして、仕切り直しとばかりに楓へと声を掛ける。
『こちらがやるべき事はジークフリートの呪いを解く為の聖人系サーヴァント探索。そっちは何か手掛かり掴めたのかい？』
「今、アストルフォとマリーが近くの街に聞き込みに言ってる」
楓が横目で見やる先にある街、モンリュソンというそこに二人が調査と聞き込みへ向かったのがだいたい十分前だろうか。
ジャンヌは竜の魔女、ジャンヌ・オルタの事もあって迂闊に街に入るわけにもいかず、人当たりも良い二人が率先して行ってくれたのだ。通信機も持たせてあるし、何かあれば連絡が来るはずだ。
「何もなくても一時間ぐらいで戻るって事になってるから、そっち待ちかな」
『成程。そっちで何か収穫があればいいけど……あまり悠長にもしていられないし』
探知能力だけでいえばジャンヌ・オルタの方が圧倒的に上。ジャンヌ曰く、本来のルーラーとしての力であればフランス全土をカバーするぐらいは余裕で可能だと言うのだから、あちらはこっちの位置が手に取るようにわかっている筈なのだ。
残念ながら、楓と契約してもなおジャンヌの能力は全開とまではいかず、探知能力もさほど戻ってはいないという事なので、こちらは嫌でも後手に回ってしまう事になる。
「いつでも移動できるようにはしていますが……後手に回る上に、あちらに聖杯があるとなると」
「……いくらでもサーヴァントを呼ばれる可能性があるね。あっちは一騎減ったところだから補充は当然するだろう。いや、とっくにしてるかもと思った方が良いかもね」
アマデウスが言う事も最もである。聖杯とはすなわち、無限の魔力供給を可能とする物。無論、そう簡単に魔力を扱えるような代物ではないのだがあちら側にそれを可能とする術があるのなら、自由自在とはいかずとも一定期間置きに扱えるのであれば十分に脅威だ。時間をかければかける程、あちらは戦力を増やし放題という事になるのだ

から。
（いざとなったら、私がもう一騎ぐらい召喚……とか言ったらドクターとメディアが怒るかな……）
ジャンヌとの契約で体が辛いと訴えたばかりなのもあって、間違いなく烈火の如く怒られる。特にメディアは「そんなに余裕なら魔術回路に思いっきり負担かけてあげましょうか？」とか絶対に笑顔で言ってくる。古びた教会で色々される感じが凄い。
喉元まで出て来ていた言葉をグッと飲み込み、新たな案をどうにか捻りだそうとしたところで、手首の通信機からのアラームが鳴り響いた。
「お、噂をすれば……もしもーし」
『もしもーし、マスター！　聖人サーヴァント、見つかったよー！』
「え、ホント!?」
なんて素晴らしいタイミングだ。今まで色々苦労した分、この程度のご都合はあり得てしかるべきかもしれない。いや、しかるべきであると楓は心の中で力強く頷いた。
『あー、でも……ちょぉっと面倒な事になる、かも？　主にジャンヌ関係で……マリーが話してくれてるから荒事にはならないと思うけど……』
前言撤回。やはり、そう都合よくはいかないようだった

モンリュソンは元々軍事の要所として築かれた街。魔女の軍勢による侵攻も何度か退けており、被害から逃れた難民や、フランス軍の残党も集まるのは当然の事であった。
（あぁ、いつかはこうなると思ってましたが……）
ならば、ここに彼がいる事も当然といえば当然なのかもしれない。
すでに話をモンリュソンの市長に通してくれていたおかげで役所まではすんなりとこれたのだが、そこで待ち受けていた人物の顔を見て、ジャンヌはアストルフォが言っていた面倒事を理解する。
「ジル・ド・レェと申します。あなた方の話はそちらのマリー殿とアストルフォ殿、数日前に我らと合流した兵達から聞いておりました」

かつて自分が率いた軍にて側近を務めてくれた彼が、今のフランスを前にして動いていない筈がない。いずれ出会うかもしれないとは思っていたが、まさかここに来て顔を合わせる羽目になるとは。

街に入るという事もあり、用意してもらったマントを深く被って顔を隠しておいて正解だった。半端な状態で召喚された影響か、霊体化すら満足にできない現状が忌々しい。楓と契約しても出来ないとは流石に想定外だった。マントで顔を隠していなければ騒ぎになっていただろう。仮に街中はどうにかなったとしても、この部屋にいるジル――彼はともかくとして、彼の部下達がどうでるかは容易に想像がつくからだ。

「えっと、兵士の方々から話を聞いたというのは……？」

「ほら、ボク達がここに来てすぐに助けた人達がいたじゃん」

「あ、あぁ……あの時の！」

あの後は色々あって気に掛けてもいなかったが、あの時に助けた人々は無事に逃げおおせてジルが率いる部隊と合流出来ていたそうだ。避難民共々このモンリュソンに到達し、以後はここの防衛についているとアストルフォが笑顔で教えてくれる。

「貴女達に助けられた事、とっても感謝してたわよ。お陰で目的のお方にもすぐに話が伝わったわ」

マリーに促されるように、楓はある人物の前へ立つ。銅色の鎧を見に纏った長髪の男性。一目見て、人間ではなくサーヴァントであると理解できる一種の威圧というか、堂々とした存在感。同じサーヴァントでも、何というか人格的、精神的な意味での格が他とは違うといった感じを受ける。

「あなたがマスターですね。私はライダー、真名をゲオルギウスと言います」

「あ、どうも……桐生楓です」

楓は知らない名前だが、ゲオルギウスはそれこそ高名な聖人である。

聖人という括りでいえば、ジャンヌよりも格上らしいと聞いて楓が驚くのはまた別の話。ともかく、探し求めていた聖人サーヴァントに

ようやく出会えたのだから。
「話はあなたのサーヴァントお二人から。それで彼女の方は……」
ゲオルギウスの視線に気づき、少し離れた位置で目立たぬようにしていたジャンヌが静かに頷く。
それに頷き返し、ジルにこの場を頼みますと声をかけてからゲオルギウスはジャンヌを連れて退室。別室で待機しているジークフリートの治癒へ向かったのだろう。
「ようやくですね、マスター」
「そうだね。とりあえず、一段落……で良いのかな？」
ジークフリートの治療という当面の目的はこれで達成。後はジャンヌ・オルタの打倒と、彼女が持っているであろう聖杯の確保。その為の準備はこれでほぼ整ったと言えるだろう。
あとは、戦って勝つ。単純で言うだけなら簡単だが実行難易度は最も高く、決して避けられない難題が待ち受けている。それを思うと気が重いが、そんな事は言っていられない。
「後は治療が終わるのを待って……まっ、て……？」
不意に、何やら視線を感じる。
一体どこからと視線を感じる方に顔を向けると、そこには二人組の少女がいた。どちらも自分より幼くも整った美しい見た目をしており、それでいて頭部から角を生やした一目見て人ではないと解る外見。
「えっと……？　何か用、です？」
「べっつにぃ……へぇ、ふ～ん……」
血のように紅い髪をした角持ちの少女が、まるで品定めをするかのように楓を文字通り頭から足の指先までじっくりと見やっている。
「顔はまぁまぁだけど、なぁんか全体的に普通ね。マスターが来たっていうし、どんな奴かと思ってたけど……」
「初対面の相手に失礼ですよ？　いくらホントの事とはいえ……デリカシーの無いトカゲはこれだから」
「ヘビみたいに陰湿な奴に言われたくないわよ」
咎めているのか同意しているのか、そんな言葉で突っ込みを入れた

和服の少女とそのまま口論を開始。
揃いも揃って中々に失礼な事を言っておきながら速攻でこちらを無視とは。自分でも比較的温厚な方だと思っている楓ではあるが、流石にイラつきを覚え……いや、いくらなんでも喧嘩腰に返すのは良くない。問答無用で襲い掛かってきた訳ではないのだから、まずはちゃんと話をしなければ。
「あ、あのお二人は……どちら様で？」
「あぁ、これは失礼いたしました。先ほどの無礼はお詫びします」
言われてハッとしたと言わんばかりに、ちょっと白々しいぐらいに礼儀正しくお辞儀をして謝罪する和服の少女。
一挙一動から育ちの良さが滲み出ている辺り、先ほどの辛辣な口ぶりとは一転している。
「私、清姫と申します。クラスはこう見えて、バーサーカーですのよ」
「清姫……きよ、ひめ……あ～、安珍清姫伝説の清姫？」
「そう、その清姫です。よくご存じで！」
知っていてくれた事が嬉しいのか漫勉の笑みを浮かべる清姫。対して、マシュは驚いたように目を見開いて声をかける。
「先輩、よくご存じでしたね。その、あまり英霊などに関する知識を持たないようでしたので……」
「ん？　たまたま知ってたって感じかな？　父方のお祖母ちゃんが和歌山に住んでるから、小さい頃によく聞かせてもらったというか。ぶっちゃけ、他に関してはさっぱりだよ私」
自慢ではないが、教師から「桐生、なんでお前は歴史だけ駄目なの？　授業態度は凄い真面目なのに……」と本気で聞かれたレベルで駄目なのだ。清姫に関しては、幼い頃に祖母から何度も聞かされていたのでなんとなく覚えていたというだけに過ぎない。
「たまたまでも嬉しい事に変わりなく！　えぇ、えぇ！　これはもう運命の出会いを言っても過言ではないのでは?!」
「えっ!?　いや、それはちょっと……飛躍しすぎでは？」
「アンタねぇ。コイツの逸話知ってるなら、思い込みの激しいストーカーだってわかってるでしょ？」

「いや、まさかこの程度でグイグイ来るとは思ってなくて……っ!?
バーサーカーってこういうクラスなの!?」
物理的に距離を詰めてくる清姫に壁際に追いつめられる楓と、なんとか二人を引き離そうとするマシュ。その様子を呆れ顔で見ていた紅い髪の少女は、マシュを見やった途端に目を細めて深刻そうな表情を見せた。
「……あんた、カーミラとやりあった?」
「えっ?　ええ、その……戦った、というには一方的に私が負けただけですけど……」
「ふぅ〜ん……よく生きてたわね。運良かったじゃない」
何やらブツブツと呟き始める少女。
彼女はカーミラと何か因縁でもあるのだろうか。そんな疑問を抱いていると、横から清姫が口元を扇子で隠しながら呆れているような、呆れを通り越して一種の関心を覚えてすらいますと言うような感じでぼやいた。
「流石血液拷問フェチというか、ご自分の趣味に合致する子ならすでに襲ってると確信してましたか」
「ウッサイわよ!　まぁ、いるだろうなとは思ってたし。アンタ、かなり手酷くやられたんじゃない?　アイツの残り香的なのがほんのちょっと残ってるから」
拷問フェチやら残り香やら、カーミラという名前すら出てくればもう何となく理解はできる。
この少女は、その真名は恐らくというより間違いなく。
「もしかしてカーミラ……というか、エリザベート・バートリーでしょうか?」
「そうよ。あっちは私の未来の姿。私はアイツがいるからその因縁で連鎖召喚されたって感じね」
カーミラと聞いて思わず身構えそうになるが、エリザベートからは一切の敵意を感じない。というよりも、その敵意が自分達に向いていないようだった。
「えっと、二人はなんでここに?」

「私達はゲオルギウス様も含め、元々マスターを持たぬはぐれとしてこの地に召喚されました。三人とも竜の魔女と敵対……あちらのトカゲはカーミラこそが最優先のようですが、ともかく敵を同じくする者同士。なりゆきで行動を共にするようになり、道中でジル殿達とも……と」
「そういう事。カーミラは責任もって私がぶっ飛ばすから、邪魔しないでよね」
　とりあえず、彼女の敵はカーミラであって、カーミラが組する竜の魔女の軍勢を打倒する事には協力しないでもない……という解釈で良いようだ。何故に未来の自分にそこまで敵意を向けるのか、までは良くわからないけれど、一応仲間になってくれると思っていいのかなと、楓は考えて。
「それじゃ、この後も一緒に……」
「ええ、そちらがよろしければ是非ともご一緒に。むしろ、私と正式に契約してくださってもよろしいですよ旦那様（マスター）！」
「マスターはジャンヌさんと契約したばかりで、身体の事を考えるとこれ以上の契約は……」
　なんだかとんでもないルビを振ってきていそうな清姫を止めるマシュと、そんな清姫に苦笑いを返す楓。
　確かに身体は現在進行形で怠さのような、全身に誰かが覆いかぶさっているような重さを感じているのだが、あと一騎ぐらいなら契約できなくもないかもとも思っている。だが、そんな事を口にすれば流石にマシュ達が黙っていないだろう。正直、自分も辛くて言い出しづらいのが本当のところだ。
（でも……いざとなったら……）
「無理してでも契約しようとか、思わない事ね」
「ひえっ!?」
　いつの間に背後に迫っていたのか、メディアの思考を読んだと言わんばかりの言葉に楓は跳び上がった。
「メ、メディア!?　驚かさないでよ！」
「あら失礼。でも、あと一騎ぐらいなら平気かも、とか思ってる馬鹿を

止めに来たんだから感謝なさい」
「えっ？　い、いや……なんの事、デショウカ？」
ギクリと目を逸らそうとする楓の顔を両手で掴み、強引に正面を向かせる。
「魔術師……いえ、魔術使いとしてすら二流どころか三流未満だっていう自覚が無いのかしら？」
ググッと、楓の頭を抑える両の手に力が込められる。
その痛みに悲鳴をあげる事など出来ない。何故なら、目の前の彼女の顔が怖くてそれを許さないから。
「マスターとサーヴァントって関係だけど、私に弟子入りしたいといったのはそっちよ？　師匠の言う事はちゃんと聞きなさい、ね？」
フードで顔を隠しながらもハッキリと解る満面の笑み。それでいて、声には圧がしっかりかかっているのだから恐ろしい。
背筋に冷たい物が走り、小さく悲鳴をあげそうになるのをグッと堪えて、楓は首を縦に振る。否、振るしか無かった。
「は、はい。わかりました、お師匠様」
「よろしい」
冷や汗と震え声混じりの謝罪を聞き届け、解放した楓が足早に逃げていく様をやれやれと見やりながら、メディアはため息交じりにぼやく。
「マシュ、マスターから目を離さないでくれる？　あの子、いざとなったら絶対追加契約しそうだし」
「え……はい。それは構いませんが……マスターも、自分にかかる負担は解っている筈では？」
「解っててやるタイプよ、あの子。どうせ、マシュや私達と違って戦えないんだからーーとか思っちゃうんでしょ。全く……実際、無理すればあと一騎ぐらいはどうにか出来ちゃいそうなのが面倒ね」
本来、マスター一人につき契約できるサーヴァントは一体限り。無論、様々な例外を除いてではあるが、原則としてそこは揺るがぬ一点。楓が複数契約を実行できているのも、カルデアが電力を魔力に変換して本来楓が受け持つ筈のサーヴァント現界維持の為の魔力消費の殆

どを賄っているという例外があってこそ。
　だからといって、楓に全く負担が無いわけではない。彼女が着用する礼装を介し、カルデア側である程度の調整は効くようだが、それでもゼロにはできないのだから。
「それで倒れられたら、こっちが迷惑するって事ぐらい解らないのかしらね。全く、やる気のある無能とはあの子の為にあるような言葉ね」
「む、無能って……。いくらなんでもそれは」
「言い過ぎなぐらいで丁度いいの。変に気を使って、勘違いさせるよりはよっぽどね」
　そう言って背を向け、霊体化するメディア。言い方は厳しいが、彼女なりに楓の事を心配しての言葉であるとは、マシュにも理解できる。しかし、無能というのはいくらなんでも、それも自分のマスターに対して酷すぎやしないか。
　万が一にでも楓に聞こえていたらと思い、彼女の姿を探すが部屋の中には影も形も無い。それに、よく見ればサーヴァントも何人か姿を消していた。
「あれ、先輩に、マリーさんや清姫さん達は……？」
「ん？　あの喧しい二人組は知らないし、興味も無い。マリーなら、多分だけど楓と一緒じゃないかな？」
　アマデウスの自信たっぷりな言葉に頷きながら、マシュはふと思う。
　楓とマリーとは、また珍しい組み合わせだなと。
「ま、楓の事はマリーに任せておけばいいさ。彼女が自分から買って出たんだから、上手くいくさ」
「やる気のある無能、かぁ……そうだよねぇ……」
　マシュとメディアの会話はハッキリと聞こえてきた。
　いや、メディアの事だから聞こえるように何らかの魔術でもこっそりと仕込んでいたのかもしれない。あの師匠は、馬鹿弟子に自覚を持たせる為ならそれぐらい平然とやるだろう。

（いざ言われると……うん、やっぱキツイ……）
役所の二階からそのまま直通していた街の城壁。
その上で壁を背に、腰を降ろして空を見上げる。自分が無能なのは、オルレアンに来てから嫌というほど自覚させられた。それでも、絶対何かできる筈だと、ジャンヌとの契約だってした。
だが、それ以上は何もない。ホイホイと追加契約して良いわけではない事も理解しているが、それ以外に自分がマスターとして出来る事は果たしてあるのだろうか。
「はぁ～……やる気だしても全然駄目かぁ、私」
「あらあら、溜息ついてちゃ幸せが逃げちゃうわよ？」
「……はい？」
俯かせていた顔を持ち上げると、そこにいたのは眩いばかりの笑みを浮かべた少女。
赤を基調とした衣服と銀色の髪がとてもマッチしている少女、マリー・アントワネットが「隣、失礼するわね」と声をかけながら腰を降ろした。
「俯いて暗い顔してるのね。せっかく可愛い顔してるのに、それじゃ台無しよ？」
「かわっ……いや、その……マリー・アントワネットに言われるとなんか恐れ多いというか」
「マリーで良いわよ。フルネームだと呼びにくいでしょ？」
歴史に名を残す王妃とは思えぬフランクぶりに、楓もはぁと頷くほかない。
何せ、教科書に名前が載るレベルの人物。歴史にあまり関心も無く、成績もよろしくない楓でも名前は知っているし、王妃様と言えばと聞かれれば真っ先に名前が出てくる。
そんな偉人が自分の隣で、下に何も敷く事なく砂埃が積もった石造りの床に腰を降ろす日が来るなんて、一体想像できようか。
「一人で外に出ていくのが見えたから余計なお世話かもと思ったけど、気になっちゃって追いかけてきたの。なんだか、落ち込んでるみたいだったし」

「あ～……そんな、目に見えて落ち込んでました？」
「ええ。解りやすいぐらいに」
　屈託のない笑みを浮かべたまま即答され、乾いた笑いを返すしかない。そこまでハッキリと態度に出ていたなんて、流石に思ってもいなかった。
「話も、盗み聞きするつもりはなかったんだけど、ほんのちょっと聞こえてきちゃって……」
　追ってきてくれたのはそういう事かと、感謝と共に申し訳なさも覚える。
　余計な気を使わせてしまった。こういう処、自分は本当に駄目だなと一層の自虐と共に。
「それで、本当に余計なお世話だけど私は思うの」
　ズブズブとネガティブの深みにハマっていく楓に対して、マリーは笑みを崩すことなくさらっと、爽やかに言い切った。
「無能なら無能で良いんじゃない？」
「……え？　いや、良くないと思いますよ!?」
　流石に予想の斜め上。まさかまさかの言葉に、楓は思わず声を荒げた。
「私、マスターとしてもっと色々出来るようになるべきなのに、何にもできないし。魔術だって才能無いから教えるだけ無駄って言われるし。令呪だって、どう使えばいいのかさっぱり分かんないし……こんなんじゃ、また足引っ張っちゃうし」
「あら？　それを言うなら私だって。サーヴァントなのにろくに戦えもしないわ。弱い敵ならどうにか出来るとしても、サーヴァント相手ならまず負ける。私が自信を持って勝てると断言できる相手は、アマデウスぐらいだもの」
　スパっと自分より弱いと断言される天才音楽家。貴方は男としてそれでいいのですか、と心の中で思わず突っ込む。いや実際、彼がまともに戦ってる姿を見た事はない。たまに援護をしてくれていたけれど、あくまで安全圏からであって矢面に立つとなると……だ。
「本当ならマスターの代わりに戦うはずのサーヴァントが戦うの苦手

だなんて、それこそ役立たずじゃなくて？」
「え？　でも、マリー……が戦うの得意だったりするイメージ全然無いから別に……不思議でも無いような……？」
「サーヴァントはそういう物だから。一応、戦う術はあるけれど……ええ、きっと私は貴女と契約しても大して役に立ちません」
　そう言って、マリーは楓の令呪に指先で触れる。
「サーヴァントにすら無能がいるのよ？　マスターになったばかりの貴女が、必要以上に落ち込む事無いわ。愚痴を言いたいなら、同じく無能の私に遠慮なくどうぞ」
「……」
　結局、あなたから見ても私は無能なんですねと言いたくなったがそれはぐっと飲み込む事にする。だが、彼女の言いたい事は何となくわかる。
「つまり、私達は無能コンビです？」
「そうね、そうなるわね！」
　無能扱いされたというのに、なんだか嬉しそうに笑うマリーに、ちょっとついてけないかもと思う反面、釣られて楓も笑う。
　とても、とても失礼な事だと思うが、無能であると自覚する者同士なんだなと思うと、なんだかとっても気が楽になった気がする。
「ん、ありがとう。少し気が楽になったかも」
「えぇ、どうしたしまして。私も、ようやく私に出来る事を出来た気がするわ」
「そんな事はありませんよ、王妃。えぇ、貴女はそんなマスターもどきと対等ではない……」
　不意に聞こえてきた、今にも爆発しそうな感情を抑え込んでるかのような声。反射的に楓を庇うように前に出るマリーに対し、声の主は堪え切れぬ笑いを漏らしながら、その姿を覆い隠す霊体化の衣を剥いだ。
「なっ……あな、たは」
「え……知ってる、人？」
　眼前に現れた黒衣の男性。その手に握るは、まるでギロチンの刃を

思わせるような大剣。
非常に整った顔立ちでありながら、吊り上がった口元と狂気に染まり、舐め回す様にマリーを見やる眼光のせいで見事に台無しになっている。
（ちょ……ちょっと、キモいかも）
ストーカーってああいう目つきしてるのかな、なんて恐怖を誤魔化す為にとぼけた思考を巡らせる。だってあの男性から発せられる威圧感は、ヴラド三世やカーミラ、ジャンヌ・オルタ程の物ではないにしろ、サーヴァント特有のそれなのだから。
「ええ、よく知ってるわ。シャルル＝アンリ・サンソン。私の首をギロチンで落とした人だもの」
「へ……ええっ!?」
生前殺された相手、といういくらなんでも予想だにしない相手の登場。
取り乱す楓に対し、一瞥する余裕も無いとばかりにサンソンを睨みつけるマリーの頬を流れる冷や汗。正直、彼も召喚されている可能性を考えなかったわけではない。ここはフランスで、自分が召喚されたのなら彼もと考えるのが自然。それが、まさか敵側という最悪のパターンとして的中するなど、最悪も良い処である。
「楓。マシュ達を呼んでくれる？　正直、私一人じゃ貴女を守りきる自信は無いわ」
「あぁ、それは止した方が良い。彼女達も……余裕はないだろうしね」
サンソンの言葉の意味を、二人はすぐさま理解する事となる。
街の遠方に見える巨大な竜が率いるワイバーンの群れ。そして、役所の扉が破壊される爆音。
なんてことだと、楓はすべて理解する。いや、理解するのが遅すぎた。彼が、サンソンが目の前に現れている以上、他の敵もすでにこの街に迫っているのは当然だという事を。
「さて、マリー王妃。僕は貴女の首を落とし、絶頂に至るほどの最後を味合せたい。けれど、今はもう一つの、優先すべき命令があってね」
ギョロリと、サンソンの視線が楓へ向けられる。

「竜の魔女（マスター）からの命令だ。そちらのマスターを……生きたまま連れてこいとね」

第十四話　邪竜百年戦争　オルレアン　9

（たかがガント如きで、よくもまぁここまで執着しますね私も）

邪竜の背に乗り、自嘲気味に魔女は――ジャンヌ・オルタは笑う。

たった一発。頭に直撃したガント。ほんの少しの、軽く小石をぶつけられた程度の物でしかなかったというのに、酷く執着をしているものだと思う。

わざわざサーヴァントを召喚し、自軍最強戦力たる邪竜すら引き連れて自ら仕返しに出向くなど、自分でも随分とおかしい真似をしていると感じている。

（まぁ、良いでしょう。特に問題があるわけでもありませんし）

自分のこの行動は大勢に影響はない。これだけの戦力を揃えて負ける事などあり得ず、仮にサーヴァント二騎を失ったとしても邪竜の一息で全て消し飛ばせば問題は無い。

唯一の懸念材料と言えるのはあの忌々しい聖女と竜殺し。どちらも戦力としては現状脅威ではなく、後者に至っては半死半生の状態だと聞く。今までの戦いで、どちらもそこそこ戦えてはいたが……さほど脅威とは言えないレベルだと判断する。ある程度の損害を被る可能性はあるにはあるだろうが、万が一があったとしても、こちらの敗北だけはあり得ない。

「まぁ、それでも……念には念を入れましょうか」

ルーラークラスの特権にして、マスターの証たる令呪に魔力を走らせる。

背中に刻まれた令呪のうち二角。今回召喚した二騎の物を使用し、絶対命令権を行使。

「令呪を持って、我が手駒（サーヴァント）に命じます。先行し、あの小娘……敵のマスターを生きたまま私の下に連れてきなさい。生きてさえいれば、手足の一本ぐらい落としても構いません。それと……他の連中は好きにしなさい」

使用された令呪が消失し、邪竜が引き連れるワイバーンの背にいた二騎の姿も消滅。

目的地へと瞬間移動した事を確認し、未だ視界にすら入らぬ目的地。モリュンソンにいる敵の姿を、あのマスターの少女を思い浮かべる。

自分の残りカスたる聖女すら、ここまで執着は覚えていない。初めて内から湧き出る子の感情に、身を任せる事に一切の不満も不審も無く、魔女は笑う。

「さぁ、勝ち目が無いなら無いなりに足掻いてみせてね？　マスターちゃん」

脳裏に楓の怯え、泣き叫ぶ様を思い浮かべながら、竜の魔女は一足早い勝利の美酒に酔いしれるのだった。

用意された個室で、ジャンヌとゲオルギウスによる解呪を受けていたジークフリードがその気配に気づいたのは、当然の事であった。

街に近づいてくる異様なまでに巨大で、禍々しい魔力。何度生まれ変わろうとも、決して忘れる事はない。例え英霊として呼ばれる事が無くなり、座からも消え失せようとも記憶に残り続けるであろう生涯のトラウマと言っても過言ではない相手の気配。こればかりは、例えルーラーの感知機能が十全に機能していたとしても、自分の方が早く気付くだろう。

「二人とも、不味い事になった」

その言葉に二人の聖者が顔をあげる。

「奴が……邪竜が来る！」

そして、ようやく理解する。自分がこの地に呼ばれたのは、かの邪竜ファヴニールへのカウンターとしてなのだと。

「邪竜……っ!?　これは!?」

ジークフリードの警告と共に、ジャンヌの探知能力にも複数の気配が引っかかった。それも街の中に。

楓との契約前ならまだしも、今の自分ならば例え霊体化したサーヴァントであっても、少なくても街中に侵入される前に気付けたはず。それなのに気付けなかった。というよりも、急にふっと湧いて出たかのような気配を現れ方。それが令呪による物だろうと確信する

のに、時間はそう掛からなかった。
「こんな間近に来るまで気付かないなんて……っ!?」
ジークフリードの解呪に全神経を向けていた等、言い訳にならない程の失態。
彼女が己を叱責するよりも早く、丁度この部屋の真下に位置する正面の入り口が吹き飛ばされた。

振り下ろされる巨大な刃を、マリーが生み出した水晶の盾が受け止める。その重量を持って、力任せに食い込んだ刃に砕かれながらも、盾は果たすべき役割をこなしている。
「――――ッ!」
マリーが右手の指に嵌めている薔薇を模した指輪に何かを呟き、それを振るうとサンソンを魔力の爆発が襲った。これが彼女の戦い方かと、思っていた以上に派手な戦法に呆気に取られる楓の前に現れるのは、これもまたマリーが造り出した水晶の馬であった。
「乗って!」
「う、うん!」
マリーの手を取り、彼女にしがみつくように馬に跨ると馬は城壁を蹴って街の中へ。
自分ではサンソンに勝つ事は難しい。いや、九割負けると確信している。サーヴァントとはどこまで行っても一度死した存在。それ故に、自らの死因やそれに連なるモノは弱点となりえる。そして、マリーをギロチンで処刑した人物であるサンソンともなれば、存在そのものが彼女にとって弱点同然と言えるだろう。
「とにかく一旦逃げて、皆と……っ!」
「逃がすと思ってるのかい?」
二人を追い、城壁から飛び降りてきたサンソンの刃が振り下ろされる。咄嗟に馬の後ろ足を蹴り上げ、それを受け止めるがバランスを崩して二人は落馬。返す刃で水晶の馬を両断したサンソンは、片腕で身の丈ほどもあるそれを振り上げ。
「ちょこまか動けなくしておこうか」

楓の足目掛け、何の躊躇いもなく振り下ろす。少女の足を落とさんとするギロチンの刃。それを阻むのは複数展開された水晶の盾。数を用意する為にサイズも小さく、一つ一つも簡単に砕かれるほどに脆いが、それでも楓がその場を離脱する時間を稼ぐには十分。
「マリー……そんなに僕の邪魔をしなくても。君の相手は後で存分にしてあげるんだけどね」
「そう言われても、彼女をやらせるわけにはいかないもの！」
絶えず水晶の盾を生み出し、サンソンの行動を妨害するマリー。得物の大きさ故、攻撃は大振りなのが幸いし、マリーでもどうにか防ぎきれる。だが、それでも何時まで持つかは解らない。決して戦闘が得意ではないマリーにとって、例え防戦であっても一対一の戦いその物が避けるべき状況なのだ。
（楓だけでも先に逃がすべき？　それとも……っ！）
皆がいる役所までは少しばかり距離があるが、それでも悲鳴混じりの喧騒や派手な破壊音が聞こえてくる。あちらにも敵襲があったのだろう。だとすれば、敵は複数。サンソン以外の敵サーヴァントがこの街に潜んでいる可能性もある。ならば、楓一人を行動させるのは悪手でしか無いだろう。かといって、自分一人で彼女を守りきれるかと言われれば……。
「まぁ、いいさ。そんなに僕の相手をしたいというのなっ!?」
水晶の盾を全て砕き、サンソンが凶刃をマリー目掛け振るわれようとした時に一発のガントが彼の顔面に直撃。倒れるまではいかずとも、動きを一瞬止めるには十分。その隙にマリーの水晶が今度は盾ではなく、いくつもの柱のように聳え立ってサンソンの身動きを封印した。
「今のうちに！」
「ええ！　ありがとう、楓！」
咄嗟に放ったガントが役に立った。内心でガッツポーズを決めながら、楓はマリーを連れ立って一気に道を駆け抜ける。後はマシュ達と合流すれば、反撃に転じる事も出来る。
城壁の上から遠目に確認できた巨大な竜。あんなのに襲われれば

こんな街なんて、一瞬で跡形もなくなるだろう。それに加え、街に忍び込んでいる敵サーヴァントへの撃退も必須。果たして勝てるのかと不安がよぎり……頭を左右に振って、それを無理矢理追い出す。
（何時までも弱気でいちゃ駄目だ！）
こんな風だから、何時まで経っても駄目なままなのだ。いい加減に少しでも前向きな事を考え、実行してみせろと自分に言い聞かせる。
とはいえ、すぐに良い考えなど思いつくはずもない。とりあえずマシュ達と合流して、後の事はそれから。目の前の事を一つ一つ片付けていくしかないんだと、何度も何度も脳内で復唱していると、真横に建つ家屋の壁が吹き飛び、衝撃がマリー諸共に襲い掛かる。
「きゃぁあっ!?」
地面に倒れ、痛みに呻く楓。吹き飛んだ瓦礫と、同じく倒れ伏して呻くマリーを視界の片隅に収め、その奥からゆっくりと迫りくるサンソンの姿を認める。
（や、ば……っ!?）
早くマリーと共にこの場を離れなければ。痛みが走る手足に力を込めようとして……壁を吹き飛ばした何者かの影が土煙の中より現れ、楓の腹を踏みつけた。
「がっ!?」
「楓！　うあぁっ！」
マリーが咄嗟に飛び掛かるも、楓を踏みつけた何者か……全身を漆黒の鎧と靄で包み込んだサーヴァントの腕の一振りであえなく吹き飛ばされ、壁に叩き付けられた。そのまま、彼女を一瞥もせずサーヴァントは楓から足を離し、代わりに首を掴んで持ち上げる。
「あっ……う、ぐぁ……っ!?」
片腕で首を掴まれ、宙吊りの体制となる楓。足をばたつかせ、サーヴァントの腕を振り解こうと必死に何度もたたき、指を引きはがさんとするもビクともしない。首を、気道を締められ困難になる呼吸。苦悶の表情を浮かべ、必死にもがく少女に対し、サーヴァントは兜の奥から低い唸り声をあげるだけで、特別な関心を示す様子はなく、無機質に締め落さんとしているようでもあった。

（く、るし……っ！　誰か……た、すけ……）
ぼやけていく視界の中で、サーヴァントの周囲に魔力の光が放出され始める。
それが何らかの魔術行使による転移の兆しだと、楓が知る由もない。光が強まっていく最中、視界の片隅でこちらに駆け寄ってくる一人の、見慣れた少女の姿があった。
「マスタァーッ！」
地面が陥没する程に踏み抜き、一気に跳び込んできたマシュの盾が鎧のサーヴァントを殴りつける。派手に地面を転がる敵を油断なく睨みつけながら、マシュは楓のすぐ傍へ着地する。
「ご無事ですか、マスター！」
「えほっ、げほっ……な、なんとか。ありがと、マシュ」
その場で膝をつき、息を整える楓。とりあえず目立った怪我も無さそうな様子にホッと胸をなでおろし、横目でふらふらと立ち上がるマリーを見やる。
「マリーさんもご無事で」
「えぇ、なんとか……ごめんなさい。私がついていながら」
「いえ、こちらも不意を突かれて……っ!?」
視界の外より、不意に飛び出してきた影……サンソンの一撃を盾で受け止め弾く。
不安定な体制ながらもどうにか踏ん張り、弾き飛ばしたサンソンの身体は空中でコートを翻し、音もなく着地する。
「応援が間に合ってしまったか……やれやれ。我々二騎だけでやれると踏んだマスターがそちらの戦力を侮っていた……いや、僕達の不手際かな」
整った顔立ちには不釣り合いの獰猛な笑みを浮かべ、サンソンは得物たる剣を持ち上げる。
その横には、転移がキャンセルされたらしい鎧のサーヴァントが唸り声をあげながら並び立っていた。
「だが、君一人増えたところでどうにでもなる」
「一人な訳、無いでしょう」

呆れたような、小馬鹿にするような声と共にサンソンと鎧のサーヴァントの周囲に魔力の弾丸が降り注ぐ。見れば、屋根の上には霊体化を解除したメディアの姿がある。
容赦なく降り注ぐ魔力の弾丸に対し、遠距離攻撃を一切持たぬサンソンは反撃できない。だが、ここにいる敵は二騎。鎧のサーヴァントが地面を蹴り、壁を蹴ってメディアの立つ屋根の上へ一瞬で到達し、腕を振り上げる。直接戦闘が不得手である彼女には、どうやっても反応できない速度と位置から、確実に彼女を仕留めんとする一撃を放とうとした彼は、横合いから突撃してきた何かによって、地面に逆戻りとあいなった。

「飛び出し注意だよ～！」
能天気で明るい声と共に、鎧のサーヴァントに突撃を仕掛けた張本人たるアストルフォがヒポグリフに跨ってバイバ～イと手を振って、地面に落下していく鎧を見送る。しかし、サーヴァントは唸りをあげながら体を器用に捻って体制を立て直し、両手足をついて見事な着地をしてみせた。
「Ａａａａ……」
「えぇ!?　絶対頭から落ちると思ったのにぃ!?」
「あの品の無い唸り声はバーサーカーで間違いないと思うのだけど……随分と芸達者ね」
感心したようなメディアの声を背に、アストルフォはヒポグリフを消して地面に降下。
「マスター、遅れてごめん！」
背中越しに楓へウインクし、マシュと共にバーサーカーの相手を買って出るとばかりに愛用の槍を手の中に実体化させる。次々と現れる増援に苛立ち混じりの舌打ちをするサンソン。それを見越したかのように、突如として彼に声が書けられた。
「いやはや、注意力無さすぎでしょ。気配遮断スキルを持たないボクらの接近すら見逃すんだしさ」
「……っ!?」

おどけたような、戦場には不釣り合いの声が路地の奥から聞こえてくる。それに反応し、表情を強張らせたサンソンは声のした方へと顔を向ける。
「アマデウス……ッ！」
「よぉ、サンソン。久しぶり。何時以来だっけ？　まぁ、そんな事どうでもいいか」
怒りに顔を強張らせるサンソンとは対照的に、久しぶりに知人に会ったので挨拶してみた的なそぶりを返すアマデウス。一目見ても穏やかではない、剥き出しの殺意を受けながらも飄々としたまま、視線だけ動かして壁を支えに立ち上がるマリーへ声をかける。
「マリーもお疲れ。不慣れな戦闘で活躍する君も中々格好良かったよ」
「全く、見てたのならもうちょっと早く助けにくるべきじゃない？　あなた、サーヴァントになってから悪趣味が酷くなってなくて？」
「はっはっはっ！　流石にそれは誤解だ。ボクは自他ともに認める人間の屑で変態だが、死ぬ前も後もリョナは趣味じゃないよ」
中々に酷い内容の、この張り詰めた緊張感と街の外から聞こえ始めた爆音の響く中ではするには不釣り合いとしかいえない緩い言葉の応酬。サンソンの、傍から見ているだけでもゾっとするほどの眼光に射抜かれながらも、普段の不真面目な態度を一切崩さないアマデウスは凄いと、今更ながらに楓は思った。
「そういうのは、ついさっきまで君と楓の尻を追っかけまわしてたサンソン君の方が好きっぽくない？」
「何の話だか解らないが……とりあえず酷く侮辱されたというのは理解したよ」
「侮辱じゃなくて真実だろ？　ついさっきまで女二人の尻追いかけてハァハァしてたのはどこの誰だよ」
そして楓は理解する。何だかんだ普段の態度は崩していないが、アマデウスも内心かなりキレているんだろうなと。自分の事はともかく、普段から仲良くしているマリーを襲い痛めつけようとした事に。
「マスター、何時まで呆けてるつもり？」

音もなく、楓の隣にメディアが降り立つ。
「残りの面子は街の外へ向かって……もう戦闘が始まってるみたいね。ゲオルギウスとジークフリートは住民の避難を手伝ってるけど、あなたはどうする？」
簡潔に情報だけ伝えて、メディアは口を閉ざした。この内と外を同時に攻め込まれた最悪の状況で、マスターとしてどう動くつもりなのかはお前が決めろと。サーヴァントとして必要以上の口は出す気は無いという事のようだ。あるいは、いい加減この辺で見切りをつける腹積もりもあるのか、と一瞬浮かばなくも無かったが、そんな考えは即座に捨て去った。
（しっかりしろ、私！）
両方の頬をパンっと叩き、少しわざとらしく息を大きく吐いて、状況を整理する。
外にいる敵は、城壁の上から少し見えた巨大な竜。それとワイバーンの群れといったところだろうか。中にいる敵はサーヴァント二騎。この場にいる面子だけでどうにか抑え込めるのか一瞬不安が過って……。
『マスター……楓！　聞こえますか!?』
脳内に直接届いたジャンヌの声に、ハッと我に返る。
念話で街の外にいるジャンヌがこちらに語り掛けてきたのだ。声が遠く、やや聞き取りづらいのは、単純に距離のせいかそれとも自分の魔術的な素養の無さのせいか、恐らく両方だろう。
「う、うん！　聞こえる！」
『楓!?　っ……返事が無いので、聞こえているという前提で話します！』
どうやら、こっちの声は届いていないようだった。
『街の外に、竜の魔女と多数の敵がいますが……こちらは私達でどうにか食い止めます。楓、あなたは、やるべきだと思う事に集中してください。大丈夫、こちらは……っ!?』
そうして、ジャンヌの言葉は聞こえなくなった。念話を止めたのか、中断せざるを得なくなったのか。あちらの状況がとてつもなく不

安だが、そんな物を吐き捨てるようにわざとらしく大きく息を吐いた。
「私達は……先にこっちを全力で片付ける！　その後、街の外で戦ってるジャンヌ達を助けに行く！　皆、それでいい!?」
「はい！」
「オッケー！」
「……良いわ。従ってあげる」
　今の自分がやるべき事。と言われても、正直よく解っていなかったりもするのだが、それなら余計な事を考えず、目の前の事を一つ一つ片付ける事に全力を傾ける方がマシのはずだ。あっちもこっちもなんて器用な真似は、どうせ出来ない。駄目なマスターなら、駄目なりに全力を持ってぶつかるだけなのだ。
「よぉし！　そういう事だから、さっさとやっつけさせてもらうよ！」
　バーサーカーに槍を突きつけ、アストルフォが吠える。
　役所でのんびりしている処に奇襲を受けるという、敵の接近に気付かなかった間抜けは自分の不注意。そのせいで、役所に詰めていた兵達に多少の犠牲が出た事も自分のせいではあるだろうが、それはそれで実行犯たるバーサーカーに対し、所謂落とし前を付けさせない事にはどうにも腹の虫が修まらない。
「Ｇｕｕｕ……ッ！」
　そんなアストルフォの感情を知ってか知らずか、バーサーカーも彼を敵と認識。してはいるのだが、あくまでも狙いは楓という事か。完全に兜に覆われ、表情を窺えないながらも、視界の済で常に楓を捉え、チャンスを虎視眈々と伺っているのは明白だった。
　彼らと背中合わせになる形で向かい合うアマデウスとサンソンも、似たような状況であった。
「よぉし、あっちでアストルフォが格好良く啖呵を切ったところでボクも続こう。本来なら勘弁願いたいところだが、特別にボクの尻を追いかける事を許そうじゃないか」
「誰が……っ！」
　アマデウスの挑発にのり、大剣を振るうサンソン。その行動に対

し、アマデウスの奏でる音が魔術となり、サンソンの動きを的確に妨害。大したダメージは与えられないが、そんな事はどうでも良いし、別に一対一で倒す事なんかに拘るような誇り高い戦士でもない。
「がぅっ!?」
サンソンの腹部に抉り込むようにして撃ち込まれた魔力の弾丸。アマデウスの数歩後方、無造作に右手を持ち上げたメディアが、隙ありとばかりに撃ち込んだものだ。
「あれ？　もしかして、こっちを手伝ってくれるのかい？　君はあっちに行くと思ったんだけど」
本音を言えば、マリーが来るのかなと思っていたりしたのだが。なんてアマデウスの心の声なんて知った事かと、メディアは淡々とした言葉と共に魔術を展開していく。
「弱い方から先に片付ける方が合理的でしょ？」
メディアとて、戦闘がそこまで得手という訳ではないがバーサーカーの身のこなしを見れば、あちらの方がサンソンより数段格上の英霊である事は理解できる。正直、マシュとアストルフォだけでは厳しく、この場にいる全員でかかった方が確実だ。かといって、サンソンをアマデウスだけで抑えきれる筈もない。ならばと、適当にマシュ達に支援魔術によるバフをかけた上でこちらに回る事にした。
「そういう事なら頼らせてもらおう。マリー、君はマシュ達の手伝いを頼む。流石に君じゃ相手が悪すぎる」
「……そう、ね。解ったわ」
少し不満気に、自分を納得させるように言葉を吐き出して、マリーは背を向ける。当然ながらというべきか、彼女に執着するサンソンはそれを追おうとするも、すぐ様に二人のキャスターがそれを妨害する。
「ぐっ……邪魔をっ！」
「生憎。君の邪魔をするのがボク達の役目でね。そのまま倒されてくれると、ボクとしては嬉しいんだけど」

バーサーカーは強敵だと、その熾烈な攻撃を盾で必死に受け止めながらマシュは実感する。武器を持たず徒手空拳で襲い来るバーサーカー。その拳を幾度となく受け止める度に、盾を支える細腕が悲鳴をあげる。いくら鎧で全身を覆っているとはいえ、拳のみでこの盾を打ち破らんとする一撃は鋭く、速い。

「でぇりゃぁぁぁ！」

マシュを狙うバーサーカーの横っ面目掛けて、アストルフォの槍が突き出される。その刺突を難なく躱し、そこを狙って振るわれるマシュの盾すら見事に躱して見せたバーサーカーの両手が二人の頭を掴み、力任せに地面へと叩き付ける。

「Ｕａａａ……ッ！」

二人を地面に押し倒し、すぐ様にバーサーカーは顔を上げて楓へと狙いを定める。マスターたる竜の魔女により命じられた役目を果たさんと、地面を蹴って楓を取り押さえんとする。だが、それは突如としてせり上がる水晶の壁により防がれた。

「Ｇａａ！」

その程度がどうしたと、一秒持たずに粉砕してみせたバーサーカーは壁の向こう。楓を守るようにその前に立つマリーなど眼前を飛び回る羽虫のように叩き潰さんと拳を振り上げて――――地面と空がひっくり返った。

「足元注意だよ！」

後頭部から思いっきり地面に叩き付けられ、一瞬意識を手放しながらも立ち上がったアストルフォの槍。触れれば転倒（トラップ・オブ・アルガリア）が、バーサーカーの足先に触れ、その名の通り転倒させてみせたのだ。正確に言えば、バーサーカーの膝から下が霊体化している。無論、バーサーカーの意思ではなく、アストルフォの宝具たる触れれば転倒（トラップ・オブ・アルガリア）による強制的な物。殺傷力はほぼ無い槍ではあるが、槍が触れた相手を強制的に転倒させるというその効果は、非常に有用である。それをサーヴァントに用いれば膝から下を強制的に霊体化させるという、直接的なダメージを与えるよりも厄介な状態に陥らせてしまえるのだ。

「やぁぁぁっ！」

そうして、強制的に転倒させられて宙に浮く形となったバーサーカーの横っ腹を、マシュの細身の体からは想像もつかない程の勢いで振り回わされた盾が豪快に叩き付け、文字通り吹っ飛ばす。受け身なども当然とれず、されるがままに吹き飛んでいったバーサーカーはレンガ造りの住居の壁を粉砕し、そのまま反対側の壁からも飛び出していった。これで少しは時間が稼げる筈。となれば、全員でサンソンを一騎に仕留めに掛かるべきかと楓が一瞬迷ったのを察知したのか、即座にメディアの声が飛んでくる。

「マスター。こっちは私達だけで十分よ。バーサーカーを確実に仕留めなさい」

「っ……解った！　そっちお願い！」

メディアの言葉に一瞬詰まりながらも、楓は力強く返答して、マシュ達と共にバーサーカーを追う。その様子を見やり、メディアはほんの少しだけ満足げに鼻を鳴らす。

「全く……ちょっとは見所出てきたと思ったらこれだものね」

「おや？　なんだかんだと入れ込んでるねぇ。やはり、君も弟子は可愛いって事かな？」

「あら？　何の事かしら？」

アマデウスの揶揄うような言葉を無視するその声は、一切の感情を読ませない物だった。

壁の崩れた住居をマシュ達より一息遅く走り抜けた楓の視界に飛び込むのは、様々な店が点在する街のメインストリートであろう大通りの中央で唸り声を立てながらこちらを睨むバーサーカーであった。見た目だけではダメージはさほど見受けられず、アストルフォの槍で霊体化させられた足も今は回復している。

「Ａａａａａａ……ッ！」

そして、違っているのは全身を覆ってる靄が完全になくなって、その身を包む漆黒の鎧の全容が明らかになった事と、右手に一本の剣が握られている事だ。あの靄が、剣に姿を変えたのか。そういうスキルか、もしかして宝具なのだろうか。どっちにしろ、今まで素手だった

強敵が武器を持ったのだから相当に厄介に違いないと、楓は怖気が走るのを感じた。
（ガントは……使えるようになるまでもうちょっとかかる。なら、あとは……）
どういう命令なら上手く使えるのか、未だによく理解できない令呪も含め、脳内で今自分がマシュ達に行える支援の方法はないかと、必死に頭を巡らせる。
その一方で、正面にバーサーカーを見据えるマシュは奇妙な感覚に囚われていた。
（あのサーヴァント……どこかで、見覚え、が……？）
そんな筈はない。冬木で出会った英霊達にあんな姿の者はおらず、それ以前に出会った英霊といえば、自分に力を与えてくれた真明不明の彼のみ。もしや、あのバーサーカーは彼と関わりのある者なのだろうか。マシュの視線に気づいたのか、バーサーカーもあらためて彼女の姿を見やり、静かに首を傾げた。
「……Ｇｙａ……ｈａｄ……？」
「……え？」
「Ｕａａａａａａａ！」
ほんの一瞬、バーサーカーの狂化が掻き消えたかのような冷静で穏やかな声が聞こえたようなと思った刹那に、狂戦士は吠えて剣を振り上げる。マシュはギリギリ反応を間に合わせ、その斬撃を盾で受け止める。甲高い激突音が、街中に響き渡った。

第十五話　邪竜百年戦争　オルレアン　１０

思っていたより時間がかかっているなと、内心苛立ち混じりに吐き捨てながら、竜の魔女は眼下にて見苦しく抗っている聖女とその他を見下ろした。街中から勢いよく飛び出してきた正義の味方御一行は、ワイバーンの群れを相手に、数の不利など関係ないとばかりに奮戦してみせている。聖女は旗を振るってワイバーンを一体一体確実に薙ぎ倒し、ランサーとバーサーカーもそれぞれの得物で見る見るうちにワイバーンの数を減らしていく。

（この街にいたはぐれですか……全く、運の良い事で）

上手い具合に味方を増やして見せたらしいマスター（あの小娘）の運の良さは、少しばかり驚愕に値するかもしれない。ルーラーとしての特権でクラスも真名もすぐに解るし、その上で大した脅威ではないと判断して、やはり眼下にいる中で一番の脅威は聖女一人である事にフンっと鼻を鳴らす。見るからに力を増しているのには少々驚くが、恐らくマスターと正式に契約を結んだのだろう。それでも、本来の力には程遠いし、何よりこうして自分が座する邪竜ファヴニールの敵ではない。街の外に飛び出した矢先、ワイバーンの群れとその最奥に控えている邪竜の姿を見た時の驚愕した顔とくれば、思い出しただけでも笑いが込み上げる。

「さて、このままアイツ等を眺めていても仕方ないですね……ファヴニール、ここは任せますよ？　私の許可なく、街を吹き飛ばすのは無しです。それ以外なら……まぁ、好きになさいな」

邪竜が了解の意を唸り声で返したのを確認し、ジャンヌ・オルタはトンとその背を蹴って街へ飛び降りる。それを見た聖女が何か叫んでいるが、すぐにワイバーンの群れを嗾けるファヴニールの咆哮にかき消された。

「バイバイ、聖女様。今の私には、もっと優先すべき相手がいるの」

万が一にでも、あの忌々しい聖女が邪竜を無視してこちらに来ることはあり得ない。これで心置きなく、自分は今回の最優先目標の為に行動できるというものだ。

街の内外で起きる戦闘。それは裏門から街の外へ住民を避難させていたゲオルギウスとジークフリード。彼らと共に避難誘導を行っているジル達にも、当然伝わっていた。普通の人間である彼らにも、その激しさは肌で感じる程のものであった。

「な、何と何が戦ってんだ……？」

怯えと驚愕混じりに呟く部下を横目に、ジルも同じ感情を抱き、身体を震わせていた。生き残った部下や他の街の騎士達。逃げ延びた避難民を引き連れていた時に出会ったゲオルギウス達の戦いを間近で見て、彼らが人間を遥かに超えた力を持つ存在である事を知ってはいたが、そういった者同士の戦いとは、微かに感じる余波程度であっても次元の違いを認識させられるほどだったのかと。

「……止まるな！　我らの役目を果たすのだ！」

その感情をどうにか押し潰し、今はまだその戦場に飛び込むわけではないのだと自分に言い聞かせて、部下達に号令。今の役割は、避難民とこの街の人々を無事に脱出させる事なのだから。

「ジル・ド・レェ殿」

「おぉ、ゲオルギウス殿！」

先行して街の外に出て、安全を確保していたゲオルギウスが駆け足で戻ってきた。どうやら、周囲の安全は完璧に確保されたようだと胸を撫で下ろす。

「街の外は他の騎士達で十分でしょう。私とジークフリード殿は、彼女達の応援に向かおうと思います」

「そうですか……我々は……」

国を、民を守る騎士としては自分達も共に戦場へ向かうべきだ。しかし、自分達がついていったところで何の役にも立たないだろう事は、火を見るよりも明らか。自分だけならまだしも、部下達に死にに行けと命令できるだろうか。

「ジル殿は、ここで市民達の守りを。それも立派な騎士の役目でしょう」

そんなジルの迷いを察したのか、ゲオルギウスは笑みを浮かべて諭すように言葉をかける。ジルは一瞬戸惑いながらも小さく頷き、背を向けて走り去るゲオルギウスを見送って、部下達に指示を送る。民を守る事も、確かに騎士の役目なのだ。戦場に馳せ参じるだけが、戦いではない。そうやって、未だ心に残る情けなさに言い訳という名の蓋をする。

（あなたも、あちらのいるのでしょうね）

ハッキリと顔を見る事は出来なかったが、それでも解る。今も最前線でその身を盾に戦っている勇者達の中に、もう二度と会えぬはずの彼女の姿があるのだと。だのに、共に戦場を駆ける事に躊躇いと、敵に対する諦めという名の恐怖を覚えている自分が、無性に腹立たしかった。

マシュがその接近に気付いたのと、それが屋根の上から真っ直ぐに楓を狙って襲い掛かるのは同時。咄嗟に楓を突き飛ばし、盾で奇襲を防ぐ。

「うくっ!?」

「マシュ！　うわっ!?」

アストルフォが助けに入ろうとして、バーサーカーがそれを遮る。マリーも彼のフォローに回ったのを確認しながら、マシュは盾を構える腕に力を込めて、攻撃してきたそれを押し返す。奇襲を仕掛けてきた何者か、竜の魔女はその勢いを敢えて殺さずに後方へ跳び下がって着地した。仕切り直しと言わんばかりのそれに乗り、マシュも楓の傍へ寄り盾を構え直して魔女を睨みつけた。

「ジャンヌオルタ！」

「オルタ？　へぇ……まぁ、好きに呼びなさいな。それぐらいは許してあげるわ」

別側面呼ばわりとは面白いとばかりに嗤う魔女を真っ直ぐ睨み、マシュは楓を守るように盾を構える。先の奇襲からして、魔女の狙いは明らか。そうでなくとも、自分の役目は変わらない。

対して、魔女の視線はマシュの影に隠されるようにある楓へと向けられていた。あの娘への借りを返す為に、わざわざこんなところまで出張ったのだ。ようやく対面できたのだから、後は衝動の赴くままにやるだけだ。地面を蹴って、自身の得物たる旗を巻き付けた槍を振るう。

「くっ！　やぁあぁっ！」

マシュは魔女の攻撃を盾で受け止め、強引に弾き返して即座に蹴りを放ち、それを容易に躱されたかと思えば、魔女はマシュに目もくれず楓へと狙いを定め、彼女の懐へ飛び込もうとするが、マシュは咄嗟に盾をジャンヌオルタの足元目掛けて投げつけた。

「なっ!?」

世辞にも投擲に向いていない形状と大きさの物を投げつけてきた事に驚き、反応が遅れて足を掬られたジャンヌオルタへと、マシュは遠慮のない回し蹴りを叩き込み、槍で受け止めながらも反動を殺しきれずに吹き飛ばされた魔女は地面に背中から叩き付けられながらも、すぐに体制を立て直し、マシュを睨みつけた。

「……へぇ。成程……どうやら、アンタから始末しないといけないみたいね」

さっさとマスターを潰せば終わると思い、見るからに大した事も無さそうだと無視していたが、どうやら甘い認識だったようだ。己の短慮を認め、魔女は目的達成の前に立ちはだかる敵を真っ直ぐに見据える。少なくとも、さっさとくたばっていった手駒（役立たず共）よりは、マシなサーヴァントのようだと思いながら。

そこから少しばかり離れた位置で、アストルフォとマリーは共に楓とマシュの様子が気になり、助けに行きたい衝動に駆られながらも、眼前にいるバーサーカーを相手にそんな余裕は無かった。

「こんなに強いとは……ちょっと思ってなかったなぁ……」

槍を支えにしながら、アストルフォは思わず愚痴った。自分もマリーも、武勇とは縁遠い英霊でハッキリ言って弱いと自他共に認めてはいるが、それでも二人がかりでここまで苦戦するなんて思ってもいなかった。マシュが魔女との一騎打ちに突入し、二人でバーサーカー

の相手を初めてほんの数分も経っていないというのに、両者ともに疲労困憊。
「はぁ、はぁ、はぁ……」
マリーに至っては肩で息をして、今にも膝をつきそうなぐらいだ。とりあえず、バーサーカーがジャンヌオルタの応援に回る事は防げているが、自分達が何時までこの狂戦士を抑えておけるかは疑問しかない。理想で言えば無論勝利なのだが、ハッキリ言って無理だと確信している。だからといって、諦めて背を向けたり、大人しく倒されるという選択肢はアストルフォには存在しないのだが。
「よし！　弱気になるのはここまで、だ！」
掛け声と共に地面を蹴り、バーサーカーへ突貫。真っ向から突き出す槍を、バーサーカーは難なく躱してアストルフォ目掛け、横薙ぎに剣を振るう。咄嗟に槍を手放し、両膝を追って膝で地面を滑るようにして斬撃を回避するが、アストルフォがそこから次の行動へ繋げるよりも早く、バーサーカーの足が振り上げられた。
「ぐはっ!?」
鳩尾を抉るように蹴り込まれ、サッカーボールのように飛ばされるアストルフォの身体は住居の壁に叩き付けられた。すぐ様にマリーが指輪を介して攻撃性を持たせた歌声を響かせるも、バーサーカーは怯む事もなく突貫し左手で彼女の顔面を掴むと乱暴に地面に叩き付ける。
「――――あ!!?」
声にならない悲鳴をあげるマリーを無視し、ジャンヌオルタとマシュの戦いに注視し、こちらへの注意が完全に失せている楓を視界に収める。マスターの応援は必要なしと即座に判断し、当初からの指示である楓の身柄に狙いを定め、バーサーカーは地面を蹴って楓を抑えんと手を伸ばし――――
「さ、せるかぁーーーーっ！」
――――叫び声と共に、投擲されたアストルフォの槍がバーサーカーの足元に突き刺さる。当たる事は無く、その効果も発動する事は無かったが、それでもほんの一瞬ではあるがバーサーカーを怯ませるに

は十分。アストルフォが腰から剣を引き抜き、バーサーカーへ斬りかかる。対して、バーサーカーは足元に突き刺さったままの槍を引き抜き、受け止める。甲高い激突音と共に、バーサーカーの手にあった彼の剣は靄となって消滅。再度、その鎧を包み込んでいき、変わりに握ったアストルフォの槍が。

「なっ!?」

靄に浸食され、まるで血管のような赤黒い魔術的なラインが槍全体に走ったかと思えば、片手で強引にアストルフォの剣を弾いたバーサーカーは、そのまま槍を叩き付けるように振り下ろす。

「がぁっ!?」

頭頂部に槍を叩き込まれ、顔面から地面に叩き付けられるアストルフォ。バーサーカーの手の中で、まるで元から彼の物であったかのように鈍く輝いていた。

「アストルフォさん!」

「余所見を、する余裕があるとでも?」

アストルフォの苦戦に気付いたマシュが、ほんの一瞬そちらに意識を奪われた瞬間に、竜の魔女は盾を潜り抜け、マシュの懐へ。咄嗟に間合いを取ろうとするマシュを嘲笑うように、彼女の剥き出しの腹部目掛けて、魔女は得物を叩き付ける。

「ぐぅっ!?　ぁああっ!」

まるでバッターに打たれた野球のボールのように吹き飛ばされるマシュの体。住居の壁に叩き付けられようとする直前、飛び込んできた少女がそれを受け止め、彼女の代わりにその身を壁に叩き付けた。

「あぐっ!」

「ぁ……マスター!　何を!?」

「ご、めん……つい……」

地面に崩れ落ち、痛みに呻く楓を支えるように抱き留めるマシュ。そんな二人は、敵から見れば隙だらけ。狙わない等という選択肢がある筈も無いと、魔女はその手から炎を放ち、それに気づいたマシュが咄嗟に盾を振り上げ弾くも、立て続けに放たれた炎ががら空きになった彼女の体を撃ち抜いた。

「あぁああっ！」
「マシュ！　きゃぁああっ！」
　体制を崩したマシュの横をすり抜け、楓の右腕を炎が掠める。ただ掠めただけでも戦闘服を焼き、その皮膚に重度の火傷を負わせるには十分。いや、実戦向けの調整を施した魔術礼装であるカルデア戦闘服だったからこそ、火傷で済んだというべきか。
「マスター!?」
「今、どういう状況か理解しているのかしら？　全く、そんな様でサーヴァントとは笑わせますね」
　加虐的な笑みを浮かべ、魔女は腰の剣を引き抜き、空へ掲げる。周囲に炎獄を展開し、膨大な魔力を解き放たんとするそれは、明らかに宝具発動の予兆。マシュは意を決して、盾を地面に突き立てながら、自身の魔力をありったけ注ぎ込んで、己の仮装宝具を展開する。
「これは憎悪によって磨かれた我が魂の咆哮」
「真名偽装登録！　人理の礎（ロード・カルデアス）！」
「吠え立てよ、我が憤怒（ラ・グロントメント・デュ・ヘイン）！」
　展開した二人の宝具が、真正面から激突する。
　激しい爆音と共に街道も家屋も炎が焼き尽くし、舐め溶かしていく。その中であっても唯一、炎による蹂躙に太刀打ちするマシュの宝具であったが、絶えず連射される炎の前に着実に追い詰められていた。
「うっ……ぐ、ぅぅっ！」
　宝具越しにも伝わる炎の熱と衝撃。全てを飲み込み、焼き尽くさんとする魔女の獄炎を防げてはいるが、マシュの身体はその反動で徐々に押し込まれ、踏ん張る両足にも今にも圧し折れそうなほどの負担がかかる。それでも必死に盾を構えるマシュを嘲笑うように、ジャンヌオルタは、余裕の笑みを浮かべる。
「一瞬で消し飛ばないとこだけは褒めてあげるけど、そんな調子でいつまで持つかしら？」
「う、ぁ……ぁ、くぅ！」
「まぁ、せいぜい無駄な抵抗をしてみせなさい」

魔女の獄炎。それをほんの少しばかり強めただけで、マシュは悲鳴をあげる。誰が見ても自分の勝ちは揺るがない。持ってせいぜい数分。その後には無様に転がった姿を晒し、虫の息で己のマスターが蹂躙される様を見せつけられる。そんな解りきった末路を迎える哀れなマスターに、ほんのちょっとは同情という名の嘲笑をくれてやっても良いだろう。

「どうします？　今からでも尻尾を撒いて逃げますか？　運が良ければ、あなた一人だけなら逃げられるかもですよ？」

「っ……だ、誰が！」

マシュが、他の皆が懸命に頑張っているのに逃げ出せる訳がない。何も出来ない役立たずであっても、自己満足でしかなくても、マスターとして最低限の何かを果たしたいからだ。無論、そんな楓に対して最初から嘲笑以外の返答をするつもりのない魔女は口の端を吊り上げる。

「ふぅん……まぁ、どのみち結果は見えてますけどね。恨むなら、そこの役立たずすら満足に使えない無能な自分を恨みなさいな！」

もうすぐ限界を超え、宝具諸共に自分の炎に飲まれる盾役。バーサーカーに二人がかりで歯が立たない弱小のライダー。少し離れた位置にいるキャスターも、直接戦闘は苦手なのか未だにサンソンすらも倒せていない始末。最早、勝利はゆるぎないと確信する。

「無能なマスターには、無能なサーヴァントしか付かないって事ですね！」

魔女の嘲笑に何も言い返せず、悔し気に唇を噛みしめるマシュ。現にオルレアンに来てからろくに役にも立てず、今まさに追いつめられている自分は無能でしかないと、言われずとも身をもって理解しているのだから。

「違う……そんな事、絶対に」

「……え？」

「は？」

しかし、同じくそれを聞いていた楓は違った。あぁ、そうだ。自分は無能と言われれば確かにそうだと納得する。否定する要素は無い

と誰よりも理解している。ただ、それでも一つだけ、絶対に認められない事がある。
「私の事は何と言ってもいい。だけど……マシュを、私なんかのサーヴァントになってくれてる皆を、馬鹿になんて、させない！」
令呪が刻まれた右手を、盾を支えるマシュの手に重ねる。
完全に頭に血が上っている。自分のような、何の取り柄も無いマスターに付いて来てくれている皆を馬鹿にされる事だけは、絶対に許してはならない。感情の赴くまま、右手の甲に刻まれたままの、持て余していたマスターと証に意識を集中させて、マシュへの信頼を込めて叫ぶ。
「令呪を持って命ずる……マシュ！　絶対に勝って！」
眩い光を放って、令呪が一画消失。同時に、マシュの体へと流れ込んでくるのは膨大な魔力。それが全身を駆け巡り、文字通りの意味で力が漲ってくる感覚を覚えさせる。これこそが、マスターが自分を信じてくれている証なのだと、実感して。
「はい！　マスター！　うぁあああああああああっ！」
その力の全てを展開する宝具へと注ぎ込んで、今にも自身を飲み込まんとしていた魔女の獄炎を押し返した。今にも焼け溶けんとしていた光の盾は、その輝きを取り戻して憎悪に彩られた黒い炎の全てを逆に飲み込んで見せたのだ。
「なっ!?　馬鹿な……そんな、はず!?」
己の宝具を防ぎきられる。それも、あと一歩で勝ちが決まるという詰みの状態からひっくり返されて。そんな、あり得ない光景に目を奪われる魔女。致命的なその隙をフォローすべく、バーサーカーがアストルフォから奪った槍を構え、マシュに突き立てんと突貫しようとして。
「何時まで、人の宝具使ってるんだよ！」
横合いから体ごとぶつかってきたアストルフォに、体制を崩された。額から血を流しながら、必死の形相で食らいついてくる騎士の姿に気を取られ、すぐに振り払わんと槍を持った腕を振り上げる。その瞬間、彼らの周囲に無数の水晶がまるで道を作るように地面から析出

した。これは不味い。狂化スキルにより鈍りながらもある程度の働きを有しているバーサーカーの戦士の感がそう察し、アストルフォを力任せに引き剥がし、その身を蹴り飛ばして急いで脱しようとするも、すでに遅かった。足元から析出する水晶がバーサーカーの両足を拘束し、透き通ったガラスの馬に腰かけたマリーが、その頭上にて己の放てる最大の一撃を、すでに展開していたからだ。
「ごめんあそばせ。百合の王冠（ギロチン・ブレイカー）に栄光あれ！」
ガラスの馬が、水晶の拘束に捕らわれたバーサーカーの鎧を蹴り砕く。悲鳴のような唸り声をあげ、上空に蹴り飛ばされるその身を追撃せんとするのは、全身の痛みに耐えながらも即座に立ち上がったアストルフォと、彼を援護する為に迷いなく切った二角目の令呪。
「令呪を持って！　アストルフォに力を！」
「その令呪に応えるよ、マスター！　行くぞ！　この世（ヒポグリフ）ならざる幻馬！」
アストルフォの最強宝具。この世にあり得ざる幻獣の次元跳躍により、一瞬でバーサーカーの背後に転移しての高速突撃。空中に蹴り上げられたバーサーカーには、最早回避のしようがない攻撃が、その身を水晶が無造作に突き出す地面へと叩き付ける。
「ＧＡ、Ａ……」
アストルフォから奪った槍を覆っていた靄が消え去ると共に、バーサーカーの身体が黄金の粒子となって消滅する。ヒポグリフ諸共に地面に突撃したアストルフォも派手に地面を転がるが、大した事も無かったかのようにすぐに身体を起こし、楓にピースサインを送る。マリーの宝具の副次効果である味方への魔力及び体力回復による物である事を知るのは、また後の話だ。
「そんな……馬鹿な……っ!?」
単純な戦闘力ならファブニールに次ぐだろうバーサーカーの消滅。一切の情など持ち得ぬ相手ではあったが、負ける筈などないと思っていた手駒の敗北に魔女は驚愕する。
「余所見をする余裕が、あるんですか!?」
それが、彼女の決定的な、致命的な隙だった。

「っ!?」
　その声にハッとなり、視線を向ければ、盾を大きく振りかぶったマシュが、自分の懐へと潜り込んできていた。かき消したとはいえ、宝具の炎が多少なりとも残っている中を突っ切り、露出した肌に火傷を負うのも構わず、わずかな隙を見逃さぬ為に。
「しまっ!?」
「やぁあああああああああっ！」
　とにかく必死さ以外の何もない。そんな少女の渾身の叫びと共に放たれた盾による一撃が、魔女の胸を打ち付けた。
「が、ぁっ!?」
　胸から背中を貫くかのような衝撃。盾の少女の一撃を受けた魔女は、激痛と驚愕に表情を歪めたまま吹き飛ばされ、無様に地面を転がされた。令呪によるブーストも切れたのか、糸の切れた人形のようにマシュも崩れ落ちる。盾を地面に押し付ける形で四つん這いになり、肩で大きく息をしながらもマシュの目線はうつ伏せで倒れ、激痛に悶えているジャンヌオルタに向けられている。
「はぁ、はぁ、はぁ……っ！」
「ぐ、ぅ……あがっ！　こ、の……こんな、筈、じゃ……っ!?」
　吐き出される血が地面を濡らす。たった一撃。令呪によるブーストがあったとはいえ、たった一撃で立つ事すら難しいほどのダメージを受けるなど、思ってもいなかった。
「なんで、こんな……っ！　私が、負けるはずが……あんな、ヤツに……イッ！」
　乱れた髪の隙間から、マシュと彼女に寄り添う楓を睨みつける。本来なら、さっさと取り巻きのサーヴァントを倒し、あのマスターに借りをたっぷり上乗せして返すだけの、簡単なお遊びだったはずだったのに。
「認めない……認めるものかぁ！」
　まだ、あの聖女に負けるのなら、ほんの少しは納得は出来なくもないかもしれない。だが、あんな取るに足らないような、人間なのか

サーヴァントなのかもわからない半端なヤツに一騎打ちで、真正面から自分が打ち負かされる等、認められるはずがない。魔女の周囲に炎が踊る。彼女が新たに抱いた、マシュに対する怒りの感情に呼応するかのように。

「ぐっ……がっ!?」

しかし、その炎が牙を剥く事は無く、魔女の口から吐き出される鮮血と共に霧散する。先ほどの一撃は、魔女の霊核にも深刻なダメージを負わせていた。それが怒りに任せた魔力放出により、更にその身を傷つける結果となったのだ。

「こ、んな……ところ、でぇ……っ!?」

こうなればなりふり構わず、ファブニールのブレスでこの街諸共に消し炭にしてやる。霊体化すれば、街の外には数秒かからず出る事は出来る。このダメージでも、ブレスの範囲外に出る事はたやすい。未だ反応が残るサンソンは、ここで消えても別に問題ない駒だ。決断は早く、すぐ様に邪竜への指示を飛ばそうとした時だった。

「な……あれ、は……っ!?」

街の外に、強力な魔力がほとばしったのは。何者かの宝具である事は違いなく、続けざまにファヴニールの悲鳴が聞こえてきた。倒されてはいないのは解るが、それでも大ダメージを受けているのは先の悲鳴からして明らか。自らの策があっさりと潰され、あらゆる負の感情が湧いてくる感覚に襲われる魔女の脳裏に、不意に声が響いた。

『ジャンヌ。我が聖女よ。失礼ながら、遠見の水晶にて全て拝見しておりました。ここはお引きなさい。ファヴニールの傷も浅く無く、御身がここで倒れてはこの国への復讐も、全て、全てが無駄になります。何、そこの匹婦共には近いうちに身の程を解らせてやる機会は訪れましょう』

「ジル……っ!? ええ……そうね……解った。言うとおりに……してあげる」

その声との短いやり取りの末、最後にもう一度だけ楓とマシュを睨みつけて、ジャンヌオルタはその姿を消した。それに合わせるようにバーサーカーも姿を消失させる。

『モンリュソンに展開していた敵性反応。その全てが離れていってる……どうやら、撤退したようだね』
「……か、勝った？」
　通信機から聞こえてきたロマニの声で状況を理解し、そう口にした事で一気に気が抜けたのか、楓はマシュにもたれ掛るように体を崩した。思わず倒れそうになった自身を必死に支え、マシュは楓を受け止める。
「先輩!?　一体どうしたんですか!?」
「いや、その……なんか、腰……抜けちゃって……あと、腕……痛すぎて……ちょっと、気持ち……わる……うぇ……っ」
　その他、令呪使用による魔術回路の隆起等もあって吐き気を催した楓を介抱するマシュといった、つい先ほどまで激戦を繰り広げていたとは思えない光景。アストルフォとマリーは、そんな二人の様子に思わず苦笑しながら、駆け寄るのだった。